特214
636

0049703000

0049703-000

特２１４－６３６

新修国文教授資料

富山房編輯部・編

富山房

女学校用　巻９

昭和１３

AHJ

特214
636

帝國圖書館藏

冨山房編輯部編

新修國文

女學校用

教授資料

東京 冨山房發兌

昭和十三年十一月 帝國圖書館

新修國文教授資料に就いて

本書は新修國文の教授用參考書として編纂したものであります。全十卷の讀本に應じて本書も亦全十卷より成り、簡潔にして要を得ることを念願と致しました。即ち地名、人名その他の名辭で殆ど常識といつてよい程普遍化されたものの註解は簡明に、修辭的、文法的に疑義の生じ易い點、若しくは異論の多い章句、講義上特に力說强調すべき個所は、繁を厭はず記述を豐富に致しました。以下實際御使用に際しての便宜の爲、本書の篇次に就いて略記致します。

取扱 この篇では、實際教授に際していかにその教材を取扱ふべきかに就いての私見を述べました。これは讀本編纂に際して、編輯部がその教材を採錄し、その場所に配置した理由を明らかにし、更に全卷との有機的關係を示したものであります。素より私見でありますから、實際教授に當つては、教授者諸彥と見解を異にする所もあると思ひますが、一教材と全卷の關係を知る事は、教授者諸彥の教材取扱の態度を確立するに資するものあるを疑ひません。

教授 この篇では、作者の略傳、引用書、語釋を擧げました。作者の略傳は簡明を旨とし、引用書は、その教材の實際教授に參考となると思ふ場合には、序跋等をも引き、古典にあつてはその文學史的價値にまで言及しました。語釋は章句に重きを置き、特に修辭的文法的解釋を下し、鑑賞に資せしめました。

鑑賞批評 この篇では教材の文學的鑑賞、批評を主とし、教授上特に注意すべき所を强調しまし

た。而してこの鑑賞批評は、どこまでも教科書中の一教材としてといふことを標準として述べました。先の「取扱」と併せて教授者諸彦の教材取扱に對する態度を決定すべき資となるものが多いと思ひますから、「取扱」と併讀される事を希望致します。

參考 この篇では、教材の講義上、折に觸れ、事に應じて參考として授くべきもの、鑑賞批評に資すべきもの等を擧げました。時には又、全文の梗概、段落、詩教材に於てはその散文譯なども擧げました。

以上本書の概要を述べましたが、實際教授に當つて御氣附の點に就いては、その都度御批正を仰ぎ、本書のよりよき完成を期したいと存じます。

冨山房編輯部

新修國文編纂係誌

新修國文　女學校用　教授資料　卷九

目次

一　落花の雪……（太平記）一
二　春は曙……清少納言　一九
　四季……二〇
　降るものは……二三
　木の花は……二三
　香爐峰……二八
三　鶯宿梅……（大鏡）二四
四　東洋の詩興……夏目漱石　四〇
五　初午は乘つて來る仕合……井原西鶴　五四
六　大原御幸……（平家物語）六四
七　比良の山風（短歌）……八二
八　百蟲譜……横井也有　九八
九　源信僧都の母……（今昔物語）一〇七
一〇　寺子屋（淨瑠璃）……一一四
一一　知と愛……西田幾多郎　一二〇
一二　新島守……（增鏡）一三一
一三　石彫獅子の賦（詩）……薄田泣菫　一五六
一四　千里が竹（淨瑠璃）……近松門左衛門　一六八
一五　美術に現れた日本國民性……藤懸靜也　一八五
一六　國土と愛國心……姉崎正治　二〇四

附錄

上古及び奈良平安時代の文學……二二七
鎌倉室町時代の文學……二三〇

（挿圖筆者略傳）

橋本雅邦……二四九
寺崎廣業……二四九
內藤東甫……二四九

一　落花の雪（太平記）

扱方　古來、いはゆる道行文の白眉として評判の高い「俊基朝臣再關東下向の事」（太平記卷第二）である軍記物語の道行文が、古今集卷第十九所載の長歌――あの壬生忠岑の「かくしつゝ長良の橋の、ながらへて難波の浦に、たつ浪のなみのしわにや、おほゝれむさすがにいのち、惜しければ越の國なる、しらやまのかしらは白く、なりぬとも音羽の瀧の、音に聞く老いず死なずの……」などに淵源を發してゐるのは、既に國文學常識となつてゐることであるが、最初にこの長歌の手法を軍記物語に應用したのは平家物語の作家であつた。「心をとむとしなけれども、荒れてなかなかやさしきは、不破の關屋の板廂、いかに鳴海の汐干潟……」我々は本三位中將重衡の海道下りの條の、かうした涼やかなせゝらぎのやうな流暢な文章を忘れることが出來ない。そして太平記の作者は、その平家物語の作者のつけた「畝を傳つて步んだ烏」に過ぎないのであるが、それにしても、軍記物語の道行文を、一つの完成された表現樣式にまで押進め一つの散文詩としての文學の一領域を占めるに至らしめた功績は、何といつても、太平記の作者に負はせなければならないと思ふのである。我々は既に、同じく太平記中の道行文として「熊野落」を讀んで來たけれども、本課の俊基朝臣の東下りを讀まないでは、未だ道行文を語るに足る資格を備へてゐないといつていい。それは、掛言葉によつて藝術美を醞釀せしめようとした、いかにも東洋的、否、日本的な――日本の言葉ならでは生まれない表現樣式である。軟かな、しとやかな、字音そのものに草假名の字體のやうな優美さを含んだ日本の言葉によつてのみ綴り得られる散文詩である。かうした道行文が遂には謠曲に取り入れられ、淨瑠璃の重要な要素となつた事は周知の事であらうが、それも一にこの表現樣式が日本の言葉の本質美と微妙な交響を起し、延いて日本人の心の琴線に共鳴を喚起する事の多いために相違ない。我々は暫く美しい交響樂に耳を澄ます氣持で本課の中に心を浸したいと思ふ。

教授

引用書

太平記――花園天皇の文保二年二月(一九七七年)から後村上天皇正平二十二年(二〇二七年)まで凡そ五十年間に於ける吉野京都兩朝前後の戰亂の事實を記した四十卷の書。作者は文中三年歿の小島法師と洞院公定次日次記にあるが、信じ難い。北畠玄惠等數人の手に成つたともいふ。とにかく吉野朝の末頃官軍方の手に成つたのは明らかである。書名も「安危由來記」「國家治亂記」「國家太平記」「天下太平記」等四變したといふが如何か。亂世を記して太平記といふ。御世を祝いだものか諷したものか。抑々亂世を諷刺したものであるか不思議とされてゐる。この書が愛讀されたのは江戸時代の初期、太平記讀の出たことが大に與つて力あるであらう。異本も頗る多く十數種に餘つて、今出川本、島津家本、南都本、毛利家本、北條本、西源院本、今川本、天正本等がある。

語釋

［踏迷ふ］ 道を――。

［交野］ 往時は肩野に作つた。もと河內國交野郡に屬してゐたが、今の河內國北河內郡山田村、牧野村、川越村及び牧方町あたりの野原である。又、鳥立ヶ原、百重原、諸岡原等の稱もあり、淀川を隔てて攝津（三島郡）の水無瀨に對する。古へ櫻狩、鷹狩などがよくこのあたりで催され、貴顯の御鷹狩の地として、民衆の遊獵を禁ぜられたから、御野または禁野などといつた。

［櫻狩］ 野山に櫻を尋ねて花を見てあるくこと。交野は昔は櫻の名所として、京からわざ〳〵花見に出かけたのである。

［紅葉の錦を著て歸る］ 紅葉を錦と見なした句で、頭註の歌は拾遺集卷第三、秋の「嵐の山のもとをまかりけるに紅葉のいたく散り侍りければ。」として出てゐるが、これは藤原道長大井川(後出)遊覽の時に、公任が詠んだ歌で、公任の歌は第四句を「ちるもみぢ葉」をとしたのを、拾遺集になほして入れたのであるといふ。一首の意は、朝のまだ明けきらぬ頃吹く嵐と嵐山とをかけ、嵐に吹散らされた紅葉を錦と見立てて、嵐が寒いから、紅葉の錦を人はみな着たといふのである。拾遺集は二十卷。古今集、後撰集と竝びて三代集に數へられる。歌數一千三百五十一首。撰者は花山天皇或は藤原公任ともいひ、確かなことは分らぬ。藤原公任は關白賴忠の長子。衆藝に通じ、詩賦、音樂に巧に、

最も和歌に長じた。累進して正二位大納言に至り、長久二年薨去、年七十六。和漢朗詠集を始め著書が多い。

［嵐の山］ 京都府下に在る嵐山で平安朝以後縉紳の遊覽地として名高い。山は京都市の西方葛野郡の南西隅に聳え、海拔約一千餘尺。西は丹後の山地に延び、北東の二方の麓に大井川が流れてゐる。嶺上には松、楓、櫻等の樹木が多くて、春秋ともに眺がよい。櫻の木は龜山上皇が吉野山から移植せしめられたものと傳へてゐる。山の下から對岸に架けてある一つの長い橋を渡月橋といひ、御幸橋ともいふ。

［ひと夜を明かす程だにも云々］ 櫻狩や紅葉狩に行つて一夜を過すだけでも、旅で他鄉に宿るといふことはつらいのに。

［恩愛の契り淺からぬ］ 肉親の關係の切つても切れない――。恩愛は、父母、兄弟、夫婦等が相恩しみ愛することをいふ。もちろん、佛教語で、父となり、子となり、夫となり婦となつて、互に相慈しみ愛するのはすべて前世からの約束――宿緣であるとして、「恩愛の契」といふのである。ここは、簡單に夫婦の緣、父子の緣の切つても切れない 感情のこまやかなくらゐに解すればいゝ。

［行方も知らず思ひ置き］ 自分が鎌倉へ行つた後にかはいい妻子はどこにどうして暮すか、どんなに流浪するかわからないと思ひながら後に置いて。

［今を限りと］ これが最後であると。今が見をさめであると。

［思はぬ旅］ 思ひもよらない――豫想しない――旅の意。

［心のうち］ 鎌倉へ送られて行く俊基の心中。

［憂きをば止めぬ逢坂の云々］ 逢坂は大津の西南。大谷の東、近江と山城の國境にある。山上には昔逢坂の關があつた。創置せられたのは大化年中で、延曆中に一度廢せられ、文安元年に再設した。昔はこの山を越して地方へ出た。都の人が人を見送るにも出迎へるにもここまで來た。この山に寄せて羈旅、別離の情を詠んだ和歌の多い所以である。「逢坂の關の清水に影見えて今か引くらん望月の駒。」(紀貫之)は、地方より駒引の馬の續々京に入り來るさまを想うて詠んだ歌である。關は元來人を調べて、うろんな者は通さない筈であるから、我が身は通してくれても、我が身について

ゐるういつらい事は、止めて通さないでくれたならばいいのに、さうは行かない逢坂の關の清水に立寄つて水を掬ふ時に袖が濡れるやうに、涙の爲に袖が濡れてといふのである。

〔關の清水〕 この逢坂の關の附近にあつた清水であるが、その跡は今明らかでない。

〔末は山路を打出の濱〕 進んで行く末は逢坂山を打出で打出の濱である。そこから湖水の沖を遙かに見渡せばと續く。打出の濱は琵琶湖に沿うた地で、近江國輿地志略によれば「古老のいふ、松本村より馬場村までの間の濱をいふ。名所方角抄を按ずるに、古昔の東路、相坂嶺より六七町山麓を經て、松本の濱邊に出づ。この間を打出の濱といふ」と見えてゐる。

〔潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうき沈み〕 琵琶湖は眞水即ち淡水湖で、鹹水でないから鹽ならぬ海といつたのである。「こがれ行くの」「こがれ」は掛詞で、漕がれに、焦がれを掛け含めたのである。焦がるといふのは心配のために心が焦げるやうに――つまり傷心し悶えるのをいふ。「うき舟」の「うき」も掛詞で、身を憂きものとする憂きと「浮き舟」の浮きとに掛けたのである。「うき沈み」も舟が波のために浮沈するのを、身の浮沈の方にも響かせたものと思はねばならない。

〔駒もとゞろと踏鳴す云々〕 通行する馬の足音もどんどんと騷がしく踏んで音を立てる――勢多の長橋をうちわたりといふのである。頭註の兼盛の歌は風雅集卷第二十、賀歌に「天祿元年大嘗會の悠紀方の屏風の歌、近江國勢多の橋をよめる。」として出てゐる。勢多の長橋は勢多橋とも瀨田の唐橋ともいひ、近江の勢多川に架けられた橋。創設の年代は詳でないが、恐らく宇治橋などと同じやうに、大化改新後に架けたものかといふ。古へ宇治や山崎の橋とならべて我が國の大きな橋とした。壬申の亂の時、近江の將智尊が橋坂を撤去して東軍を防いだのが例となつて、その後交戰の際橋を斷つて敵を防ぐことが常用手段となつた。川の中に島があつて、橋は大小二つに分れてゐる。今の橋は大橋の長さ百間（もと九十六間）、小橋四十間（もと三十六間）。風雅集は勅撰二十一代集の一。花園上皇の撰になつたもので同天皇の貞和二年に成つた。平兼盛は王朝時代の歌人。從五位上駿河守に至つた。正暦元年

卒。

〔行交ふ人にあふみ路や〕 「行交ふ」は、彼が行き、これが來る――即ち行きちがふで、行きちがふ人に逢ふ近江路のうねの野と續くのである。「あふみ路や」の「や」は感嘆詞。

〔世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり〕 頭註の歌は古今集卷第二十、大歌所御歌に「近江ぶり」として出てゐる。「うねの野」は近江國栗太郡老上、野路の附近であるといふ。「うね」に憂を含めたので世を憂ふるうねの野と續くのである。「たづ」は「たづる」（田鶴）の略で、もとは田にゐたからいつたが、後には單に鶴といふのと同じ意になつた。「子を思ふ」は「燒野の雉子夜の鶴。」などといつて、鶴は子を思ふものといはれてゐるところから、自分も京都に妻子を置いて來たので、すぐ子を思ふのかなどと聯想したのである。詞花集卷第九、雜上に「帥前內大臣明石に侍りける時、こひかなしみて病になりてよめる。」として出てゐる高內侍の歌に、「夜の鶴みやこの內にこめられて子をこひつゝもなきあかすかな。」とあり、白樂天の詩にも、「第一第二絃索々、秋風拂ㇾ松疎音落、第三第四絃冷々、夜鶴憶ㇾ子籠中鳴、第五絃最掩抑、瀧水凍咽流不ㇾ得。」などとあるのから出た語。

〔時雨もいたく守山の云々〕 時雨も甚く漏る守山の木の下に滴る露に袖が濡れてといふのである。「守山」は近江國野洲郡に在る名高い地。今「もりやま」といふ。頭註の貫之の歌は古今集卷第五、秋歌下に「もる山のほとりにてよめる。」として出てゐる。なほ貫之集の詞書には「竹生島にまゐるついでに、もる山といふ所にて。」となつてゐる。紀貫之は平安時代第一流の歌人。延喜五年勅を奉じて紀友則と古今和歌集を撰した。承平九年歿。著の土佐日記は土佐守に任ぜられた際の紀行であり、廣くよまれてゐる。

〔木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や篠わくる路を云々〕 篠原も野洲郡の地名であるが、篠竹の生えてゐる原といふ意に取れるから、風に吹かれて、葉に置いた露が散るといつたのである。それで直ちに篠竹を分けて進む道を過ぎて行けばと受けた。古今集卷十三、戀の「秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢ增りける」（業平）の歌を踏まへてゐる。だから「篠わくる」は「ささ」と讀むべきだが、「篠

原」とあるから「篠わくる」とつづけた。（篠は、やだけ、めだけのやうに細くて數多生ずる竹の稱）

〔鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず〕 鏡山は近江國蒲生郡鏡山村に在り、近江富士ともいひ、三上山の東北に並び立つ小丘である。樹木繁茂して松茸を產する。その北に鏡宿がある。古今集卷第十七、雜歌上に「鏡山いざ立ちよりて見て行かん年へぬる身は老いやしぬる。」とあつて、註に「この歌はある人のいはく大伴黑主がなり。」とあるが、この歌で特に有名である。「鏡の山」といふ由來は、俗說に天日槍が鏡を收藏した舊跡であるからといふ。

〔ものを思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に云云〕 「おいその森」は蒲生村安土村の東南、老蘇村の字東老蘇と西老蘇との間にあるが、昔はこの邊は悉く森で、兩字とも森の跡であつたらう。老蘇は又老曾とも書く。物を思へば即ち心配すると一晩の中に老いるといふその老蘇の森といふので、「物を思へば夜の間にも」はただ「老」にかゝるだけで、以下にはかゝらない。壬二集上、雜に「寄レ杜旅。」として「旅寢してむすぶ枕もあはれなり老その杜の露の下草。」といふ歌があるが、恐らくこの歌などを聯想したものらしい。老蘇の森の立木の下に生えてゐる草を食はせようとて、駒を止めてふりかへつて見ると、故郷に雲が隔てゝ邪魔をしてゐるのか少しも見えない。

〔番場、醒ヶ井、柏原〕 「番場」近江國坂田郡に屬し磨針嶺にある山驛で一に馬場とも書く。鳥居本から一里、醒ヶ井まで一里、往古は嶺城に關所が置かれてゐた。「醒ヶ井」は番場の北方一里ばかりで坂田郡に屬してゐる、柏原は醒ヶ井から東北五十町ばかりにある山驛であつて、同じく坂田郡に屬してゐる、美濃國境を距てること一里。この次に「を過きて」と補つて見るといい。

〔不破の關屋は荒果てて〕 美濃國不破郡關ヶ原村大字松尾の大木戶坂に在つた關所。元來美濃國は昔から東海、東山、北陸三道の分岐點で最も要衝に當り、特にこの地はその咽喉の地で、昔から近江の愛發、伊勢の鈴鹿と共に三關と稱せられた。歷史に見えたのは壬申の亂の時で、不破の道を塞ぐと見えて居り、一代要記に據れば、天武天皇はこの亂が終ると、翌年この關を置かれたと出てゐる。その後平城京の間は他の二關

とともに三關として軍事上の施設をしたらしい。平安奠都後は逢坂關が設けられたので、三關の必要がなくなつたものと見え、延喜八年七月詔勅を以て廢せられ、もとの關はただ名のみ殘り、平安朝末には專ら詩人の歌詠に上り、板庇の名ばかり甚だ著名となつてゐた。鎌倉時代には關所として往還を取締り、關料を徵收した事があつたらしい。それから荒廢して關所の存在を傳へない時代に至つては、關屋が賣物に出る程になつたといふ。今も關の跡があつて、林鶚撰の關銘、秦鼎撰の碑銘及び蜀山人の狂歌の碑などがある。又時々古瓦を發掘するといふ。關跡のある松尾村は又大關村ともいひ、その北十二三町の北國街道に小關村がある。小關村にも小さい關所があつて、脇關として北國街道を警戒したらしい。大體の意味は、不破の關所は（名こそ不破ではあるが）今は全く荒れきつてしまつて、守る者はなく、ただ漏るものは秋の雨であるといふので、雨を月とした本もある。「もる」は守ると漏るとの掛詞である。新後撰集卷第四、秋歌上に出てゐる藤原信實の歌に「秋風に不破の關所のあれまくも惜しからぬまで月ぞもりくる。」とある。なほ欄外の良經の歌は新古今集卷第十七、雜歌中に「和歌所の歌合に關路秋風といふことを。」として出てゐる。

〔何時か我が身のをはりなる云々〕 いつか我が身の終、即ち死ぬべき時が來ようと思ひ、尾張に在る熱田の八劍神社を伏拜みといふのである。「我が身の」に美濃をいひ掛けたといふには及ばないが、をはりには終と尾張とをいひ掛けてある。

〔熱田の八つるぎ〕 尾張國熱田（今名古屋市の內）に鎭まりませる熱田神宮の南方に、八劍宮がある。元正天皇の時に造つた八口の寶劍を祀つたもの。

〔汐干に今や鳴海潟〕 もちろん今や干潟になるといふのに鳴海潟を掛けたのである。鳴海潟は尾張國愛知郡に屬し、大日本地名辭書には「後世、陸地となり、舊形を詳にする能はず。蓋し笠寺、星崎の南にあたり、大高の北、天白川の末に一江灣ありて、これを鳴海潟と稱したるなり。」と見えてゐる。

〔傾く月に〕 傾く月は西山に入りかゝる月。新古今集卷第六、冬歌に出てゐる。秀能の歌に「さよ千鳥こゑこそ近くなるみ潟傾く月にしほやみつらん。」とある。

〔明けぬ暮れぬと云々〕 夜が明けた、日が暮れたと

毎日々々旅を續けて行く道の。

〔末はいづくと遠江〕「とほたふみ」に問ふと遠江とを掛けてある。元來「とほたふみ」といふ詞は「遠つあはうみ」即ち遠淡海の意で、近江即ち近つあはうみに對し、琵琶湖に對して濱名湖をいつたのである。しかし明應七年の地震や海嘯で濱名湖をいつたのである。しかし明應七年の地震や海嘯で濱名川が埋められ、その東に新口即ち今切が出來、潮水が出入して鹹水となり、その後永正、元祿、寶永等にも湖口が破壞したといふ。

〔濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき云々〕濱名の橋は濱名湖に今切の出來なかつた以前、湖と海とを連絡する濱名川に架けてあつた橋で、三代實錄に「元慶八年九月、遠江國濱名橋、長五十六丈、廣二丈三尺、高一丈六尺、貞觀四年修造、歷二十餘年既以破壞、勅給彼國正稅一萬二千六百四十束改造焉。」と見えてゐるが、この橋は波濤の荒い外洋に近いので、時々水害で落ちることがあつた。今切が出來たので橋は廢せられたが、慶長五年荒井關が置かれて船渡となり、二十七町の渡海となり、寶永四年の大地震で現今のやうに一里半の渡海となつた。橋の跡は今の新居町大字濱名の西南の邊に在るといふ。「ひく人もなき」といふのは誰も助けてくれる者なく、まるでうつちやつてある舟同樣の身であるの意。「沈みはてぬる」は、舟に浮き沈みがあるやうに、今は沈みきつた身であるから、誰があはれといはうか。夕暮の入相の鐘が鳴つたので、今ぢや先へ進んでもどれだけも行かれないといふので、池田の宿につかれたといふ意味である。「身にしあれば」の「し」は意味を強める助詞。「夕暮の」は、誰かあはれといふのを夕暮に掛けたので、「いふ」と「ゆふ」とは假名が違ふが、「末はいづくととほたふみ」の「とほ」と「とふ」とのやうに、發音が同じなので用ひた——いはゆる假名遣の掛詞である。池田の宿は遠江國磐田郡に在る村で、天龍川の東岸に在る。昔東海道の驛市であつたが、近頃は大いに衰へた。海道圖會には天龍川の西岸に在つたと見えるから、天龍川の流域が違つたのだらう。

〔元暦元年云々〕平家物語卷十、「海道下りの事」の條に「本三位の中將重衡(中略)三月十日の日(元暦元年)梶原平三景時にぐせられて關東へこそ下られけれ。(中略)池田の宿にもつき給ひぬ。彼の宿の長者ゆやがむすめ侍從がもとに、その夜は三位しゆくせられけり。

侍從、三位の中將殿を見奉つて、日ごろはつてにだに思しめしより給はぬ人の、今日はかかる所へ入らせ給ふことの不思議さよとて、一首の歌を奉る。『旅の空はにふの小屋のいぶせきに故郷いかにこひしかるらん。』中將の返事に『故郷もこひしくもなし旅のそら都もつひの住みかならねば。』とある。「頃かとよ」は頃とかいふことであるの意。

〔重衡〕平清盛の子。治承四年、藝人頭に補せられ、維盛等と共に源頼政を宇治川に破り、進んで東大、興福の二寺を燒き、養和元年、源行家を洲股に擊つた。累進して左近衛中將に任じ、從三位に敍せられた。壽永三年、一の谷の戰の時、追詰められて捕へられ、後鎌倉に送られた。が、前に重衡のために敗北の慘を嘗めさせられた東大、興福二寺の衆徒によつて鎌倉から請ひうけられ、翌年木津川に斬られた。年二十九。

〔東夷〕昔駿河以東の地に割據した蝦夷種族の總稱。あづまえびす。轉じて古來關東の者を卑しめて呼んだ。ここは義經を指す。

〔この宿に著き給ひにし云々〕原文には「この宿につき給ひしに、『東路の丹生の小屋のいぶせきにふるさといかにこひしかるらん。』と長者の娘が詠みたりしその古のあはれ……」とある。

〔思ひ殘さぬ涙〕殘さずに思ひ出でて、涙の種となつたの意。

〔旅館の燈かすかにして云々〕宿屋の燈火が夜明近くなつて薄暗くなり、一番鷄、二番鷄と鳴いて夜明を催促するやうに聞えると、宿を出掛け、匹馬は朝風にいなないて、天龍川をうち渡るといふのである。昔は菜種油の燈火を用ひたから、油がだんだん少くなると、次第に薄暗くなるのである。「鷄鳴曉を催せば」は黄山谷の詩に「晨鷄催不レ起、擁レ被聽ニ松風一。」とある。馬匹は一匹の馬。公羊傳僖公二十三年に「馬匹隻輪無レ還。」と見えて、大敗北の爲に一匹の馬、一臺の戰車も本國へ還らないといふことで、春秋の世は車戰が行はれたから、隻輪といつたのである。又三體詩にも「宮柳青青匹馬嘶。」といふ句がある。「いばえて」は、「いなないて」(嘶)。和名抄に「音西、訓以波由、俗云、以奈々具、馬鳴也。」とある。天龍川は信濃、遠江を流れる大河。

〔小夜の中山越えゆけば云々〕小夜の中山は遠江國の名所で、もと東海道の往還に當り、日坂と金谷と

の間の坂嶺である。昔は日坂から山を上り、菊川に下りて、それから牧野原初倉驛へ出たものだが、室町時代の中世から江戸時代の世にかけて、金谷への新道が開け、それから東海道をここと定められた。近頃更に新道が出來て、菊川を通らずに金谷へ出ることが出來るやうになつた。小夜の名義は狹谷で、中山は長山の義であるといふが、或は佐野郡の中山といふ義であるともいふ。西行の歌で有名になつた。白雲が往來をだんだん埋めて來て、どこがどこともわからない夕ぐれに、家のある鄕卽ち故鄕の空をこひしさの餘りに眺めやつても見えもせず、西行法師の二度目に越えたことまで羨ましい。自分は今度越えればそのまゝに殺されてしまつて、とてもこの山を越えて故鄕京都へ歸ることは出來まいといふのである。

〔西行法師が云々〕　頭註の歌は新古今集卷第十、羈旅歌に「東の方にまかりけるによみ侍りける。」として出てゐる。その大意は、この小夜の中山を年を取つてから再び越えようとは思はなかつたのに、今日又、これを越えることの出來るのは、命があつて長生をしたからであるわいといふのである。

〔隙行く駒の足早み云々〕　駒は白駒といふのを略したので、白駒は日影をいひ、隙は壁の隙をいふ。で、日影が壁の隙を過ぎるやうに迅速に光陰が經過する意。駒といつたから「足早み」と續けたのである。史記魏豹列傳第三十に「酈生說レ豹豹謝曰、人生一世間、如ニ白駒過ヒ隙耳。」とあつて、その註に「索隱曰、莊子云、無レ異ニ麒驥馳過レ隙、則謂レ馬也。小顏曰、白駒謂ニ日影一也、隙壁隙也、以言遠疾若ニ日影過ニ壁隙一也。」とある。「早み」の「み」は形容詞の語根について、その狀を指し、又はその狀を思ふ意を表すにいふ接尾語。亭午は正午。

〔かれひまゐらする程とて云々〕　「かれひ」は餉の略。晝食をたべさせる頃であるので、乘物を休憩所の庭先に止めたのである。輿は人を乘せて舁ぎ行く乘物。昔は貴賤尊卑によつてその形狀製作を異にしてゐた。卽ちいたごし。あじろごし、あげごし、さげごしなど種類が多い。

〔ながえをたゝいて〕　轅は元來車の前の方へつき出た二本の棒であるが、ここは輿を舁くために前後に出てゐる二本の棒をいふ。それを叩くのは、人を呼ぶ合

圖に他ならない。

〔警固の武士〕　非常をいましめて守り固める武士。警衛の武士。警備の武士。

〔菊川〕　今は遠江國榛原郡金谷町の大字。小夜の中山の麓に當り山懷になつてゐる。菊川(後出)が村はづれを流れる。

〔承久の合戰〕　承久三年。後鳥羽院が幕府(北條氏)の專橫を憤られ討伐しようと思ひ立ち給うた時の合戰。承久三年、院宣を諸國に下されたが、北條泰時が鎌倉の將として京師に上るに及び、官軍は敗走し、後鳥羽院は隱岐に、土御門院は土佐に、順德院は佐渡に遷幸あつた。

〔院宣〕　上皇の勅旨。卽ち院中の有司が院旨を奉じて下知する文書で、當時は詔勅と並び行はれた。白河天皇が遜位の後、政を院中に聽かれてから始まる。

〔光親卿〕　東鑑によれば、「按察使光親卿、去日出家(中略)、依レ觸ニ可レ誅之由ニ於ニ加古坂一(駿河)梟ニ之畢、時年四十六。」とあつて、光親が誅せられたのは菊川でない。然るに同書に、「承久三年七月十日、中御門入道前中納言(藤原宗行)相ニ伴小山左衞門尉朝長ニ下向、今日宿ニ于遠江國菊河驛ニ、終夜不レ能レ眠、獨向ニ閑窓ニ讀ニ誦法華經ニ、又有レ書ニ付旅店之柱ニ事ヨ、昔南陽縣菊水、汲ニ下流ニ而延レ齡、今東海道菊河、宿ニ西岸ニ而失レ命。」とあるから、ここで誅せられたのは宗行で、作者の思ひ誤であらう。しかし「宗行」の殺されたのも、實は駿河駿東郡藍津原である。宗行は左大辨行隆の子。累進して建保六年、權中納言に至つた。享年四十八。なほ「卿」は三位以上の敬稱。

〔昔南陽縣菊水云々〕　「昔は南陽縣の菊水。下流を汲んで齡を延ぶ。今は東海道の菊川。西岸に宿つて命を終ふ。」とよむ。東鑑には「終レ命」を失命となつてゐる。昔支那の南陽縣の菊水は、その上流に慈童の彭祖が住んでゐて、菊の葉に法華經の一偈(佛家の詩詞、普通四句を一偈とする。頌の義)を書いて置いたのでそれに置いた露が川水に落ちたために、その川水を飲んだものは長生したといふのに、今は我が國の東海道に在る菊川は、その西岸に宿泊して命がなくなる。昔と今、支那と我が國との差はあるが、菊水と菊川とよく似た名でありながら、かうも違ふものかといふ意味である。慈童の彭祖の話は、太記平卷十三龍馬進奉藤

房卿諫言事の條に見えてゐる。菊川は遠江國榛原郡の山間から出て、西南に流れて、小笠郡に入り、二三の溪流を合はせて海に注ぐ。一名安川。

〔いにしへもの歌〕　一首の意は、古も自分同樣の光親(宗行)卿などの例を聞く菊川の同一の狀態に自分もはいりこむことかといふのである。菊川に聞くをいひかけ、その川の緣語で「流」、「沈む」を用ひたのである。

〔都にありし名を聞いて云々〕　桂川の上流を大井川(大堰川)といふから、この東海道の大井川を通つて、その名を聞いても、あの嵐山の麓を流れる大堰川が聯想せられて、嘗て後醍醐天皇がその大堰川の附近に在る龜山殿といふ離宮へ、嵐山の花盛りの頃行幸せられ、大堰川に龍頭鷁首の船を浮かべたのに乘つて、詩歌を作り管絃樂の合奏をして宴會に侍した事も夢の樣に考へられ、とてもそんな夢は二度と見られないと俊基は思ひつゞけたといふのである。龍頭鷁首は大きな舟で、船の首に龍を刻り鷁を畫がいたもの。樂人などを乘せる船である。龍はよく水を涉り、鷁はよく風に耐へる鳥であるから、颶風の厭勝にするものであるといふ。

〔龜山殿〕　京都嵯峨にあつた離宮。龜山離宮とも嵯峨殿ともいふ。建長年中後嵯峨天皇が檀林寺の古地につき造營せられたもので、大堰川を隔てて嵐山に對し、宮殿堂宇には皆廻廊、廊橋を架設して、輪奐の美を極めてゐた。本文に行幸とあるのは、後醍醐天皇に陪從して、この殿へ參つたのである。今の天龍寺は、足利尊氏が後醍醐天皇の御冥福を祈るために夢窓國師を開山として曆應二年創建したものである。

〔島田、藤枝にかゝりて云々〕　島田は駿河國志太郡の西端に在る町で、遠江國金谷町と大井川を挾んで相對する。藤枝も島田と同郡の地で、瀨戸川の北岸に在る。「かかる」は藤枝の緣語でここは通りかゝる意。岡邊は藤枝と丸子との間の宿で今は町になつてゐる。岡邊は岡のほとりといふ意味にも取れるから、「眞葛」うら枯れて」といつたのである。眞葛の眞は美稱で、「うら枯る」は先の方、末の方枯れること。末のことを「うれ」とも「うら」ともいふ。藤原爲家は定家の子。仕へて正二位權大納言に至つた。續後撰集及び續古今集はその撰する所である。建治元年薨去、年七十九。

〔宇都の山べを越えゆけば云々〕　駿河國安倍郡と志太郡との境界に在る山で、岡部と丸子との間に當る。昔から東海道の官道が通じてゐて、宇津谷峠といふ。蔦、かづらはともに蔓草。

〔すみかを求むとて云々〕　伊勢物語に「昔男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして京にはあらじ、あづまの方にすむべき所(一本に國)もとめにとて行きけり云々。行き〳〵て駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて我が入らんとする道はいと暗う細きに、蔦楓は茂り物心細く、すゞろなる目を見る事と思ふに修業者あひたり。かゝる道にはいかでおはするといふに見れば、見し人なりけり。京にその人の許にとて文書きてつく。『駿河なるうつの山邊のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。』」と出てゐる語を引用したのである。歌はいはゆる序歌で、「駿河なるうつの山邊の」は序詞で、主意は「うつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」にある。卽ち「うつゝに」もの「うつ」と「宇津の山邊」の「うつ」と同音であるから地名に事よせて、裝飾として置いたのである。現實はいふに及ばず、夢にも心に思ふ人にあはないと、意中の人をこひしがつたのである。歌の中「入」は文中の「その人」をうけ「かくやと」は昔の人の境遇も現在の自身のやうであつたらうかと想傾したのである。

〔清見潟〕　駿河國庵原郡の海岸の勝地。興津、由比兩町の間に横たはつてゐる薩埵嶺から西南興津町に至る附近一帶の海岸で、その岫崎は昔清見關の在つた所といふ。夢になりとも都に歸つて見たいと思ふが、波の打寄せる音がやかましいので、おち〳〵眠ることも出來ないのを、波といふ關の番人が、都にかへる夢までも通さぬと洒落たのである。逢坂の關には憂きをば止めぬといひ、ここでは夢さへ通さぬといひ方を變へた所に、筆者の苦心があると思ふ。

〔通さぬ波の關守〕　都に歸ることのかなはぬ身は、せめて夢にだに歸りたいが、その關守が無情にも、その夢さへ通さぬとの意。なほ頭註の法橋顯昭の歌は風雅集卷第三、春歌下に「題しらず」として出てゐる。

〔向ひはいづこ三保が崎云々〕　向ふはどこかと思つて見るといふ「見」を、三保が崎にいひかけたのである。三保が崎は三保又は美穗、御穗とも書き、駿河國有度郡、今安倍郡の東南端から東北に向かひ駿河灣

に突出する砂嘴で、長さ一里半、幅十町乃至二十町、中部で三つに分れて穂狀をなし、最も長く東北に伸びて清水港の口を扼するのを眞崎といひ、中のを貝島、次のを辨天といふ。今三保村といふ一村をなしてゐる。海を隔てて清水江尻に相對する洲の上に老松が群り生え、白い砂と相映じ、南方に渺茫たる大洋を控へ、北方には駿河灣の穩な波を隔てて富士山一帶の風物を望み眺望の美は繪のやうで東海一の勝區である。興津は駿河國庵原郡の海岸に在る町で、もとは東海道の一驛であつたが今はもとの宿、及び八木間、横山、薩埵、洞、清見寺、中宿、承元寺、谷津等諸村を合して町となつてゐる。南に清見潟を擁して風景甚だ佳い。近海で興津鯛がとれる。延喜式に息津驛、十六夜日記に沖津とある。蒲原も同國同郡に在る町で、駿河灣頭富士川河口の西に位し、興津から東北二里餘離れてゐる。富士山を望み景色がいい。

「雪の中より立つ煙云々」　富山士は雪に被はれながら煙を吐いてゐる。それを自分のこの上のない心配にくらべながらといふのである。「おもひ」の「ひ」に「火」をいひ掛けて、煙の緣語とした。頭註の家隆の歌は新古今集卷第十二、戀歌二に出てゐる。

「浮島が原を過ぎゆけば云々」　浮島が原は駿河國愛鷹山の南麓に在る浮島沼即ち富士沼附近の原野。原の東部に原町がある。大日本地名辭書に「足高の裾なる須戸沼附近の原野をいふ。」とある。昔は砂土の海潮作用などによつて移漂したものであつたらう。故に海道記には「この原昔は海の上に浮かびて蓬萊の三つの島の如くに在りにけるによつて、浮島となん名づけたると聞く。」と見える。

「おりたつ田子のみづからも云々」　「潮干や淺き舟見えており立つ」とつゞけたのは、潮干のために海の水が淺いのか、舟が見える所へ人がおり立つて居るといふそのおり立つを、すぐ田子に轉じたのである。田子は又田人ともいつて、田を耕作する人即ち農夫である。上からのつゞきは、水田におり立つ農夫で、「みづからも」に「水」をきかせて、さて自分と轉じたのである。又田子には田子浦を匂はせてある。田子浦は駿河國富士川口附近の海濱で、もとは蒲原附近の濱邊を指したが、今は富士川の東である富士郡吉原、鈴川等の海岸をいふ。古くは田籠、田兒、または多湖とも書いた。東海道海濱中の勝區で、白砂青松互に相映じ、北に富士山を仰ぎ西に三保松原を望み、南は渺々たる大洋に瀕して、山海の風景ともに備はつてゐる。源氏物語葵の卷に、六條御息の「袖ぬるゝこひぢとかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞうき。」といふ歌がある。それ等を利用したのであらう。

「うき世をめぐる車がへし」　車返は駿河國駿東郡の地で、沼津の北に當るといふ。車の緣で上にめぐると置き、水田に下立つて働く田子も、浮世をめぐる活計の爲であるとつゞけた。

「竹の下路行惱む、足柄山の峠より云々」　竹の下は、駿東郡足柄村の地名で、昔の足柄道にあたり、駿河國から、相模國に越える要衝である。これから登る、と足柄峠に達する。建武二年十二月新田義貞が足利氏と戰つて敗れた所。竹の下の道を行惱む足のその足柄山の峠から大磯小磯を見下して、あゝ都を離れて遠くも來たことかなと思へば、袖もさながら波の越えたやうに涙で濡れるといふので、「足柄山」の「足」に歩く足をいひ掛け、「こゆるぎのいそぐ」に「越ゆる」と「磯を急ぐ」とをいひ掛けて、應接に遑がないやうに掛詞を用ひてゐる。

「こゆるぎの、いそぐとしもはなけれども」「こゆるぎのいそ」は淘綾郡（又餘綾）の磯即ち海濱か、それとも淘綾郡の鄕名に伊蘇といふのがあるからそれか。大磯附近であるといふ說があるから、伊蘇といふ鄕が大磯と小磯とに分れたのかも知れぬ。明治二十九年三月大住、淘綾二郡を合はせて中郡が新設せられた。淘綾を昔はよろぎといつた。風俗歌に「玉だれの小甕を中にすゑてあるじはもや肴まぎに肴とりに、こゆるぎの磯のわかめかりあげに、わかめかりあげに。」と見え、それを利用して源氏物語帚木の卷、紀伊守が中川の家に源氏の方違に行く事をいへる條に「あるじも肴求むと、こゆるぎのいそぎありくほど云々」とあるのを襲用したやうに見える。即ち「こゆるぎのいそ」に「いそぐ」をきかせてゐる。古今集、相模の歌には「こゆるぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖に居れ波。」とある。

「鎌倉にこそ著き給ひけれ」　原文には次に左の文が續く。「その日やがて、南條左衞門高直請け取り奉りて、諏訪左衞門に預けらる。一間なる處に、蜘手きび

しく結びて、押籠め奉る有様、ただ地獄の罪人の、十王の廳に渡されて、頸械手枷を入れられ、罪の輕重を糺すらんも、かくやと思ひ知られたり。」とある。

鑑賞批評 この一節は默讀して底に漂ふほのかな風味をすゝり取るといふ種類の文章ではない。是非音讀して自分の聲の律動に聽入る——といふ底の文章だと思ふ。そして、さうした音讀をしてゐるうちに、自ら作者の表さうと意圖した情緒が、心の中に釀し出される文章だと思ふ。まして、一字一句の辭書的解釋に心を取られ、頭を痛めなどしてゐた日には、この文章の生命は影のやうにどこかへ逃げ去つてしまふに相違ない。作者は、甚だ衒學的である。あたかも謠曲の作者がさうであるやうに、一句一句古歌を綴り合はせて、そこに日本流の詩美を漂はせようとしてゐることは、あまり明らか過ぎるほど明らかなことである。が、それは飽くまで「日本流の詩美を漂はせようと」するためであつて、それを——その出典を、謎々か何かのやうに讀者の頭惱に訴へてほじくり出さうなどとしたものではない。で、本課の基調は、いふまでもなく俊基朝臣——屠所に引かれる羊と化した俊基朝臣の哀な感慨、旅情に置かれてゐるのだが——かうした特殊な感慨旅情を寫すのに、太平記の作者が選び用ひた表現樣式が、どれほどしつくりと調和したものかはここに吻々を要しないことと思ふ。——讀み進んで行くうちに、山を送り、湖を迎へ、川を越え、野を過ぎ、朝日を仰ぎ、夕日を顧、宿から宿を縫つて蜿々と續く東海道の旅跡のさまが、巧に綾なされた緣語掛詞によつて、あたかも葬送曲(フューネラルマーチ)のやうに徐々と靜かに靜かに心に律動を與へる——と思ふのは、あながち筆者ばかりではあるまい。俊基朝臣の一行の微かな足音——遠江から駿河に、駿河から相模に長々しい旅を續ける一行の足音さへ緣語と掛詞の中に籠められてゐるやうな感じがするではないか。それは進みののろい足である。氣の進まない旅である。俊基朝臣にとつては、この旅の終る時が卽ち死ぬ時に他ならないのだから……。我々は、今本課を一讀し、さうしたのろく、はかばかしからぬ步調がこの一節全體のテンポとなつてゐることを、しみ〴〵と感ずることが出來たと思ふ。「緣語、掛詞などを自由自在に驅使し故事成句を織りまぜて錦繡の如き詞章をなしてゐる。」などといふ評言でもつて、本課の文を批評し得たとする人には、又何をかいはんやである。一面かうした道行文を

一括して、「文章の一種の遊戯」であると見なす人に對しても、亦我々は與することが出來ないものである。

參考 「道行文」は鎌倉時代の軍記に於ては、ほんの記事の一部として、人物の行動を叙したものに過ぎなかつたが「太平記」に於ては、發達して一種の獨立した文學の趣を具へるやうになつた。そして後には更に發達して謠曲や淨瑠璃に見るやうな、劇の主要なる一部とさへなつた。先づ謠曲の道行を標本として擧げて見る。

信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に着きにけり。(鉢の木)

簡單ながら出發から到着までの地名と、その間の景色と、行人の情意と、かう三つの問題を同時に美しく取扱つた、謂はゞ三元描寫の文章法である。

しかしこの三元描寫は隨分困難なので、二元描寫に留まつて居るものも尠くない。例へば、

旅衣思ひ立ちぬる朝霞、彌生の空も半ばにて、日影のどかに行く舟の、浦々過ぎてはる〴〵と、波の淡路をよそに見て、須磨の浦にも着きにけり。(須磨源氏)

の類で、これは叙景が主となつて、行人の情緒の殆ど表はれてゐないものである。

何處にも住みは果つべき雲水の、身は果知らぬ旅の空、月日程なく移り來て、所を問へば世を厭ふ、我が衣手や住の江の、里にも早く着きにけり。(梅枝)

これは殆ど一種の抒情文となつて居るものである。道行文は大抵この三種の何れかに屬するのであるが、中には純乎たる一元描寫のものもある。

近江路や瀨田の長橋うち渡り、猶行末は鏡山、老蘇の森も打過ぎて、末は伊吹の山風の、不破の關路を過ぎ行き、青墓の宿にも着きにけり。(朝長)

これは單なる旅行した地名の列擧「所盡し」ともいふべきもので、その間には叙景もなければ抒情もない、これと比べると、二元描寫や三元描寫の妙趣がはつきりと解つて來る。

道行文が朝長のやうな「所盡し」の一元描寫になると、まるで詩趣のないものになつてしまふ。之に對して叙景や抒情の一元描寫を見よう。

百千鳥囀る春は物毎に、あらたまりゆく日數經て、頃も彌生の空なれや、やよとゞまりて花の友、知るも知

らぬも諸共に、誰も花なる心かな。（西行櫻）

これには地名さへも見えない。春の歌の一種である。名にし負ふ豐芦原の國津神、青海原にさし下す、天の瓊矛の露なれや、秋津島の朝ぼらけ、其方もしるく浮ぶ日の、神の御國はこれかとよ。（善界）

これは國土歎美の歌である。

これ等はそれ自體としては興味のある文章ではあるが旅程を叙述すべき道行文としては、全く本義に離れたものといはねばならぬ。（佐藤謙太郎氏による）

二　春は曙

清少納言

（枕葉子）

扱方　清少納言の「枕草子」の抜萃である。「源氏物語」とともに國文學の冠冕と稱せられ、いかにも女性らしい精緻な觀察と、豐かな才分を思はせる奇警な批評と犀利簡勁な筆力とを以て燦爛とした光輝を後世に放つてゐるこの書は、我が國最古の勝れた隨筆として國文學に大きな影響を及した。ここには冒頭の四季の變化を敍した一段、木の花の風情を描いた一段、有名な香爐峰の雪の一段等を抜いた。この數節のうちにも清少納言の文の特色は溢れるほどに表れてゐる。この特色を吟味させ、既得の文法の知識を十分に發揮させて、正しい現代語譯を試みさせ、當時の文章の大體を知らしめ、延いて、王朝文學に親しましめる一助としたい。

教授

作者

清少納言　セイセウナゴン

清少納言といふのも、また紫式部と同じく呼名で、姓が清原であり、父元輔（深養父の孫）の官位が少納言であつたから名づけられたといひたいが、どうも元輔は少納言のやうな高位に昇らなかつたのである。その實名は諾子だといふ說があるけれど、もちろん信ずるに足りない。紫式部と共に實名は悉皆わからないのである。少納言が一條天皇の中宮（後、皇后となられた）定子（後出）の宮に仕へたのは正曆二年頃の事だつたらしい。そして長德二年十二月、定子が崩御せられてから後の「少納言の消息は明らかでないが、崩御と同時に宮中を去つたものと見るが至當であらう。或は上東門院彰子（關白道長の女、一條天皇の中宮。因みに彰子が中宮となると定子は皇后の尊稱を得たことについては後出）に仕へたとか（扶桑拾葉集作者系圖）、三條院の女御淑景舍に仕へたとか（春曙抄）といふ說もあるが、それは少納言を誣ひるものでなければ幸である。忠臣二君に仕へずの思想でないまでも、あれほどまでに理解しあひ、親しみあつた皇后君臣といふ關係を離れて敬愛してゐた皇后に突然死に別れての彼女の絕望と悲歎とは推察される。彼女の氣質として再び主人を代へて宮仕しようとは、到底考へられない事であつたに違ひない。（中略）彼女にとつて唯一の偶

像であり唯一の知己であつた皇后の崩後、悲歎の裡にも周圍の情勢見るに忍びず、憤然袂を拂つて去つたものと見られる。その後は獨りわびしく舊邸の附近にさゝやかな棲家を求めて味氣ない月日を送つてゐたらしい。（中略）その後、少納言は尼になつた、彼女は尼になつた後も、舊宅の傍に住んでゐたか。……或は郊外にでも隱棲したか知れぬ。無名草子には、身より賴りもない彼女は、乳母の子に連れられて、遠い田舍に行つてしまつたとも書いてある。要するに清少納言の時代は、その宮廷生活十年間だけである。皇后の崩御と共に少納言の生命もまた終を告げたのである。」（栗原武一郎氏著――枕草子全釋）その家集は「清少納言集」。

引用書

枕草子――「清少納言が日常生活の經驗並びに感想を叙述したもので、自己の周圍に關するものと、自然の觀察に關するものとが交錯してゐる。そして中には『雪の山』や『法興院の供養』の如き長篇もあるが、『ものはづくし』の如き名詞を羅列した極めて短いものもある。かくの如くして三百一段の記事は、その間に連絡もなく統一もなく、たゞ思ふがまゝに書いてあるので、自然觀察の文に自讃の文があり、次にものはづくしがある如きである。この一見不統一であるが如き中に、清少納言の感興が浮び出て、その自然觀が表れてゐるのである。彼女は殿上人に對しても常に對抗し、頭中將齊信や藤原行成に對しても漢才の應用と機智とをもつて張りあつてゐる。そして己より才の鈍い則光の如きに對しては盲目的な愛を寄せ、幼兒や犬猫に對しても溢れるばかりの愛と同情とを注いでゐる。この弱者を愛し强者に對抗する所に、彼女の自我の强さを示して居り、從つて、或書には非難せられた所もあつたであらう。そして感性の鋭さは衣服の色彩等に關する細かい記述にもなり、自然の急所を捉へてゐる。この點に枕草子の特質もあり、長所もある。が、彼女の觀察はどこまでも感覺的であつて、內面に入り得ず、彼女の自我も外面的な自己優越感であつてそれ以上深く內面的に入り得なかつた所に、やはり彼女もこの時代の一女性であつたことを思はしめる。」（藤村作著――國文學史總說）

語釋

○四　季

〔春は曙（あけぼの）〕　春の景色の最も賞すべきは（一日の中で）

曙であるとの意。春にては、曙が最も面白いの意。即ち「曙」の下に「をかし」といふ語が略されてゐる。以下、「夏は夜」「秋は夕暮」「冬は朝」も皆同じ。（（をかし」に就いて後出）

〔白くなりゆく〕　夜が白んで來る。明るくなつてゆく。「しろく」を著（しる）くと解し、はつきりして來る意に解する說もあるがどうか。尙、「――なりゆく」で句切る說があるが、從ふべきであらう。

〔山ぎは〕　山際。山の峰と空と接する際、つまり空を劃してゐるあたりの山の峰、――山の輪廓。

〔あかりて〕　明りて。ほの紅くなつて。

〔紫だちたる〕　紫色を帶びた。「たつ」はその氣の發（た）つ意。紫は今日一般にいふ紫とは違つて、稍赤味を帶びた茶色で、いはゆる古代紫である。今日の紫色は、江戸紫である。

〔たなびきたる〕　たなびきたるがをかしの意。

〔月の頃〕　月のある頃。月夜。

〔さらなり〕　いふもさらなり。即ちいふまでもなく面白いの意。

〔闇もなほ〕　闇の夜も。「なほ」はやはりの意。月夜もいいが、闇夜もまたよい。

〔飛びちがひたる〕下に「をかし」が略されてゐる。「とびちがふ」は入り亂れて飛ぶこと。

〔雨などの降るさへ〕　雨が降るのなども、夏の夜の雨はどこか風情があつて面白いの意。

〔をかし〕　興趣がある。面白い。これを可笑の意に限つたのは後期のことである。

〔はなやかに〕　ぱつと鮮かに美しく。

〔山の端いと近くなりたるに〕　夕日が低くなつて、山の端に極めて近くなつた時分に。山の端が近くなつたやうに見える意に解しない方がよい。「山の端」はここでは「山ぎは」と同じ意に解してよい。「いと」は甚だしく、極めての意。

〔ねどころ〕　ねぐら（塒）。

〔あはれなり〕　趣がある、風情がある。感が深いといふ意。「あはれ」は面白い事でも、悲しい事でも、すべて人の情緒を動かすことを意味する。これを悲哀同情の意に限つたのはやはり後世のこと。

〔まいて〕　「まして」の音便。

〔つらねたる〕　列をなしてゐる。

〔小さく見ゆる〕 遠方に高く點々のやうに見える。
〔蟲のねなど〕 下に「聞ゆる」が略されてゐる。
〔つとめて〕 早朝。「つとめて」は副詞で「朝早く」の意もあるが、ここは名詞で、朝、早朝の意。冬は早朝が最も面白いの意。
〔言ふべきにもあらず〕 いふまでもなく面白い。
〔さらでも〕「さあらでも」の略。さうでなくても。雪や霜が降つてゐなくても。
〔いと寒きに〕 非常に寒いのに。
〔炭もてわたるも〕 炭を炭取に入れて持つて歩くのも。「もて」は持つて。
〔つきづきし〕 似合はしい。似つかはしい。ふさはしい。いかにも冬らしくてよい。いかにも冬の氣分にふさはしい。
〔ぬるくゆるびもてゆけば〕 嚴しい寒さがだん〳〵と緩んで來て、溫くなつて行くと。「ぬるく」は溫くで稍溫いこと。「ゆるぶ」はゆるやかになること。「もてゆく」は次第に進みゆく意。
〔すびつ〕 炭櫃。「すみびつ」の略。圍爐裏のこと。爐床を四角に穿ちて設け、火を燃し、又は火を貯へて暖をとる所。
〔火桶〕 火櫃(火鉢)の圓いもの。圓火鉢。桐の木などをくつて作り、內を銅やその他の金屬で張り、外部を木地、又は箔でだみ、その上に彩色の繪などを施したもの。
〔白き灰がち云々〕 晝になつて溫になつたので、誰も火鉢の傍へ寄りつかなくなり、炭もなくなつて、ただ白い灰ばかり多くなつてゐるのは、餘りよい感じはしないの意。

○降るものは

〔雪。霰〕 この下に。をかしを略してゐる。
〔みぞれはにくけれど〕「みぞれ」は霙。雪の降る際やゝ溫暖な氣層を通過するとき、その一部がとけて急激に降るもの。——霙の降ることは少し氣にいらないけれどもの意。
〔まじりたる〕 一本「まじりてふる」に作る。
〔檜皮葺〕 屋根を檜の皮でふいたもの。この下に「降りたる」を略してゐる。
〔消えがた〕 消えかけた程。消えぎは、消えかけた頃。「がた」は、頃ほひの意。

〔瓦の目〕 瓦と瓦とのふき合せ目。
〔黑う、眞白に云々〕 ここは勿論、瓦は黑く、雪のあるところだけは特に眞白に見えるの意。「黑う」は「黑く」の音便。
〔霰は板屋〕 この次に「をかし」の語の略されてゐることは前例の通りである。霰が板でふいてゐる屋根に降る音が面白いとの意。
〔いとをかし〕 原文には、この次に「朝に去る色とかや。文にも作りためる。」とある。甚だおもしろい、趣味がある。

○木の花は

〔木の花〕 木に咲く花。草の花に對する。
〔濃くも淡くも紅梅〕 梅は色が濃いのでも薄いのでも、紅梅が最もよいの意。
〔櫻の花びら多きに〕「櫻は」もちろん山櫻である。
〔葉色濃きが〕 山櫻の若葉の濃い赤色をいふ。
〔枝細くて咲きたる〕 下の「いとめでたし。」に掛けてある。細い枝に咲いてゐるのはの意。
〔しなひ長く〕 花房が長く垂れてゐること。「しなひ」はしなやかに撓むこと。
〔色よく〕 色美しく。
〔めでたし〕 愛づべくあり。愛すべし。賞すべし。非常に見事であると褒めた語。
〔卯の花〕 空木の花。灌木で、初夏の頃、白い花が咲く。それがちやうど陰曆四月頃であるから、陰曆四月に卯月といふ異稱が出來た。又、その頃に降りつゞく霖雨を卯の花腐といひ、その頃の曇天を卯の花曇といふ。
〔品おとりて〕 他の花よりも品格が劣つて。
〔何となけれど〕 どこをどうと特に取立てていふ程でもないが。
〔咲く頃のをかしう〕 咲く時節そのものが面白く。折からの晩春初夏で、杜鵑なども啼き、賀茂祭もあり興趣盡きない時節であることをいふ。
〔杜鵑の蔭にかくるらんと〕 ほとゝぎすが卯の花の蔭に隱れてゐるだらうと思ふと。杜鵑と卯の花とは古來歌では常に配合されて詠まれてゐるが、「新古今集」夏の人丸の歌に「なく聲をえやは忍ばぬほとゝぎす咲く卯の花の蔭に隱れて」といふのがある。
〔祭〕 賀茂祭。男山八幡宮の祭を南祭といふのに對し

て、北祭ともいひ、その盛大なことが京中第一であるところから、單に祭といへば賀茂祭を指すやうになつた。又、この祭日に葵の葉を社前に飾り、供奉の人々の衣冠に着け、車簾にかけるから葵祭ともいつた。山城國愛宕郡上賀茂村にある神茂別雷神社と、同郡下鴨村にある賀茂御祖神社との大祭で、昔は陰暦四月中の酉の日に行はれ、祭日には朝廷から奉幣使以下發遣し齋王に供奉させられた。齋王はまづ下社に參向し、次に上社に向ふ。その行列が壯觀であつたから、上は上皇、女院より、下は田夫までも先を爭つて見物し、棧敷を所々に構へ、物見車が路を埋めたさまが「年中行事繪卷」などに見えてゐる。今は五月十五日に古式に則つて行はれるのである。

［かへさ］「かへるさ」に同じ。お歸り。歸途。齋王は四月中の酉の日に紙の下社（賀茂御祖神社）から上賀茂の上社（神茂別雷神社）に參向の後、神館に一夜お泊りになつて、その翌日齋院に歸り給ふ。その歸り道にの意。

［紫野］　愛宕郡大宮村大德寺附近の舊稱。船岡山の東大德寺、雲林院等があり、賀茂齋院もまたこの附近にある。

［わたり］　あたり。邊。附近。

［あやしの家ども］　見苦しい家家があつて。「あやし」はここでは怪の意ではなく、卑しい、見苦しいの意。卑しいものは貴人の目から見れば、奇怪に見えるからかういふのである。

［おどろなる］　やぶになつてゐる。「おどろ」は柴や雜木のこと。三丹地方の方言。本來はうばらの意で、荊棘のこと。

［垣根などに］　空木を生垣に交へてゐるのである。

［青色］　染色、又は襲の色目の名。麴塵、卽ち黃色のかゝつた青色である。

［單がさね］　單襲。單重「花鳥餘情」に「女房の裝束、五月五日よりは單がさねを著る。單二つを捻り重ねたる物なり。」とある。「捻り重ね」とは二枚の單の端を合はせて縫ひ捻ること。袷ではない。地質は生織物、又は綾等を用ひ、色は普通には蘇芳、女郎花等である。

［かづく］　被く。上から引重ねて着ること。「かづきたる」の下に「さま」を入れて解するとわかりよい。綠色の「おどろなる垣根」の上に白い卯の花が咲きこぼれてゐるさまの形容。垣根を「青色の衣」に、卯の花を「白き單がさね」に譬へたもの。「かづきたるやうにて、いとをかし。」の所が、原文には「かづきたる、青朽葉などにかよひて、いとをかし。」となつてゐる。

［晦］　月ごもりの略言。月かくるの義。月が全くかくれて、影のないこと。陰暦で月の下旬をいふ。又陰暦の月の最終日に限つて用ひる。ここは次の「ついたち」と共に狹義にとつた方がよい。晦。みそか。

［朔］　月たちの音便。月が立つ義。陰暦で月の上旬をいふ。又陰暦の月の第一日に限つて用ひる。ここは後者。

［橘］　垂仁天皇の十年、田道間守を常世の國に遣して求められた。今、一般に柑子蜜柑の稱である。去年の實も今年花が咲くまで黃に色づいたまゝ落ちずにゐるところから、祝の意で年始に用ひられる。花は細かく白色である。「橘の葉の」は原文には單に「橘の」とある。

［世になく］　世に又となく。

［心あるさまにをかし］　趣があつて面白い。

［花の中より云々］　花の咲いてゐる中に、黃金の玉のやうに熟した實（去年の實）が見えてゐて。和漢朗詠集に「枝繁二金鈴一春雨後、花薰二紫麝一凱風程。」（具平親王）とある。

［きはやか］　際やか。際立つてゐるさま。朗らかに。鮮かに。目立つて。

［杜鵑のよすがとさへ云々］　その上に、この橘は杜鵑と緣あるものと思ふからであらうかの意。橘と杜鵑はよく配合されて歌に詠まれるからかういつたので、「古今集」に「けさ來鳴きいまだ旅なる杜鵑花橘に宿はからなん」などある。「よすが」は、緣、寄處の義、ゆかり、たより、よるべの意。

［いふべきに　あらず］　いふまでもなくをかしの意。

［よに］　ことの外に。非常に。誠に。ここでは「世の中で」と解さない方がよい。

［すさまじく］　「すさまじ」は荒凉の義で、興のないこと、面白くないこと、その他厭なこと、淋しい、物凄い、恐しい等の意がある。ここは興趣に乏しいこと。

［あやしき物］　前にもあつたやうに、ここも卑しいものの意。

［目に近く］　目に近づけて賞玩したり。

［はかなき文つけなどだにせず］　ちよつとした手紙

をその花の枝につけたりなどすらもしない。手紙を花の枝につけて人に贈るのは當時の慣習であつた。

〔愛敬おくれたる〕 愛嬌の足りないこと。無愛嬌なこと。愛敬は俗にいふ愛嬌に同じく、愛らしく、人ずきのする意。

〔たとひにもいふ〕 當時、無愛嬌なことを「梨の花の如し。」と譬へていつたものらしい。「たとひ」は「たとへ」の方がよい。

〔その色よりして〕 その花の色をはじめとして、その花の白けた色からして。

〔愛なく〕 愛らしげがなく。――無愛嬌に。

〔もろこしに限りなき物にて〕 支那では、この梨の花をこの上もなくよいものとして。「もろこし」は、昔我が國で支那を呼んだ稱。唐又は唐土の字を宛てる。

〔文にも〕 詩文にも。「文にも作るなるを」は詩文にも作つてあるが。「文」には書物、文書の意。手紙の意、詩の意等がある。

〔さりともあるやうあらん〕 「さりとも」は「世にすさまじく云々」から「愛なく見ゆる」までを指してゐる。たとひそんなに無愛嬌な花であつても、どこかに褒められるだけの仔細があらうとの意。「あるやう」は「しかあるやう」の略で、「しか」とは「もろこしに限りなきものにて、文にも作る」仔細を指す。

〔せめて〕 強ひて。心をとめて。

〔にほひ〕 ほんのりとした色艶。匂はここでは香氣の意ではない。

〔心もとなくつきためれ〕 あるかないかのやうにおぼつかなくついてゐるやうである。「めり」は物事の狀態を然りと推量していふ意の語。原文にはこの次の「楊貴妃、みかど「玄宗」の御使にあひて泣きける顏に似せて、梨花一枝春の雨を帶びたりなどいひたるは、おほろげならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは類あらじと覺えたり。」とある。

〔さてなほいみじう云々〕 それによつて見ると、やはり梨の花の非常に結構なものであることは（もろこし人がいつたやうに）他に比類はあるまいと思はれた。

〔葉のひろごり〕 葉の大きく廣がつてゐること。「廣ごり」は「廣がり」に同じ。

〔ざまうたてあれど〕 その樣（葉の廣がつてゐる樣）が餘り感心しないが。「うたて」は、もとはいよい

よ悪しくの意。忌はし、面白みなし。

〔他木〕 異木の義。他の木。

〔ひとしういふべきにあらず〕 同一視することは出來ない。

〔ことゞしき名つきたる鳥〕 仰山な、大層な名のついた鳥。鳳凰をさす。鳳凰は支那で想像上の瑞鳥。羽蟲の長とされ、鷄頭、蛇頸、燕領、龜脊、魚尾、羽の五彩の色文を具へてゐる。梧桐でなければ棲まず、竹實でなければ食はず、醴泉でなければ飲まず、天下に道ある時は出で、道なき時は隱れるといはれる。

〔これにしも栖むらん云々〕 鳳凰のやうな瑞鳥も特にこの桐の木を選んで住むのであらうと思へば、又一種特別な心持になるといふ意。「しも」は意味を强める助詞。

〔琴に作りて〕 琴は長い桐の板を張り合はせて中を空にし、その上面に絃を張るのである。毛詩に「椅桐梓漆、爰伐琴瑟。」とあり、「文選」に「惟椅桐之所レ生兮託二峻嶽之崇岡一、至人攄レ思制爲二雅琴一。」とある。

〔をかしとはよの常に云々〕 「世の常にをかしとはいふべくやはある。」の意。世間にありふれた言葉でただ「をかし」といへようか、いはれはせぬ。さういふ言葉ではあらはせないほど興趣深いといふ意。

〔木のさまぞにくげなれど〕 木の樣には愛らしげはないが。

〔あふち〕 樗。楝とも書く。高さ一丈餘に及ぶ。葉は南天に似て鋸齒狀をなしてゐる。夏五瓣の淡紫色の花を開き、圓い實を結ぶ。木材は種々の用になる。俗に栴檀の木といふ。

〔枯ればなに〕 枯花に。花の色が干からびてゐて。

〔さまことに〕 風がはりに。異樣に。普通の花とちがつて。

〔五月五日にあふ〕 五月五日の節句の時、必ずこの花の咲いてゐるのに出會ふの意。「拾芥抄」に「證類本草云、五月五日供人取二楝葉一佩レ之、避二惡氣一。」とある（今でも田舍などで端午の節句にせんだんを折つて軒に挿す習俗の地がある）五月五日は端午の節句である。五節句（正月七日人日、三月三日上巳、五月五日端午、七月七日七夕、九月九日重陽）の一で、端午は月始めの午、卽ち初五の義で、五午相通じ用ひたので、もとは五月の第一日の午の日に行はれたが、いつの頃から

か五日と定まつたのである。重五の節句とも、菖蒲の節句ともいひ、俗に上巳の節句を女兒の佳節とするに對して、端午は男子の節句として、その立身榮達を祝する。中古朝廷ではこの日に天皇は菖蒲縵を着けて武德殿に出御して節會を行はれ、群臣を召して饌を賜ひ又藥玉を賜ふ。文武の百官もまた菖蒲縵をかける。これを五日節會といひ、節會が終ると、左近、右近の馬場で騎射を行はせ給うた。

○香爐峯

〔香爐峯〕 香爐峯とも書き、支那江西省の潯陽道に聳える名高い廬山の北に連る一峯である。雲氣が蒸しのぼつてその峯がちやうど香爐(香を焚くに用ひる具)に似てゐるので、この名がついた。

〔例ならず〕 平素と違つて、いつもと違つて。いつになく。

〔御格子まゐらせて〕 御格子を下して「まゐらせて」は下しての意を鄭重にいひあらはした語。「まゐる」は高貴のあたりで、格子を上下するをいふ。格子は細い角な木を縱横に組合せて造つた戸で、寢殿造などの建物の外面の柱と柱との間にはめ、上下二枚あつて、上のを釣上げ、下のをたてて置くのである。今も社寺などにこの制が殘つてゐる。

〔集りさむらふ〕 女房たちが集つて侍坐してゐると。

〔少納言よ〕 清少納言よ。清少納言の仕へてゐた皇后(藤原定子)の御言葉である。

〔香爐峯の雪〕 「白氏文集」卷十六に「香爐峯下新ト二山居草堂一初成偶題二東壁一」として「日高睡足猶慵レ起。小閣重レ衾不レ怕レ寒。遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。匡廬便是逃レ名地。司馬仍爲二送レ老官一、心泰身寧是歸處。故鄉何獨在二長安一。」とある。尙「遺愛寺云々」の對句は「和漢朗詠集」にも出てゐる。白樂天が江州の司馬となつて廬山(江西省)の一峯香爐峯の下に新しく草堂をつくつて住んだ時賦した詩である。大意は、朝日は高くのぼつて眠も十分足つたのに、なほ起きあがるのが太儀で、小閣に夜着を重ねて寒さを恐れない。折から響いて來る遺愛寺の鐘は枕を傾け注意して聞き、香爐峯に降積んだ雪は簾をかゝげて眺める。匡廬(廬山の別名)のやうな邊鄙な地は名聞を逃れるのに最も適當な地であらう。又司馬の官は閑であるから餘生を送るのにはまことに都合がよい。毫も俗事に心身を拘

束せられることがなく、心も身も共に安寧であるからこの地に安住して、都の長安に戀々たる心は些もないといふ意。香爐峯、遺愛寺に就いては「白氏文集」卷四十三の草堂記に「匡廬奇秀甲二天下山一、山北峯曰二香爐峯一、北寺曰二遺愛寺一、介二峯寺間一其境勝絶、又甲二廬山一云々。堂東有二瀑布一、水懸三尺、瀉二階隅一、落二石渠一、昏曉如二練色一、夜中如二環珮琴筑聲一云々。春有錦繡谷花一、夏有二石門閒雲一、秋有二虎谿月一、冬有二爐峯雪一。」と出てゐる。

〔御格子あげさせて〕 人に……。

〔御簾高く云々〕 少納言自身が……。御簾は神前、又は貴人の前などに垂れるすだれ。綾、緞子などの緣がつけてある。

〔笑はせ給ふ〕 皇后が……。

〔さる事〕 白樂天の「香爐峯」の詩のこと。

〔思ひこそ寄らざりつれ〕 この場合に、機轉をきかせて、御簾を高く捲上げるなどといふことは、少しも心に浮かんで來なかつた。

〔なほこの宮の人には云々〕 やはりこの皇后に仕へる人としては、清少納言は相當した人のやうであるの意。人々が清少納言を賞讃した語である。因みに皇后定子は關白道隆の女で伊周の妹に當る。正曆元年正月一條天皇の女御として入內し、十月には中宮となつた。天皇はその時御年十一歲、定子は十五歲の若さであつた。長德二年懷姙して、二條の第に移つたが、折から(四月)兄伊周と隆家が罪を得て配流されたので、これを憂へて尼となつた。そして、この尼となつたことが道長に、彰子を中宮とする口實を與へたのであつて、即ち長保二年、道長は「主上の寵幸は舊の如くなりと雖も一旦尼となりしものは、眞の中宮に非ず。宜しくこれを優禮して別に中宮を立つべし。」と論じ、定子には皇后の名譽を與へて、彰子を立てて中宮としてしまつたのである。長保二年十二月崩御、御年二十五。

鑑賞批評 「枕草子」の文章には定評がある。ここに多言を要しないが、細かな美を十分に味ははうとする作者の感受性と、齒切のいゝ省筆とには、どんな讃辭を贈つても、過ぎるといふことはあるまい。たとへば「夕日花やかにさす」秋の高い大空に「雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆる」風景を敍したあたり、又「日入りはてて、風の音虫の音などいとあはれなり。」とだけ敍して

夕闇の深さと、肌にしみる夜寒を讀者に感じさせるあたり、木の花の所で山櫻の「花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる」さま、橘の濃い綠の葉と白い花との上に降る初夏の朝雨の風情など、すべて簡潔に印象的な筆觸で描かれてゐる。一方、作者が色彩に重きを置いてゐることにも心を留めて見なければならない。即ち「白くなりゆく」といひ「すこしあかりて」といひ、「紫だちたる」といひ、或は「櫻の葉色濃き」「橘の葉のいと濃く青きに花のいと白く」「橘の實の黃金の玉かと見えて」「花びらのはしにをかしき匂」「桐の花紫に咲きたる」の如き、作者の印象には、悉くといつていゝほど、色彩が主となつてゐることに氣附くであらう。又、「青色の衣の上に、白き單がさね云々」といふ卯の花の形容に就いては、かうした服色に見立てることをこの作者が得意としたことを話されたく、四季のうち、春夏は短く記し、秋冬を比較的長く記したところ、「三つ四つ二つ」の數へ方の末に至るまで、文章の妙味が溢れてゐる點に注意すべきである。

參考 金子元臣氏の「枕草子評釋」の中から、本課採錄のものに對する評を摘記しておく。

〔四季〕 我々日本人くらゐ自然といふものに對しての深い憧憬をもつてゐる民族は、他に恐らくあるまい。我々の祖先の生活は、自然に支配され、時に盲從してゐる。それ故我々の有する文學美術には、自然を目的として、その美を發揮することを勗めたものが頗る多い。よし目的とせぬまでも、自然を背景とせぬものは殆どない。だからわが文學美術から自然を切離して見ることは、到底不可能なことである。かうした國民性をもつた我々の祖先が、やゝもすれば四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは、蓋し當然である。云々。

やわらかい輪廓をつくつた東山の峯に、ほの〴〵と別れてゆく横雲の空は、京うまれの淸女が、幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が今の我々の想像以上に强かつた當時において、「雨などの降るさへをかし」と道破したのはよく時代を超越して、自然の趣味を解したものである「三つ四つ二つ」の辭樣の參差は、雁のまばらに飛んでゆく、狀を形容し得ておもしろい。「ちいさく見ゆる」は、雁が山とび越えて去來する光景で、京都の地勢上常にあり勝なことである。稀にはひくゝ飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は、遠く聞えたるをかし」といつてゐるのを見ると、それは淸女の嗜好に適はなかつたものだらう。否恐らくは、近い雁に詩味を感得するほどの機會と經驗とをもたなかつたのだらうと推察される。「火など急ぎおこす」に、寒氣を怖れた趣が現れてゐる。「炭もてわたる」は、彼方此方の火桶炭櫃に、女官達が炭つぎ廻るさまであらう。……天井はなし、大間(おほま)にはあり、四方かけ拂にはあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舍では、寒さはさこそと思ひやられる。そこで、火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味なわけとなつて、つき〴〵しくも、をかしくも感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は、空前の新案である。さて春は曙、夏に夜、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出來て、次にはその細說を試みるに當つて、春、夏、秋は專ら叙景につとめ冬には人事を配して、內容に變化あらしめ、また春、夏を輕々に評し去つて、秋冬に力をそゝぎ、また春、夏、秋は專らその好處のみ擧げ、冬には「晝になりて……わるし」と、抑損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んでまことに面白い。しかも文の樣式が整然として、その結構から布置から、一寸のたるみも無い。初學者の模範を取るには、最も都合のよい文體の一つであらう。

〔雲は〕 曙雲を中心としていろ〳〵の雲を擧げ、さて月前の雲に及んだ。當時において雲の觀察に、これだけ耽り得たことは珍しい事であり、又空前であつた。

〔木の花は〕 奈良時代には專ら白梅を賞翫したが、平安時代になつて紅梅を珍重することが始まつた。尤も奈良時代には白梅こそ舶來してゐたが、紅梅はなかつたかも知れない。平安時代は優美といふ方面にその全力を傾注した時代で、社會のあらゆる事件から文學工藝の上にまでその結果があらはれた。そこで紅梅も大分ふえて來て、禁中にも數多植ゑられ、色の濃いのを殊にめではやして、紅の濃染の梅といひ、鶯宿梅の佳話さへのこつた。紅梅合も始まつた。櫻は我が邦花だがその枝さしの無骨なのに氣付いたのは慧眼である。

（枝のしなやかな今の櫻は染井吉野といつて、德川時代の變種である）

藤の花は奈良以前から賞玩された花で、これを氏名

とした藤原氏もある。「今ぞ榮えん北の藤なみ」など歌はれて、藤原氏の興隆と共にます〳〵珍重され、その花の紫色は、色相上非常になつかしい色合である。殊に平安人士の性情では、この派手やかな優雅な紫色が大にその嗜好に適つたもので、大寶令の服色の制度が一變して、四位以上一色の黑袍となつたこの時代にもなほ紫を聽色即ち禁色といつて勅許を經ぬ以上は君達でも着ることが出來なかつた。で、單に色合が濃い薄いといふ時は、紫藍のうへのことである程に一般的好尙となつた。當時非常にもてはやされた葡萄染でも、二色でも、つまりは紫が基礎色である。下文に「紫のものは、何も〳〵めでたし」といつてゐる。

桐の花や楝の花も、色が紫だからよいのである。花にはさのみいゝ所は認められない。鳳凰や琴は典故的で、印象があさい。楝は禁中に割合に多かつたことから想像すると、これをめづるのは時代の好みであつたらう。まして古人が五節供などの年中行事に對する趣味心執着心の強いことは、現代人の夢にも思ひ及ばぬ所で、殊に婦人の筆者としては必ず端午の節に咲合つて、その花は贈物として翫ばれる楝はなつかしくもめでたくも覺えたであらう。

卯の花は平安期に入つて、いよ〳〵器量をあげた。祭のかへさの卯の花は、下文に更に詳述した名文がある。清女のよほど氣に入つたものであらう。白重した青色、青朽葉に比べたのは、さすがに婦人の觀察である。

橘は垂仁朝以後繁殖して、奈良時代には路傍庭前、これを植ゑぬ所はなかつたといふ。……その賞翫は一方でなかつた。餘勢平安時代になつて衰へず、「雨のふりたるつとめて」は、その香の高いことが思はれ、「朝露にぬれたる櫻にも」は、櫻のめでたさが言外に立證される事の外に、橘の風情を當時の人がいかにめでたかゝ窺はれる。そして卯の花も橘も、時鳥を點景として賞翫することも、奈良時代の遺風である。

梨は禁中諸所に植ゑられ、昭陽舍には梨壺の號さへあり、一般に愛好されたやうである。清女がこゝに「すさまじ」といひ、「あいなく見ゆ」といつたのは、直覺的の感情を基礎として、創見を立てたやうであるが楊貴妃を引あひにしひて世評に雷同を試みたのは、全く因習の力に壓されたものである。かうなると、前言

は只抑揚の筆法に過ぎないことになる。

……以上を總括して見ると、特色のある意見はすくなく、種類は八種、色は三色に止まつてゐるのは、甚だ貧弱である。見聞のせまい上流婦人には、最も困難な題目であるから、その月並に終つたのも、無理はない。但文章は安らかに書けてゐる。

「香爐峯」雪とさへいへば、慄へながらもめでたがつた人達が、格子をおろして話し込んでゐたのは、蓋し異例である。中宮の「香爐峯の雪は」の提唱は、格子をあげさせたく思召しての御方便だらう。香爐峯の雪はの句は、……當時誰知らぬ者もない、撥簾看は中宮の豫期してをられた歸結だが、只それを女房達がどんな塩梅に扱ふか、どんな形式で發表するかに、興味をもたれたのである。女房達の中には、折角思ひ寄つても、氣の利いた御答が出來ないので、躊躇した者もあらうが、清女の如く、何もいはずすつと起つて、簾を捲上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよ〳〵その敏慧さに驚かされる。清女が再三名聲を博したのは、文辭上口舌上の才鋒であつたが、これは更に一歩を進めた仕打である。清女の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで特に傳稱された所以もそこにある。

三　鶯宿梅（大鏡）

扱方　一陽來復と共に百花に先立つて、霜雪の中からその純白清美の莟を開き、清爽の芳香を放つといふので、梅は古來騷客によろこばれ、萬葉集、古今集以來盛に詩歌に、說話に述べられて來た。上古にあつては、花とし言へば梅の花を意味したものであつた。――櫻を指すやうになつたのは平安朝以後の事である。この梅に關する說話の中で、和歌の尊重と結びついて最も有名に人口に膾炙されて來たのが本課の鶯宿梅の話である。本課を通じて、我等の祖先國民がいかに藝術を尊重して、優にやさしき心情を有してあつたかを窺ひ知られるのである。

「勅なればいともかしこし云々」の歌によつて、その梅の木を再び貫之の女の許に戻されたと、拾遺集には見える。大鏡にはこの歌をよまれた村上天皇が「あゝ、何と情知らずなむごい事をしたものか」と掘り取つて來た者に歎かれたといふ――これはひとり天皇の御氣持ばかりではなく、當時の我々の祖先は藝術に對して格別な愛、時にはその神秘性をさへも信じてゐたのである。本課の說話はその具體的な表れなのである。が、かうした藝術觀賞は、往々にして、その藝術の眞價よりも、それに附隨した說話のゆかしさに心ひかれ、眞に藝術を觀賞しがたからしめる事が少くない。我々の祖先のゆかしい風雅の心、懷かしい說話に心ひかれる事を以て、その眞の藝術觀賞の態度を誤る事なきやう、一應の注意を覺へておく必要があると思ふ。尙參考として、今昔のこれに類した說話を擧げておいたから、說話の價値と、それに附隨した藝術の眞價とを、はつきりと區別して鑑賞させて頂きたい。

教授

引用書

大鏡――平安朝末期に出來た歷史物語で、一般に藤原爲業の作とされてゐるが、斷定は出來ない。文德天皇より後一條天皇の御代までの歷史を、藤原道長を中心として記述してある。初めに序があつて、雲林院の菩提講に大宅世繼、夏山繁樹といふ百五十餘歲と百四十歲程の老人が行きあひ、それに若侍が加はり、世繼が主として語

つて繁樹は合槌をうち、若侍は批評するといふ形式で、全體が出來てゐる。大鏡の後、この形式にならつて今鏡、水鏡、增鏡等が作られてゐるが、大鏡が最もすぐれてゐる。本文の鶯宿梅は前後の昔物語をあつめた部分に見えてゐる。

語釋

〔鶯宿梅（あうしゅくばい）〕　今も京都市の林光寺に、この梅がある。勿論これは當時の梅の木ではなく、何代か植繼いだ後の稚木である。本文の說話によつてこの名を得たものといはれる。

〔村上の帝〕　第六十二代。御諱は成明。醍醐天皇の第十四皇子。延長四年六月降誕。延長九年卽位。康保四年五月落飾して法諱を覺貞といひ、同月淸涼殿に崩御、寶算四十二。

〔はた申すべきならず〕　「はた」は上を承けて、もまたの意を表はす語。その上にまた。それとはかはりてまた。この文のさきに、朱雀院の優におはしたことを述べてあるので、ここはそれをうけて村上の帝もまた申すまでもないの意。

〔なつかしう云々〕　優になつかしくおはしましましたことは。なつかしくお心ゆかしくおはしましたことは。

〔延喜〕　第六十代醍醐天皇を指す。

〔――にもまさり申させ云々〕　御父帝醍醐天皇にもすぐれさせられて、慕はしくやさしくおはしますと世の人は申し上げるやうである。

〔人はいかゞ云々〕　世の人は何と噂してゐるぞ。

〔人に〕　侍臣に問はせ給うたのである。

〔ゆるになんおはします〕　「ゆる」は緩に、ゆるやかに。御心がおほまかにひろくおはしますと、世間では申してゐる。

〔王のきびしくなりなば云々〕　およそ帝王たる者の政事が峻嚴苛酷にすぎて寬大でなくば、天下の民はどうしてこらへられようか、必ず苦痛に思ふことであらうと、仰せられたといふことである。

〔いとをかしうあはれに云々〕　この村上帝の時にもつとも風流に奧ゆかしかつたことは。

〔淸涼殿（せいりやうでん）〕　古くはセイラウデンと讀んだ。禁中、主上の常の御殿である。東方に面してゐる。

〔御前の梅の木〕　淸涼殿の東庭にある梅の木、禁秘

御抄に「――同梅（在二瀧口南砌一）天德四年十二月十八日、栽二紅梅於中殿良角一、康保二年十二月二十五日、御記曰、式部大輔直幹、献二梅一株一、即栽二仁壽殿東北庭一、以二前日所レ栽小紅梅一、移二栽清涼殿東北庭一、此梅去月四日所レ栽二仁壽殿一木也。」と見える。

［もとめさせ給ひしに］　枯れた梅の木の代りとなる梅の木をさがさせましたところが。

［なにがしのぬし］　某氏。ぬしは之大人の約といはれ、人を尊んでいふ時添へる言葉。大人といふ。

［藏人］　藏人所の役名。五位、六位の者がこれに任じ定員七名。普便でクランドとも讀む。藏人所は初め內裏校書殿の書籍を司る役所であつたが、後機密文書や諸祈を掌り、主上の御衣、御膳よりすべての御起居に侍し、又宣旨を傳へ、上奏を取りつぎ、諸種の儀式を掌るなど、非常に重い役となつた。長官を別當といひ大臣を以て補し、その下に頭（四位殿上人が任ずる）藏人、非藏人等がある。殿上人は五位以上だが、藏人は特に六位迄の昇殿を許され殿上人の中に加へらる。

［いますがり］　在りの敬語で、在すに同じ。ありたまふといふ意味である。いまそかりともいふ。共に良行變格活用に屬する動詞である。

［うけたまはりて］　天皇の御命令を承つて。

［え見知らじ］　どこにどんないい梅があるか、とても見知つて見つけ出すことは出來ない。「え」は下に反說の話を用ひて、能く、敢へて等の意をあらはす副詞。え思ふまじ、え行かじなどはその例。「じ」は動作を推量して打消す助動詞。

［きんぢ］　汝に同じ。この「きんぢ」は「繁樹」（大鏡の解說參照）を指すとする說と、「何がしのぬしの藏人」を指すとする說とがある。前說によれば「若きものどもはえ見知らじ。きんぢもとめよ。」は藏人の命令であり、後說によれば主上の御言葉となる。どちらとも定め難い。

［のたまひしかば］　のたまふは言ふの敬語。告りたまふの意。

［ひと京］　京都の町の到るところを。京ぢゆう。

［まかりありきしかども］　歩き廻りましたけれど。「まかる」は退き去る。往來するなどの敬語で、轉じて他の語の上に熟語として添へて敬語とするが、ここはその用ひ方である。「ありく」はあるくに同じ。

［西の京］　古の京都は朱雀大路を中心として東西に分れてゐた。內裏から見て西の京を右京ともいふ。

［そこ〳〵なる家］　ある家。某所にあつた家。はつきり何處と指さずに、ほんやりといふいひ方。

［やうだい］　樣體。容態。すがた。かたち。なりふり。

［家あるじ］　その家の主人。

［これ］　次の歌を書いた短冊。

［もてまゐれ］　持て參れ。持つて行つてくれ。「まゐる」は行くの敬語で、參上する、あがるの意。

［いはせたうびしかば］　おつしやいましたから。「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形。「たうぶ」は給ぶの延で、給ふに同じく、他人の動作に添へていふ敬語。

［あるやうこそは］　あるやうこそはあれ、これには何か仔細があることであらう。「あるやう」は仔細、理由の意。「こそ」は係結びの助詞で下を已然形で結ぶ。ここは良行變格活用動詞「あり」の已然「あれ」を略したもの。

［もてまゐりてさぶらひしを］　もつてあがりましたところが。「さぶらふ」は、はべりに同じく貴人の側につゝしみうかがつてゐる意から、有りの意の敬語となつたもの。

［女の手にて］　女の筆跡で。

［勅なればいともかしこし云々］　天皇の御仰せでありますから大變恐れ多いことで、私は梅の木にさし上げるのに何も異存はございませんが、只この木に毎年來ては鳴くあの鶯が今年もやつて來て例の梅の木が今年は無いのに驚き、私の宿はどこにいつたのでせうと問ひましたなら、私は何と答へたらいゝのでせう、こればかりが心掛りでございます、との意。「いとも」は大變に、非常に。「かしこし」は恐れ多い、勿體ない、かたじけない、といふ意味。この歌は拾遺集卷九に「內裏より、人の家に侍りける紅梅を掘らせ給ひけるに、鶯の巢くひて侍りければ、家のあるじのむすめ先づ斯く奏させ侍りける」と詞書きがあつて載つてゐて、後に「斯く奏させければ掘らずなりけり」と註してある。大鏡の話とはこの註の部分が一致しない。

［あやしく思し召されて］　不思議にお思ひになつて

［貫之］　平安朝前期の歌人としてその名最も高い人。醍醐天皇の延喜五年に我が國最初の勅撰和歌集なる古今和歌集撰者の一人たるの榮譽を擔つた。その歌は古

今集に多く見え、著には有名なる土佐日記がある。貫之のむすめのことは、この話以外には聞えてゐない。

［遺恨のわざをもしたりけるかな］　天皇が「勅なれば」の歌を御覽じて、「かやうに風流な主人の梅を無下に掘つたことは、いたはしくもまたあはれなことをしたものだわい」と後悔し給うたが。

［あまえおはしましけり］　――と後悔し給うたが、さてどうしようすべもないので、あまえてそのまゝになされたの意。「あまえ」はあまえる。恩になれて氣ままにすること。

鑑賞批評　「われをばいかゞいふなる」との村上天皇の勅問に對して、「ゆるになんおはします」と答へたのに對して、「さてはほむるななり云々」と仰せられた所に、畏れ多いことではあるが、いかにも村上天皇の御性格が全般的に御窺ひ出來て、大鏡の作者が「なつかしうなまめきたる方は、延喜にもまさり申させ給へり」といつてゐるのが、全くうなづけるのである。延喜の聖代と並べられて、天曆の聖代を現出せられたのも、決して遇然ではなかつたことをこの一事だけでも、我々は理解出來ると思ふ。まづ我々は、この天皇の御やさしい御心に打たれずにおられない。この一話を前奏曲として次の鶯宿梅の話が展開されて來るので、それが一層、讀者の心を打ち引きつけるのであらう。作者の用意の程が窺はれる。鶯宿梅の話は、既に生徒も知りつくしてゐる事であらうがその話のやさしい、風雅な内容と全く同じ調子を奏でるやうなやはらかい、中古文を以てこの話を讀み返して見ると、その表現と内容とが全く一致して、何ともいはれぬ優雅な感じに打たることと思ふ。「ひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に云々」以下の叙述の何と魅力的なことか。簡潔ながらも周到な叙述、情をつくし、意をつくして、縹々たる餘韻のこもつた筆致、それは、正に短篇小說の味がある。最後の「遺恨のわざをもしたりけるかな」との天皇の御言葉は、再び御やさしい御心を現して、前述の天皇の御性格と照應して一層深い感激を呼ぶ。短い文ながら、幾度讀み返しても興趣のつきぬ魅力ある文である。

［參考］　古來和歌に關する說話は決して少くない。この說話は我が國民がいかに藝術（和歌）に對して烈しい愛と尊敬とを以てゐたものかを語るものであるが、又、かうした說話のゆかしさに惑はされて、その和歌の眞價を誤り看るやうな弊がなかつた事を否定し得ない。次にかうした和歌に關する說話二三を擧げておく。和歌と說話との各眞價をはつきりと鑑賞させる一資としたい。

飛梅

菅原道眞が大宰府に流される時、日毎愛し來つた庭前の梅との別れを惜しんで

東風吹かば香おこせよ梅の花
　あるじなしとて春な忘れそ

と詠んだが、太宰府に着かれると、この梅は一夜にして飛んで太宰府に至つたといふ、今もなほこの梅が「飛梅」といつて太宰府にある。

雨乞

小野小町が炎旱の時神泉苑に於て詠んだ雨乞の歌

ことわりや日の本ならば照りもせめ
　さりとてはまたあめが下とは

と詠むと、天これに感じて沛然として雨降らしたといふ。勿論これは全くの傳說であるが、この傳說で雨乞小町の名が高く、江戸時代になると、この傳說に基づいて所作事に仕組まれ、川柳などの材料となつてゐる。

以上は本歌に因んだ傳說と、有名な歌人を持ち來て附餘したものとの二つであるが、歌人自らが、自己の歌を有名ならしめようと策を弄したものは、例の能因法師の

都をば霞と共に立ちしかど
　秋風ぞ吹く白河の關

や、伏柴の加賀と呼ばれた加賀の

かねてより思ひしものよ伏柴の
　こるばかなりなるなげきせんとは

などが有名である。

四　東洋の詩興

夏目漱石

（草　枕）

扱方　「草枕」の冒頭の一節である。出世間的な東洋の詩味を說き來り、說き去り、一面、科學に拘束せられて身動きのならない二十世紀の世相を諷し、他面、新聞の三面記事を延長したやうな文藝に冷嘲の矢を放ち、諧謔の火花を散らしてゐる點、作者漱石の面目躍如たるものがある。世間の俗惡な刺激に堪へかねたものは、この靜謐な非人情の天地に遊ばなければならない。「すべてを忘却して、ぐつすりと寢こむやうな功德」それは藝術が人生に與へる唯一無二の贈物である筈だといふのである。この漱石の文藝觀と、それに合致した東洋の文藝、詩觀に目を開かせ、文藝批判の能力を養はせたいのである。

教授

作者

夏目漱石　ナツメソウセキ

名は金之助。慶應三年東京牛込に生れた。一橋中學校を經て大學豫備門（第一高等學校の前身）に入學する爲、駿河臺の成立學舍に英語を學び、明治十七年に豫備門に入學した。正木直彥、芳賀矢一、正岡子規、中村是公等と同窓であつた。大學には建築學研究の目的で入學したが、中途から英文科に轉じて、二十六年に卒業した。卒業後正岡子規の紹介で伊豫松山中學校に赴任し、二十九年第五高等學校教授に榮轉。三十三年英國に留學し、三十六年一月に歸朝した。その後帝國大學・第一高等學校の講師として英文學を講じ、傍ら小說に筆を執り、「吾輩は猫である」を發表して忽ち文名を馳せ、續いて「坊ちやん」「草枕」を出して文壇の中心勢力となつた。四十年に講師を辭して、東京朝日新聞社の文藝部に入り、「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」等を同紙に連載。四十四年には文學博士の學位を授けられたが受けず、大正五年十二月「明暗」執筆中胃潰瘍によつて逝去した、年五十。著には前記の小說の他、「文學論」「文學評論」等があり、書簡集等と共に今「漱石全集」に收められてゐる。

引用書

草枕――明治三十九年九月、雜誌「新小說」に揭載された中篇小說。今「漱石全集」第二卷に收められてゐる。

語釋

〔詩興〕　詩のおもしろみ。詩趣。又、詩を作る興味をおこすこと。詩思を催すこと。詩的興味。杜甫の詩「東閣官梅動二詩興一。」

〔山路を登りながら〕　「草枕」は明治三十九年九月、雜誌「新小說」に揭載せられた中篇小說である。主人公「余」は「たゞ一人繪の具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそ〳〵あるく」畫家であり、又俳句、漢詩に巧な男である。「山路を登りながら」の山路とは那古井へ越える峠である。「山を越えて落ちつく先の今宵の宿は那古井の溫泉場だ。」とある。那古井は勿論假の名で、實は肥後の小天溫泉ださうである。漱石は熊本の高等學校在職中、この邊に旅行したものであらう。

〔智〕　事物を分別する心の働。情、意に對していふ。ここは理智に從つて行爲すればの意。

〔角が立つ〕　情を交へずに、すべて理智ばかりで行爲すれば、圭角ばかり多くて物事が滑に行かない。

〔情〕　事物に感ずる心の働。智、意に對していふ。

〔棹させば云々〕　理智を用ひずに行爲すれば、感情にのみ走つて過が多く、しくじり易い。「棹さす」に對して「流される」といつたのである。

〔意地〕　思ひこんだことをどこまでも通さうとする心。

〔窮屈〕　心身の自由にならないこと。思ふまゝに働かれないこと。樂々としないこと。氣づまりなこと。

〔高ずる〕　高ぶる。つのる。ふえる。增長する。增加する。俗に嵩ずると書くのは誤である。

〔心安い所〕　安心の出來る所。心配のない所。住み心地のよい所。

〔越す事のならぬ〕　「詩が生まれ、畫が出來る。」と「越すことのならぬ云々」との間に、原文には左のやうな文がはいつてゐる。「人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。やはり向ふ三軒兩隣にちら〳〵するただの人である。たゞの人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりもなほ住みにくからう。」

〔寬げる〕　ゆるやかにする。ゆるめる。

〔束の間の命〕　人生のはかない短い意。「束の間」はしばらくの間。すこしの間。暫時。

〔天職〕 その人の身に、自然と備つてゐる職務。天稟の性に相應した職業。自然に天より授つてゐる職分。即ち詩人はこの住みにくい人間の世界を、少しでもくつろげて住みよくする天職を以て生まれて來たもので詩がある爲に、窮屈な住みにくい苦しいいやな人間の世の中も美化せられるのである。

〔使命〕 命ぜられた用向、使のつとめ。畫家も詩人と同樣にこの世界を住みよくし、くつろいだものに美化せしめる使命を帶びてゐる意。

〔藝術の士〕 藝術家。藝術は美を色彩、音律、言語、形等で表示する手段。繪畫、音樂、文學、彫刻等。

〔人の世を長閑にする〕 世の中を平和にする、人の住み慣れた社會をのんびりとした平和な心地にするといふ意。

〔人の心を豐かにす〕 日常生活に疲れ、潤がなくなり、枯渇した人の心に、慈味を與へ、潤を與へ、美しく豐かにする意。

〔煩〕 氣苦勞。繁雜な面倒なこと。

〔寫さないでも云々〕 詩人は美しい景に接すれば、おのづから胸裡に詩や歌が湧いてくる。それを表現する、しないは第二義以下の問題であるの意。

〔著想を紙に落さずとも〕 胸裡に湧いてきた想を文章や繪畫に表現しなくてもの意。著想は或想を考へつくこと。おもひつき。考。工夫。

〔鏗鏘の音〕 原文には璆鏘の音とある。金や石の相打つ音。又、金石の樂器の聲の形容。ここでは後者の意。これは音樂家のことである。原文の璆も玉の觸れて鳴る音。

〔胸裏〕 胸のうち。胸裡。胸中。

〔丹青〕 赤い色や青い色。赤と青。轉じて繪の具、又は彩色。

〔畫架〕 畫を描くとき、畫面を支持させる脚架。イーゼル(Easel)。

〔塗抹〕 ぬりつけること。なすりつけること。

〔五彩〕 青、黃、赤、白、黑の五種の色。

〔絢爛〕 きら〳〵と美しく光り輝くさま。

〔おのづから心眼に映る〕 自然と、心や目にその影、形が現れる。これは勿論畫家のことをいつてゐる。

〔觀じ得て〕 觀察することが出來て。

〔靈臺〕 靈のあるうてな、即ち心をいふ。精神。莊子

に「萬惡至者天也、而非人也、不可內於靈臺。」又周の文王の作つた物見臺をいふ。

〔方寸〕 一寸四方。又こころ。胸の中。ここは前項の靈臺とともに、心の意である。

〔カメラ〕 Camera. ここでは心胸を寫眞のカメラ(暗箱)に見立てていつたのである。暗箱は寫眞器の一部分で、內部を黑く塗り、側壁は皮或は布で伸縮するやうに作つてある。これを蛇腹といふ。前壁にレンズを取りつけ後壁に磨硝子及び取枠をはめる。「草枕」の峠の茶屋の場面にも「余の席からは娑さんの顏が殆ど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラへ燒きついてしまつた。」といふ文がある。

〔澆季〕 世の末になつて、道德が衰へ、人情が輕薄となること。末の世。末運。季世。

〔溷濁〕 みだれにごつてゐること、混濁。渾濁。

〔俗界〕 俗世間。俗人のより集つた、即ち世俗一般の社會。

〔清く麗かに收め得れば云々〕 前にカメラといつたから、カメラに收める——寫し取るといふ語をもつて來たのである。「住みにくい世から住みにくい煩を引拔いて」清淨な輝しく美しい世界だけを心胸に感受する意。

〔無聲の詩人〕 表現しない(歌はない)詩人。「寫さないでもたゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く」詩人。

〔無色の畫家〕 「丹青を畫架に向かつて塗抹せずとも五彩の絢爛は自ら目に映」る畫家。無色とは色彩を用ひないこと。即ち畫を描かないこと。

〔尺縑〕 一ひらの繪絹。ごく小さい繪絹。

〔煩惱〕 佛教語。人の心身を煩悶想亂させる一切の精神作用の總稱。まよひ。

〔解脫〕 佛教語。煩惱の縛を解き、三界の苦を脫すること。世俗の念を脫離すること。

〔淸淨界〕 佛教語。煩惱、私慾、罪惡などがなく、心の淸い所。「淸淨界に出入し得るの點」とは、「澆季溷濁の俗界を淸く麗かに收め得」る點。

〔我利私慾〕 自分の利益のみ圖つて公共のためを思はぬいやしい慾望。「淸淨界に出入し得るの點に於て」と「我利私慾云々」の間に、原文には「又この不同不二の

乾坤を建立し得る點に於て」の一句がはいつてゐる。

〔羈絆〕　きづな。ほだし。束縛。羈はたづな、絆は馬の足をとめる繩。

〔掃蕩〕　はらひきよめる。はらひたひらげる。掃殄。掃滅。

〔俗界の寵兒〕「掃蕩する點に於て」と「あらゆる俗界の云々」との間に、原文には「――千金の子よりも、萬乘の君よりも」の句がはいつてゐる。俗界の寵兒とは、俗世間にもてはやされ、時めき榮えてゐる人。

〔忽ち足の下で〕　「俗界の寵兒よりも幸福である。」と、次の「忽ち足下で云々」の間に、原文には次のやうな文がはいつてゐる。

「世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には、きつと影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うてゐる。――喜の深きとき憂愈〻深く、樂みの大いなる程苦みも大きい。これを切放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寢る間も心配だらう。戀はうれしい、うれしい戀が積れば、戀をせぬ昔がかへつて戀ひしかろ。閣僚の肩は數百萬人の足を支へてゐる。背中には重い天下がおぶさつてゐる。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考がここまで漂流して來た時に余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそくなつた。平衡を保つ爲に、すはやと前に飛出した左足が、仕損じの埋めあはせをするとともに、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に下りた。肩にかけた繪具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸ひに何の事もなかつた。

立ちあがる時に向ふを見ると、路から左の方にバケツを伏せたやうな峰が聳えてゐる。杉か檜かわからないが、根本から頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらにたな引いて、續ぎめが確と見えぬくらゐ濃が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて肩に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。

路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ、石は切碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る氣色はない。向ふで聞かぬ上は乘越すか、廻らなければならん。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くなつて、中心が、窪んでまるで一間幅を三角に穿つて、その頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより川底を涉るといふ方が適當だ。もとより急ぐ旅ではないから、ぶら〳〵と七曲りへかゝる。」

〔せつせ〕　いそがしいさまにいふ語。しきりに。せかせか。

〔方幾里の空氣〕　あたり一面の樣子。あたり一面の氣持を意味してゐる。方幾里は幾里四方のこと。

〔一面に蚤に刺されて云々〕　雲雀が忙しく絶えずピイチクピイチクと鳴く聲が耳をむづ痒く搔るやうに響くことを「空氣が一面に蚤に刺されてゐたたまらないやうな氣がする。」といつたのである。「ゐたたまらない」は、居堪らないで、そこにゐるに堪へないこと。

〔瞬時の餘裕〕　目ばたきする間ほどの僅かなゆとり。

〔春の日を鳴きつくす〕　「鳴きつくす」は「鳴きくらす」に同じ。

〔擧句〕　もの事の終。しまひ。もと連歌の終の七七の句の稱で、それから轉じたもの。

〔流れて雲に入つて云々〕　雲の中にさまよつてゐる中にの意。「流れて」は「漂う」に對して巧にいつた言葉で、別に意はない。

〔春は眠くなる〕　「春は眠くなる云々」　修辭學にいはゆる漸層法で、次第次第に力づよいことを書いて行くのである。「空のうちに殘るのかも知れない。」と「春は眠くなる。」の間に、原文には次の文がはいつてゐる。

「巖角は鋭く廻つて按摩なら眞逆樣に落つるところを、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛上つてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時も、上る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。」

〔自分の魂の居所さへ忘れて〕　即ち正體なくなることで、恍惚とした夢遊病者になつてしまふこと。魂は生物の體内にやどり、精神の作用を司どるものとされてゐる。

〔かう思つてかう愉快になるのが云々〕　前の「寫さないでもたゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。」と照應する。

〔シェリー〕　イングランドの南方サッセックス(Sussex)の一名家に生まれ、イートン(Eton)校を經て、オックスフォード(Oxford)大學に入學したが、在學中校規に觸れて放校せられ、暫くロンドンに留つてゐた。その間に珈琲店の十六歳になる一少女と結婚して父の怒に觸れたが、その後夫婦間の感情が離隔したので離緣し、大陸を遊歷し、バイロン(Byron)とも相往來したが、一八二二年スペチア(Spezzia)灣内で溺死した。シェリーは當代の革命的思潮を代表した詩人で、社會現在の制度、習慣を以て一切害惡の根源とし、宗教上には無神論を唱へ政治上には共和主義、共產主義の思想を懷いてゐた。シェリーは一種の思想家で、その理想を詩中に歌ひ、抒情詩人としては、イギリス詩人中で第一流とされてゐる。原文には「シェレー」とあるが、「シェリー」とよむのが正しい。

〔雲雀の詩〕　"Ode to the skylark" 一八二〇年の夏、シェリーが Leghorn で作つたもの。最も廣く愛誦せられてゐる。

〔前を見ては云々〕

We look before and after
　And pine for what is not,
Our sincerest laughter
　With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those
　that tell of saddest thought.

pine＝こひしたふ、あこがれる。sincerest laughter＝眞に心の底からの大笑。pain＝苦痛。fraught＝滿々と荷を積んでゐる意。sweetest song ＝最も甘美な歌である意。

「前を見て云々」の全部を解釋すると、我等は周圍を見廻して、いろいろの願望や希望が湧いてくる。が「明暗は表裏の如く、日のあたる所にはきつと影がさす、喜の深いときは憂愈〻深く、樂みの大いなるほど苦みも大きい。」(前出「忽ち足下で」の項參照)かういふわけで、樂みと悲みとは、紙の表裏のやうに、一にして二、二にして一であるから、我等の歌ふこの上もなく樂しい歌の中に、この上もなく悲痛な想が籠つてゐることが知れるはずだといふのである。

〔萬斛の愁〕　斛は斗の十倍で石に同じ。千萬無量の悲愁。

〔詩人に憂は附物〕　「萬斛の愁などといふ辭がある。」と「詩人に憂はつきもの云々」との間に、原文には左の文がはいつてゐる。

「詩人だから萬斛で素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜もあらうが、無量の悲みも多からう。そんならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々たんぽゝを踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黃色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振向いて見ると、黃色な珠は依然として鋸のなかに鎭座してゐる。のんきなものだ。又考をつづける。」

〔微塵〕　極めて細かい塵埃。轉じて極めて細かいこと。ここは熟して、少しも、ちつともの意。

〔かう山の中へ來て〕　「たゞうれしくて胸が躍るばかりだ。」「かう山の中へ來て云々」との間に、「たんぽゝもその通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。」の句がはいつてゐる。

〔苦しみのないのはなぜ〕　「別段の苦しみも起らぬ。」と「苦しみのないのは云々」との間に、原文には「起るとすれば足が草臥れて旨いものが食べられぬくらゐの事だらう。しかし苦しみのないのは云々」とある。

〔一幅の畫〕　一枚の畫。幅はかけものなどを數へるにいふ語。

〔料簡〕　了簡とも了見とも書く。こころ。かんがへ。思案。

〔腹の足し〕　腹のたすけ。滿腹するためのおぎなひ。「たゞこの腹の足しにもならぬ云々」は原文には「たゞこの景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにも

ならぬこの景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。」とある。

〔瞬刻〕 瞬時に同じ。またゝくひま。

〔陶冶〕 育成すること。養成すること。陶化。やき物師が、やき物を造り、かぢ屋が金物を鑄るやうに敎へそだてる意。

〔醇乎〕 純粹で指摘すべき箇所のないさま。清くして純美なさま。純乎。韓愈の讀荀子に「孟子醇乎醇者也。荀與揚大醇而小疵。」「醇乎として醇なる」は意味を强調していつたのである。

〔詩境〕 詩的な心境で、やはり詩興と同じく、詩を作る興味を起す意。

〔苦しんだり怒つたり〕 「詩興に入らしめるのは自然である。」と「苦しんだり怒つたり云々」の間に、原文には左のやうな文がはいつてゐる。

「戀はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だらう。しかし自身がその局に當れば利害の旋風に捲きこまれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んでしまふ。從つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲には、わかるだけの餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小說も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小說を讀んで面白い人も、自己の利害は棚に上げてゐる。見たり讀んだりする間だけは詩人である。

それすら、普通の芝居や小說では人情を免れぬ。苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒つたり騷いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬといふ點に存在するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌だ。」次の「苦しんだり、怒つたり、泣いたりするのは云々」は、原文には「苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。餘も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽き〳〵した上に芝居や小說で同じ刺激を繰返しては大變だ。余が欲する詩は云云」とある。

〔世間的〕 作者のいはゆる出世間的の對。世間は世の

中、即ち俗界。「世間的の人情を鼓舞する。」とは、うき世の苦しんだり、怒つたり、泣いたりする情を一層はげまし、さうした情を益〻起したてるやうな强い刺戟を與へること。

〔俗念〕 世俗の觀念。俗界のさまざまの考。白居易の詩に「世緣俗念消除盡、別是人間清淨翁。」

〔塵界〕 けがれた世の中。ちりの世。俗界。塵世。塵寰。

〔理非を絕す〕 理非以上に出る。理非は理と無理と、道理と非道と。さうした世の中の窮屈な鑄型から脫離して、超然と洒々落々とした芝居や小說は少からうといふのである。

〔どこまでも世間を出る事の云々〕 自然主義(Naturalism)の戲曲、小說に於て、特にこの特色が甚だしい。次に厨川白村の「近代文學十講」の中から、自然主義の文藝の特色を述べた一節をあげる。

「自然主義の文藝は常に現實生活そのものに觸接してゐるだけ嚴肅であり、眞面目であるともいへる。詳しくいへば浪漫派以前の舊文藝は人を夢幻の鄕に誘ひ忘我の境に拉し去つて、そこに現世の痛苦を忘れさせようとする。どうしてもその中にのんきな氣樂な道樂風があつたが、始終齷齪してゐる近代人の胸中には、最早さういふ餘裕もなければ閑日月もない。彼等は精神上にも肉體上にも、ともに切端詰つた苦しい生活を送つてゐるだけに、寸時たりとも現實の苦を忘れ、我を忘れることが出來ない。——否、それどころではなく却つてその苦しい現實生活を一層深く吟味し細かく觀察して、その裏の裏まで發き出し、世の中は一體どうしてかうあるだらうと、reflect しようとするのが彼等の傾向である。我を忘れるどころではなく、却つて現在の我を中心として、現在の生活を反省しようとするのだ。小說、戲曲に對しても常に『今のわが身につまされて』そこにはじめて interest を感ずるのである。自己と、現在の苦しい生活と、この二つを離れては、他のすべてが皆彼等に取つて意義なきものとなるのだ。今これを極めて卑近な例で譬へると、自分が貧乏で非常に苦しんでゐる。あくせく思つて心に瑣の餘裕もない。さういふ時一夜にして巨萬の奇利を博した物語を讀んだところで、少しも面白くもなければ、何の interest もあるまい。何だかばか〳〵しいやうな氣がし

て、更に胸に響いて來ない。それよりは貧苦をありのまゝに描き出し、その慘澹たる生活狀態を寫したものでも見れば、それが自己の現在狀態に切實なだけ、それだけ、いはゆる『今のわが身につまされて』一層深刻に劃切に胸に應へる。それからはなほ進んでしみじみと自己生存の問題をも一層深く考へる。と、かういつた風になる。」

〔人事が根本〕 人間社會の基礎。人事は世間の事柄。人の身分、能力等に關する事項。

〔嬉しい事に〕 「この境を解脱することを知らぬ。」と「嬉しいことに東洋の詩歌云々」の間に原文には「どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェリーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。」といふ文がはいつてゐる。

〔採菊東籬下云々〕 陶淵明の詩で、陶淵明集卷三には飲酒二十首中の第五、文選卷三十には飲酒二十首の中から、雜詩二首として採つてゐる一つである。全詩は、「結レ廬在二人境一。而無二車馬喧一。問レ君何能爾。心遠地自偏。採二菊東籬下一。悠然見二南山一。山氣日夕佳。飛鳥相與還。此間有二眞意一。欲レ辯已忘レ言。」（原文には「きくをとるとうりのもと、いうぜんとしてなんざんをみる。」とよませてある）「南山」は終南山、周の都であつた豐鎬の南にあり、詩經にも「如二南山之壽一。不レ騫不レ崩。」と出てゐて、有名な山である。「籬」は、まがき。透間を粗くあけて結つた垣。ませかき。淵明はその家の庭に澤山菊を植ゑ、菊をとつては酒を酌み、靜かに天命を樂しんだ詩人であつた。「陶淵明」は晉の詩人で、字は元亮、靖節と號し晉で淵明といひ、宋では潛と改めた。彼の有名な歸去來辭は彭澤の令を辭して歸る時の作。門に五柳樹を植ゑて五柳先生と號した。又菊を植ゑ、酒を嗜み、素琴を撫し、賦吟自ら樂しんだ。宋の文帝の元嘉四年歿、年六十三。

〔超然〕 超然は、高く群をこえ、かけはなれたさま。「まるで忘れた光景が出てくる」と「超然と出世間的に云々」との間に、原文には「垣の向ふに隣の娘がのぞいてゐるわけでもなければ、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。」といふ文がある。

〔出世間的〕 佛教語。俗世を脱離したやうな。浮世ばなれしたやうな。

〔利害損得の汗云々〕 前に「暑苦しい世の中」といつたから「汗を流し去る」といふ語をもつて來たのである。「暑苦しい世の中」とは、忙しく塵をあびて活動する社會。汗まみれになつて働く社會。その社會から清らかな境にぬけでることを「汗を流す」といふ語で表したのである。「利害損得の汗」とは、寸時も利害損得を離れて活動することの出來ない營々たる社會の空氣に染み浸ることの形容。

〔獨坐幽篁裏云々〕 唐詩選にある王維の輞川別業二十絶の一で題は竹里館とある。竹里館は輞川二十勝の一で、竹林下にある館の名。「篁」は竹林のこと。「嘯」は口をつぼめて聲を出すこと。全意は、獨り奥深い竹林中に坐して、琴を彈じたりまたうそぶいたりしてゐるが、林が深いので世間の人は一向知らず、隨つて來り訪ふものもなく、たゞおとづれるものは明月の光のみであるとの意。「王維」は唐の有名な詩人で、字は摩詰といひ、山西省太原の人。李白や杜甫と竝び稱せられ、又草書隸書に巧で、畫をも善くした。即ちいはゆる南畫の祖である。その詩、その畫、共に「山谷蒼々煙雲飛動、洵によく塵外無窮の趣を發揮し、その思致の高遠にして、筆墨の清潤なる、杜甫も推稱して高人王右丞」といつたといふ。詩集に王右丞集がある。

〔優に〕 十分に。ゆたかに。あまりがある。

〔別乾坤〕 別天地。別世界。乾は陽で天を意味し、坤は陰で地を意味する。

鑑賞批評 鈴木敏也氏の「漱石研究草枕評釋」の中から、本課に採錄した部分の評釋を摘記しておく。

「智、情、意。人間の精神活動を、この三つに分けるのが在來の慣習のやうである。尤も複雜な精神活動を、かく明確に區劃するの不可能な事はいふまでもない。これはたゞ便宜上の制約にすぎぬ。この一節は山路を上つてゆく本篇の主人公の人生觀であると共に、作者自身の所謂「人生觀の一局部」の壓搾である。理智の閃めきの鋭いために、とかく人中に立つて圓滿を缺く人、感情に脆いために知ら識らず引づられて、一生をさゝほさにして了ふ人、また意志が鞏固すぎて狷介孤獨の路を辿るべく餘儀なくされてゐる人、かうした人達は、我々がつい手近な周圍を見廻しただけでも程度の差こそあれ、それぞれにモデルを物色する事が出來よう。」

「その苦しさつらさを幾分でも寛ろがせて、餘裕のある世間にして、住みよくするものが文學であり、美術であり音樂であるといふのである。これは作者の所謂「藝術觀の一局部」であり、また藝術發生論でもある。藝術の目的は人生に餘裕を與へるにある。實際の世間は紛然雜然として餘裕どころの騒ぎでない。生馬の眼を拔く位でなく人の胴腹に風穴もあけかねまじき勢である。さういふ境涯から脱却して有難い世界をまのあたりに見せてくれるのが詩であり繪であるといふのである。即ちこのどさくさの世の中を忘れさせてくれる所に藝術の精髄があるといふのである。かう見てくれば、逃避的態度を持して人生を眺めるのが純な藝術家といふ事になる。こゝは作者が全般の藝術論を論述してゐるのでない事に注意せねばならぬ。確かにかういふ態度、かういふ藝術があり得る。またなくてはならぬといふのである。此作發表の當時が、せつぱ詰つたの、觸れたの觸れぬのと、鳴物入りで騒ぎたてた自然主義の昂騰期である。東洋思想に立脚したこの藝術論の提唱は、時にとつての清凉劑であつたと見なければなるまい。」

「議論は一轉して叙景となつた。……空氣が一面に蚤に刺されての一句はこの人ならではと思はれる。奇想天外の警句である。雲雀の形が空で消えて聲だけが殘るとは美しい詩人の幻想である。かゝる長所は讀者を魅惑して豐麗な情味の中に浸らしめる。」

「春闌けし山の、七曲りといふやうな岨路を、ぶらりぶらりと上つて行く畫家の耳に、まづ響いたのは雲雀の聲であつた。彼は直ちに雲雀に低徊し初めた。この畫家は眼に見、耳に聞く物象に對して、無邪氣な至醇な心をひらいて低徊する性癖を持つ。先づ……第一に雲雀の歌に卽してシェレーに纏綿したのである。而して魂全體で鳴く雲雀に傾倒して、あゝ愉快だ、この愉快になる心動の方、それ自身が詩であると嬉しがつた。……この節の冒頭春は眠くなる、猫は鼠をとる事を忘れ、人間は借金のある事を忘れるは、單に警句といふだけでなく、此の獨自の世界を語る古典的價値を把持するものであらう。」

「詩人に憂愁が附物でも、雲雀を聞く心持になれぬ事はあるまい。この心を以て萬象に對する時は、萬象の生命は疑固を離れて流動し、大醉飛喜の狀態を以て我が懷に飛びこんで來る。菜の花でも蒲公英でも、櫻でも皆さうだ。そこに歡びの跳躍があつて、苦悶の陰影のないのは

どうしたものだらう。それはいふまでもない、利害關係を棚に上げて、至醇な心境に安住してゐるからである。美しいものをたゞ美しいものと見るだけだからである。この境地を理解するには、理解するだけの餘裕のある第三者の地位に立たねばならない。傍觀的態度を以て、人生と自然とに對せねばならない。しかし、さういふ境界は口でこそ云ひ得ても實行となるとむづかしい。小說を讀んだり芝居を見たりして面白がつてる間は第三者の地位を的確に把持してゐるやうであるけれど、つい同化して、作中や劇中の人物と一緒になつて動いて了ふ。世間の大多數は皆それで……ある。すればどうしたらいゝか自然の風景の中に悠遊するより外はない。かゝる詩境を求めるとしたら、人間本位の西洋文學は餘りに世俗的だ。」

「陶潛の詩と王維の詩とで、この出世間的超俗的な境地が釋明されてゐる。かういふ詩味に憧憬したり、かういふ幽韻に愉悦するのを、消極的だ、回避的だと非難してはいけない。消極であり回避である事と、積極であり進取である事との間に高下善惡の等差はあり。得ない二十世紀に睡眠が必要ならば二十世紀に此出間的詩味は大切であると作者は微溫的な態度をとつてゐるが、何世紀であらうと、數へて千年に至り顧みて萬里に亙らうと、かかる詩味は常に必要である。舞踏會だとか洋裝だとかいつて、バタ臭くなつてゐる人間には分らない境地である本來のわれに立返り自己の心を凝視した時、東洋人の脈管には陶潛王維とは必ずしも云はず、もつと深く自己を掘さげて行つた西行や芭蕉の內生活も如上の詩味、否、精神を會得してこそ、ほんとうに理解されるのである。」

五　初午は乘つてくる仕合

井原西鶴

（日本永代藏）

扱方　西鶴の町人の物慾生活を描いたいはゆる町人物のうちで、その最初に執筆された「日本永代藏」（一名大福新長者教）の一節、しかもその開卷第一の一話を採錄した。江戸時代の商人（今で同樣であらうが）が、いかに致富の爲に祕術をめぐらし、權謀をたくみ、汲々としてゐたかといふ、町人生活の一面を知ると共に、「長者教」として、その目的達成に對して西鶴がいかに教へたか――尤もこれは教訓書ではないからその教訓を開き直つて受取る事はないとしても――を知る事が出來る。それ等は又、我々の實生活に何等かの刺戟となり、教訓となることも否定出來ない。それはとまれ、こゝに江戸文學の魅力をなす浮世草子の一文を知らし、古今能文家と評せられる西鶴の文に親しましめたいのである。西鶴の文は俳諧の手法を取入れた、丁度その付句を付けるやうな氣持で書かれてゐるので、甚だしい省略と、すばらしい聯想の飛躍がある。且つ又、本課は西鶴の町人物としての最初の作の最初の所であつて、少しく固苦しく相當に難解な個所があるから、これ等を注意して實際教授に臨まれたい。

教授

作者

井原西鶴　キハラサイカク

江戸時代の小說家。俳人。初め西山宗因を師として談林派の俳諧を嗜んだが、四十一歲の時（天和二年）好色一代男を出してより浮世草紙の作者として立つた。彼の浮世草紙は大體好色物・町人物・武家物の三種に分れる。好色物には好色一代男・好色一代女・好色五人女が主なものであり、町人物としては日本永代藏・胸算用がすぐれ、武家物には武道傳來記・武家義理物語等がある。元祿六年八月十日（二三五三）歿、年五十二。

引用書

日本永代藏――西鶴著の浮世草子。六冊。一名大福新長者教といふ。貞享五年、京都、大阪の兩所で刊行された。各卷五章の說話から成り通じて三十說話。何れも町人の物質慾の生活に材を取つたものである。

語釋

〔初午は乘つてくる仕合〕　これは日本永代藏第一卷第一章の題目である。卷頭の目次には「江戸にかくれなき俄分限、泉州水間寺利生の錢」といふ小題がついてゐるが、これによつて本章の內容が明示されてゐるのである。「初午」は二月初の午の日のことで、水間寺觀音の會日にあたる。「乘つてくる」は午（馬）の緣語。要するに、水間寺への初午詣の御利益としてめぐつて來る幸運といふ意。和漢三才圖會の和泉國泉南郡の條に「水間寺、在二木島鄕水間村一、緣起曰、龍谷山水間寺、聖武勅願天平年中行基開闢、本尊正觀音、以二二月初午一爲二會日一、相傳、此日運レ步者除二四十二歲厄難一得二福德一、云々」

〔天道もの言はずして云々〕　天は無言のあひだに國土に惠みを垂れることが深いといふ意。「天道」は天道樣といはれる天道で、或は單に天と言ふに同じ。尙頭註參照。（論語、陽貨第十七篇）。

〔人は實あつて僞多し〕　天道に對して人としたのである。人間には眞實もあるが虛僞もまだ多い。

〔その心はもと虛にして云々〕　人心は本來空白なもので、正邪善惡いづれとも定まるところはない。外圍の事情に應じて或は惡くも働き或は善くも働くといふのみであつて、その心の跡は認むべき何ものをも殘さない。尙頭註參照。（古文眞寶、後集、五、程正叔の視箴）

〔これ善惡の中に立つて云々〕　下文「豐かに渡る」を「豐かに渡る事は」と見るか、「豐かに渡る人は」と見るかによつて、下の「常の人にはあらず」の句の解も異る。後者の意にすると、このやうな次第で、善も惡も行はれてゐる中に立つて、しかも眞直に治まつてゐる今の御代を豐かに渡世して行く人は、人の中での人で正道を踏み德義も具はり、智慧才覺も十分な人であるから、なか〳〵凡庸の人ではないといふ意。前者の意では、人の人たるが故にこそ、はじめて出來るのであつて、凡庸の人には出來る渡世ではないといふ意となり、語を補ふ必要がある。「これ」の一語は指示格と見るよりも、前述の如く接續語と見るがよからう。「善惡の中に立て」は「すぐなる」に續けると同時に「豐かに渡る」の副詞的修飾と見るがよい。「人の人たる」は人の中の人たる、人の上の人たると意。

〔身を過ぐるの業（わざ）〕　世を暮して行くための職業。名

詞になると、身すぎ、口すぎ。

〔始末大明神〕「始末」は儉約の意。大明神とつづけたのは上の「神職」と緣語にし、且つ儉約を第一とすべきことを强めて、崇め奉るほどの心から、始末を神格化したのである。

〔御託宣〕 神佛の御告。

〔人間長く見れば云々〕 人間の一生は長いと觀じても明朝のことが豫測しがたい。短いと觀ずれば、今日の晝間は無事でゐた者が、夕になつての急死に驚くやうなこともある。

〔天地は萬物の逆旅云々〕「逆旅」は客舍、宿屋。「過客」は旅人。悠久な天地は、常に生滅しつゝある萬物の宿舍である。速かに過行く光陰は、落ちつく間もない旅人のやうなもの。そして人間の生涯は夢幻のやうにはかない。李太白の春夜宴二桃李園一序に「夫天地者、萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若レ夢、爲レ歡幾何」(古文眞寶、後集三)

〔時の間の煙、死すれば何ぞ云々〕「時の間」に死期が來るといふ語勢であるが、又、下に續けて、時の間に火葬の煙と化してしまふといふ意。かくて死んでからどうして金銀が役に立たうぞ、瓦石にも劣つたものであるといふ意。「この句は、死すれば、を最初に置き、何ぞ金銀も瓦石に如かんや、と反語法に言ひたいところである。何ぞ、は上から係つて來てゐるが、ここで句讀點を施すのは、恐らく筆者の筆くせに適ふまい。何ぞ、と起して、おとれりの如く終止形で肯定的に結ぶのは、西鶴の反語法上の常套的破格である。」(佐藤鶴吉說)

〔黃泉〕 冥土。よみぢ。

〔世にある程の願、云々〕 この句は「世にある程の、願ひは、何によらず銀德にて叶ふ、されど又銀德にて叶はざる事、天が下に五つあり」と、二句にいふべきを一句に約したのである。

〔銀德にて叶はざる事天が下に五つあり〕この五つについて諸說あつて今斷じがたい。以下藤井乙男博士の說を引く。——これについては從來とも諸說があつて判然としないが、まづ藤村博士は「增壹阿含經」卷二十四、善聚品第三十二第七節に「今有二五事一最不レ可レ得」とあるを引用して、盡、滅、老、病、死の五つであるとなし(日本永代藏評釋所引)、佐藤鶴吉氏はこれに對して五輪又は五大と解し、種々用例を蒐集して證明に努めてゐられる(日本永代藏評釋)、然るに最近になつて清水泰氏は御伽草子「天狗の內裏」の用例を擧げて、五大の事を五つの借物といつて居つたのは早く室町時代からの事で「永代藏」に所謂銀德にて叶はざる事の五つとは卽ちこの五大であると說明せられた。……ところがもう少し當時の用例を集めてみると、「銀德にて叶はざる事」といふのは必ずしも「五つ」には限らなかつたやうだ。……藤村博士の說を參看して、生、老病、死、戀の五つではないかと疑つておいたのであつたが、これとても「五つ」といふことに拘泥して樹てた說に過ぎない。……結局、三つありとか四つありとか又五つありなどといふのは、銀德をより强く示すための方便であつて、その實は明確にその三つ或は四つ、五つなるものを意識してゐなかつたのではないかと考へられるのである。猶今後の研究に俟ちたい。」(江戶文學叢書、西鶴名作集)

〔寶船〕 七福神その他寶物を載せた船。それを紙に描いて節分の夜に枕に敷いて寢て吉夢があれば來年福があるとし、惡夢を見れば、翌朝、川に流したものであるこれは單に寶の意にすぎない。

〔見ぬ島の鬼の持ちし隱笠、隱蓑〕「見ぬ島」といつたのは、下に「手遠き願ひ」といふ緣語となつてゐる。「隱笠」「隱蓑」は、共に着れば身體が隱れてしまふといふ有り難い寶物である。

〔手遠き〕 手近きの反對。

〔家職〕 家業。家に傳はる職業。

〔福德はその身の堅固にあり〕「堅固」は物堅いこと。ここは身持の著實であること。福德は、その身を堅固に持つものに惠まれるといふ意。

〔仁義〕 交際上の人情義理とか、處世上の正しい道とかいふほどの意。

〔和國〕 日本國。和朝。

〔をりふしは〕 その折は。

〔水間寺〕 前述しておいた。

〔遙かなる苔路、云々〕「姬萩」はひめはぎ科の常綠草木で、をんし、すゝめはぎともいふ藥用植物。「燒原」は野燒をした跡の原。ここの文は徒然草十一段「或山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて云々」を踏まへてゐる。

〔片里〕 片山里。山間の片田舍。

〔祈誓かけしは――富めるを願へり〕 ここは、祈誓かけて――富まんことを願へりといふべきである。

〔返言し給ふもつきず〕 「返言」はここでは觀音の言葉であるから、託宣の意である。大勢の祈願者に對して一々の返言は遊ばしきれないといふ意。

〔「今この娑婆に――この如く」〕 この一文が觀音樣の返言、お告げである。「土民は汝に」は「土民は己れに」といふ語格である。今、此のせちがらい娑婆につかみどりはない、我れを願むまでもなく、土民たる者は、おの〳〵に備つてゐる業を勤めたがよい、卽ち夫は田を打つて、婦は機を織つて、朝な夕なその職を營むがよい、一切の人々皆この樣にせよといふ意。

〔土民〕 一般庶民。

〔戸帳〕 觀音の像の前に垂れてゐる帳。斗帳。緞帳。純帳。その戸帳が開かれてゐないから戸帳越しといつたのである。

〔あらたなる〕 靈驗のいちじるしい。あらたかな。

〔借銀の利足〕 「利足」は利息。當時は借銀をカリギン借錢をカリゼニと訓んでゐた。借金といはないで借銀といつたのは上方は銀貨本位であつたからである。江戸は金貨本位であつた。

〔壹錢〕 錢一文のこと。錢は銅又は鐵で作り、圓形で中央に孔があるので、百文二百文とまとめて緡にさして持つたものである。參考篇參照。

〔失墜なく〕 間違なく。

〔「おの〳〵五錢――より內を云々」〕 それで大ていは、各人が五錢とか三錢とか、十錢より內ばを借りるのであつたが、ここに――。

〔風俗〕 身なりや髮かたちなど。當時は個人の風體をいつた。

〔律義〕 リチギともいふが、原本にはリッギとある。眞面目、忠實の意であるが、ここは風體のきちんとしてゐることにいふ。

〔頭つき後上がりに〕 「あたまつき」は髮の形。髷の後の方が前方よりも上るやうに結つた髮形。又は髮の剃り方によつていふらしい。今は前說に從つておく。當時「貞享」から元祿初期の流行は後さがりであつたのが、元祿末期からはまた後さがりが蠻風とされて、後あがりが流行した。ここは勿論一時代前の後あがりで舊式な時勢遲れの遺物だといふ意である。

〔信長時代の仕立〕 時勢おくれといふべきを信長時代をいつて蠻風を想像せしめたのである。「仕立」はこしらへ、いでたち。

〔著物〕 原本キルモノと訓む。當時上方の用語である。

〔袖下せはしく〕 袖の八口から下端までがせせこましく作つてあること。袖口もゆつくり、袖下も長いのが當時の粹人などの風俗である。

〔裾まはり短く〕 裾まはし卽ち裾裏のことか。或は單なる裾のことか。

〔太織〕 絲屑(しけ絲)をあつめて績んで織つた布。甲斐國郡內、武州八王子などから出る。

〔無紋〕 無模樣。

〔花色染〕 縹染。薄い藍色。

〔上田縞〕 信州上田の產によつて名けられる。萬金產業袋卷四に「上田嶋、幅九寸貳丈七尺づつの反物也。そのむかし信州上田より出たるは縱橫紬にて至極つよし。俗に表一つに裏三つ取かゆるとて三うら嶋といふとか。然れども今は曾て出ず。間にたま〳〵出ても品大分次也。」

〔中脇差〕 大きさの中位な脇差。小脇差、大脇差などある。

〔柄袋〕 刀や脇差の柄を保護する袋。旅行や雨雪の折に用ひる。

〔野老入れし髭籠〕 「野老」は薯蕷科の蔓草。根を燒蒸して食ふ。味苦く少し甘い。「髭籠」は竹の端を髭のやうに編み殘した籠。頭註畫は本文挿圖を擴大したもの。

〔下向〕 參詣からの歸り。

〔御寶前〕 神佛の御前。拜殿の前の賽錢箱などに、この文字が書かれてゐる。

〔壹貫〕 ここは錢千文。

〔寺役の法師〕 寺の會計掛の僧。

〔貫ざしながら云々〕 錢一貫文を一緡としたまま相渡して、其の住國も名前も尋ねもしないうちに、彼の男は行きかた知れずなつてしまつた。

〔借る人これが初なり〕 借りる人はこれがはじめである。この人が初めて借りたといふ意。

〔濟むべき事とも思はれず〕 この錢は返納される事とも思はれない。

〔大分に借す事無用〕 多額に借すことはまかりならぬ。無用は禁止するの意。

〔小網町〕 江戸日本橋川に近い洲で、町家のあつた町名。現今、日本橋區内の町名となつてゐる。

〔浦人の著きし舟問屋〕 「著きし」は著くといふべき語格。「舟問屋」は回漕問屋ともいひ、海運業者と荷主との仲に立つて回漕を周旋する家業。

〔掛硯に〕 掛硯箱に。掛子のある硯箱。頭註參照。

〔仕合丸と書附け〕 仕合丸は家業がら船の名のやうにして緣起を祝つてつけたのである。

〔子細を語りて〕 水間寺觀音の錢であるから御利益があるなどと勿體をつけて。

〔遠浦に聞傳へて云々〕 だん〳〵遠い浦邊の人々までが聞傳へて、次々に借りに來る——。

〔せんぐりに毎年集りて〕 その元利が先繰りに毎年集つて——。最初の貸付錢が元利戻つて來ると、それを又貸付け、それが戻れば又貸付けして——。「せんぐり」は先繰り、先から〳〵、順おくりに。

〔一年一倍の算用につもり〕 「一倍」は數學的にいへば二倍のことである。一年に元金の二倍になる利子の勘定につもり。これは本文にあつたやうに、水間寺の借錢の利子勘定を基準としてゐる。

〔十三年目に——八千百九百拾貳貫にかさみ〕 十三年目になつて元金壹貫文の錢が、八千百九十二貫に嵩んだといふ意。この計算は正確である。

〔通し馬〕 途中でつぎ替へをしない馬。出發地から到着地まで打通して行く荷馬。

〔詮議〕 衆議とも書く。評定。會議。會議の結果で寶塔建立と決定した。

〔語り句〕 語り草。話の種。

〔番匠〕 大工。昔、飛彈大和などから上洛し、木工寮で勤番したので勤番する工匠の義から出た語。

〔寶塔〕 梵語ストーパ、卽ち卒都婆である。寶物で飾るので寶塔ともいふ。佛或は靈者の遺骨を藏し、或は聖者の功德を頌するために建立するもの。

〔有難き御利生〕 寶塔を建立し得たのは有りがたい御利益で儲けられた資金のお蔭であるといふ意。「利生」は利益のこと。

〔内藏〕 内庫。家の内(軒つゞき)に建てた藏。庭藏の對。

〔常燈〕 常に神佛の前に點じておく燈明。ここでは金箱を積んで其の前に供へておくことにしてゐる。金に燈明を供へるのは、當時千貫目以上といふ習慣であつたらしいといはれてゐる。

〔銀五百貫目〕 銀六十匁を金壹兩として、八千三百三十三兩强。卽ち壹萬兩近い金高となる。

〔分限——長者〕 金滿家の名稱である。

〔この銀の息よりは云々〕 「息」はいきほひ、生氣の義と利息の息をも掛けたらしい。この銀の息がかかつて、銀は銀を生み、次第に千貫萬貫、幾千萬貫と殖えてゆき、萬歲樂と祝ひ歌つて、めでたく一生を送ることが出來るのである。

鑑賞批評 佐藤鶴吉氏の「日本永代藏評釋」の中から摘出しておく。

まづ本課の文を四段に分けてみる。

第一段「これは和國の風俗なり」まで。

第二段「諸人の耳に入らざることのあさまし」まで。

第三段「自今は大分にかすこと無用と沙汰し侍る」まで。

第四段 終りまで。

〔第一段〕 これまでがこの一章の序說であると同時に、永代藏全卷の緒論とも見られる。天道に筆を起して人間の性情に說き及び、善惡さま〳〵の事が行はれてゐる實社會に處して、所謂「吻に應じて跡なき」心を巧みに働かして豐かに生を營んで行く人は、人の中の人で、凡人ではないといふ。以下章を追うて作者が紹介する人物、必ず何かしら常人と異なつた所を有する人物の行動は、卽ちこの冒頭に說く所を事實に物語つてゐる。次に家職を一生の一大事とせよ、始末を大明神と崇めよ、金銀を溜めよと誡めてゐる。この凡人以上の才覺と、勤勉と儉約と貯金、これより外に長者教、町人道の根本精神はない。各卷の話も畢竟この三者が形を變へ姿を改めて說かれてゐるに過ぎない。「二親の外に命の親なり」といふ、こゝで一段落になつてゐるが、いかに町人道とはいへ、聊か拜金の臭味が鼻について來る。そこで「人間長く見れば」と筆を轉じ、「黃泉の用には立ちがたし」と涼しい心持を示してみたのである。併し何と言つても銀德の力は偉大である。やはり「是にましたる寶船」はない。

〔第二段〕 この一節では、水間寺觀音初午詣の貴賤男女の心持と、觀音樣の思召とを叙した。「皆信心にはあら

ず欲の道づれはるかなる」とは、辭の續け方もうまいがその穿ちも鋭い。「この御本尊の身にしても」と、本尊に同情したやうな筆つきは滑稽である。その御告も何となく滑稽に思はれるが、家職第一と諭し給ふ所は、平凡にして平凡にあらざる「あらたなる御告」と申さねばならぬ。それが、やゝもすれば、何か「つかみどり」もがなと願ひ、道は近きにありと悟らぬ「諸人の耳に入らざること」があさましいのである。

〔第三段〕「それ世の中に借銀の利足程おろしき物なし」一寸唐突に感ぜられるやうなこの一轉句は、以下の叙事を運ぶ血脈であり骨子であり、且、新長者教としての本書第一章の主眼でもある。借銀の利息のおそろしいといふことは他の場合にも屢〻言及されてゐるが、この第一章に就ては、之を眼目としてゐるところに、作者の用意の存することを見のがしてはならぬ。末節に於ては、一貫の錢の十三年目の元利を計算して、その借銀のおそろしさを數字を以て示し、具體的に讀者を警戒してゐる。「欲の道づれ」の中から、一人の田舍男が顯はれる。その風俗が野暮くさくて人目を引く。それが「借錢壹貫」といふ、レコード破りな借り方をするのだから、更におもしろい。まんまと借りおほせて名どころも言はず行方知れずなつたのは、尙更に痛快である。寺僧達が後の祭の狼狽と警戒とは笑止の極みと言はうか。この一節を芝居の幕に譬へるならば、まさに波瀾を約束した一幕で、觀客は異常な緊張を以て次の開幕を待つといふ所である。

〔第四段〕行きがた知れずなつた男は、かくの如く正體を現したのである。元來が舟問屋で家が榮えた故に觀音樣からの借錢は他に又貸しつけて、それを十三年目に一文の間違ひもなく返納し奉つた。「この錢濟むべき事にあらず」と心配した寺僧たちは果して健在なりやと言つてやりたい。通し馬が着いた時の彼等の顏が見てやりたい。八千百九十貳貫といふ數字は數字的に正しい。(西鶴はいゝ加減に數字を用ひることもあるが、かういふ場合は決して出鱈目でない)五錢拾錢の算用にのみ慣れてゐた寺僧達は、この大金を受取るにさぞ又狼狽したことであらう。

「子細を語りて百文づつ」一年二倍の算用で貸しつけるそこが即ちこの男の才覺である。十割の高利率はすでに觀音樣の照鑑ましますで、それに又「借りし人自然の福有りける」とは即ち觀音の御利生といふものであらう

才覺と御利生、これがこの男を「江戸にかくれなき俄分限」たらしめたのである。但し、俄分限と言つても、觀音からの借銀は現在まで經濟を別にして來たと見える。決して一文をも身につけようとしてゐない。その點が特に注意される。「人の人たるが故に常の人にはあらず」といふ、當年「欲の道づれ」であつた貴賤男女の群から遙かに抜け出た人物である。

更に結語として、「惣じて親のゆづりを受けず、その身才覺にしてかせぎ出し」と斷つたことには、……一入意を留むべきである。

參考 徳川時代の貨幣について簡明に述べておく。

徳川時代の貨幣には金貨、銀貨、錢の三貨が通用されてゐた。その單位は、金貨は兩、銀貨は匁(目)、錢は文(モン)と呼んだ。金一兩の$\frac{1}{4}$を一分(歩、ブ)、一分の$\frac{1}{4}$を一朱と言つた。銀一匁の$\frac{1}{10}$を一分(銀はブンと讀んで金のブと區別した)、一分の$\frac{1}{10}$を厘と言ひ、銀一匁の千倍は一貫匁(目、メ)である。錢は千文が一貫文である。三貨の種類は、幕初以來元祿享保頃迄は金貨は大判(價十兩)、小判(一兩)、一分判の三種があり、銀貨は丁銀(重量約四十三匁)、豆板銀(重量不定、凡そ一匁乃至四五匁位)の二種があり、錢には一文錢(價一文)の一種を主とした。後世になると三貨の比價は、「金一兩——銀六十匁——錢四貫文」と言ふのが公定相場で、即ち銀一貫目は金十六兩餘、銀一匁は錢六十六匁、錢一貫文は銀十五匁と言ふことになる。然し實際は絶えず變動してゐたが右比價の標準であつた。(幕末には錢相場が下落して金一兩につき六七貫文位、錢一貫文が銀九匁乃至十匁位であつた。)次に當時の米價と現代の米價とを對照して通用價値を推定してみる。元祿以後惡貨の鑄造があつて正確なことは頗る面倒であるが、明暦萬治頃から元祿八年頃までは凡そ米一石が銀四十匁乃至五十匁位であつたから、假に一石銀五十匁位を定め、現代の米價を凡そ一石二十五圓位と見ると、銀一匁は今の五十錢見當の通用價値を持つてゐたことが判る。それで金一兩は前述の公定相場により銀六十匁故、今の三十圓程の値打がある勘定になる。

六　大原御幸

（平家物語）

扱方　平家物語、灌頂卷、大原御幸――それは材料が既にたまらなくいいのである。題材そのものが文字通り劇的なのである。洋の東西、時の古今を問はず、どんな劇作家でもこんなにいゝ材料を手に入れたら、一刻も早く劇にしてみたい――といふやうなものなのである。第一、「時」がいゝ。華やかなりし平家一門が、西海の波に浮かんで敗戰に敗戰を重ね、門司、赤間、壇の浦の戰に、はかなく青潮の水沫と消えた――そのあはたゞしき眼まぐるしさの後に來る、魂の滅入るやうな靜寂、さうした靜寂に閉された「時」がいゝ。次に「所」がいゝ。洛北大原の片山かげ、小藪の中を分けて流れる高野川のせゝらぎが、人の心に畫もなほ夜の夢を見續けさせるやうなしみ〴〵とした響を澄みとほらせる「所」がいい。それから又、恐多い極みだが「治承壽永のおん國母、三十にして經讀ます」といふ御境遇、そして後白河法皇がその閑居の御住居をおたづねになるといふ御情景、――さうした一つ〳〵がすべて劇的要素をなして交響し、人々をして感動の最高點にまで導いて行くのである。――それを平家物語の作者が、例の「諸行無常」の雰圍氣の中に飽和させ、一流の麗筆でもつて奏でるやうに描き擧げたのが本課の大原御幸の一條である。平家物語ではこの一條はもう全卷の最後に近い。いや結末だといつてもそんなに間違はない。僅々數頁、建禮門院の御往生で悲劇、平家物語の幕は閉ぢられてゐるのだから。それは、黎明の青やぎわたる空を縫つて、ほそほそと光を引き疲れた螢の――その光にも譬へられるやうな淡い光をもつた物語である。この平家物語獨特の哀韻を心ゆくまで味はゝせたい。一通りの解釋を與へた後、反覆熟讀朗誦させるか、又は一生徒に朗讀させて、耳を以てその哀韻を感ぜしめるやうにしたい。平家物語は語り物として發達して來たために特殊な發音がある。語釋中に數ヶ所指定しておいた。教科書としてはその必要もあるまいが、訓み癖の一端を知らせておきたい。

教授

引用書

平家物語　十二卷。鎌倉時代に於ける軍記物語の一

であつて、敍事詩としても日本文學史上の傑作とされてゐる。平家の榮華に筆を起し、源賴朝の擧兵によつて平家が滅亡するに至るまでの、二十年間の榮枯盛衰を、劍卷、十二卷、灌頂卷の二百餘條に分つて敍してゐる。全篇は人生に對する無常觀が中心となつてゐて、平家の榮枯盛衰のあはたゞしい事件の中に重盛、賴朝、義仲、義經の如き多くの副人物を配して、淸盛の强烈な自我を飽くまで突き進ませてゐる。而して「平家物語」は一面に於て貴族的精神が武士的精神によつて次第に滅されて行く一種の悲劇である。文は多く遒勁な和漢混淆文であるが優美な事件を敍するには、假名文の纖細優雅な筆致を用ひて、程よく織り交ぜられてゐる。作者に就いては、信濃前司行長說と葉室大納言時長說とがあるが、何れも確說ではない。承久の頃、僧家の手になり、謠物として幾多の增補が行はれたものと見られてゐる。從つて非常に多くの流布本と異本とが行はれてゐる。

語釋

「法皇」　太上天皇（天皇の御讓位あられし後の尊號）の落飾して佛門に入らせ給へる稱。なほ後白河法皇と建禮門院との御續き柄をいへば、法皇の御子（第三皇子）は高倉天皇（第八十代）、で高倉天皇の中宮が建禮門院でいらせられるから、法皇は卽ち門院の御舅に當らせられてゐたわけである。

「文治」　第八十一代安德天皇が平家一門に奉ぜられて西海に漂ひ給ひ、遂に壇の浦に沈み給うたのは壽永四年三月二十四日の事であつたが、同年八月十四日、文治と改元になつたのである。第八十二代後鳥羽天皇の御治世。五年續いて建久となる。

「建禮門院」　高倉天皇の中宮であらせられた。安德天皇の御母に當らせられる。御名は德子。平淸盛の第二女、母は贈左大臣時信の女時子であつた。承安元年十二月二日、從三位に叙し、同二十六日、女御となり同二年二月十日、中宮となつたが、その時、わづかに十六歲の幼さであつた。次いで治承二年十一月、言仁親王卽ち安德天皇を生み奉つたが、養和元年正月十四日、高倉天皇が寶算二十一で崩御遊ばされると同年十一月二十五日、門院號を稱せられた。壇の浦の戰に安德天皇が二位の尼に抱かれ給うて御入水になると、門院は「御硯、御燒石、左右の御懷に入れて、海に入らせ給うた」が、源氏の兵渡部源五馬允熊手にて引上げ奉り

それより、京都に御歸還、東山の麓、吉田のほとりにお出でになつたが、元暦三年五月一日、長樂寺の阿證坊を御戒の師として御髮おろさせ給ひ、眞怨覺と號せられた。時に御年二十九。かくて「文治元年九月の末にかの寂光院へ入らせおはしま」したが、建久二年二月中旬、遂にそこで薨ぜられ給うた。最もこれは平家物語にさうあるので、史實によると寂光院から京都法性寺に移られ、健保元年十二月十三日、そこで薨去、御年五十七といふことになつてゐる。

〔大原〕 小原とも書く。京都府（山城國）愛宕郡大原村。京都の北方、西江州へ通ずる山峽にあつて、京都から三里の距離にある。戸寺、井出、野村、草生等の字があつて、戸數は四百戸ばかり、八瀬村の北に接してゐる。村の女がくろ木を賣りに京へ出るので有名である。いはゆる大原女である。

〔閑居の御すまひ〕 世を避けて、人里離れた地に心離かに住み給うてゐる——その御住居。

〔御覽ぜまほしう〕 御覽になりたく思し召した意。「まほし」は「まくほし」の約で、希望の意である。

〔つらゝ〕 單に氷の義。源氏物語、末摘花の卷に「朝日さす軒の垂氷はとけながら、などかつらゝのむすぼほるらん。」後轉じて氷柱のこととなつた。氷柱は前の歌の垂氷のこと。この物語では氷と解釋してよい。

〔北祭〕 單に祭ともいふ。毎年四月中の酉の日に行はれた賀茂の葵祭のこと。祭日に葵の葉を、奉幣使や供奉職員の衣冠につけたり、車簾にかけたり、社前に飾つたりするので葵祭といふ。儀式が頗る盛大なところから單に祭といつて、この祭のことを意味するやうになつた。賀茂神社の本祭で、今も五月十五日に、古式に則とつて行はれてゐる。

〔御幸〕 天皇、法皇、女院のいでまし。

〔しのびの御幸〕 微行の御幸。人目をしのんで身をやつしての御幸。源頼朝を憚り給うたのである。

〔供奉〕 高貴のいでましに御供し奉ること。又その人。

〔後德大寺〕 藤原實定である。右大臣公能の子である。人と爲り穎敏で頗る才學があつた。保元三年權中納言に任ぜられた。應保元年二條天皇日吉社に幸した際藤原實長行事の賞とし從二位に叙された。實定昔日父公能の第に幸するの賞を追請して同じく從二位に叙されたが班は實長の下にあつた。長寛二年實長と並んで權

大納言に任ぜられたが、尙心にあきたらず遂に大納言を辭して正二位に叙せられ、よつて實長に超えた。公卿にして官を辭して位階を進められたる者古來なしといはれる。仁安の初皇后宮大夫に任ぜられたが、嘉應三年これを辭し、是より家居すること數年鬱懊として志を得ず、詩歌を作つて以て自ら慰めた。佳句多く世に傳へられてゐる。治承元年再び大納言に任ぜられ幾ばくもなくして右近衛大將を兼ねた。壽永二年に內大臣となり、大將は故の如くであつた。建久元年官を辭し、子左近衛中將公繼を擧げて參議となし、翌年薙髮して名を如圓と改めた。この年十二月薨去、年五十三。後德大寺と稱せらる。實定の家に藏書多く和漢すべて萬餘卷に及んだといふ。又最も和歌を好み、一堂を構へて常に歌人を延き、嘯詠して自ら娛しんだといはれてゐる。

〔花山の院〕 藤原兼雅。花山院太政大臣忠雅の子。建久元年右大臣となり、次いで同九年、左大臣に任ぜられた。正治二年七月薨ず、年五十三。

〔土御門〕 源通親。太政大臣雅實の曾孫。內大臣雅通の子。後白河天皇から土御門天皇に至る七代に歷任した。治承中藏人に補し、參議に任ぜられ、淳和、奬學兩院別當、左衞門督、檢非違使別當を經て、建久六年權大納言に轉じた。その女在子は宮中に入つて皇子を生む。後卽位された土御門天皇である。通親は院別當となり、後內大臣に進み、建仁三年十月薨、年五十四。

〔北面〕 院の御所の北方にあつて、北面の武士の伺候する所をいふのであるが、普通は北面の武士を略していふ。北面の武士は院の御所を守護せる武士で、白河院の時始めて設置せられ、上北面と下北面との別ありて、四位、五位は上北面、六位を下北面といふ。

〔さぶらひけり〕 お傍につき從つたの意。扈從した。「さぶらふ」は侍する、伺候する意。

〔遠山にかゝる白雲云々〕 遠山にかゝつてゐる白雲は、花とまがつて既に散つてしまつた花を思ひ出す種である。續後撰集春歌下に「千五百番歌合に。」と詞書して出てゐる後久我太政大臣の歌に「まがふとて厭ひし峰の白雲は散りてぞ花のかたみなりける。」とある。形見の記念——卽ちすべて過去の事の思ひ出される種となるものの意。「北面少々候ひけり。」と「遠山にかゝる白雲は」の間に、原文には「鞍馬通の御幸なりけれ

ば、かの清原の深養父が補陀樂寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽ありて、それより御輿にぞ召されける。」の文がある。

〔青葉に見ゆる梢には云々〕 すつかり青葉になつてしまつた梢――青葉に埋れた梢を見れば過ぎ去つた春――この梢が花で埋れた春を殘り惜しく思ふ心が切である。「青葉に見ゆる梢」はもうすつかり青葉と化し、梢全體が青葉に見えるの意か。

〔卯月二十日餘り〕 卯月は陰曆四月の異稱。卯の花月の略。卯の花は卯木の花。「二十日餘り」は二十日頃。

〔茂みが末〕 「末」は草の葉末。

〔初めたる御幸〕 この邊へははじめての御幸。

〔御覽じなれたる方もなく〕 お見馴れになつたものは、何もなく。「方」はいろ〳〵さま〴〵の物を漫然と指す。

〔人跡絶えたる程も〕 人の往來も絶えてゐるほども。この「ほど」は度合、ころあひ、ほどあひ、即ち程度の意に解する。

〔一宇〕 一つの家屋、又は殿堂。

〔古う造りなせる〕 古風に造つてある。「造りなす」は造りたつ、造つてそのさまになす意。

〔泉水〕 庭前に設けた池。

〔よしある〕 故ある。いはれある。由緒のありさうな。

〔いらか破れては霧不斷の云々〕 出所は古來不明とされてゐる。破れた屋根から浸入して來る霧が、絶えない香を焚いた煙のやうに、ほの〴〵と白く漂ひ開き戸が破れ落ちて月光がさすので堂内が明るく、まるでいつもある燈(常夜燈)を供へてゐるやうだといふ意で、荒廢した堂宇の有樣を、美しい對句をもつて形容したものである。「香」は伽羅、沈香、白檀、梅檀などの材の薫のあるもの、又種々の香を集めて煉つたもの、ここの香はもちろん佛にたむける香である。「常住」は常にとゞまるで、不斷と同じ義。大藏法數に、「常住者無滅無生、不遷不變之謂也。」

〔樞〕 戸臍の義。楣、閾に孔をあけた所。即ち開き戸のかまちの上下の端に出たものを「とまら」といふが、これと相合はせて「くるゝ」となつて戸を回轉開閉する仕掛である。

〔青柳絲を〕 柳の枝の若芽したのを青柳の絲といふ。

〔浮草〕 浮萍科の小草。池、沼などの水面に浮生する。全體が平圓形で葉狀をなしてゐる。夏日淡紅色の小花をつける。

〔晒す〕 ここは布、木綿又は纖維などを、水に洗ひ日にあててその色を白くする意。もちろん「錦をさらす」といふことは實際にはないことだが――さういふ風に思はれるといふのである。

〔中島〕 池中の島。

〔藤波〕 藤花のなびきゆれるさまを波に形容していふ語。轉じて藤の花のことをもいふ。萬葉集卷三、雜歌、防人司祐大伴四繩の歌に「藤波の花はさかりになりにけり奈良の郷をおもほすや君。」

〔うら紫〕 裏紫。單に紫といふに同じ。「うら」には意味なく、ただ添つてゐる調。

〔青葉まじりの遲櫻云々〕 金葉和歌集、夏歌に、「二條の關白の家にて人々殘花の心をよませ侍りけるによめる。」と詞書して藤原盛房、「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりもめづらしきかな。」

〔初花〕 初櫻に同じ。最初に咲いた櫻の花。

〔八重立つ雲〕 幾重にもたなびいてゐる雲。

〔山杜鵑〕 山にゐるほとゝぎす。山から來るほとゝぎす。

〔君の御幸〕 ここは「みゆき」と訓む。

〔叡覽〕 天皇(ここは法皇)の御覽遊ばすこと。

〔かうぞあそばされける〕 かうお詠みあそばれたことであるの意。

〔池水にの歌〕 この歌は、千載集卷第二、春歌下に出て居つて、「みこにおはしましける時、鳥羽にわたらせたまへりける頃、池上花といへる心をよませ給ひける。」と詞書して後白河院の御製としてゐる。されば院の御製ではあるが、寂光院でお詠みになつたものではない。即ちこれは作者が藝術家的才腕をもつて巧にここに綴り出したものなのである。「波の花」とは波の白沫を花に見立てるのであつて、貫之集には「浦ごとに咲出づるなみの花見れば海には春も暮れぬなりけり。」といふ歌が出てゐるが、ここは、たゞさういふ成語を用ひただけで、落花が池面を蔽うてゐるのを、波の花と見、櫻は散つて盛りを過ぎたが、波の花は今が盛りだといふ意である。「みぎは」(汀)は水際。

〔舊りにける〕 古びた。

〔綠蘿の垣〕 綠蘿は、あをかづら。綠のつたかづらの纏うてゐる垣。青蘿、碧蘿ともいふ。

〔翠黛の山〕 みどりの苔のむしてゐる山。一本には翠苔とある。――美しくゑがかれた黛のやうに優しい曲線をなした翠の山。山の青いのをみどりのまゆずみに形容したのであるが、現今では寂光院の裏手に翠黛山といふ固有名詞をもつ名稱が出來てゐる。

〔女院〕 國母、または女御、內親王等で佛門に入つて特に門院の號を賜うた後の稱。ここでは建禮門院のこと。

〔御庵室〕 原文室は濁音。小さな假の住家、主に僧尼の住む所、いほり。

〔つた〕 蔦。葡萄科に屬する草、蔓莖で物に纏繞する。葉は掌狀に分裂し互生し、秋季に紅葉する。花は小形で淡紅色を呈し、夏季に開く。

〔しのぶまじりの忘草〕 忍草と忘草とが交つて茂つてゐるさまに、忍ぶと忘れとを相對せしめたので、自ら懷舊の情趣を含ませてある。「忍草」は羊齒類に屬し、葉は檜に似て靑く、地下莖を有し深山に自生する。軒などに吊して觀賞用に栽培する。「忘草」は萱草の一名である(異說がある)文選卷六の註に「萱草忘憂也。」とあるから出た。萱草は百合科の草本。高さ二三尺に達し、塊根から葉が叢生し、花は黃百合に似てゐる。

〔瓢簞屢〻空し云々〕 この對句は橘直幹の「請レ被下特蒙二天恩一兼二任民部大輔闕上狀」(本朝文粹所載)の中の句で、和漢朗詠集にも「瓢簞屢空、草滋二顏淵巷一、藜藿深鎖、雨濕二原憲之樞一。」とある。つまり直幹が支那の顏淵、原憲に託して自分の貧を嘆じ、昇進を願つたもので、「瓢」はヒサゴ、酒水を入れる器、「簞」は食物を入れる竹器である。で、句の意味は、飲食乏しく瓢簞が度々カラになる――といふやうな境涯にある顏淵の住居に訪ふ人もないから、その住む狹い橫町には草がおどろ〳〵しく茂つて居り、また原憲の住む家のあたりはあかざがこれまたいつぱいに茂つて路を埋めとざし、屋根も軒も破れはててしまつてゐるから、その家の樞は雨漏りで、しとどに濡れてゐるといふのである。「橘直幹」は長盛の子。橘公統に師事した。天德の初め式部大輔となり、文章博士として冷泉天皇に侍讀した。後撰集の作家。

〔顏淵〕 名は回、字は子淵、無繇の子。孔子の弟子。

天資明睿、一を聞いて十を知つた人。孔門十哲の首にゐた。年二十九で頭髮白く、常に淸貧を樂しんだ。周の敬王三十七年(皇紀一七八年)歿、年三十二。孔子これを哭して、「天我を喪す。」と歎じた。

〔藜藋〕 「藜」はあかざ。「藋」もあかざをいふ。あかざは藜科に屬する一年生草木。莖の高さ四五尺、葉は卵形で缺刻及び波狀緣がある。嫩葉は銀赤色の粉がある。花は穗狀花序に排列し、黃綠色を呈し、初夏開く。嫩葉は食料にし、老大の莖は杖となる。

〔原憲〕 周の宋人。孔子の弟子。字は子思、孔子より若いこと三十六歲。人となり狷介、孔子の歿後草澤の中に隱れた。その居所は非常に荒れた所であつた。同門の子貢が衞の相となつて訪れ、「夫子病めるか。」と問うた時、原憲答へて、「われこれを聞く、財なきものこれを貧といひ、道を學んで行ふこと能はざる者これを病といふ。憲の如きは貧なり、病にあらず。」と。そこで子貢は慚ぢて去つたといふ。

〔杉の葺きめ〕 杉の木の皮を薄くはいで、それを順々に重ねて葺いた――その重ねあはせた緣と緣と相接する所。「め」は「縫ひめ」などといふ、あの「め」である。

〔洩る月影云々〕 葺目のまばらなところから時雨、露霜などのもれるのと、月の光のもれてさすのといひかけてある。「洩る月影に爭ひて」は、時雨、露、霜などがもれるのが、月光がもれるのと競ふといふ意。

〔たまる〕 溜つて流れぬこと。堪ふの義。

〔いささ小笹〕 「いささ」はいささかな、わづかな。「小笹」の「小」は接頭語で意味はない。口調を整へるために用ひてある。

〔世に立たぬ身〕 「世に立つ」は世間に出ること。「世にたたぬ身」は卽ち遁世した身。

〔憂き節しげき〕 もの憂きふし――卽ちもの憂いことの多いのと、竹に節の多いのとを巧みにいひかけたのである。

〔間遠に結へるませ垣〕 「ませ垣」は約して「ま垣」(籬)ともいふ。竹木でまばらに結つてある丈の低い垣根から、音信の間遠なことを、垣のまばらなのとかけたのである。

〔ことととふ〕 言問ふ。ものをいふ、話す意から轉じてたづねる、訪れる意。

〔賤〕 しづ山がつ。「しづ」は卑しい者の意。ここでは

山に住んでゐるいやしい者。卽ちきこり、そまびとなど。

〔爪木〕 爪先で折取つた木の義。薪料にすべき折枝。

〔まさきのかづら〕 扶芳藤。衞矛科に屬する蔓生常綠植物。莖は細小な氣根を以て上昇し、葉は橢圓形で鋸齒を有し對生する。花は聚繖花序に排列し、小形黃綠色を呈する。我が國の山野に自生し、又觀賞用として栽培せられる。神樂歌に「み山にはあられふるらしと山なるまさのかづら色づきにけり。」

〔青つゞら〕 淸風藤科に屬する蔓生草本。葉は卵形互生。青白色の小花を開き、實を結ぶ。かづらもつゞらもともに蔓生で長く手繰ることが出來るから、繰ると來るとにかけて用ひたのである。

〔御いらへ〕 御答へ。

〔花摘〕 佛にたむけるための花を摘むのである。

〔さこそ〕 そのやうに。

〔世を厭ふ御習〕 世を捨てて、佛門に入つたもののならはし。つまり難行苦行が、佛者のならはしなのである。

〔さやうの事〕 花摘などのやうなこと。

〔五戒〕 佛敎で、在家の人の保つべき五つの制戒。不殺生戒、不偸盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飮酒戒。

〔十善〕 十善は十惡の對。不殺生、不偸盜、不邪淫、（以上は身に關する業）。不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語（以上は口に關する業）。不慳貪、不嗔恚、不邪見（以上は心に關する業）。前世に十善を行へば、功德によつて今世では王位を受けるといふ。ここは女院の御身のことをいつてゐる。

〔果報〕 業因によつて報があらはれた結果。——前世に善行を積んだ結果として、今生に受ける應報をいふ。

〔捨身の行〕 佛敎に於ける修行の一で、佛果を得んため、自己の身體を捨てて正道を修行すること。

〔なじかは〕 いかにして。いかでか。

〔惜しませ給ひ候ふべき〕 この句と、次の「とぞ申しける。」の間に、原文には「因果經には、『欲知過去因見其現在果、欲知未來果、見其現在因。』と說かれたり過去未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つや〳〵御歎きあるべからず。昔悉多太子は十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて木の葉をつらねて肌を隱し、峰に上つて薪を採り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の

功に依つてこそ、遂に成道正覺し給ひき。」の句がある

「給ひきとぞ申しける」と續くのである。

〔分ちも見えぬ〕 區別もわからない。「分ち」は別である。

〔斯樣の事〕 こんな非凡な高尙なこと。

〔涙を抑へて〕 袖に——。涙をおしとどめて——。

涙の出るのを我慢しての意もある。

〔故少納言入道信西〕 藤原通憲のこと。實兼の子。鳥羽、崇德、近衞、後白河の四朝に仕へ少納言となり薙髮した圓空と稱し信西と改めた。平治の亂に藤原信賴、源義朝等に殺された。古今の典籍に通じ、その時代の學者であつた。本朝世紀、法曹類林等の著がある。續後撰集の作家。「少納言」は太政官の判官。「太政官」は八省諸司及び諸國を總管し、大政を統理した官所。その長官を太政大臣、左右大臣とし、大納言、中納言參議があつて宮中の事を通辨し、その下に小納言、左右辨官の三局があつて事務を分掌した。

〔阿波の內侍〕 源平盛衰記に「誠やこの尼は紀伊二位にも孫たり。彼の二位と申すは、法皇の御乳母なりければ、この尼も御乳母子にて、殊に身近く召使はれし人なりければ、なつかしかるべき者にこそ。」とあるが傳は詳でない。寂光院にその像及び墳墓がある。「內侍」はナイシノジャウともいふ。內侍司の女官の稱。內司は後宮の十二司の一。天皇に常侍し、奏請、宣傳をなし、女孺を檢校し、兼ねて內外の命婦の朝參にあづかり、及び後宮の禮式などを掌る所。尙侍、典侍、掌侍、女孺等の職員がある。

〔紀伊二位〕 藤原朝子。近衞天皇の乳母。紀井守範元の女。藤原信西の妻。二位に叙せられ、父が紀伊守であるから、紀伊二位と稱した。源平盛衰記には「彼の二位と申すは、法皇の御乳母なりければ、この尼も御乳母子にて、殊に身近く召使はれし人なれば、なつかしかるべき者にこそ云々」とある。

〔さしも〕 あれほどまでに。

〔いとほしむ〕 いとほしく思ふ。あはれに思ふ。ふびんに思ふ。愛する。

〔忍びあへぬさま〕 こらへしのぶことが出來ない樣子。「あへぬ」は堪へ得ないこと。

〔目も當てられず〕 餘りの事に、まともに見てゐることも出來ない。見てゐるにしのびない。顏をそむけ

たくなるの意。

〔あんなれ〕 あるなれ――あんなれ――あなれと轉約する。

〔せきあへさせ云々〕 御涙が溢れて、それをさへざりとゞめることがお出來にならないから。

〔ことわりにて申しけり〕 尼が種々の佛說などを引用していふ點に、非凡な面影が見えるので前に「あの有樣にてもかやうのことを申す不思議さよ。」とあるのに照應する語で、成程、阿波の內侍なればこそ、いつたのも道理であつた。「申しけるもことわりなり。」の意。

〔しぎたつひま〕 鴫が下り立つことが出來るだけの。――水のない所。「しぎたつ」は鴫が飛ぶことではない。鴫は涉禽類に屬する鳥。嘴長く、根部に軟皮を被り、前額と多少判然たる角度をなしてゐる。中形大の鳥で常に水邊に棲息し、小魚、虫類を捕食する。

〔來迎の三尊〕 原文訓方注意。「來迎」は佛を念ずる、衆生を佛が來りむかへて淨土へつれ行くこと。「三尊」は彌陀、觀音、勢至をいひ、又或場合には釋迦、文殊、普賢を三尊といふこともあるが、ここでは前者がよい。

〔中尊〕 原文の訓方注意。三尊のうち中央の彌陀をいふ。

〔五色の絲を懸け云々〕 佛に結緣する（佛に緣を結ぶ）ために、佛像に絲をかける習があつた。「五色」は青黃、赤、黑、白。現今でも淨土宗では五色の布をかける禮典がある。

〔左に普賢の繪像〕 原文の訓方注意。普賢は利德周遍（普）仁慈惠悟（賢）の菩薩の名。文殊と共に釋迦に侍し說法を輔けた。白象に騎してゐる繪像である。

〔善導和尙〕 善導は唐の高僧。光明寺にゐたので光明寺和尙ともいふ。河西の導綽が淨土の觀經を講ずるのを聞いて、心を念佛の一門に發し、三十餘年苦行して淨土宗を唱導し、高宗の永隆二年、寺前の柳樹に登り自ら投じて死んだ。「和尙」は僧の弟子から師を呼ぶ稱。禪宗ではヲシャウと讀み、天台宗ではクワシャウ、眞言宗ではワシャウ、律宗ではワジャウと讀む。平家物語でクワシャウと讀むのは慣用であらう。

〔先帝〕 安德天皇を指す。第八十一代の天皇。御諱は言仁。高倉天皇の太子。母は建禮門院平德子。源頼朝

が鎌倉に兵を起すに及び、平宗盛は天皇を奉じ、筑紫に赴き、又壇の浦に走り、文治元年、平氏滅び、天皇もまた海中に投じて崩御、在位五年、實算八歳。

〔御影〕 畫像の尊稱。「先帝の御影を掛けられたり。」の所が原文には「――御影を懸け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。」となつてゐる。

〔蘭麝の匂〕 蘭麝は、一種の薰香で、麝香鹿（交趾支那、ネバールより中央アジアに棲む一種の鹿）の臍のあたりにある香料。それに蘭の芳香があるので、蘭麝といふ。平家物語抄に「蘭麝名香也。聖武帝の時、日本に渡る。」と見える。古はこれを婦人の衣服などにたきしめたものである。この句の意味は宮中に奧深く居られた時の意。

〔竹の御竿〕 竹竿を衣桁に用ひたのである。

〔紙のふすま〕 紙で作つた寢具。「衾」は、寢る時、身體の上にかけおほふ夜具のこと。

〔本朝漢土のたへなるたぐひ〕 日本や支那の勝れたもの、凝つたもの。

〔數を盡し〕 數のかぎりをつくした――。殘りなくとりあつめた――。

〔綾羅綿繻〕 あや、うすもの、にしき、ぬひとりのある帛。ここはすべてで美しい衣服、又は織物の意。

〔まのあたり見奉りし云々〕 昔目前に見奉つた宮中の盛裝の花やかさなど、現在の事のやうに思はれて、きのふに變るけふの樣を悲しみ泣いたとの意。

〔かけぢ〕 懸路。石のある山路。または嶮岨な山路。

〔おりわづらひたる樣〕 下りなやまれてゐるさま。

〔花がたみ〕 花や菜を摘入れる籠。

〔岩つゝじ〕 岩間に生えるつゝじである。「いはつゝじ」といふ石南科に屬する二三寸の落葉小灌木があるが、これが花期は夏であり、その花も佛前に供へるやうなものでなく、小さなみすぼらしい群花である。

〔鳥飼中納言維實〕 維實はまた伊實とも作る。藤原伊通の子。位、正三位に至り、官、皇太后宮大夫權中納言に至つた。母は按察使顯隆の女。永曆元年薨、年三十五。或はいふ四十五。

〔五條大納言國綱〕 保安三年に生まる。右馬權助藤原盛國の子。仁安元年、參議となり、權中納言を經て大納言に至り、治承三年、五十九歳で引退した。

〔大納言典侍局〕 典侍については前出「內侍」の項參

照ら「局」は宮中で各別にしきり隔てた部屋の意だが轉じて局を有する女官の稱に用ひる。ここは養父の五條國綱が大納言であつたから、大納言典侍局といふのである。平重衡の妻で、安德天皇の御乳母。

〔申しもあへず〕　ここではいひも終らずの意。

〔見え參らせんずらん恥づかしさ〕　見え參らせんとする恥づかしさ。お目にかゝらうとする恥づかしさの意。「見え參らす」は他に對する敬語。

〔消えも失せばや〕　このまゝ消えてなくなつてしまひたい。

〔閼伽の水〕　佛にたむける水。「閼伽」は阿伽とも書き、梵語 Argha の音譯で、水の意、また佛にたむける水または香水の意に限つても用ひられる。で「閼伽の水」といへば重複のやうであるが、閼伽には閼伽の具——即ち佛にたむける水を入れる器の意もあるから、かういつても決して重複にはならないのである。

〔掬ぶ〕　水をすくひとるといふのと、結ぶ袂といふのと兩方にいひかけてある。

〔萎るゝに〕　しをれる上に。閼伽の水を汲むために袖がしをれるのと、涙の爲にしをれるのとかけてある。

「曉おきの袖の上云々」も、袖の上の涙の露と、山路の露とをいひかけてある。

〔絞りやかねさせ云々〕　袖の上の涙の露と、水を汲むことにぬれる袂の濕ひとを、しぼりかねるといひかけたのである。「や」は疑問の助詞である。

〔賜はりけり〕　受取つたとの意。貴人に對しては、こちらから申し受けた意にしないで、先方から下さる意にするのである。

〔何か苦しう候ふべき〕　少しも心苦しいことはありません。

〔見參〕　面會、對面等の敬語。

〔還御なし參らせ云々〕　法皇が都にお歸りになれるやうにしてお上げなさいの意。

〔一念の窓の前には云々〕　一念の窓の前と十念の柴の樞と面白い對句となつてゐるのである。阿彌陀佛の攝取來迎を待つてゐたのに思の外にも法皇の御幸があつたことをいふのである。「一念」には二義がある。一時物を思ふこと、一度口に佛名を唱へることである。ここは後者の意で窓の前で一度念佛を唱へる意。無量壽經に「諸有衆生聞其名號、信心歡喜乃至一念、至

心回向、願生彼國、即得往生。」

〔攝取の光明を期し〕　阿彌陀佛が、光明を以て念佛者の迷を照らし、極樂淨土に導くことを、希望して待つことをいふ。「攝取」は佛が衆生ををさめ取ること、救ふこと。佛に救はれる希望を豫期しての意。「光明」は佛菩薩の心身の光、智慧の相である。明かに眞俗の諸法を照らし、十方に輝いて衆生の無別を被る義。ここでは希望の意でよからう。

〔十念の柴の樞には〕　粗末な戸の前で十回の念佛を唱へてはの意。十念は後世の爲に南無阿彌陀佛の六字の名號を七たび念ずること。觀無量壽經に「具足十念。」

〔聖衆の來迎〕　人の臨終の時、多くの佛菩薩が來現して亡者を極樂淨土に迎へるといふこと。かくして、ひたすら後世を祈つてゐたのに、けふは思ひかけずも、法皇の御幸云々。

〔鑑賞批評〕　「いゝ材料であるのに、惜しいかな、その字句の上に、やたらに艶麗を求めようとして、全體の敍事の體をなさないでしまつた。それで調子がばかに花やかで、浮いてしまつて、少しもしんみりとした所がない。殊に『憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や』の一節は、やたらにかけたことばを用ひて妙な調子である。こんなにかけことばを用ひた所は前(平家物語中に於て)にはどこにもなかつた。」とは內海弘藏氏の本文に對する批評である。そして、それは內海弘藏氏に限らず、一般の人々の定評でもあるやうだ。つまり文が修飾過多のために妙に浮はついて、實感味を缺いてゐる——といふことになるのだが、さういふ批評は批評として、作者が、これほどまでに修飾を用ひたといふことには、作者としては或意圖があつたに相違ない。即ちこれは平家物語全卷の挽歌である。屢々と敍して來た平家の長篇哀史のエピローグなのである。物語の作者は、「祇園精舍の鐘の聲」に筆を起して、莊嚴なスケールをもつて、平家の盛衰を隈なく歌つて來て、そして、ここでその悲しくも美しい歌を歌ひをさめるのである。修飾過多——單にさういつてこの文を排し難ずることは、作者の長篇構成上の技法を無視するものだと思ふ。即ち本課はどこまでも平家の挽歌、平家物語全卷のエピログとして讀まなければならない。平家物語のやうな長篇を讀むに際しては、それだけの細心をもつて臨むのが、作者に

對する禮儀であらうと思ふ。が、さういふ事を別にしてたゞ獨立した文として本課を讀んだにしても、光つた所は澤山あるはずである。環境描寫と事實描寫との巧な融合――それは決して綴錦のやうだといつた底の概念的な言葉では批評し得られない渾然味をもつてゐると思ふ。晩春初夏の大原の自然、それも飽くまで平家物語らしく涙ぐましく描き出してあると思ふ。特に終の「やゝあつて上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人云々」以下は、哀音嫋々とでもいふのか、しめやかに、しみ〴〵と讀者の胸を打つ。抒情長詩――さういつた感銘が要するに本課讀經の感銘であらう。

參考 建禮門院の御悟についての、姉崎正治博士の所說を擧げておく。

建禮門院は時代の變革につれて起つた根本的精神の覺醒の一代表者である。但しその覺醒は受身であつて、自ら進んだ活動ではない。運命の波のまに〴〵搖られて有形無形の苦惱の末に達した精神轉換であつた。

平德子は入道相國の女として、平家の世盛に人となり十六歲で入內して中宮となり、二十三歲で安德天皇を產み、間もなく國母建禮門院となられた。住む所は金殿玉樓、護る者は平家一門。世の幸福快樂、榮耀榮華、一として獲られぬものはない。實に天上界の生活にも譬ふべく、快樂充滿の生であつた。しかし、それは自然の推移で、敢へて望まず招かずして女院は此所に到られたのである。

然るに以仁王一發の烽火は諸國の源氏を蜂起せしめてあはれ壽永二年七月二十五日、さしもの平家も都落をしなければならなくなつた。今の京都驛の荷物取扱驛は、その昔西八條平家邸宅豪奢の地で、今の氣笛靴音の區は當時朗詠管絃の街であつたのである。

女院も一門の人々と同じ運命に弄ばれ、またも望まず欲せずして急轉直下、失意落魄の人となり、九國を追はれ瀨戸內の潮に漂ひ、終に壇の浦で一族の沒落に逢ひ、安德天皇をも見失つた。かくて心ならずも捕虜の身となつて都に立還り、遂に長樂寺印誓の許で剃髮し、大原の寂光院に入つて、「極重惡人、無他方便。唯稱彌陀、得生極樂」の誓願にすがり、一心に阿彌陀佛を念じて、主上をはじめ奉り、二位殿、一門の人々、且は我が身の淨土往生を希ふ外、他に一つの望もなかつた。かくて女院は最後の五年を寂光院で行ひ澄された。傳說によれば、御

往生の時は西に紫雲たなびき、異香室に滿ちて音樂空に聞えたとの事である。

思へば淨土門の信仰は、この轉變の悲しみ、別離の歎に胸を痛められた女院にとつては、何よりの福音であつたらう。

女院は時代の變革を一身に集めて、遂に精神的覺醒に達したとは言ふものゝ、徹頭徹尾受身であつた。運命のまゝに搖られて榮え、運命のまゝに搖られて安定を得たのである。(中略)

世に先んじて覺醒する人は少い。世に從つて覺醒する者も多くはない。大多數の人々は、覺醒の域には容易に達せられないものである。建禮門院は運命の波に搖られて最後に覺醒したが、一生を醉生夢死に終る者に比してどのくらゐ尊いか知れない。

◇「大原御幸」の段の粉本――粉本と目せられるものに「閑居友」(二卷)三十二の當時の說話を集めたもの。著者は慈鎭とも慶政上人ともいふといふ)といふのがあるが、兩文比較のためにその全文を引く。

建禮門院御いほりにしのびの御幸の事

文治二年の春、建禮門女院世をすてゝこもりゐさせたまへるもとに、いかさまにしていまそかるらむとて、夜をこめて忍びの御幸ありけり。そのおはします所に、いとあやしげなるあまのとしおひたるありけるに、女院はいづくにおはしますぞととはせたまひければ、このうへの山にはなつみにいらせ給ぬといらへけり。いとあはれにきこしめして、いかでか世をすつといひながら、みづからはときこえさせたまへば、あまの申やう、家をいでさせ給ばかりにて、いかでかさる御をこなひも侍ん。切利天の億千歲のたのしみ、大梵天の深禪定の樂にも、かやうの御をこなひのちからにてあはせたまはんずるには侍らずや。うき世をいでゝ佛のみくにゝむまれんとねがはん人、いかでかすつとならば、なをざりの事侍べき。さきのよにかゝる御をこなひなかりけるゆへにこそ、かゝるうきめを御覽ずる事にて侍らめといひけり。御ともの人々は、すがたよりはあはれなるものいひかなといひしろひ、また院もあはれにおぼしめたり。

さて御すまるを御らんじまはしければ、一まにはあみだの三尊たてまいらせて、はなかういといみじくそなへさせたまへり。一まにはふさせ給所とみえて、あやしげなる御ぞ、かみのきぬなどあり。さうじには經のようも

んどもかゝれたり。つくゑには經よみさしてあむめり。心をひづむべきふみども、ならひに地獄ゑなどさもとおほえてならべをかれたり。これを御覽ずるに、なにとなくむかしの御あたりちかき御たから物どもにはたとしへなきをあはれにかなしくおぼさる。たれもあはれとやおぼされけん。あるはなをしのそでをかほにあて、あるはおもてをかべにむかへて、おの〳〵ことばずくなになりておはしけるほどに、山のうへよりあま二人おりたりけり。ひとりははなごをもち、ひとりはつまぎをひろひもちたり。やう〳〵ちかづき給を見れば、はなごもちたるは女院にてものしたまひけり。つま木もちたるは昔ちかくめしつかはせ給ける人なりけり。をの〳〵なみだをながして、あきれあひたまへり。さてそばのまよりいらせ給ひて御そでかきあはせてむかひまいらせておはしましけり。いかに事にふれて、たよりなき御事も侍らんかしなど、さまざまかたらはせたまへば、なにとはたよりなくもわびしくも侍べき。いみじき善知識にこそ侍れ。つねに思ひいではべれば、なみだもとゞまらず。花の都をいでしより、かへりみればわがすみかとおぼしくて、けぶりたちのぼりて、ゆくさきもなみだにかくれふたがり、いづれが山河ともわかず。八しまのさとにまかりたりしかば、そのかたみしをしなどのやうにおぼえて、ゆみやのほかにささげもちたる物なし。さてここもかなふまじとて、八しまをいでゝゆくゑもしらぬうみにぞうかみて、おきふしはなみだにしづみ侍しほどに、ふねにおそろしきものどものりうつり侍しかば、今上をば、人のいだきたてまりて、海にいり給ひき。人々或は神璽をさゝげ、あるはほうけんをもちて、うみにうかみて、かの御ともにいりぬと、なのりしこゑばかりしてうせにき。のこれるものども、めのまへにいのちをうしなひ、あるはなはにてさまざまにしたゝめいましむ。すこしもなさけをのこすことなし。いまはとてうみにいりなんとせしときは、やきいしすゞりなどふところにいれてしづめにして、今上をいだきたてまつりて、まづいせ太神宮をおがませまいらせ、つぎに西方をおがみていらせ給しに、我も入なんとし侍しかば、女人をばむかしよりころす事なし。かまへてのこりとゞまりて、いかなるさまにても、後のよをとぶらひ給べし。おやこのするとぶらひは、かならずかなふ事也。たれかは今上の後世をも我後世をもとぶらはんとありし、今上はなに心もなく、ふりわけがみにみづからゆひにて、あを色の御衣をたてまつりしをみたてまつりしに、心もきえうせて、けふまであるべしともおぼえ侍き。されど後世をとぶらひたてまつらむとて、身をすて、いのちをかろめていのりたてまつれば、いかでか諸佛菩薩もおさめたまはざるべき。かゝれば是にすぎたる善知識はなしとこそおぼえ侍れとぞ申させたまひける。さてよもふけ月もかたぶきにければ、御ともの人もなみだにしほれつゝ、かへりにけるとなん。これはかの院の御あたりの事をしるせる文に侍き。なにとなくみすぐしがたくて、かきのせ侍なるべし。

（閑居友——下卷第八話、續群書類從本）

七 比良の山（古歌）

扱方 古今集から新古今集に至る時代の代表的歌人、男性女性を通じて十八家を選び各一首づゝの歌を擧げた。この一首のみを以て各歌人の特性をうかがふことは出來がたいが、通じて讀む時、古今から新古今集に至る歌風の變遷は、やゝ知ることが出來ようと思ふ。古歌の風格に接すると共に、この變遷に注意し、國文學史の常識を得るのに資せしめたい。參考に古今集と新古今集の歌風の變遷を記しておいたから、時間に餘裕あらば、これも說明されたい。

教授

作者

紀貫之 キノツラユキ

望行の子、延喜中御書所預となり同五年、友則、躬恒、忠岑等と勅令によつて古今和歌集を撰進した。延長八年に土佐守として赴任、任地で新撰和歌四卷を編した。承平五年、土佐の任を果して歸洛の日記が、土佐日記である。天慶三年玄蕃頭となり、同八年には木工權頭となつた。天慶九年歿したが、歿年に就いては不明とされる。その歌は古今集以下の勅撰集に多く入り、家集貫之集もある。國文の著には土佐日記があり、古今集の序、大井河行幸和歌序等は名高い。彼は情熱的でなくて、學者的である。奔放でなくて穩健、感覺的でなくて思索的である。從つて、歌人としてよりも、批評家として勝れてゐた。古今集の序はこれを語つてゐる。彼が古今集を撰進して勅撰集の模範を示したこと、土佐日記を著して假名文の紀行文の典型を遺したことは、何といつても文學史上の大功績といはねばなるまい。

凡河內躬恒 オホシカフチノミツネ

寬平六年甲斐權少目、延喜七年丹波權大目、同十一年和泉權椽に任じた。延喜五年には紀貫之等と古今集を撰進した。その生歿年については確定說がない。その作歌は古今集以下の勅撰集に多く見え、家集に躬恒集がある。彼の歌には躍動した情緒があり、張切つた心で一氣呵成によんだところと、或寂しさを力强く訴へようとするところとがある。貫之の歌に比較して調子が高く鋭く、而も粘りがあり、氣持を生かした表現が多い。

紀友則 キノトモノリ

貫之の從弟。寬平九年土佐椽に任じ、十年少內記、延喜四年、內記に進んだ。延喜五年貫之等と古今集の撰修に從事したが、中途で歿した。六十歲位と推定される。その歌は古今集以下の勅撰集に多く見え、家集に「友則集」がある。その技倆は前二者に劣り、些か萬葉風を殘してゐる。

壬生忠岑 ミブノタヾミネ

安綱の子。初め右大將定國の隨身であつた。後、御書所に候し、左近衞番長、右衞門府生、左近將監、御厨子所預、攝津大目に任じ、六位に叙した。延喜五年貫之等と古今集を撰進した。七年には法皇の大井川御幸に供奉して、歌を奉り、貫之と同じく序を作つた。生歿年は未詳。その作歌は古今集以下の集に多く、家集「忠岑集」がある。その歌は溫和で、多少概念的な所がある。

曾根好忠 ソネヨシタヾ

丹後椽であつたので、初めは曾丹後椽、又は曾丹後と稱せられ、後には曾丹といはれた。寬和元年二月十三日圓融院の子の日の御遊が船岡に催され、歌人として召された能宣、兼盛、元輔、時文、重之などが衣冠で畏まつてゐると、烏帽子狩衣の賤しい姿をした好忠が現れた。召のないのに來た事を咎められると、歌よみが召されると聞いて來た、自分はこゝに召された者に決して劣らないといつて立去らうとしないので、大勢に外へ引き出されたといふ話がある。その歌は拾遺集以下の撰集に入り家集に「曾丹集」がある。その歌には動搖し易い心、傷つき易い心が伺はれ、鋭い直觀をもつて對象をよくつかんでをり、淸新な叙景歌にすぐれてゐる。また主觀の歌に於ても、氣持を鮮明にとらへてをり、當時の人々が情緒を享樂的によんでゐるものとは、その趣を異にしてゐる。

源俊賴 ミナモトノトシヨリ

經信の子。初め六位藏人右少將であつたが、五位に叙して殿上を允された。寬治八年には右京權大夫、康和年中には木工頭であつた。後年、伊勢に下つて齋宮に仕へたこともある。天治元年金葉集の撰を命ぜられた頃は六十七、八歲といふ。作歌は金葉集以下の撰集に入り、家集に「散木弃歌集」がある。彼は題材に於ても、表現に於ても自由な態度をとり、沈潛された情熱、餘裕のある心境を通じて、すべての題材と用語とがよくこなされて

ゐる。彼は典型美を標準としないで、素朴な氣持や生活をそのまゝ出さうとしてゐる。如何なるものも興味をもつて眺めるやうな拘束されない、落着いた心をもつて、人生を觀、自己を省み、人生の寂寥と不遇の悲哀とを感じ、技巧のない率直な心で山川草木を歌つてゐる。

藤原俊成　フヂハラトシナリ（シュンゼイ）

俊忠の子、定家の父、通稱五條三位といひ、釋阿と號した。永久二年生。永萬二年、從三位となり、左京大夫皇后宮大夫等に任じたが、安元二年重病に罹り、官を辭して出家した。治承二年夏、仰せによつて「長秋詠草」を守覺法親王に進覽し、壽永二年、後白河法皇の院宣によつて「千載集」を撰した。建仁元年には、式子內親王の仰せにより「古來風體抄」を書いて進覽した。當代の和歌の大御所として、永萬二年から建仁二年まで、三十有餘年、歌合の判者となること數知れず、かくて、元久元年十一月歿、享年九十一。その歌は千載集以下の集に入り家集に「長秋詠草」がある。歌風は情景を構成しようとするよりも、氣分を出さうとする傾向が強くて、詠歎の歌が多く、表現形式は單一である。物靜かな沈潛の中から刹那々々の「あはれ」をよみ、十分餘情を殘すことに努め、一度表現したものから、逆に「あはれ」の情を味はひ、そこに心と詞との一致を見出すのみならず、言外の餘情を求めて象徵を重んじたのである。

藤原良經　フヂハラヨシツネ

嘉應元年生。父は有職家として名ある兼實であつた。十一歲元服して從五位上に叙せられ、次いで侍從となつた。文治五年二十一歲の時には左近衛大將となり、建久六年には內大臣、正治元年三十一歲で右大臣となり、建仁二年父出家の後は內覽宣旨をうけ、次いで攝政となつた。元久二年退隱して藤氏長者の權勢のみを持した。彼の累進の速かだつた事は、父の權勢にも負う所あつたらうが、有職を父に、和歌を俊成、定家に、詩を親經に學び、行くとして可ならざるなき才氣を見せた、その稟性にもよるのである。建永元年三月歿、年三十八。その著も頗る多く、秋篠月清集、後京極殿御自歌合、詩十體、作庭記、新十二月往來等。「後鳥羽院々傳」に、良經の作には秀逸が多く、二三首の程度には證しきれないといふ意味のことがある。その作風は、しかく多方面に亘り、濶達自在であるといふ類の評價には相應しないが、幽韻に富み、清趣かぎりない詞藻がなか〳〵多い。その最も

長所とする所は、自然觀照の犀利といふに存したが、その把握の方法や詩語の驅使といふことに於ても細慮を拂つてゐる。

藤原家隆　フヂハラノイヘタカ（カリウ）

定家と並稱された歌人。父は光隆。十八歲の時、從五位下に叙せられ、翌年侍從となつた。建久四年正五位下同九年上總介に任ぜられ、文久二年には從四位上、翌年には宮內卿に任ぜられた。嘉禎元年には從二位に進み、世人は壬生二品と呼んだ。翌年痼疾の爲に出家し、佛性と號した。翌三年四月歿、年八十。家集を壬二集といひ外に朗詠百首、三家類題抄、等があり、作歌は千載集以下の集に多く入つてゐる。彼の歌の特質は、自然の腑肺に喰ひ入り、靈妙な技巧によつて、華美且つ幽玄の叙景歌をなしたことである。が、時に技巧に過ぎ、眞實感に乏しいものが少くない。

藤原定家　フヂハラノサダイヘ（テイカ）

俊成の子。新古今の代表歌人で國文國語學者。高倉、安德、後鳥羽、土御門、順德、後堀河の歷朝に仕へ、權中納言で京極中納言ともいふ。仁治二年（一九〇一年）歿、年八十。後鳥羽上皇の和歌所復活と共にその寄人を命ぜられ新古今集撰者の一人となり、後堀河の朝に單獨で新勅撰集を撰んだ。小倉百人一首も彼の撰といふ。家集に拾遺愚草三卷、同員外二卷。入選歌は新古今に四十首、新勅撰集に十五首、新後撰集に四十首、歌學書の近代秀歌は詞古想新を目標とし典雅で妖艶で餘情の深い歌を唱へ、詠歌大概では歌道の修養觀を述べ、每月抄では歌論十體を唱へて後進を指導した。以上三書は後世二條派の歌論の金科玉條である。「新古今集の歌人として最も注意すべきは、撰者の中の藤原定家と家隆とであつてこの二人は古今集の貫之と躬恒との如き位置を占めてゐる。定家は俊成の子であり、歌人としてのみならず歌論の上にもまた古典研究の上にも功績がある。歌人としては歌の彫琢に苦心を重ね、新古今集の歌調を代表してゐるが、西行のやうな心情の自らに發して歌をなしたものとは趣を異にしてゐる。……彼の歌論の中心は俊成の唱へた幽玄體を更に深く究めて、所謂有心體の歌を理想とするに至つた點にある。更に源氏物語、古今集、伊勢物語等の古典のテキストを制定した功績も忘れることは出來ないのである。」（日本文學史概說——藤村作）

伊勢　イセ

藤原繼蔭の女、中務の母。三十六歌仙の一。伊勢御ともいふ。宇多、醍醐兩天皇頃の人。初め七條后に仕へ、后の兄仲平と契つたが、捨てられて、大和の父の許に下つたが、又召されて上京した。後、宇多天皇の御寵愛を蒙り親王を生み奉つた。後更に敦慶親王に召され、中務を生んだ。當時宮廷に於ける花形として、數奇な運命に弄ばれた人であつたやうに思はれる。家集を「伊勢集」といふ。その歌は情熱を抑へながら力一杯歌つてゐるから調整があり愼ましやかである。古今集收錄のものはまだ熟さぬ所があるが、後撰集の歌には人生の愛着と人間の寂しさとを深く體驗した所が見えて、完成の域に達したことを示してゐる。

相模　サガミ

相模守大江公資の妻であつたので、相模と呼ばれる。本名は乙侍從。後一條天皇の頃までは生存してゐたらしい。大江公資が相模守となつた時、共に任國に下つたが後離別し、その後は自由な戀愛生活に終始したらしい。彼女は充實して張りきれるやうな生活意識をもちながら、それを統一しようとはせず、現實生活のまゝに轉々として、奔放に刹那に生きたやうにも見える。歌詠みであることを自覺せずに、情熱の單純な發露をそのまゝに投げ出してゐるのが、彼女の歌である。家集を「相模集」といふ。

中務　ナカツカサ

敦慶親王の御子で、母は伊勢といはれる。その生歿年傳記等については全く分らない。その歌については、天分はあつたかも知れないが、これを境地や表現に於て練ることは、さまで苦心努力してゐないやうに見える。時には古い表現や構想を襲用して、歌としては熟してゐない不徹底さも見える。家集を「中務集」といふ。

和泉式部　イヅミシキブ

和泉守橘道貞に嫁してから、和泉式部と呼ばれた。御許丸、雅致女式部ともいふ。父は大江雅致、母は越中守平保衡の女。傳記は明白でないが、容色艶麗、資性多感な式部の生涯は奔放な戀愛に終始したらしい事は、その歌、日記（和泉式部日記）等によつてうかゞはれる。彼女の性格は不羈奔放で、感情の赴くまゝに行動した。然しその天賦の豐富な感情はあくまで純眞で、明澄で、何物をも壓倒しなければ止まぬ純粹で强烈な感情は、王朝女流歌人中での異數である。

赤染衞門　アカゾメエモン

赤染時用（ときもち）の女、實は兼盛の子。長じて大江匡衡の妻となり、二子を生んだ。藤原道長の妻倫子に仕へた。匡衡の歿後は、相當戀愛生活を營んだやうである。晩年尼となつたが歿年は不詳。家集に「赤染衞門集」がある。俗に「榮華物語」の作者といはれてゐる。その歌には烈しい母性愛や、夫を思ふ情が强く現れてゐて、いかにも深刻である。存命中から歌名が高く、和泉式部と相對して當時の二女流歌仙といはれた。

齋宮女御　サイグウニヨウゴ

承香殿女御ともいふ。御名は徽子女王。延長七年に御生れになり寛和元年薨去、御年五十七。承平六年から八年間、伊勢の齋宮に在任され、天慶八年御母の喪にあつて退去された。天曆元年入內して、同三年村上天皇の女御となられた。家集に「齋宮女御集」がある。

式子內親王　シキシナイシンワウ

御父は後白河院、御母は大納言藤原季成の女成子の方である。その御生涯中には、保元、平治の亂があり御血緣の間にある崇德院、（叔父）以仁王（兄）圓惠法親王（兄）安德天皇（甥）といふ次々に時運に殉ぜられた方々を見ればならなかつた。その御心中は、生々として「千載集」或は御家集中に詠はれてゐる。建仁元年正月薨去、御享年は未詳。その御病中の委曲は定家の「明月記」に盡くされてゐる。後鳥羽院の御代に於ける女流の歌人として、第一に推さるべきは、式子內親王である。題材の廣汎さ詠みロの自由さ、或は女性らしい調、哀切な情緒の表現その他いづれの點から見ても、一代の女流歌人たるの資格を備へてをられた、家集に「式子內親王家集」があり、後に「前齋院御集」一卷がある。

宮內卿　クナイキヨウ

新古今集時代の代表的女流歌人。「增鏡」のいふ所によると、右京大夫源師光の女。御鳥羽院に仕へた。幼時から和歌に長じ、繪をも嗜んだ。承元元年歿。作歌は新古今集以下の勅撰集に收められてゐる。

俊成女　シユンゼイノムスメ

藤原俊成の女、出家して越部禪尼（こしべのぜんに）と呼ばれた。實父は藤原隆信。俊成出家後、その養孫となつた。「千載集」の撰には、その女の助力があつたと傳へられてゐる。その後、璋子內親王に仕へ、緣あつて源通具に嫁し、具定を生んだ。彼女の歌才の發揮されたのは、この前後からで

あつた。安貞元年夫通具に死別し、重ねて承久の亂により、知遇を辱うしてゐた上皇方の哀れな御宿命を痛む心から、遂に寛喜年間、出家して都を去つた。建長六年寂した、享年八十餘歳と推定される。彼女の歌は、新古今調的技巧の跡が鮮かなものもないではないが、それは極めて稀で、女性的の情熱を自由に複雜に、しかも典麗に保持し、表はし盡したところ、小町などに比し、別天地を開拓したものといふことが出來る。家集を「俊成卿女集」といふ。

語釋

〔春日野のの歌〕 古今集卷一、春歌上に見える。「歌奉れと仰せられし時、詠みて奉れる」と詞書が見える。「春日野」は奈良春日神社の一の鳥居から三笠山、嫩草山に至る一帶の稱。「しろたへの」(白妙)は衣、袖、袂、紐、たすき、雪等にかゝる枕詞。「ふりはへて」はわざ〳〵の意。「ふり」に袖振るといひかけてある。一首の意は、春日野の若菜を摘みにあのやうに面白さうに、白妙の袖を振つて招き合ひつゝ、あゝわざ〳〵女達の出かけるのであらうか。「奈良時代の都人の立場になつて詠んだ。「袖ふりはへて」はこの作者の好んで用ひた辭樣で、……簡淨な特色もあるが、それよりも袖を振ることに、若菜摘に出かける婦人達のはずんだ俠な動作が現れて、この歌としては頗る面白い。又「人の」の一語で、自他の差別を立てた所に、物義みするさまが見え、序に聲調を緩和してゐる。全體一つの閑文字もなく、玲瓏として玉を延べたやうなのはさすがに貫之獨特の伎倆で、……勅命によつて上つた晴の歌たるに背かぬ風格である」(金子元臣氏)

〔秋の野をの歌〕 新古今集卷四、秋歌上に見える。上の句は、秋の野をわけゆけば、わけゆく千草の花の露にうつりつゝといふ意をつゞめたのである。「分けゆく」は、千草の花の咲亂れたる中をふみわけゆくの意。「露にうつりつゝ」 千草の花の露に染まつて。「わが衣手」は自分が着た衣の袖。一首の意は、秋の野をわけて行くと、わけゆく千草の花の露にそまつて、まあ、自分の着た衣の袖は、千草の花のにほひがすることであるよ。百花亂れ咲く野を行く人の、感動が高調に詠ひ出されてゐる。緊縮された表現、眞卒な感情の表現は、現代でも清新さを感じさせるものがある。

〔夕されば の歌〕 拾遺集卷四、冬歌に見える。「夕されば」夕方となれば。「佐保の川」は奈良の西北、佐保村にある佐保山の麓を流れる川。「ともまどはせる」は友をまよはす。その聲をきいて、はぐれた友が心をまどはすといつた意から出たもので、この場合は「友にはぐれた」と解してよい。「友まどはせる」は、かうした意味に屢々用ひられてゐる。「千鳥」はつぐみ科千鳥亞科の鳥類の總稱、河海湖沼の畔に棲み、羽色は多く上面は淡黑色で下面は白い。飛翔力强く、冬の頃水邊に群がり飛ぶ。大意は、夕方となると佐保川の川原の一面川霧が立ちこめた中を、友にはぐれた千鳥が淋しく鳴く。川霧に姿なく鳴く千鳥の淋しい聲を、友にはぐれた悲しみの鳴聲と聞いたのである。調子のとゝのつた心の深い歌で、おのづからその情趣に引入れられるやうに覺える。

〔思ひやるの歌〕 「思ひやる」は推量する。「ほど」は限度。程度。「隈」はすみ。大意は、いくら心をつくして思ひやつても、限りのないことである、それは廣い野を吹き渡る風の、隅々まで行き渡らないものゝあると同じやうなものである。人間の心の、いかに氣をつけても、思ふ相手に、どこからどこまでも行き屆く事の出來ない現實を詠んだもので、いかにも人間の心の實狀を深く見つめてゐる。沈思の中から生れた歌として深い示唆を含んだものと思ふ。

〔くもりなきの歌〕 曾丹集。百首の歌の中の夏十に見える。「大海の原」は大海の原。「しるく」ははつきりと。大意は、曇りなく晴れ渡つた太洋の上を飛ぶ鳥のその影がくつきりと見えるまでに照り晴れた夏ではある。客觀的な寫生の歌である。景象の大きさ、印象の鮮かさは賞するにたる。

〔さま〳〵にの歌〕 千載集卷四、秋歌上に見える、「堀川院の御時百首の歌奉りける時よめる」と詞書がある。「心ぞとまる」は心が引付けられることであるよ。「宮城野」は奥州仙臺の東部にある一帶の原。萩の名所として知られる。大意は、宮城野の原に咲くいろ〳〵の花、鳴くいろ〳〵の蟲、それ等一つ一つにいろ〳〵の氣持で心が引付けられる事ではあるよ。內容としては、何の奇もなく、變もないものであるが、表現はいかにも面白い。「花のいろ〳〵云々」の下の句の名詞止にした、繰返しを重ねて用ひた技巧、よく平凡な詩想に、複雜性に與へて、ひきしめて結んでゐる。調子を

賞すべき歌。

〔夕さればの歌〕　千載集卷四、秋歌上に見える。「うづら」（鶉）は鶉鷄類に屬する鳥で形は牝鷄に似て首が小さく尾は短い。全身茶褐色で黑白の斑點がある。多く原野に棲み、肉は美味である。「深草の里」は今の山城國紀伊郡深草村。京都、伏見間の街道にあたる。一首の意は、夕暮方に深草の里に立つて見ると、野邊には身にしむやうな秋風が吹いて淋しげであるのに、叢の中には物悲しい鶉の鳴聲さへも聞えて、一層のあはれを感ずるといふのである。洛外の秋、そゞろに夕べを催した佗しい深草の里の暮色が、水のやうに冷たい風の肌ざはりと、旅愁を湧かせる鶉のはかなげな鳴聲とに一入あはれを誘ふ風情が一氣に溢みなく歌ひ出されてゐると思ふ。すわりのいゝ、しつとりと落着いた、濁つたところのない、あやふやなところのない、――まさしく俊成の歌の代表作の一つといふべきであらう。

〔ひぐらしのの歌〕　新後撰集卷三、夏歌。「千五百番歌合に」の詞書がある。大意は、ひぐらしが、かなかなかなと鳴いてゐる所に、夕方の風までが吹いて來て落ちかけた夕日が涼しく見られる、その下に岡の上に松が生えてゐる、ひぐらしの音はそこから流れて來るのだ――それが一層夕方の涼しさを感じさせてゐる。落ちかゝる日の下の岡の松、そこからひぐらしの聲が流れ、しかも、時々風が吹いて、その松がゆれる。それを見てゐると、沈みかけた日が一層涼しく思はれるといふのである。相當に手のこんだ表現をとつてゐる。その引きしまつた表現は、よく內容の「すゞしさ」と相待つて、景情身にしむものあるを思はせられる。

〔かすみ立つの歌〕　新古今集卷一に見え、「攝政太政大臣の家の百首の歌合に春曙といふ心をよみ侍りける」と詞書がある。「霞立つ末の」の「末の」は「末の松山」とかゝる。「末の松山」は今宮城縣宮城郡岩切附近にある山ともいふ、或は多賀城村とも、また岩手縣二戸郡一戸町の附近とも、いろ〳〵說がある。「よこぐも」は横になびいた雲。大意は、立つ霞の末に、末の松山がかすかに見えて、沖の方には横雲が波に分れてゆく。この歌は詞書のやうに、實景を詠んだものではなく、全く想像の歌である。が、霞の末にかすかに見える末の松山、明けると共に、浪と雲とがはつきりと分れてくる風情、そこに作者の表さうとした「春曙」の心は

十分に汲みとれると思ふ。しかし、結局は作りものたるを免れないのは、かうした場合の歌として、また止むを得ない弊といはねばなるまい。

〔見渡せばの歌〕　新古今集卷四、秋歌上に、「西行法師すゝめて百首の歌よませ侍りけるに」と詞書がある。古來、西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」と寂蓮法師の「さびしさはその色としもなかりけり槇立つ山の秋の夕暮」と共に三夕の歌としてあまねく知られた定家の代表的な名歌である。大意は、ずうつと見渡した所、花も紅葉もない、浦のとまぶきの漁家は秋の夕暮をたゞ寂しく立つてゐるのみだ、そこに住む人のわびしい氣持も思ひやられる。

〔見る人もなきの歌〕　古今集卷一、春歌上に、「亭子院の歌合の時よめる」と詞書がある。亭子院は宇多天皇の御事である。一首の大意は「どうせ見はやす人もない山里のこの櫻は、いつそよそ外の櫻が悉く散つてしまうその後にサ咲かうものを、さすれば外に花もない故、否でも遠方からもわざ〳〵人が見に來て少しは賞翫もされよう」といふのである。「山家の花の見る人もなくて徒に咲き散る事を惜んで、かうせよと櫻に對つて敎へた口氣である。結句咲かましの語調がいかにも弱く力なげなのに、衰へきつたその現境があり〳〵と見え、就いては聊かでも優つた方を希ふ意が籠つてなまじひに早く咲いてもてはやされぬよりは、面白い事ではないか、人も來て見ようと思へば、後れて咲いたがまだましだといふ意に聞える。そも〳〵伊勢は宇多帝の御寵愛を承けて、寬平の間更衣となり、遂に皇子を產み奉つて御息所とも稱されたのを、後には新人の爲に恩寵を奪はれたのだらう。延喜の御代の頃には大に零落して窮乏した趣は、今昔物語にも見え、又この集の雜部下にも「家を賣りて詠める」と詞書があつて「飛鳥川淵にもあらぬわが宿もせにかはりゆく物にぞありける」の一詠があるのを思ひ合はせると、自然わが身の上の事をば下に歎いて、外のお后方のお寵愛の衰へた時分に宮仕すればよかつたのにと、悔恨の餘り、こんな歌も出來たものであらう。」（金子元臣氏）

〔みわたせばの歌〕　後拾遺集卷三、夏に、「正子內親王の繪合し侍りけるにかねのさうじにかき侍りける」と詞書がある。「玉川の里」の玉川には六つある。こゝ

はその何れか判明しないが、恐らくは京都附近の井手の玉川か、攝津の三島玉川、或は近江の野路玉川かであらう。その何れであらうと、歌の情趣には變りない。卯の花の一面に白く咲いた玉川の里、それをずうつと見渡すと、まるでしがらみにうちあたつた流が、白く波立つてゐるやうに見えるといふのである。「しがらみ」は水流をせく爲に杙を打ちならべて、これに竹木を横たへたもの。卯の花の白く咲きつゞいたのを、白波と見たてたので、大した新しみはないが、「波のしがらみかけてけり」といふ表現は、さすがに緊縮された、老巧さを見せてゐるといふべきであらう。

[咲けば散るの歌] 拾遺集卷一、春にあり、「子にまかりおくれて侍りける頃東山にこもりて」と詞書がある。咲けば散る事が悲しまれ、咲かぬうちはまたいつ咲くかとこひしく思はれる山櫻の花に對して、始終思ひつめてゐる、そのやうに亡き子の上に對しても、死後の事やら、また若し生きてをつたならばといふやうに、あゝかうと思ひつゞけて、悲しい思から逃れる事が出來ないといつた意。子に死別した母親の悲痛な氣持が、櫻の花の上に托して、靜かに、詠はれてゐる。

譬喩を以てしただけに、烈しい感情が直接に讀者に迫るものがないが、その代り、しみ〴〵と人の心に奥深くしみこむ悲哀を與へてゐる。

[夏の夜はの歌] 「和泉式部集」卷一、夏所載。「まきの戸」は槙材で作つた戸。「ひとだのめ」は人に頼もしく思はすること。人にたのもしく思はするばかりで、その効果のないこと。「くひな」は水鶏。涉禽類の鳥で六月頃、雄の鳴く聲は、恰も戸を叩くのに似てゐる。一首の意は、夏の夜、まきの戸を或は門を、ほと〳〵とたゝくので、さては思ふ人のおとづれて來たのかと思ふと、ではなくて、それはくひなの鳴くのであつた、何て人だのめなくひなであらうか。ほと〳〵と門叩く音に、さてはと浮立つ氣持、それがくゐなの鳴く音と知つた時の失望、さうした氣持が「ひとだのめなるくひなりけり」にいみじく表現されてゐる。くひなの鳴聲に、人來と感じるといふのは、必ずしも作者一人ではなく、和歌一般に通じた感じであるが、本歌はよくさうした類型的な感じを、實感として生かしてゐる。さすがに情熱の詩人和泉式部の人となりや、才藻が遺憾なく現れてゐる。

[こえはてば歌] 後拾遺集卷九、羈旅に見え、「七月ついたち頃に尾張に下りけるに夕すゞみに關山をこゆとてしばし車をとゞめて休み侍りてよみ侍りける」と詞書がある。「關」は逢坂の關で、こゝを越えると、都とは全く距たつた氣持になるのが、當時の人々一般であつた。一首の意はこの逢坂の關を越えてしまつたならば、もう都も遠くなることであらう、都との名殘を惜しむために、しばらくこの關の夕風にすゞみませうといふので、夕風に涼をとる事によつて、都との名殘を惜しまうといふのである。壺天のうちに全生涯を置いた當時の上臈達にとつて、都を遠く離れるといふ事は、どんなに心さびしいことであつたらうか、それは現代の人々のとても想像出來ないものであつた。「都も遠くなりぬべし」は、さうした氣持の現れとして、當時の讀者の心を打つことが非常なものであつたらう。實感のしみ〴〵とにじみ出た、聲調のなだらかな歌として推すべきであらう。

[さらでだにの歌] 後拾遺集卷四、秋上に「村上の御時八月はかりうへ久しう渡らせたまはでしのびて渡らせ給ひけるをしらずかほにて琴ひき侍りける」と詞書がある。「あやしき程」は、「あやしいと思はればかり」、「あやし」は心に何となく異常を感じさせるやうな狀態をいふ。こゝは妙に物さびしいといつた氣持であらう。「荻」は禾本科の多年生草木。葦に似てもつと優しい格恰をしてゐる。一首の意は、さうでなくてさへものさびしい氣持に耐へないやうな秋の夕暮時分にかてて加へて、荻を吹く風が、さら〳〵とその葉をゆすぶる音が聞えて來て、一層さびしい氣持をかき立てるのである。このさびしい氣持には、帝が「久しく渡らせたまはぬ」ためなのである。優しい女性の氣持が劃合に強い表現をとつて、しつかりと歌はれてゐる。新古今集の調子が感じられる。

[山ふかみの歌] 「百首の歌奉りし時」と詞書があり、新古今集卷一、春歌上に見える。「山ふかみ」は山が深いので。「松の戸」は、松の生えしげる中の家の意。「雪の玉水」は雪どけのしづく。一首の大意は、山がふかいので、こゝには春が來たこともしらぬらしく、松にかこまれた家の軒には、屋根の雪がとけてぽつり〳〵と間遠にしづくがたれてゐることである。春なれば普通の所には雪などは見られぬであらうのに、こゝには

雪がある。そしてその雪も、まだ、なか〳〵解け消える樣子もなく、とける水がしづくとなつておちるそれまでが、いかにも絶え〳〵としてゐるといふので、ここが、いかに奥山であるかを示してゐる。然し、これは、いかにも說明的で、實感味に乏しい。幽玄味を取つたものではあらうが、机上の作たるを免れない。但し、その表現の巧みさは、味はふべきであらう。

［花さそふの歌］　新古今集卷二、春歌下に、「五十首の歌奉りし中に湖上花を」とある。「比良の山」は近江琵琶湖の南西岸にあり、暮雪の景を以て聞えてゐる。一首の意は花をさそふやうに比良から吹き來る山風がはら〳〵と花を散らして吹いて來た、散つた一面の花が湖上に浮かんで、その上を漕ぎ行く船の行つた跡がそれとはつきり見えるまでに、散つてゐる。下句を上に、上の句を下に、顚倒してみると意味がはつきりする。比良の山風に吹き散る落花を、稍大げさに詠んだもので、印象的で、實景眼前に躍如たるものがある。「……吹きにけり」と上の句切れにした所、そこに時間的の變化が感じられて、景を活動的に生かしてゐる手際を味はふべきであらう。

［風かよふの歌］　新古今集、卷二、春歌下に「千五百番歌合に」の詞書がある。一首の大意は、そよ〳〵と風の吹いて來るのにふと目がさめた、その風と共に花の香が吹きおくられて來て、袖のあたりが、ほんのりと匂ふやうな氣がする、うつとりとその匂にひたりながら、まださめきらぬ春の夜の夢を、枕から離れずになつかしく思ひ返してゐるといふのであらう。「かをる」は「袖の花の香に」と共に、「はるの夜のゆめ」にもかゝり、以て、その夢のどんなものかを、それとなく感じさせてゐる。非常に入りくんだ表現、複雜な內容の歌で、當時の宮廷女流の優にやさしい生活の一面がなつかしくもしのばれる。

［參考］

◇古今から新古今へ――思潮的に觀察した尾上八郎博士の說を名著「古今と新古今」から引く。

「平安朝時代の歌の完成したのは平安朝の第二期延喜時代である。すなはち古今和歌集を以て代表せらるべき時代である。貫之、躬恒の活躍した時代である、しかして此時代に於ける歌は、前の奈良朝時代の歌の舊套を脫して一の新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒を巧みに結合

した叙情詩である。これで形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこれの外に出るものはない。しかし第三期寬弘時代に於いては、この風が少し飽かれて多少の新傾向が出て來た。從來の叙情的傾向に對して叙景的趣味を加味して來、更にまた幾分か排技巧の傾向を生じた。が前期の權威は盛んなもので、猶その範疇を脫することを許さない。と云つても新進の氣は到底制せられない。古典的な者が漸次現代的にならうとして第四期になると一種の新派を生じて來た。すなはち金葉和歌集を選んだ源俊頼はそれである。舊套中にありながら、新意を添へ、俗語をも用ゐて一種の新味を加へた。が古典的な反對黨は藤原基俊に依つて代表せられてこれに抗爭した。この兩派抗爭の間に、又一の折衷派とも云ふべき詞花和歌集を選んだ藤原顯輔の一派も生じて、歌界は餘程複雜になつた。

然し要するに延喜を理想とするものと、現代を主とするものとの爭である。亂が極まれば英雄が出る。時代は遂に藤原俊成を出した。俊成は基俊に學び、然も俊頼を慕ひ、また顯輔の傾向をも考へ、よく三派を知つてこれを併合した。千載和歌集はこれによつて成つた者である。であるから、これには三派併合の結果として成つた典雅がある、清新がある。殊にその間に辭句の洗練の結果によつて成つた趣味の多い語句即ち後に秀句と云ふ者がある。如上の傾向が俊成の子定家が覇を唱へた鎌倉幕府時代の初期に多くの技巧的な含蓄の深い歌となつて現はれた。これらを集めた者が新古今和歌集である。鎌倉幕府時代は、既に公卿道の時代でなく武士道のそれであるけれども、猶公卿その人は依然たる公卿である。政權が鎌倉幕府に歸してから、堂上は非常に閑暇である。公卿道の粹はいよ〳〵發揮せられて、新古今和歌集は古今を綜合し、千載に光被する意氣を以て選ばれた。古今和歌集は從來の歌人には經典の如く崇拜せられてゐる。それに繼いで新の字を冠して出でしめたのは、「これはこれ新經典である」と誇稱したと同樣である。しかも、これまた後世に多大の影響を及ぼし、舊來の歌の發達をこゝに留めて居る。當時の歌人定家及び家隆、雅經等の意氣は景仰すべきでは無からうか。故に平安朝に新旗幟を樹立した功に於いて、典型を千載に殘した功に於いて、吾人は古今和歌集を尊ばねばならぬ。貫之躬恒を重んじなければならぬと共に、又紛亂を平定した後を受けて更に典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣に於いて、

新古今和歌集を崇拜せねばならぬ。而して定家、家隆等を尊敬せねばならぬ。

〔古今集と新古今集と〕 ◇古今と新古今と――兩集の特質について金子彦二郎、河津啓太郎共著「新體國文學史要」から引く。

「古今集二十卷は醍醐帝の勅命により、紀貫之、紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人が萬葉集以後の名歌を集めたもので、延喜五年に成つた。淳仁帝より醍醐帝に至る約百五十年間に亘り千百餘首を收む。之を春夏秋冬賀別離戀哀傷等十二部に分類してゐるが其中四季と戀の歌が最も多い。萬葉集の撰集以來當時まで凡百五十年幾分交錯の點もあるが大體に於ては彼は奈良朝、之は平安朝の歌風を代表する。今兩者の差異を比較してみる(一)内容に於ては、萬葉風は男性的剛健であり古今風は女性的纖細である。前者は眞摯率直で思想感情をさながらに現はし、後者は技巧的で比較的純眞でない。前者は人生的であり、後者は藝術的である。前者は直覺的生一本であり、後者は思索的回避的である。前者には儒佛の影響が少なくて純國風の色が強いが、後者には儒佛の色が稍々濃くて國家的な色彩が薄い。(二)形式に於いて、前者は長歌が多いが、後者は長歌五首、旋頭歌四首の外すべて短歌である。前者は五七調であるが、後者は七五調である。前者は措辭粗大幾分拮倔であるが、後者は平滑である。前者の修辭は比較的單純で自然的に使用されてあるが、後者は複雜で特に緣語、掛言葉の技巧が多い。

新古今集二十卷、平安朝末朝から源平爭亂の間にも歌道は衰へず俊成の勅撰千載集が出來たのであるが、後鳥羽・土御門・順德の諸帝は何れも歌道に御堪能であり、特に後鳥羽帝は非常に御熱心であらせられた。當時の歌人には俊成の子定家を始め、家隆・良經・雅經・有家・源通具僧侶は、寂蓮・慈圓、女流では式子内親王・宮内卿・俊成の女等著名な人が多い。其の氣運に釀成されて出來たのが新古今である。本書は後鳥羽上皇の勅命により定家・家隆・有家・雅經・通具等が之を撰した。古今集以來の歌風に對し、内容措辭に幾らか新味を出して居た千載集の傾向を更に深めて、かの古今集と相對峙するに至つたのが此の集である。それは内容に於て多く客觀的態度を採り、華麗の中にも意義深く、典雅にして幽玄閑寂な趣を現はさうと務め、形式に於て省略法を用ひる結果名詞止めが多くなり、枕詞・序詞を用ひず、掛詞・緣語の類又は

隱喩を使用する傾向は、當時の散文と相通ずる。只複雜味を持たせようとする結果、勢ひ難解に陷り、又は本歌取りと稱して、昔の歌を新形式に詠み改めるといふ一種の遊戯の爲に、概念的になつたものなどのあるのが缺點である。

◇古今以後十一代集の表

	(集名)	(卷數)	(勅宣)	(年代)	(撰者)	(歌數)
一	古今	二〇	醍醐	延喜五年	紀貫之等五人	一一一一
二	後撰	二〇	村上	康保四年	大中臣能宣等五人	一四二六
三	拾遺	二〇	花山院	長德頃	花山帝(一説公任)	一三五一
四	後拾遺	二〇	白河	應德三年	藤原通俊	一二二〇
五	金葉	一〇	白河院	大治二年	源俊頼	六五〇
六	詞花	一〇	崇德院	天養元年	藤原顯輔	四一一
七	千載	一〇	後白河	文治三年	藤原俊成	一二七七
八	新古今	二〇	後鳥羽院	元久二年	後鳥羽帝定家以下四人	一九七九
九	新勅撰	二〇	後堀河	天福二年	定家	一三七六
十	續後撰	二〇	後嵯峨	建長三年	爲家	一三六八
十一	續古今	二〇	同	文永二年	爲家等四人	一九二五

八　百蟲譜

横井也有
（鶉衣）

扱方　芭蕉の「奥の細道」、許六の「風俗文選」、支考の「本朝文鑑」等を先驅とする俳文は、安永、天明の交に出た半掃庵横井也有の「鶉衣」に於て大成された。——といふのは國文學常識である。也有は蕪村より少し先輩だが、先づほゞ同時代の人といふことが出來る。現に、この二人の歿年は共に天明三年であつて、前者は六月十六日に、後者は十月二十四日に白玉樓中の人となつてゐるのである。そして、蕪村は、いふまでもなく天明調を創めた人である。が、也有は——何も俳諧上の革命は起しはしなかつた。「易水にねぶか流るゝ寒さかな」の句はまさしく「蛙とびこむ水の音」の境地とは別な乾坤である。けれども、「拾うたを嗅げば坊主の頭巾かな」の句柄には、蕉風勃興以前の「歌申し上ぐる蛙かな」といつた庶の句とそんなに變つた所は見出せない。しかも、俳文の方になると、也有は天才そのものであつた。彼は俳句を作るためといふよりも俳文を草するために、——俳文を國文學史上に燦然たる一領域を占めさせるためにこの世に生れて來たかのやうな觀のある人である。蕪村も俳文を作らないことはなかつた——いや、「春風馬堤曲」の如き、俳文としては特殊の樣式を創造してもゐる。が、その量に於て、又その質に於て、也有の足許にも寄りつけまい。いや、蕪村ばかりではない。芭蕉にしても、許六にしても、支考にしても、俳文に於てだけは也有の前に一籌を輸さないわけには行くまい。本課には「鶉衣」の中の定評ある名篇であり、俳文の代表的佳章とされてゐる例の「百蟲譜」を採つた。もちろん現代ではもう古典（クラシック）の中に入つてゐるものではあるが、その圓轉滑脱の調と、氣品の高い諷刺諧謔とは、我々日本人の本質に根ざしてゐるところのものである。本課を讀んで行くうち自ら一種の懐かしさ——父母の聲を聞くやうなしみじみした懐かしさが胸ににじみ出て來たら、それこそ俳諧の本質に徹する最初の緒をつかみ得たものといふべきであらうと思ふ。

教授

作者

横井也有　ヨコヰヤイウ

俳人。尾張名古屋の人で、幼名は辰之丞、後に市郎平といひ、長じて通稱を孫右衛門といふ、名は時般（ときつ）、字は伯懐、晩年隱居して名を並明、字を順察と改めた。野有、遯窩、暮水、半掃庵、蘿隱、知雨亭、紫紅、永言齋、蘆狂庵、半谷居、蜍翁、紫隱里、蓼花庵、不恙庵などの別號がある。代々尾州公に仕へてその重臣であつた。儒學は藩儒小出洞齋に學び、和歌、狂歌をも能くし、また武藝、繪畫、亂舞にも通じてゐた。その俳諧は一說に五竹坊に學んだといひ、また太田巴靜に學んだともいふけれど、祖父（野雙）、父（一水）共に俳を知つた人であつた事より察すると、これらの薫化と自分の努力とで道を開いたといつた方が事實に近いであらう。晩年致仕して隱宅を名古屋の郊外前津の里に營んだが、その時年五十四歳であつた。也有の名をして不朽に傳へしめるものはその著「鶉衣」である。それは彼の俳文を集めたもので、人の推賞して措かないところである。彼は洒脫である一面には確乎たる志氣を具へ、かの太宰春臺が、「四十六士論」を著して、赤穗義士を惡評すると、彼は「野夫談」を著して、大いにこれを辯護した。著書には、「鶉衣」「野夫談」の外、「蘿葉集」「小皮籠」「蘿の落葉」「峨洋篇」「美南武須比」「白活傳難陳」「蘿隱篇」「蟻塚集」「千句集」「五百句集」などがある。天明三年六月、年八十二で歿した。

引用書

鶉衣——横井也有の俳文集。博文館「俳諧文庫」及び「有朋堂文庫」に收めてある。註解には佐々政一著「鶉衣評釋」があるが武笠三の「鶉衣註釋」の方が全部に亘つて居る。本課の「百蟲譜」は「鶉衣」前篇續に出てゐる。

語釋

〔百蟲譜（ひやくちゆうのふ）〕　いろ〳〵な蟲の種類を書きあつめて、一一その形貌や氣質や、これに伴なふ聯想を、それからそれへと書きつゞけた俳文。「譜」は系譜の譜で、ここは百蟲の眷族をならべてその系譜を書きあらはした意である。「辭源」に「譜は籍錄なり。凡そ人物を籍錄しその順序、詳序を詳列するもの、皆これを譜といふ。家譜、年譜、食譜、棋譜の如し。」

〔蝶の花に云々〕　蝶々が野邊の草花に舞ひ飛んでゐるのは優しいものの最上であらう。ほんにうひ〳〵しい、かはいゝものだとの意。

〔それも〕　その優しい蝶も。

〔啼く音の愛なければ云々〕 かはいゝ啼聲も持たぬので（鈴蟲やきり〳〵すのやうに）籠の中に捕へられて苦しむ身でないことは、なほ一層結構な事だ。宗因の句に「もし啼かば蝶々籠の苦を受けん」とある。「愛なし」はかはいらしげなし、面白みなし。「めでたし」は愛づべくあり、愛すべし、賞すべし、又、非常に見事であると褒める意。

〔莊周が夢も云々〕 莊周が夢も、（蝶が籠に入れられる苦しみがなく自由の身であるので）この蝶にかこつけたのであらう。莊周は支那周代の蒙の人。名は周。孟子と同時代。博學多識にしてその學は老子を祖述した。楚の威王がその賢を聞き、召して相としようとしたが、應じなかつた。「莊子」三十三篇を著した。莊子齊物論篇に「昔者、莊周夢爲二胡蝶一、遽々然胡蝶也。自二喩適一志與不レ知レ周也。俄然覺、則栩々然周也。不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上」とある。

〔遠く聞ゆるはよし〕 蛙のなく音の遠くから聞えるのは近く聞くよりも趣がある。

〔翁〕 芭蕉翁。元祿時代の俳人。正風の祖。

〔目覺したれば〕 芭蕉翁が、池に飛びこんだ蛙の音に天地の閑寂、人生の幽玄を感じ、始めてその俳諧に正風（蕉風）の眼が開かれたから。

〔更にも誇り難し〕 少しでも惡口はいはれない。

〔やゝ日盛に云々〕 だん〳〵日が經つて、日光の烈しい夏の眞晝頃に鳴きしきるのは、その鳴く音を聞いただけでも、汗が絞り出るやうな暑い心がする。「稍」はだん〳〵、やう〳〵の意。

〔初蟬〕 蟬の初聲。俳句の一つの季題になつてゐる。孟遠の句に「初蟬や梅雨の晴れ行く朝嵐」

〔このものの上〕 この蟬の身の上については。

〔景物の最上〕 四季折々の風物の中の最もすぐれたもの。

〔すだく〕 集る、群るの意。轉じて蟲などの多く集つてかまびすしく鳴く意にも用ひるが、ここは前者の意。

〔五月の闇は云々〕 五月闇は全くこの螢をながめるためにつくられてあるのかと思はれる程、闇夜の螢のながめはいゝ。五月闇は五月雨の頃の空のどんよりと曇つて、常よりも深い夜の闇。

〔貧の學者に云々〕 晉の車胤が貧困で燈火をともすことが出來ず、螢を集めて囊に入れ、その光によつて

勉強したといふ故事は、「晉書列傳」「蒙求」等に見えてゐる。

〔このものの本意には云々〕 この螢の本望ではあるまい——迷惑至極なことであらう。

〔歌に螢火と詠ませざるは〕 和歌の方で「螢火」といふ語を（和歌に）用ひることを禁じてあるのは、この他に「落葉する」「青あらし」「すゝ風」などの語は歌に用ひることを禁じられてゐる。

〔俳諧〕 もと、たはむれ、おどけの意（下學集に戲義と稱してある）であつたが、轉じて俳諧歌——和歌の一體で、言葉遣や意想のおどけたもの——の略となり連歌の中で諧謔を弄したもの、俳諧の連歌——轉じて單に俳諧といふ——をいふやうになつた。

〔暑さは晝の梢に云々〕 ひぐらしの鳴くのは、晝の暑さもすぎて、夕方涼しくなつて露のおくころであるの意。

〔つく〳〵ぼふし〕 蛁蟟。蟬の一種。最も小形で、長さ一寸ばかりの小蟬。體灰黑色。黃綠の斑紋を有する、秋の頃鳴く、その鳴聲によつてこの名がある。鳴聲はォ、シィツク〳〵と聞える。漱石の句に「鳴き立ててつくつくぼふし死ぬる日ぞ」

〔あはれは〕 この蟬に對する傳說のあはれな點はの意。「哀」は廣く人の情緒を動かすことを意味する。これを同情悲哀の感のみに限つたのは、「をかし」を可笑に限つたのと同じく、ずつと後世のことである。しかし、本文の場合にあつては、どうも哀の意に用ひてあるらしい。

〔蜀魂〕 支那の傳說に、古、蜀の望帝が化して鳥になつたとあるので、この鳥を蜀魂といふ。「裳中記」に「蜀の先、人皇の際に始れり。黃帝の子昌意。蜀人の女を娶り、帝嚳を生む。後、その支庶を蜀に封ず。始めて王と稱す。帝自ら蠶叢と稱す。次は伯灌、次は魚鳧。後王杜宇といひ、望帝と號す。荊人鼈靈、相となる。帝自ら以爲らく、德、鼈靈に如かずと。位を禪りて逃げ去り、化して子規となる。蜀人その鳴くを聞きて曰く、これわが帝魂なりと。」

〔雲に叫ぶ〕 雲の上を飛びながら啼く。

〔世の爲に終り〕 世の中のために終りといふので、蠶が產絲のために生存してゐることをいつたのである。

〔火取蟲〕 夏夜燈火に集る蛾。燈蛾。闌更の句に「筆とめて打拂ひけり火取蟲」

〔たが爲に云々〕 誰のために火中に投じて身を焦して死ぬのか――まことに合點のゆかぬことではある。「身を焦す」には心を苦しめ惱ます。いはゆる思ひこがれる意があり、それに掛けていつたのである。

〔蜉蝣〕 擬脈翅類の昆蟲。薄い二雙の翅があり、夏秋の交、多く水邊に飛び、數時間で產卵して死ぬ。尤も幼蟲は二三年を經て成蟲に羽化するのだが。なほ「かげろふ」は蜻蛉の古稱でもあり、その飛ぶさまが、「かげろふ」(陽炎)のひらめくのに似てゐるからこの名がある。

〔はかなきためしに云々〕 蜉蝣の一期の短いことを人生のはかない例に引く意。蘇東坡の赤壁賦に「寄二蜉蝣於天地一。」とあり白樂天詩に「長生無二得者一、擧レ世如二蜉蝣一。」とあるが、なほ「徒然草」にも「かげろふの夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。」と見えてゐる。

〔たで食ふ蟲〕 蓼の葉に棲み、こがね蟲(後出)の一種で、小さく黑く、その性、辛烈なものを好んで甘いものを好まない。蓼は水邊に生ずる草。春二三月頃、苗を生じ、夏になつて繁茂し、秋、枝ごとに長い穗を出し、白い花を開く。夏、その葉を採つて食べることが出來る。蕪村の句に「砂川や或は蓼を流れ越す」

〔物好の誇となれり〕 風變りのものを好む人をそしる譬になつてゐる。原文には「ふもの好」とある。「ふもの好」は不物好で、惡物くひの意。諺に「蓼食ふ蟲もすきずき。」とあり、白居易の詩にも「何異食蓼蟲、不レ知二苦是苦一。」とある。

〔玉蟲は優しく〕 玉蟲といふ名は――の意であらう。玉蟲は山中の榎などに多く生ずる甲蟲。長さ一寸ばかり、體は楕圓形で六足。背の甲に碧と綠の縱線があつて、腹は綠。全身から五彩の光を放ち、植物の葉を食つて生きてゐる。昔、婦女がこの蟲を收めて置けば、衣類が多くなるといつて、匣中に珍藏したものである。白芹の句に「玉蟲や伽羅とも朽ちぬ香包み」

〔こがね蟲〕 黃金蟲。玉蟲の類。體は金綠色で頭に觸角がある。長さ六七分、幼蟲は白くヂムシといつて農作物の根を害する。許六の句に「御魂舍の幾代ふりてかこがね蟲」

〔たゞ水にあるべきものゝ〕 貝殼をもつてゐる蝸牛は、どこまでも水中に棲んでゐるべきものであるのに。貝類はみんな水中に棲息してゐるから、かういつたのである。

〔家は持ちたれども云々〕 蝸牛は家を持つてはゐるが、どこへ行くにもそれを負つて歩くといふ厄介さ、――面倒臭さは。

〔水雲の安きに似ず〕 行脚僧が山野のどこにでも旅寢する氣樂な境遇とは大いにちがふ。水雲は行脚僧をいふ。つまり行雲流水のやうに所を定めずに方々をめぐり行く義である。「安き」は氣樂さ、安樂さ、氣安さ、のんきさ。

〔駕籠に乘りて云々〕 原、吉原のあたりは富士の眞正面で、富士を仰ぐには最も適してゐる所だが、そこを駕籠に乘つて富士を眺めて行く旅人に似てゐるといふので、――つまり駕籠は前進して行くけれども、乘客は(横の眞正面に見える)富士の絕景に見とれてゐるから、ちやうど駕が横を向きながら前進するのにたとへた、いや、蟹をさうした旅人にたとへたのである。

〔松蟲のその木にも云々〕 松蟲は松の木に住むこともないのにどうして松に因んで、松蟲などと名をつけたのであらうか。

〔毛生ひむくつけき蟲〕 松毛蟲のこと。鱗翅類に屬する蝶蛾類の仔蟲の稱で、松の害蟲である。「むくつけき」はきたなげな、氣味の惡い、醜くおそろしげな。

〔在所〕 ここは田舍、在鄕の意。

〔後生を願ひ〕 佛に歸依して極樂往生を願つて、常に善い行をし。

〔殺生を事とす〕 いきものを殺すことを常習として無慈悲な――後生はきつと地獄に墜ちるやうな惡行を始終やつてゐる。

〔夜寒を敎へ〕 だん〳〵夜が冷えて寒くなつてくるから、早く寒さを防ぐ準備をせよと敎へてくれるやうに思はれ。夜寒は秋の夜、寒氣の身にしむること。但し「夜を寒み」「寒き夜」などといへば冬の夜の寒さになる。

〔藻にすむ蟲はわれから〕 「われから」は「和訓栞」に「海藻に生じて藻に似たる蟲。體八寸餘。至つて細く、手足長く色も靑く美しき蟲なり。藻につきたる小貝といふは後世の事なるべし。」とある。

「われからと唯身の上を云々」　自分自身で、たゞ自身の身の上を歎いてゐるやうであるのに。「われから」には蟲の「われから」と、「我から」（自分から）の意とが掛けてある。

「蓑蟲のちゝよと呼ぶは」　「われから」といふ蟲とちがつて、「父よ。」と鳴いて父を呼んでゐるのは。蓑蟲は鱗翅類に屬する昆蟲の幼蟲。腹脚を有せず、木片で巣を作つて棲み、これを運びつゝ移動する。「枕草子」「蟲は」の條に蓑蟲を敍して、「八月ばかりになれば、ちゝよ〳〵とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。」とある。

「いと優しげなり」　非常におとなしく、しとやかである。優美の意ではない。

「蚊は憎むべき限りながら」　蚊は極めて憎むべきものであるが。――一番憎らしいものだが。

「卯月」　陰暦四月の異稱。卯の花月の略。もちろん卯の花の咲く頃だからいふ。

「端居珍しきゆふべ」　端居は緣の端近く居ること。初夏の候で、まだ緣端などに出て夕涼みするのも珍しい頃。

「ほのかに云々」　生れ落ちたばかりのうぶ〳〵しい鳴聲をかすかに聞いたのは趣がある。「聞きたらん」の次に「をかし」が省いてある。

「長月」　陰暦九月の異稱。

「力なく殘りたる云々」　もう夜寒も近く、死に近づいた蚊が弱りきつて鳴く音は、淋しげに哀愁を感じさせることがないでもないの意。

「七賢の夜話云々」　七賢とは支那の晉時代の竹林の七賢をいふ。この七人が共に豪放不羈で意氣相投合し、竹林に入つて酒を飲み、淸談に耽つて世を罵倒したので、詩人が呼んで七賢といつたのである。で、この七賢の夜話には、定めて藪蚊の襲擊が激しくて、これを拂ふ爲にいかばかり團扇の忙しかつたことであつたらうかといふのだ。

鑑賞批評　森川許六（芭蕉の門人）に「百花譜」といふのがある。本課の「百蟲譜」はそれに擬し、なほその上に「枕草子」の「蟲は」の條に則とつて書かれたものであることは、誰しもすぐ感づくことだらう。也有の俳句には、あまりかんばしい作のないことは、先にもちよつといつたが、彼はどうも自然の懷に沈潛する本格的な「俳人」ではなく、どこか「名人」の風格を備へた文藝上の「才物」であつたらしい。「くさめして見失うたる雲雀かな」「足と鍬三本洗ふ田打かな」「物まうの聲に物着る暑さかな」――かうした句に表れてゐる也有の顏は、「ひいと啼く」夜の鹿の尻聲に耳を澄まして聽入る顏や、春雨に「小磯の小貝」のぬれるのに見ほれる顏とは、同一の顏ではない。もつと輕快なすばしこさうな印象を與へる顏である。牛の腹の下をついとくゞつて、電信線の上にかろ〳〵とまり、ピーチピーチとうれしがる――あの初夏の燕のやうな趣をもつた風格である。だからこそ、俳句に於てよりも俳文に於て見事成功した。俳句によつてよりも俳文によつて、その藝術的心境の全幅を吐露し得た。そして、それが畢竟俳句と俳文との――藝術分野上の微妙な差を示してゐるのではないだらうか。もちろん俳句と俳文とは、同じ俳句の風味を、一は詩の形式により、一は散文の形式によつて表したものだといふ事も一應は首肯出來る。が、我々が　少くとも行きつく所まで行きついた、つまり大成された形に於て見る俳文は、俳句とは、微妙な差のあるもののやうな心地がせられる。卽ち俳文には、俳句の持味以外の或要素を必要とし

そして、その要素を本質的に體得してゐる人が俳文の名家となつてゐるやうな風に考へられるのである。その要素とは何か？――といへばそれは風格的ににじみ出てゐる輕快洒脫な諧謔味である。俳句は、まつこうから取つ組むことも出來る――いや取り組まなければならない藝術である。が、俳文は飽くまで斜視を必要とし、物象を裏からのぞくことを必要とする。しかも、俳諧の味はやはり心境の基調をなしてゐなければならないのである。そして、この點に於て、橫井也有はまことに天成の俳文家であつた。で、その也有の俳文だが、これに就いては三浦圭三氏の「綜合國文學概說」にその特徵を抽出して擧げてあるから、暫くそれを借りて置くことにしたい。卽ち「一、故事の引用の多いこと。二、その引用は大抵潛引法ともいふべきもので、『昔〇〇氏の曰く云々』とはしないで、平氣で本文に作りこんで、キヨロリと澄ました趣味がある。三、主想となつてゐるものは閑適の情操である。利害得失の外に出て、死生浮沈の問題には觸れてゐない。四、揶揄と皮肉に富んでゐる。江戸つ兒の手きびしいアイロニーもなく、さりとて上方の理責めでニタ〳〵笑はす趣もないが、六分の輕快、三分のからかひ

一分の憎まれ口くらゐな割で、流麗に笑つてのけてゐる彼の文致は、江戸上方の中間にゐて、中京の名ある名古屋の産として、正にふさはしい地方色を示してゐる。五、輕快洒落な想に富んでゐる。その洒々落々たること奈良茶漬の如き趣がある。六、思無邪なる矛盾を含んでゐる。」

参考 「枕草子」――蟲はの段を擧げておく。兩文章を比較されたい。

蟲は鈴蟲。松蟲。促織（はたおり）。蟋蟀（きりぎりす）。蝶。われから。ひをむし。螢。蓑蟲いとあはれなり。鬼のうみければ、親に似て、これもおそろしき心あらむとて、親のあしききぬひき着せて、「いま秋風吹かんをりにぞこんずる。待てよ。」といひて、にげていにけるも知らず、風のおと聞き知りて八月（やつき）ばかりになればちゝよ〳〵とはかなげになく、いみじうあはれなり。ひぐらし。ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらん。又おもひかけず暮き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきもののうちに入れつべけれ。愛敬（あいきやう）なくにくきものは、人々しう書き出づべきもののやうにあらねど、よろづの物にゐ、顔などにぬれたる足してゐたるなどよ。人の名につきたるは、いとうとまし。夏蟲いとをかしく、らうたげなり。火近うとりよせて、物語など見るに、草子のうへなどに飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれど、かろびいみじうて、水のうへなどを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。

九　源信僧都の母

（今昔物語）

扱方 今は昔の物語である。横川の源信僧都は、學問よりは德行をこそとの母のいさめに心を打たれて、一心に山籠りを始めた。六年間の歳月はすぎたが、下心に戀しと思つてゐるに違ひない母はまだ逢ふ事を許さない。九年目になつた時、僧都は急に心細くなつた。そして母の許もまたず故鄕大和國に下り行くと、途中で母の使に逢つた。母は今臨終の床にあつて、子を一日千秋の思ひで待つてゐる。不思議にも僧都は母の死目に合つて、念佛を唱へさせ、往生をとげさせた。といふ話で、不思議な親子の機緣をのべたものがたりである。文章としては委曲をつくした中古文の床しい筆致に親しませ、內容としては、子を育てる母の涙ぐましいまでのしつかりとした心構へを理解させたい。

教授

引用書

今昔物語――三十一卷。現存のものはその中數卷を闕く。印度、支那、日本の珍事異聞を集め、類によつて分つてある。卷一から卷五までは天竺（印度）の部、卷六から卷十までは震旦（支那）の部、卷十一以下は本朝の部で、その中卷十一から卷二十迄は佛敎、但し卷十八が闕けてゐる。卷二十一は闕卷、卷二十二は藤原氏の事、卷二十三は歷史の話と武勇强力の事、卷二十四、二十五は世俗と題し、卷二十六は宿報、卷二十七は靈鬼、卷二十八は更に世俗、卷二十九は惡行、卷三十、三十一は雜事と題してゐる。この書は卷帙が多く誤脫も少くなく、刊本の種類も少い。丹鶴叢書、史籍集覽、國史大系本等があるが、現在で一番完全なものは芳賀矢一編の「攷證今昔物語」三冊であるとされてゐる。尙著者は源隆國である事については多分働かないところとされてゐる。

語釋

〔源信僧都（げんしんそうづ）〕 天台宗の高僧。比叡山惠信院に住したから、惠信僧都の名で知られてゐる。俗姓は卜部氏。大和葛城郡の人、天慶五年に生れた。幼にして父を喪ひ比叡山に登つて良源（慈慧僧正）に師事し、天台の學を修めた。「一乘要訣」等天台に關する著作の外に淨土信仰を現した「往生要集」等がある。又佛畫をよくし

聖衆來迎圖・地獄變相圖、山越彌陀圖等その作と傳へる名作が多い。寛仁元年寂、年七十六。惠心僧都全集がある。

〔今は昔〕 今は昔の事であるが……。といつた意に用ひてある。お伽噺などで「むかし〳〵」といふのに同じい。この「今は昔」は今昔物語各説話の冒頭に必ず用ひてあり、よつて以て書名の出たもととなつた。

〔横川〕 比叡山三塔（東塔、西塔、横川）の一。根本中堂を距る北方約六粁に位する。中堂を楞嚴院といひ慈覺大師の草創になる。古來幾多の名僧がこゝから輩出した。

〔比叡の山に登りて〕 比叡山の延暦寺（天台宗）の僧となつて佛學を修めたこと。

〔やんごとなき〕 すぐれた。貴いの意味にも用ひる。

〔學生〕 學者。ここでは佛學者とも、大學及び國學で經業を受けたものをいつたが、こゝは、前記の意とみてよいと思ふ。

〔三條の大后の宮〕 第六十四代圓融天皇の皇后。御名は詮子。關白藤原兼家の女。天元元年女御となり、同年一條天皇を生ませらる。一條天皇卽位後、皇太后となる。正暦二年、疾によつて剃髮、東三條院と號す。長德三年崩、御年四十。

〔御八講〕 法華八講。法華經八卷を八人に分け、八座（八面）に讀誦供養する法會。天台宗の高僧がこれをつとめる習慣になつてゐる。支那の僧惠明によつて始められたといふ。日本にては、延暦十五年、大和の石淵寺の僧勤操が榮好といふ僧の母の冥福を祈つた際、同志七人と共に、法華經を讀誦したのに始まるといふ。

〔捧物〕 ここでは佛前の供物。獻上品の意味に用ひることもある。

〔かくなん〕 このやうに。「なん」は「ぞ」と同意の助詞。

〔后の宮〕 皇太后の意。

〔賜はりたる〕 先に「かくなん」と「なん」があるので、かく、「たる」と已然形で結んであるのである。

〔初めたる物なれば〕 初めて頂戴したものであるから。

〔返事〕 返信。

〔おこせ給へる物ども〕 送りよこしなさつたいろいろの品は。

〔賜はりぬ〕 頂戴した。

〔あるき給ふは〕 「あるき」は外に出あるくこと。

〔法師になし聞えし本意〕 僧侶になし申した本望。「聞え」は敬語で「申し」などといふのに同じである。

〔そこには〕 そなたに於ては。おまへの方では。

〔嫗〕 老婆。僧都の老母の自稱。

〔元服〕 男子の成人したしるしに、垂髮を上げて髻を結ひ、冠を加へる祝儀。

〔身の才そなはりて〕 自分の身の學才が完全して。

〔多武峯の聖人〕 天台宗の高僧。橘恒平の子。幼にして、延暦寺に入り、慈慧大師に就いて學ぶ。十二年間山を出ずして修學す。（源信僧都と同門である）冷泉上皇に召されたが、固辭して奉ぜず、遂に詐り狂して去つた。應和三年、大和多武峰に上りて住す。長保五年寂す、年八十七。源僧の母は禁庭の召しに應じなかつた增賀上人の態度を理想としてゐるので、これを例として出したのである。多武峯は大和國磯城郡多武峯村、山の上に妙樂寺がある。同寺は明治維新の際廢絕した。

〔聖人〕 又はヒジリとも讀む。高德の僧。佛法に歸依して、固く戒行を守る人。後の「名僧」に對して用ひてある。

〔後世〕 死後の世。來世。

〔名僧〕 名高い僧。この語は世に勝れた僧の意にも用ひるが、ここでは世間に名の賣れてゐる俗僧の意に用ひてある。「名僧にて云々」は、名高い僧となつて花々しく外に出歩きなさるのは……。

〔生きたらん程に〕 生きてをる間に。

〔聖人にしておはせんを〕 聖人となつておいでになるのを。

〔心安く〕 安心して。

〔更に名僧たらんの心なし〕 全く名の賣れてゐる俗僧とならうといふ氣はない。

〔宮ばら〕 皇族がた。ここでは三條皇太后を指す。

〔思ふ心深くして〕 深く思つて。一心に思つて。

〔あはれに悲しく嬉しく云々〕 感じ入りもし、悲しくも思ひ、また嬉しくも思ふの意。「あはれには」は後に「悲しく」ともある故、古語にいふ、「感じ入る」「感が深い」などの意に解すべきである。「悲しく」は自分の輕卒であつたことを悲しく思ふの意。「嬉しく」は母の言葉によつて山籠りを決意するに至つたことを

嬉しく思ふの意。「かなし」には、「陸奥のいつくはあれど鹽釜の海人の小舟の綱手かなしも」の「かなし」の如くに、身にしみて面白いの意に用ひることもあるがここではやはり「輕卒であつたことを悲しく思ふ」の意に解して置いてよいと思ふ。

〔山籠り〕 山寺に籠つて修練すること。ここでは比叡山に入つて十二年間修練をすること。類聚國史に、「弘仁十三年六月、傳燈大師位最澄言、夫如レ來制レ戒、隨機不レ同、衆生發心、大小亦別。伏望、天台法華宗、年分度二二人一、於二比叡山一令二得度受戒一、十二箇年不レ聽レ出レ山、四種三昧令二得修練一云々」とある。

〔母と申せども、極めたる善人にこそ云々〕 女子である母とは申しながら、此上ない善人（能く人を善に導く高僧）のやうな御方でおありになる。ここの「けれ」は過去ではなく詠歎の助動詞である。母が女子の身を以て自分を善に導き給うたことを謝したのである。ここの善人は儒教にいふ善人の意でなく、佛教に所謂「善智識」（後に出づ）の意に解してよいと思ふ。

〔書きて送りつ〕 書いて送つた。「つ」は完了の助動詞。

〔今なん胸おちゐて冥途も安くおぼゆる〕 今がおちついて、死後も安心に思ふの意。「なん」は「ぞ」と同義に用ひる助詞。

〔ゆめ〳〵おろそかには云々〕 決して今後の修練を粗末にしてはならないの意。

〔この二度の返事〕 この前後兩度の母の返事。この二度目の返事の意味にも解せられるが、兩度の意に解した方がよい。

〔法文〕 經文、經卷。

〔取出して見つゝぞ云々〕 取出して見ては泣いた。

〔あからさまに〕 ちよつと。

〔見えんにやは罪は滅びんずる〕 たとひそなたが我が許に見えたところで、わが罪（來世に於て報を受けるべき罪）の滅びることもないの意。「やは」は反語で「滅びんずる」の後についたのと同じである。罪が滅びるならば來ても貰はうが、さもなくば來て貰ふ必要はないの意。

〔これより申さらざん限りは〕 當方から申出でない以上は。

〔常人にもなき人〕 常人でない人。非凡な人。

〔かく言ひてんや〕 かうは言はない。是非我が子に逢ひたいといふであらうの意を含む。

〔怪しく心細く思ひて〕 今日に限り不思議に心細い氣がして。何かの暗示でもあるのかの意を含む。

〔さはれ〕 それでも。それにしても。

〔御坊〕 坊さん。僧に對する尊稱。

〔しか言ふは我なり〕 汝がさういふのは我のことであるの意。

〔賤しきさまに云々〕 賤しい者の手跡であつた。代筆であつたのである。

〔風の起りたるか〕 風邪が起つたのか。

〔年の高きけにやあらん〕 老年のためであらう。

〔心强く聞えしかども〕 氣强く申したけれども。

〔限りの時になりぬればにや〕 愈々死ぬ時になつたからであらうか。

〔覺え給ふれば〕 思ひますので。この「給ふ」は先方に對する敬語の「給ふ」（四段活用）ではなく、自己の動作を先方に對して丁寧にいふ時の「給ふ」（下二段活用）である。

〔怪しく心にかく覺えつるは〕 不思議にもあのやうに母に逢ひたく思つたのは。

〔かくありければにこそありけれ〕 このやうに母が危篤であつたからである。

〔親子の契はあはれなる事とはいひながら〕 このやうに都合よく母の死目に逢ふことの出來た母子の緣は身にしみてありがたいこと（あはれなる事）とはいふものの。この下に、「それは如何なる場合にも有うることではなく」などの語を補つて解くべきである。

〔佛の道にあながちに勤め入れ給ふ母なれば〕 普通の母とちがつて、自分を佛の道に强ひて勤め入れ給ふ母であるから。この下に「佛の惠によつて」などの語を補つて說く。

〔かくは覺えけるなりと〕 あのやうに母の病氣を豫感することが出來たのであると。

〔具したりければ〕 連れてゐたので。

〔かゝる事のありければなり〕 かういふ事（母の危篤）があつたから、急に母を訪れたく思つたのであるの意。

〔むげに〕 全く。一向に。

〔頼もしげなし〕 回復のあてがない。絶望である。
〔契深くあはれにもありけるかな〕 親子の縁が深く身にしみてありがたいことである。
〔息の下に〕 やつと聲を出すこと。咽喉の奥の方でものをいふこと。
〔念佛〕 稱名(しやうみやう)ともいふ。阿彌陀佛の名號を稱へること。善導以後念佛の語は多くこの意味に用ひられる。
〔力なきに〕 念佛を唱へる、身體力もない上に。
〔合せて勸むる人のなきなり〕 且又傍らにゐて念佛を勸める人がないのである。
〔貴きことども〕 佛の救のありがたいことをいふ。
〔懇に道心を起して〕 深く佛道を信ずる心を起して
〔消入るやうにて〕 人心地がなくなるやうで。やすらかに往生を遂げたさまをいつたのである。
〔臨終〕 しにぎは。末期。
〔かくはなからまし〕 このやうに念佛の中に安らかに往生することはなかつたらう。
〔機緣〕 佛の教化を受くべき因緣。「親子の機緣深くしては」親子ともに、佛の教化を受くべき因緣が深くあつての意。
〔往生〕 極樂往生。極樂淨土に往つて生れること。
〔聖の道〕 聖(高德の僧)となる道。
〔限りなかりける〕 無限な。この上もない。
〔善智識〕 能く人を善に導き入れる高僧。「親は子の爲子は親の爲、云々」親子互に佛の道に導き合つたことをいつたのである。
〔七七日の法事〕 人の死後、四十九日間(人が死んで未來の生を受けない期間、中陰ともいふ)にする法事。潛邸劄記に、「今人以二初喪四十九日一居二柩側一、謂二之七七日一」とある。陔餘叢考に、「俗以人死毎二第七日一爲忌、至二七七四十九日一則卒哭。」とある。
〔あはれなりける親子の契かな〕 感じ入るべき親子の緣であるの意。
〔語り傳へたるとや〕 語りつたへといふことである。これも今昔物語の常套的結びの言葉である。

鑑賞批評 これは源信僧都の孝心感應を主題とした說話である。全文のどこにもことさら作爲をこらした誇張した描寫がなくて、しかも母が子を思ひ、子が母を慕ふあたゝかい人情がいかにもしとやかに流れわたつてゐるのが快よく讀まれる。母の言葉をたゞちにすなほにうけ入れ「この二度の返事を法文の中に卷きおきて、ときどき取りいだして、見つゝぞ泣きける」といふ僧都の姿の中に彼の母に對する感情やひいては彼の人となりまでがしのばれるものである。「六年はすでに山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねばこひしくや思ひ召さん。然らば、あからさまに詣でん」といふのはやさしい思ひやりである。母はそれに對して「げにこひしくは思ひ聞ゆれども」と答へてゐる。その母が明日をも知れぬ病の床に臥してみづから、口づたへに書かせたであらう手紙には「堪へ難く、限りなくこひしくおぼえ給ふれば申すなり。疾く疾くおはせ」とある。母の心情はありゝとここに見えてゐるではないか。かうした母子の日常の心的交通を傍から見知つてゐたであらう横川の聖たちが心の底からゆり動かされて言つた「あはれなりける親子の契かな」といふ言葉は、かう見てくると全く同感されるしみゞゝとした響をもつてゐると思ふ。この文章のよさは、作者が實感としての同情をもつて書いてゐる所にあるので、淡い筆致ではあるが、しかも人の心を捕へる何物かがこもつてゐる。

一〇 寺子屋

（菅原傳授手習鑑）

扱方 淨瑠璃「菅原傳授手習鑑」の中で、最も有名な「寺子屋の段」を採錄した。菅公への同情が一般に盛んだつた反面に、その敵に廻つたものへの憎しみは強かつた、その憎まれ者の中の一人、松王丸が世間の冷笑惡罵の中にあつて、本心の菅公への報恩の機を窺つてゐたが、いよ〳〵その時が來た、菅公の遺子菅秀才――武部源藏の下にかくまはれてゐたのが發れて、斬つて首渡せとのつぴきならぬ立場に至つた時、松王はその子供を菅秀才の見代りにするといふ血涙のにじむやうな松王の苦衷を書いたものである。あくまで菅秀才を守らうとする武部の苦心、敵にそれと知られぬやうに巧く身代とする松王の苦衷は、斷ちきれぬ子の愛に惱む松王の女房の歎きと共に、武士氣質、人間愛の極致を示すものとして、讀者の涙を誘はずにおかないと思ふ。本課に於ては、これ等の人々の取つた處置を考へ、批評する事を避けて、全文にみなぎる燃えるやうな忠義、人間愛を單的に感受せしめ、感憤興起せしめたい。そして、我々の先祖の胸に燃えてゐた忠義心、純な人間愛に感激せしめたい。

教授

引用書

菅原傳授手習鑑――時代物淨瑠璃。五段。竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲等の合作に成る。延享三年八月二十一日、竹本座で初日を出してから大好評を得、翌四年三月まで打續けた。菅公左遷の經緯、薨去後內裡天變の事、北野及び天滿天神の緣起等に、菅公に關する諸々の俗說を取合せて背景とし、梅王、松王、櫻丸の三つ子の兄弟の父子夫婦、武部源藏夫妻その他一門家の子の苦衷を描いたもの。尙參考に梗概を擧げておいたから參照されたい。

語釋

〔一字千金〕 一字の文字が千金の價値があるといふ意。非常に貴重な文章をいふ。「晉書」に「不レ貴レ勇而貴レ忍、此眞一字千金之兵法也」とあり、又「史記」の呂不韋傳に「呂不韋以二呂氏春秋一布二咸陽市門一、縣二千金其上一、延二諸侯游士賓客一、有二能增一損一字一者、予二千金。」

〔三千世界〕 三千大千世界の略。大千世界を三千倍したもの。須彌山を中心とし、日、月、四大洲、六欲天、梵天を含んだものを一世界とし、これを千倍したものを一小千世界といひ、小千世界の千倍を一中千世界といひ、中千世界の千倍を一大千世界といふ。以上の總稱を一大三千世界といふ。この廣大無邊な世界を一佛敎化の範圍としてゐるのである。

〔武部源藏〕 健部傳內をもぢつたものであらうと樋口慶千代氏はいふ。傳內は元祿頃江戸の能書家で御家流から出て一家をなし、幕府の書家となり、門人三千人以上もあつたといふ。傳內流の祖である。

〔いたはる〕 大切にする。ねんごろにする。

〔かしづく〕 厚本「傳」の字。つきそうて守り養ふ。愛し大切にする。

〔片山家〕 片田舍の山里にある家。卽ち京都大原の西方、草生井出の山里の古名である芹生を指す。

〔所がへ〕 住所を替へること。

〔人形書く子は……見えにける〕 近松作「釋迦如來誕生會」第三に「文字一つ覺えぬ癖に當字書く、敎ゆる人は頭搔く、世話をかくぞと見えにける」とある語の轉用であらう。

〔誕くり〕 誕を垂れるだらしない子。

〔若君〕 菅秀才。

〔三百六十字〕 貞享曆の一年の日數は三百六十日であつたのでさういつた。

〔本の〕 眞實の。

〔ませよ云々〕 ませだ〳〵と囃し立てたのである。「ませ」はませるの轉成名詞で、まさるの轉訛である。增の意で、年齡の割に大人ぶつてゐること。老成。

〔てうけかゝる〕 嘲戲掛かる意。ふざけかかること。

〔口過す〕 口返答をする。

〔いがめてやろ〕 歪めてやらうの意。いぢめること。

〔けさん〕 卦算。文鎭。

〔傳ふる筆〕 書道傳授を受けてゐること。

〔いさかひ〕 諍ひ。あらそひ。喧嘩。

〔おとましや〕 うるさいな。面倒くさいな。疎ましいな。

〔連合〕 連れ合ふ夫。

〔振舞〕 饗應。もてなし。饗應に招かれること。

〔いてなれば云々〕 行つてゐるから立戻る時間が知

れない。

〔こなた衆〕 このいたづら者のために……。

〔寺入り〕 寺入り子の略。寺子屋へ新入學する子供。この子が實は菅秀才の身代りとなるべき松王の一子小太郎である。この「寺入り」は寺院で寺院關係の者の兒童の初等教育を行つてゐた事は、鎌倉時代に既にあつた。江戸時代になつても寺院を私塾に當てたから、寺子屋というたのであるが、中には藩邸、教師の宅、百姓家、浪宅などもあつた。士分や平民の兒童を教育するを目的とし、教科書は「庭訓往來」「商賣商來」の類が廣く用ひられ、これによつて習字、讀書、作文を習得させ、更に進んでは四書の素讀、算術を教授した。教師は一人で、教場は室内に机を並べ、男女席を分ち教師は側面に位置を占めて監視した。兒童が寺子屋に入學するを寺入といひ、生徒を寺子といふ。入學期も退學期も隨意である。幕末まで寺子屋教育は殆んど全國に普及し、兒童の大半は寺子屋で勉學したものである。(樋口氏)

〔いろはに云々〕 「いろはに」と平假名を讀む子もあれば、「一筆啓上候」と讀む子もあるといふ意。

〔べくの男〕 これは「一筆啓上候」の候に「候べく」をいひかけて、「候べく候の男」の意、即ち行きなり任せの男といふ意につづけたのである。「候べく候」は行きなり次第といふ意。

〔堺重〕 大内義弘以後、泉州堺は漆器の產出多く、堺の塗物として聞え、堺の人春慶の發明した春慶塗はその名高く、春慶塗の重箱、切溜を、堺重と稱したのである。

〔文庫〕 書物、又は雜品を納れる手箱。

〔利發〕 利口發明。賢いこと。

〔愛に愛持つ女同士〕 たつぷりとお互に愛嬌を交す女同士。

〔輕う暮らしてをる〕 細々と生活してゐる。謙辭である。

〔内方〕 他人の妻を呼ぶ敬稱。後出の「内儀」と同意。

〔御座りますすげなが〕 御座りますさうですが……。

〔どの御子〕 我が愛兒小太郎を菅秀才の身代りにしようとして入學させたのであるから、菅秀才を見ておきたいと「どの御子か」と質問したのであるが、母親の情がよく現れてゐる。

〔源藏殿〕 當時は自分の夫に敬稱を用ひた。

〔いかい〕 嚴めしい。きつい。甚だしい。大變な。

〔へぎ〕 折板。へぎ板で作つた盆。

〔内儀〕 他人の妻を呼ぶ稱。内方。

〔いはれぬ事を〕 下さる謂はれのない事であるのをこのやうにして頂いては恐縮ですといふ意。

〔おはもじながら〕 お恥かしながら。「はもじ」は恥かしといふ文字詞である。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微して供御の物備はらないために、女官等はその物の名をいふを忌んで、何文字といつた隱語から起つたものである。

〔取弘める〕 土產として披露し分配すること。

〔蒸物〕 饅頭の類。

〔粒椎茸〕 椎茸の小さく細くて粒狀になつてゐるもの。

〔ほんそ〕 奔走。走りまはつて世話をする義から轉じて、愛しいつくしむこと。

〔惡あがきせまいぞ〕 惡いたづらして跳ね廻ることはいたしますまいぞ。「あがく」は足掻く意。

〔内證〕 人の妻を呼ぶ稱。内儀。

〔たしなむ〕 苦しむ、なやむ、辛苦するといふ意の他に轉じて、豫て心掛けておく、常に用意しておくといふ意もあり、又は戒む、遠慮する、慎しむの意もある。ここは慎しむ。

〔頑是が御座りませぬ〕 聞き分けが御座いません。

〔道理いな〕 道理ですよ。道理ですな。「い」は延言。

〔つい戻つてやらんせ〕 早く戻つて來ておやりなさい。

〔常に變りて色青ざめ〕 この下に原本は「内入り惡るく子供を見廻し、「エエ氏より育といふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立たず」と、思ひ有りげに」と續く一句がある。

〔酒機嫌かは知らぬが〕 この下に原本は「山家育は知つて有る子供、憎體口は聞へも惡い、殊に今日は約束の子」と續く一句がある。

〔さがない人〕 口ぎたない人。善くない人。

〔氣の毒〕 心苦しいこと。

〔いたいけに〕 憐れに可愛ゆらしく。

〔公家〕 公家衆。堂上方。

〔高家〕 武家の名族。武家のお歴々。

〔お袋〕 母。「倭訓栞」に「后宮名目に母だつ人を袋になぞらへ侍る事は、胎中に其子こもれる時、袋の中に物ある如くなれば、めでたき事にことぶきて申侍る也」

〔機嫌よう遊ばし召され〕 源蔵が子供たちに言つた詞。若君菅秀才がゐるので敬語を用ひたのである。

〔きつ相〕 氣相。顔色。面色。

〔庄屋〕 莊屋とも書く。莊家、庄官の轉。名主のこと。一村或は數村の長の稱である。領主より命じて、その地の出來事を司らしめ、郡代、代官の下位にある。土着の民が之に任ぜられる、代々の役となつてゐる。數十ケ村、或は一郡をも支配する者を大庄屋といふ。

〔時平〕 藤原時平。平安朝時代の廷臣。基經の長子。本院大臣と稱した。昌泰二年菅原道眞を右大臣、時平を左大臣とし、更に道眞を關白とさせようといふ宇多天皇の御意が漏れたので、時平は道眞を譖した。名文家で「延喜格」「三代實錄」を著した。延喜九年四月四日薨、年三十九。

〔菅丞相〕 菅原道眞。「丞相」は大臣の唐名。平安朝時代の廷臣。參議是善の子。醍醐天皇に仕へて賢明の聞え高く、左大臣時平は歳も若く才智も劣つてゐたから、天皇の思召も特に道眞の方に厚かつた。之がために時平は心安からず、道眞は女婿齋世親王を皇位に立てようと企圖してゐると讒奏したので、道眞は昌泰四年正月二十九日太宰權帥に貶せられて太宰府に配流され、居ること三年、延喜三年二月二十五日配所で薨じた、年五十九。後天皇悔いて本官を復して正二位を贈り給ひ、一條天皇の時、正一位太政大臣を贈られた。村上天皇の天曆年間、京都北野にその靈を祀つて天滿天神と稱した。

〔病みほうけながら〕 病みほけてゐながら。病みさらばひてゐながら。

〔訴人〕 訴へ人。告發人。

〔退つ引ならぬ手詰〕 如何に辯解しても辯解の方法も詰つて、退き引きすることも出來なくなること。萬策盡き果ててしまふこと。

〔玉簾の中の誕生〕 玉簾の中で誕生したといふ意で高貴な生れの方。貴公子。

〔薦垂の中で育つ〕 玉簾云々の反對の對句。むしろの中で育つたといふ意で、貧乏育ちの子供等といふ意。

〔屠所の歩み〕 死地に近附く心地して足の歩みも進みかねること。「摩耶經」の偈に「譬如下旃陀羅(屠者の意)驅レ羊就二屠所一、歩々近二死地一、人命亦如レ是」

〔天道のひかへ強きにや〕 「ひかへ」は控であらう。意不明であるが、秀才を見殺しにしないで、力强く引き控へてゐるといふ義で、つまり、天運が强いからであらうかといふ意であらう。

〔まんざら〕 ——といはれぬといふやうに下に打消の語を伴ふ。全く、正に、ひたすら……でないといふ意。

〔烏を鷺〕 黑白を顚倒する意の諺。烏を鷺と言ひくるめるなどと用ひる。

〔三つ子〕 梅王丸、松王丸、櫻丸といふ三人兄弟。

〔一かばちか〕 「一か八か」と書く。伸るか反るかといふ安危の瀬戸際にいふ。

〔殘る奴ばら〕 殘る手下の奴ども。

〔死出、三途〕 死出の山と三途の川とをいふ。「死出山」は死天山とも書き、冥土にある山で、人の死後この山を越えて行くといはれてゐる。「佛說地藏菩薩發心因緣五十經」に、「閻魔王國堺、死天山南門、亡人重過、兩基相逼、破レ膝割レ膚、折レ骨漏レ髓、死而重レ死、故言二死天一」とある。「三途川」は三瀨河ともいふ。三惡道を河に喩へて冥土にある河とした。「十王讃歎鈔」に「此河に三の渡有レ之、故に三途河と云也、上にある渡をば淺水瀨と名付く、此は淺くして水膝を不レ過、罪淺き者此を渡る也、中にある渡をば橋渡と名付く、此は金銀七寶の橋也、善人のみ此を渡る也、下にある渡をば强深瀨と名付く、此をば惡人のみ渡る也、此渡り流れ早き事矢を射るが如く、浪の高き事大山の如し。」

〔ちよつほくさ〕 お世辭上手にちよつくらしやべるさまにいふ詞。

〔大事は小事より現はるゝ〕 秘密な大事なことは小事だと油斷することから露現するといふこと。「老子」に「天下大事必作二於細一」

〔弟子子といへば我が子も同然〕 師弟愛の深きをいふ。近松作「源氏冷泉節」に「師弟は親子と申さぬか」

〔業〕 宿世の業。因果。

〔火の車〕 地獄に墮ちる罪人を迎へるのに用ひる地獄の火焰の車。

〔せまじきものは宮仕へ〕 してはいけないものは仕官(奉公)といふことであるといふ意。「親子は一世、夫

婦は二世、主從は三世」といはれるやうに、絶對的道義的主係關從に立つといふことは、士道としての精華であるが、本文の源藏夫婦の場合は因果律によつて自分の身も同じ運命になるだらうと考へると、矛盾した思想のやうではあるが、實際「せまじきものは宮仕へ」であるといふ考が起きよう。

〔駕籠乘物、門日に舁据られば〕　この次原本に、跡には大勢村の者附き隨ふて「申上げます、皆是に居る者の子供が手習に參つて居ります、若し取違へ首討たれては取返しが成りませぬ、どうぞお戻し下され」と願へば玄蕃「ヤアかしましい蠅蟲めら、うぬらが餓鬼の事迄身共が知つた事か、勝手次第に連れ失せう」と、呵り付くれば、松王丸「ヤレお待ちなされ暫く」と駕籠より出づるも刀を杖、「憚りながら彼等とても油斷はならぬ、病中ながら拙者めが檢分の役勤むるも、外に菅秀才の顏見知りし者なき故、今日の役目仕果すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、有難き御意の趣疎には致されず、菅丞相の所緣の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が悴に仕立て助けて歸る手も有る事、コリやい百姓めら、ざは〳〵とぬかさず共一人宛呼出せ、面改めて戻してくりよ」と退つ引きさせぬ釘鎹打てば響けの內には夫婦、豫ねて覺悟も今更に胸轟かす計なり。……この次に百姓たちは自分の子供を呼出して連れ戻つて行くのである。

この樣子を見て菅秀才と小太郎とを取替へる計劃をしたが、暴露されては主從の身の破滅であるので「すは身の上」と源藏夫婦は緊張するといふ本課の文に續くのである。

〔胴をする〕　度胸をする。覺悟した態度になつて。

〔手詰の催促〕　いかやうの辯解もきかぬ嚴しい督促。

〔かりそめ〕　假初。苟且。まにあはせ、一時の事、ふとしたこと、いささか等の意もあるが、ここは輕々しい、なほざり、おろそかといふ意。いやしくも右大臣殿の若君であるので、さう言葉通りに輕々しくは取扱はれないといふ意である。身替を作るために餘裕を得んがためでもある。

〔御用捨〕　御容赦。御猶豫願ひたいといふ意。

〔その手は食はぬ〕　そのやり方で欺まされはしない。

〔身替りの贋首云々〕　この言源藏夫婦の致命的先手であるが、同時に、我が子を身替として提供したから

それを實行せよといふ松王丸の血を吐く思ひの豫告的暗示であつたといふことが後文で判るであらう。勿論身替であることが玄蕃に悟られては折角の苦心も水泡であるので、疑心を消させるためにもさう言つたのである。松王丸のこの苦心は源藏は知らないのである。菅秀才の命が安全であつたのは、松王丸のこの犧牲的精神からであつたのである。

〔舌の根の乾かぬ內に〕　發言して直ちに。言下にといふ意。

〔權柄〕　權は秤の錘、柄は斧の柄。轉じて權力、威を振ふこと。

〔餓鬼等は云々〕　人を罵つて言ふ語。多く子供に用ひる。松王丸が机を數へていふ詞は鋭いが、心の中は泣いてゐるのである。

〔今日初めて寺、いや寺參りした子云々〕　寺入りといひかけて、敵方の松王の子小太郎であるとは勿論今は知らぬのであるが、この子を實は身替にする計劃故、そこは女心で、不憐に思つてゐる氣轉からして「いや寺參り云々」と言ひ逃れた。ところが戸浪が寺入りと寺參りとを混亂して口走つたのだから松王は「何馬鹿な」と言つたきりで追窮はしなかつた。これに對して、松王はすでに我子が身替になることは萬々承知であつたのである。

〔木地を隱した塗机〕　言ひくろめる意をも含んでゐる。

〔ざつとさばいて云々〕　あつさりと辯解してすませてしまつたのである。

〔命の瀨戸際〕　大事な成否の分れどころ。

〔けしとむ〕　消し飛ぶの轉。魂消えて飛ぶ義。又は蹴飛ぶの義でもあらう。非常に驚き跳ねあがること。

〔目通り〕　目の前。正面。

〔性根をすゑて〕　心を落着けて。

〔忍のつば元くつろげて〕　こつそりと刀の鯉口をゆるめて。贋首だと言つたら直ちに斬掛かる態勢を示してゐる。

〔虛〕　嘘。贋物。本物を實といふに對する。

〔淨玻璃の鏡〕　玻璃は梵語 Spṛṭika. 水晶のこと。水晶の純粹透明なものを淨玻璃といひ、これで作つた鏡のこと。閻魔の廳に於いて、死者が前世で犯した善惡の業報を映出するといはれてゐる。このことからして

事物の眞僞を見分ける眼力の意に用ひられる。

〔鐵札、金札〕「十王經」に出てゐる語。閻魔廳で淨玻璃鏡に照らして善人と惡人とを鑑別し、その惡人の名を記して地獄に逐ひやる爲の鐵製の札を鐵札といひ、善人の名を記して極樂に送るための金製の札を金札といふ。この鏡に照らして善人か惡人かを判定する意に用ひてゐる。

〔十手〕 昔、捕手が用ひた具。中程に鉤の附いた鐵製の短い棒であつて、犯罪者を捕縛するときに用ひる。

〔曲者〕 ひとくせある者。松王を指す。

〔絶體絶命〕 體も命もきはまる義。逃るべき道なく、のつぴきならぬ場合。

〔五色の息〕 雜多無量の歎息の意に用ひる。

〔盛德〕 原文に聖德とある。聖德は天皇の御德を稱する語であるが、玆は道眞公の御德といふ意。從つて勿論ここに聖德の文字を使用することは妥當ではない。

〔天成〕 天がなしたところの——。

〔菅丞相樣が入つて御座つたか〕 この次に原文「但し、首が黃金佛ではなかつたか、似たといふても瓦と金、寶の花の御運開きとあんまり嬉しうて」とある。

〔惡さ〕 いたづら。いたづら者。小太郎を指す。實はすでに身代りとして首打つてしまつたのである。一層源藏夫婦をうろたへさせてゐる一語である。

〔しれ者〕 白者、白痴などと書いて愚者の義とするがここは轉じてぬからぬ者、さるべきしつかり者、思慮深く油斷のならぬ者の意としてゐる。

〔我が子の〕 小太郎の——。

〔經帷子〕 死者に著せて葬る白帷子である。衽或は背に南無阿彌陀佛の六字の名號、或は南無妙法蓮華經のお題目、或は經文の文句などを書いたもの。

〔幡〕 菩薩幡のこと。寺院の本尊の前に懸かつてゐるもの。幡の功德は無量であつて、亡者の爲に作れば亡者はその功德の七分の一を得るといふ。

〔して〳〵〕 さうして、さうしての略。念を推す意。

〔得心〕 納得。承知。

〔梅は飛びの歌〕 道眞の詠だといはれてゐる。道眞の愛樹梅、櫻、松に、梅王、櫻丸、松王の三人兄弟をきかせてゐる。歌意は梅王は九州に飛んで來てくれよ、櫻丸は自害した、何とて松王のみが不人情であらうといふ意。今その松王が一子小太郎を道眞の若君秀才の

身代りに立てて忠義立てが出來たといふ意をも含めてゐる。この歌について樋口氏は「「榻鳴曉筆」卷十九にも菅公が「梅は飛び櫻は枯るる世の中に松ばかりこそつれなかりけれ」と詠まれた由見えて居れども、實は菅公の詠ではなくて後人の假託したものである。「玉かつま」卷九にもこの歌を論じて、源順の歌といはれてゐる「梅はとび櫻は枯れぬ菅原や深くぞ頼む神のちかひを」の歌をつくりかへたのかとも思はれるが、さて源順の詠といふこの歌も、本末かけあはず、拙い歌であるというてある」と。

〔不覺〕 覺悟ならぬこと。未練。

〔夫婦か〕 斬り附けた女と松王丸とは夫婦であつたのかと、又々吃驚したといふ意。松王丸とその妻千代である。

〔一禮は先づ後の事〕 禮は禮儀、挨拶すること。御挨拶はまづ後ですることとして、それよりもこのやうな仔細は一體如何したといふことだといふ語氣である。

〔兄弟三人〕 松王丸、梅王丸、櫻丸。

〔肉緣切り〕 松王が父に勘當を願うて許されたことは第三段佐太村の段にある。

〔作病構へ〕 僞病をつかつて。

〔貴殿〕 武部源藏を指していふ敬稱。

〔心のめど〕 心の中でひそかに占つて確めること。「めど」はめどはぎで、蓍草又は蓍木といふもの。宿根から數十の莖が出て枝なく、高さ四五尺に達する。この莖五十本で作つた筮(メドギ)を以て占ひをする。後には竹で作り、筮竹といふ。

〔性根〕 心。性質。「性根を見込み給ひ」は松王は不人情、不忠だとお考へになり——。

〔つれなからうぞ〕 不人情であらうか。

〔世上の口にかゝる悔しさ〕 世の評判となる口惜しさ。

〔人でなし〕 人非人。人間の道を辨へ知らぬ奴。

〔草葉の陰〕 あの世。冥途。

〔何時にない跡追うたを〕 いつもさうはせぬのに、蟲が知らせたのか、この度に限つて、母樣わしも行きたいと、別れを悲しんでなつかしがつたのを——。

〔冥途の旅へ寺入〕 身代りとなつて死ぬために寺子屋に入學するのであるから、さういつた。

〔見たさ〕 見たさに跡返りをして來ました。それを未練がましい、女々しいと笑うては下さいますなといふ意。

〔四十九日の蒸物〕 中陰滿了の日までの期間が四十九日間である。この滿了の日には亡者が三界六道に生ずる日といはれて、饅頭などの蒸物を供へて佛事を修するのである。

〔死ぬる子は媚よし〕 死ぬ運命にある子は顏容が特に麗しいといふ意。死ぬ子に對する親の愛著心である。土佐日記に「死にし子顏よかりき」。

〔疱瘡〕 昔は種痘がなかつたから、誰でも一度は疱瘡にかからねばならぬと考へられ、疱瘡にかかるのを兒童の生死の分れ目とされてゐた。大厄の疱瘡まですましして長壽を願つてゐたのに、今身代りとまでなつて非業の死を遂げねばならぬとは、何の業報かと悲嘆するのである。

〔かつぱと伏して泣きければ〕 この次に原本は

　俱に悲しむ戸浪は立寄、「最前にナ、連合の身がはりと思ひ付いた傍へ行て、お師匠樣今から賴み上げますと、いふた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が

碎ける、親御の身ではお道理」と涙添ゆれば「イヤこれ御內證、コリヤ女房も何でほへる」。

〔何でほえる〕 どうして聲をあげて泣くのか、と些か罵り氣味でたしなめたのである。

〔御夫婦の手前もある〕 武部氏御夫婦に對しても遠慮せいといふ意。

〔潔よう首さし伸べ〕 分別を辨へ覺悟して、大人なしく首をさし伸した小太郎のいぢらしい心持に泣かされる。日本武士道精神はかくして家庭教育として完成されて來た一例である。

〔利口な奴。……九つ〕 「利口立派」と頭韻を合はせ、「やつ」を三つ疊みかけて押韻し、「奴」を「八つ」にかけてゐる。

〔櫻丸〕 齋世親王と菅公の養女苅屋姬との戀を取持つたことから、菅公流罪の事件を起したといふ責任を感じて自殺した人である。第三段佐太村の段參照。

〔けなりい〕 氣の惡いの轉訛。心にくいほどうらやむ意。うらやましい。

〔伯父御〕 小太郎にとつては櫻丸は叔父にあたる。

〔泣沈む〕 この次に原本には

　歎も洩れて菅秀才、一間の內より立出給ひ、「我に代ると知るならば此悲しみはさすまいに、可愛の者や」と御袖を絞り給へば夫婦ははつと、俱にひたする有がた涙、「序ながら若君樣へ御土產」と松王つつ立ち「申付た用意の乘物早く〳〵」と呼ばはるにぞ「ハッ」と答へて家來共御目通に昇据ゆる、「早御出」と戸を開けば菅丞相の御臺所「ノウ母樣か」「我子か」と御親子不思議の御對面、源藏夫婦橫手を打ち、「方々と御行方尋ねしにいづくにか御座なされし」「サレバ〳〵、北嵯峨の御隱れ家、時平の家來が聞出し召捕に向ふと聞き、某山伏の姿と成り危い所奪取つたり、急ぎ河內の國へ御供なされ、姬君にも御對面、コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入れ、野邊の送り營まん」「アイ」と返事の其中に戸浪が心得抱てくる、死骸を網代の乘物へ、乘せて夫婦が上着を取れば、哀れや內より覺悟の用意、下に白無垢麻社衍、心を察して源藏夫婦「野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、我々夫婦が代らん」と立寄れば松王丸「イヤ〳〵是は我子にあらず菅秀才の亡骸を御供申す、いづれも門火〳〵」と門火を賴み賴まるゝ、御臺若君諸共にしやくり上たる御涙

冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子をあへなくも、散りぬる命、是非もなや、あす夜たれか添乳せん、らむ憂る目見る親心、劍と死出の山けこへ淺き夢見し心地して、跡は門火にゐひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

鑑賞批評 先づ措辭の方面から見る事にする。淨瑠璃は言ふまでもなく謠物である。從つて口調の滑らかさを貴ぶ。で、全體が大體七五調を以て書かれてゐる。冒頭の「一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、敎へる人に習ふ子の云々」といふのは、全く七五調である。又、言葉の所も、「草葉の蔭で小太郎が聞いて嬉しう思ひましよ、持つべきものは子なるとは、あの子の爲によい手向云々」といふあたりも全くの七五調をとつてゐる。よし、また七五調ではなくとも、一種のリズムを以て、調子よく、すら〳〵と滑らかに書かれてゐることは一讀直ちに氣の附く所であらう。全課は殆ど問答體で出來てゐるが、地の文には調子の上からも、用語の上からも、非常苦な苦心を拂つてゐる。「一字千金、二千金、三千」の、千、二千、三千の重用、「器用不器用淸書を、顏に書く子と手に

書くと、人形書く子は頭掻く、教ゆる人は取分けて、世話をかくとぞ見えにける」の「かく」の連用などそれである。かうした點はまだ〳〵多いから、語釋に當つては一應の注意を與へるべきであらう。そして又、かうした句の解釋は、調子に重きを置いて、言葉そのものの意味には大した重點を置いたものではないから、餘り言葉の意味に拘泥しては文意が却つて混亂することも注意されたい。內容としては、武部源藏夫婦の一筋な忠義心が心を打つ。折から寺入した小太郎を身代りにして、その贋と現れたら、「松王めを眞二つ、殘る奴ばら切つて捨て、叶はぬ時は若君もろ共、死出三途の御供」と覺悟はしても、小太郎の母が、小太郎迎へに來たらどうしようと惑ふ、そこに流石に弱い人情がある、それも、斬つて捨てようと決心する、が、忠義の爲とはいへ、罪もない人達を害める事に、人間愛は呵責される。「弟子といへば我が子も同然、さ、今日に限つて寺入りしたは、あの子が業か、母御の因果か、報はこちが火の車、追つ附廻つて來ませう」と妻が歎くと、源藏も「すまじきものは宮仕へ」と、涙ぐむ。この一言は萬斛の情をたゝへて讀者——否聽者の腸をかきむしらずにおくまい。かうした夫婦の忠義の心に搖すぶられた讀者の胸は、次いで、春藤玄蕃、松王丸の出現、その毒々しい、傍若無人の言動は讀者の憎しみをあふると共に反射的に源藏夫婦の忠義心を強く感銘させる。そして、最後に松王丸の登場、その意外な告白、小太郎の母の悲歎は、松王夫婦の苦肉の計、忠魂が源藏夫婦以上に強く激しく讀者を打つて、殆ど慟哭せしめずにおくまい。松王の「菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ、推量あれ源藏殿、幹がなくば何時までも、人でなしと言はれんに、持つべきものは子なるぞや」といふに至つて、誰か彼の苦衷に涙なき者があらう。それに續いて松王の妻千代の悲歎、人の親の心を赤裸々に吐露して讀者をしてたゞ斷腸の思あらしめるではないか、それを抑へて松王が、小太郎の最期の樣子を問ふ、「……定めて最後の節、未練な死を致したで御座らう」「いや、若君菅秀才の御身替りと言ひ聞かしたれば、潔よう首さし伸べ」「あの逃げも隱れも致さずにな。」「につこりと笑うて」「むゝ〳〵、出かしをりました利口や奴、立派な奴云々」に至つて、荒くれた顏に流れる涙をのごへもあへず、苦しい笑を笑ふ有樣が現前

する、かくて、讀者の感情は最高調に達し、その涙を絞つてこの一場を終るのである。彼等の忠魂は、かくて、讀者の胸に、涙に淨化されて、何時までも〳〵鼓舞激勵の響を傳へてゐる事であらう。全體を一つの劇として見た時、その構成の手法もよく波亂を重ね、抑揚に富み、讀者をぐん〳〵最高調點に引きづつて行く手際は、並々ならぬもののあるのを認めずにをられない。

參考

◇本課(寺子屋段)登場人物。

武部源藏(菅公に元仕へた者寺子屋の師匠)。戸浪(源藏の妻)。松王(菅公の恩顧をうけた白太夫の子。時平公の舍人)。千代(松王丸の妻)。菅秀才(菅公の子。八歳)。小太郎(松王丸の子)。春藤玄蕃(時平の家來)。

影となつて現れる人物。

菅原道眞(右大臣、大宰權帥)。藤原時平(左大臣)。櫻丸(白太夫の子。齋世親王に仕ふ。小太郎の叔父)。

◇「菅原傳授手習鑑」の全梗概。

一段(通稱大內、加茂堤、傳授、築地)

(內裡)渤海國の使僧天蘭敬、日本皇帝の繪像を求めに來朝、偶々帝御惱のため、逆心ある左大臣藤原時平自ら帝に代つて描かせんとするが、道眞はこれを諫止し、御見舞に參內の皇帝齋世親王をこれに代へんとの敕許を得る。道眞は筆道の奧義を後繼者に傳授せよとの敕命により、七日の潔齋をすべく退下。(加茂堤)御惱平癒の祈願に齋世親王、道眞の名代左中辨希世、時平の名代三善清行が社參。齋世親王の舍人櫻丸は女房八重と謀り、道眞の息女刈屋姫と親王との戀の媒介をし、道眞の舍人梅王丸、時平の舍人松王丸兄弟を欺き去らしめ、牛車の中に二人を逢はせるが、清行等に發見される。親王と姫はその場を落ちのび、櫻丸は行方を尋ねる。(道眞館)希世は筆道傳授を受けんとの野望を抱くが、以前不義の科で勘當された武部源藏が召出されて、傳授の卷を與へられる。內裡よりの俄のお召に參內せんとする道眞の冠が落ちる。(門前)加茂堤より行方知れぬ親王と刈屋姫との情事から道眞は謀叛と言ひ立てられ遠島と決つたので、清行等に追はれて歸館、そのまゝ押籠めとなる。梅王と計つて源藏夫婦は密に一子菅秀才を盜み出して立去る。

二段(通稱道行、汐待、道明寺)

(道行詞(ことば)の甘替(あまかへ))櫻丸は飴賣に身を窶し、親王と刈屋姫を荷箱に隱し、姫の實母で道眞の伯母なる覺壽の住む河

内土師の里を指して道行。道眞遠島と決し、津の國安井の濱に風待ちすると聞いて急ぐ。(安井の濱)警固の士判官代輝國の情により道眞は覺壽の許を訪れることとなる。親王、刈屋、櫻丸が駈つけて嘆く。土師の里から刈屋の姉立田が迎へに來るので、刈屋は姉と土師へ、親王は櫻丸を伴うて都へ立別れる。(土師の里)母の覺壽は道眞への義理から刈屋を折檻する。姉娘立田の聟宿禰太郎とその父土師の兵衛とは時平に内通し、一番雞を早鳴きさせ贋の迎へを以て道眞を連れ出し、暗殺せんと企んでゐるが、立田が知つて諫めるので、これを殺して池に沈め、雞を池上に浮べてときを作らせ、贋迎へを差立てて道眞を拉し去る。立田の屍が發見され、覺壽は下手人を宿禰と知つてこれを刺す。道眞が自ら形見として刻み遺した木像が種々の奇瑞を現して贋迎へが暴露し、道眞は輝國に護られ、覺壽、刈屋と悲しく訣別する。

三段(通稱車場、賀の祝)

(土手の並木)御臺の行方を尋ねる梅王は、櫻丸と出逢つて不運をかこつ所へ、吉田に參籠の時平が舍人松王等を先立てて來かゝるので、梅王、櫻丸は行列を阻まうとするが、時平の威に打たれて事を成し得ず、兄弟は恨を遺して別れる。(佐太村)三つ子の父四郎九郎は道眞の下屋敷を預り、愛樹の梅、松、櫻の手入れに日を送つてゐるが、道眞公の遺言により今日より白太夫と改名し、七十の賀の祝をしようと、兄弟の相嫁千代、お春、八重を招き、庭の梅、松、櫻を兄弟によそへて祝宴を張る。八重を伴ひ、白太夫が氏神に詣でた跡へ梅王と松王とが來るが、日頃の意趣が發して喧嘩となり、誤つて櫻の木を折つて了ふ。白太夫が歸るので松王は勘當されたいと願ひ梅王は筑紫への旅立ちを許されたいと訴へる。父は怒つて兄弟を追ひ歸す。納戸に隱れてゐた櫻丸が出て、己れの戀の取持ちが道眞公に禍した責を負うて父の前に自害する。女房八重も跡を追はうとするが、樣子を窺ふ梅王夫婦に止められる。白太夫は道眞公の跡を慕うて筑紫へ立つ。

四段(通稱配所、天拜山、北嵯峨、寺小屋)

(配所安樂寺)靈夢によつて道眞は白太夫を伴うて安樂寺に赴き、飛梅の奇瑞を見る。梅王丸もこゝに下つて來て時平の刺客鷲塚平馬を捕へ、時平の陰謀を知る。道眞は激怒し、梅ヶ枝を折つて平馬の首を刎ね、自らは雷となつて帝都を守護せんと神風を起し、火焔を吐いて飛去

る。(北嵯峨隱家)御臺所はお春と八重にかしづかれて世を忍んでゐるが、危險を感じ、法性坊の阿闍梨に隱家を求めんと、お春を走らせた後へ、時平方の侍が襲來し、八重は防戰して死ぬ。突如山伏が現れ、御臺所を奪ひ脫走する。(寺小屋)本課採錄。

五段

(大内)内裡に天變が頻りに起るので、法性寺の阿闍梨が召されて紫宸殿に修法が行はれる。齋世親王、刈屋姫、菅秀才は輝國に伴はれてひそかに參内、法皇への取なしを乞ふ。時平一味はこれを知つて襲ふが、雷の爲に希世、清行は死ぬ。櫻丸、八重の靈が現れて時平を惱まし、遂にこれを殺す。松王、白太夫、梅王も來り會し、菅秀才は菅家相續を許され、道眞の靈は大自在天神と崇められる事となる。

一　知と愛

西田幾多郎
（善の研究）

扱方　作者は冒頭に於て「知と愛とは普通に全然相異なつた精神作用であると考へられてゐる。然し、余はこの二つの精神作用は決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。」といふ、そして本課はこの知と愛との全く同種の精神作用である事を論じた哲學的、心理學的小論である。その推論の正確で、説明には種々と比喩を持來つて理解を助けてゐるので、非常な高級な論ではあるが、讀者は割合に苦勞なく所論を理解出來ると思ふ。といつても、何にしても説く所は人間の精神作用に關する事であり、極めて深遠な境地を論じてゐるのであるから、よく精神を鎭め、所論に從つて思索の迹を綿密に辿らないと、その所説を理解する事は出來まい。で、これは大體その推論の順序を説明し、結論をはつきりと摑ませ、思を潛めて熟讀翻思せしめねばならない。かうした教材によつて、生徒の思考力を發達せしめてやる事を心がけたい。

教授

作者

西田幾多郎　ニシダイクタラウ

哲學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。明治三年八月、石川縣に生れた。明治二十七年、東京帝國大學文科哲學科を卒業し、石川縣立中學校教諭となり、爾來第四高等學校、學習院、各教授、京都帝國大學文科助教授を經て、大正二年京都帝國大學教授に進み、同年文學博士の學位を授けられた。現在は同大學の名譽教授である。我が國に於ける哲學界の重鎭で、その哲學は世に西田哲學と呼ばれてゐる。善の研究、思索と體驗、自覺に於ける直觀と反省、意識の問題、道德と藝術等の著がある。

引用書

善の研究――西田幾多郎著。大正十年三月、東京、岩波書店發行。非常に一般に普及した本で、昭和六年四月には既に百七十五版發行された。氏が第四高等學校教授時代に筆を執つたものといふ。尙本課は第四編宗教の部の第五章であるが「此文はもと此編の續として書いたのではなく、獨立のものとして書いたのであるが、此處に附加しても意味に於て不都合はあるまいと思ふから入れることとした。」と斷り書がしてある。

語釋

〔知〕　知ること。知覺。知識。心理學的には、一切の認識的性能、または作用であるといふ。哲學的には、感覺に訴へられないものを表象する主觀の能力であるといふ。尙本課に説明されてゐる。

〔愛〕　なさけをかけること。かはゆがること。キリスト教では、神が人類に幸福を與へること、他の人類を兄弟と思つてかはゆがることとしてゐる。尙本課に説明されてゐる。

〔眞相〕　眞實のありさま。

〔妄想〕　又、もうざう。佛教語で、みだりな想ひ。正しくない想ひ。

〔臆斷〕　おしはかつてきめること。

〔主觀的〕　客觀的の對。自己を基本として觀察すること。「主觀」は、ものそれ自身の意。哲學的には Subject 認識作用乃至情意作用の主體で、對象を認識し思惟するものをいふ。尙本課に説かれてゐる。

〔純客觀〕　純粹なる客觀。客觀そのもの。「客觀」はかつくわんとも訓む。哲學的には Object 自己以外の物。意識の目的物。主觀卽ち自己の對象となる一切の外物。主觀の對象となるものであれば、物的と心的、實在的と觀念的たるとを問はず客觀である。尙本課に説かれてゐる。

〔天文――の學〕　Astronomy. 天體の本質、運行、大いさ、距離、他天體に及ぼす影響等、天體に關する事項を研究する學問をいふ。

〔地質の學〕　Geology. 地殼の成立、地層の構造、地殼の變動に伴なふ水陸分布の變異、その他地球上の變動沿革などを研究する學問をいふ。一般地質學、動力地質學、岩石學、鑛物學、應用地質學、地史學、層位學、構造地質學、古生物學等の諸部門に分れてゐる。

〔自然法則〕　自然界の一切の事物を支配する原因、結果の普遍的、必然的法則。

〔考究〕　考へ、究めること。

〔現象〕　表面にあらはれて見えるかたちをいふ。哲學的には、吾人に感知せられるものの形象。主觀に映ずる相。本體の對である。

〔佛陀〕　Buddha. の漢音譯。略して佛といふ。覺者、知者の意。ほとけ。佛法。佛法の開祖を「釋迦牟尼」と

いふ。「牟尼」は寂默、智者の意。彼は印度迦毗羅衞國に住した刹帝利種の一種族の名。世界四大聖人の一人。印度ヒマラヤ山の南麓の迦毗羅城主淨飯王の子、母を摩耶といふ。二十九才(異說あり)の時宮殿を遁れて苦學苦行し、三十五才(異說あり)菩提樹下に坐して正覺を得、鹿苑、祇園、王舍城、竹林等に法を說くこと四十五年、西曆前約四八五年(或は四八七)拘戸那揭羅の沙羅雙樹下で八十才で入滅。(或は西紀前四六六誕生、三八六年入滅)

〔觀破〕 觀察し破ること。看ぬくこと。看破。

〔境遇〕 遭遇した運命又は事情。まはりあはせ。

〔直覺〕 直觀。推理又は經驗等の思惟作用によらないで、對象を直接に知得し識別すること。

〔抽象的概念〕 「抽象的」は箇々別々の具體的觀念から共通した屬性を抽出して綜合したありさまをいふ。「概念」は多くの觀念中から共通の要素を抽象し、綜合した一つの新しい觀念。特殊的具象に共通する屬性を概括して得たもの。

〔維持〕 つなぎもつこと。もちこたへること。

〔對象〕 總て精神作用の目的となる事物、即ち欲求又は認識の目的物。

〔人格〕 人がら。ここは心理學上でいふ知、情、意の主體をいふ。倫理學上では道德的行爲の主體で、自覺的・統一的、理想的の特性を有する精神的存在をいふ。

〔哲人〕 ここは哲學者の意。哲學は、人生世界の具體的、現實的な問題を確實嚴密な知識批評によつて根本的に解決する學問である。

〔捕捉〕 とらへること。

〔分析〕 複雜な物事を各個に分けて明らかにすること。

〔推論〕 理を推して論ずること。

〔鑑賞批評〕 先づ冒頭に普通には全然別種の精神作用と思はれてゐる知と愛との二作用は、實は全く同一の精神作用であると、結論を與へておく。そして、その同じな理由を以下に說明して行くのである。で、知の精神作用に就いて、知とは主觀を離れてものゝ眞相に合一する作用であるといひ、又、愛の作用も、自他合一の作用であると說く。で、知る爲にも愛さねばならず、知る事の深さが增すと共に愛は益々濃やかになるものであると說く。こゝに至つて、知と愛とは同じ精神作用であり、その間

に密接な關聯のある事が明らかとなつた。が、更に論を進めて、この兩作用は、それ〴〵獨立して、因果の關係を保つものではなく、知は愛、愛は知と分離すべからざる作用であることを說明し、普通に愛は感情で純知識と區別されねばならぬとの考を論駁し、たゞその對象を異にする所から愛と知との別が生じて來るとの一家の見を述べ、最後に再び知と愛との相關に言及して一文を結んでゐる。その推論の過程には些かの澁滯もなく、混亂もない。一糸整然として、讀者をして惑ふ事なく自分の思索の迹に追隨させて行く。その說く所は極めて高遠ではあるが。所々に卑近な事例を擧げて理解を助けてゐるので、全體の論旨は一層容易に把握される。その叙述も簡明卒直に、ぐん〴〵中心に斬込んで行く味はひは、利刄を以て亂麻を斷つやうな痛快ささへも覺えしめる。どこまでも鋭い頭腦から生れた文章であると感ぜしめられる。それはともかく、知と愛とは我々の生活に最も近い精神作用である。その本質をはつきりと知つておく事は、自他の言動の批判ともなり、自他の精神活動を統制する原動力ともなる事と思ふ。更にまた、かうした教材によつてその思索力を養ふ事は、精神生活の向上にとつて、不可缺の事である。かうした點を生徒の上に實効あらしめるやう心がける事も忘れてはならないと思ふ。

一二　新島守

（增鏡）

扱方　增鏡の一節、承久の亂の顚末を記した一條である。仲恭天皇の御卽位から、官軍と北條氏との交戰、官軍の敗北から、後鳥羽院の隱岐遷幸と隱岐における上皇の御生活までを記したもので、如何に亂離の世とはいひながら、水無瀨の雅遊も春の夜の夢と消えて、隱岐の孤島に波風をわび給ふ御身の上とかはり果て給ふたことは、千載の下、なほ涙あふるる物語である。一天萬乘の貴き御身が、かくも悲慘な末路を經られた事に對して、我々は國民としての義憤を禁じ得ない。平家物語や源平盛衰記が鎌倉時代の產物であるのに對して、太平記とほぼ同時代に生まれた吉野時代の特異の史書として、その文章に親しましめると共に、この義憤を喚起せしめ、國民的奉公心の鼓吹につとむべきである。卽ち、三上皇の悲慘な御境遇を强調する事によつて、反對的に讀者の國民意識を昂むべきである。

教授

引用書

增鏡――「おどろの下」より「月草の花」まで全二十章。世に大鏡、水鏡と併せて三鏡の名がある。「治承四年、後鳥羽院の卽位し給うてから、元弘三年、後醍醐天皇が隱岐から御還幸になるまで十五代百五十年間の編年體の歷史物語である。この書の成立に就いては一條兼良作といふ說もあるが、未だ從ひ難いのであつて、たゞ應永本の奧書によつて、元弘三年から永和二年までの四十八年間に、或人によつて書かれたといふことのみはたしかであらう。增鏡は、これを內容の上から見れば、承久の亂と元弘の亂といふ二つの事件を中心とした皇室と執權北條氏との交涉史、卽ち公家と武家との爭鬪史である。かくの如く皇室對幕府の爭鬪史である爲に、公家でありながら武家に接近した西園寺家の榮華を極めた點、武家が皇室の反武家的精神を幾分でも弱めるために計らつた兩統迭立問題や、攝家將軍、親王將軍の如きは委曲を盡してゐるが、武家と公家との融合一致した元弘の亂は、それが歷史としては重大な問題でありながら、この書の精神に觸れることが少かつたために筆をば省いたのであるとも思はれる。その文章は源氏物語を摸した擬古文であつて、優麗な點はあるが、力が弱く描寫も生き〳〵としてゐない。嵯峨の淸源寺で老婆が語ることになつてゐるのは大鏡等にならつたものであるが、大鏡のやうにそれ等の人物が躍動してゐない。」（國文學史總說）

語釋

［四月二十日］　「――承久も三年になりぬ。四月二十日――」

［帝おりさせ給ひ云々］　順德天皇（第八十四代）が御位を四つにならせられる春宮卽ち御子仲恭天皇（第八十五代）にお讓りになつた事をいふ。仲恭天皇は世に九條廢帝と申し上げる。「春宮」は東宮に同じく、禮記に「太子宮曰ニ東宮ニ」とあつて、皇太子の宮殿をいふのであるが、轉じて皇太子を稱し奉る。

［近頃皆この御齡にて云々］　後鳥羽天皇は四歲で踐祚され、土御門天皇亦四歲で受禪し給うて、いづれも榮えさせ給うたから、この御門（仲恭天皇）の御行末もまためでたい事であらうの意。「受禪」は先帝の位を新帝がゆづり受け給ふこと。先帝からいへば讓位である。「めでたし」は愛づべくあり。賞すべし。慶賀すべしの意。「かし」は語の末尾につけて意を强める語。

［院號］　退位の帝又は皇太后、准母等に附する尊號。

［新院］　順德天皇。

［御兄の院］　土御門院の御事。第八十三代の天皇。

［父帝］　後鳥羽院（第八十二代）。「父帝」は順德天皇の御父君である後鳥羽院を指す。

［聞えさする］　申し上げられた。「さする」は尊敬を表す助動詞「さす」の終止形。

［家實］　藤原氏。關白近衞基通の子。累進して關白太政大臣從一位に至つたが、この年（承久三年）四月二十日順德天皇の御讓位によつて關白を罷めた。七月八日に攝政となり、十二月に至つて罷め、翌年正月太政大臣に任ぜられた。仁治二年十一月出家、法名圓信。二年十二月薨去、年六十四。

［おとど］　大臣。「おほとの」（大殿）の略轉。貴人の邸宅の尊稱から轉じて大臣又は公卿などの尊稱となつた。ここは大臣。

［關白］　天子を輔佐し、百官を總べて萬機の政を行ふ者をいふ。天下の萬機を關り白す義。多くは大臣が補任せられる。光孝天皇の時、藤原基經が、一切の奏文を御覽に供する前に、まづ關白せしより起つて職名と

なつた。

〔道家〕 藤原氏。後京極良經の第一子。土御門、順德の兩朝に仕へて從二位左近衛大將となり進んで左大臣となる。承久元年征夷大將軍源實朝薨じて繼嗣絶えた爲、北條義時は道家が源氏に連姻ある故、その子賴經を迎へて將軍とした。道家は三年四月仲恭天皇卽位の時その姉、東一條院が順德天皇の后で、仲恭天皇の御母であるから攝政となり、太政大臣氏長者となつた。後、關白となり、後堀河、四條、後嵯峨の數朝に歷仕して、建長四年薨去、年六十。その日記を玉蘂といふ。

〔攝政〕 天皇御幼少の時、天皇に代つて萬機の政を總攬する者、女帝の時にも置く。大臣が兼任し、關白と似てゐるが、また異なる所もある。天皇に代つて宸等の宣命を書き、敍位、除目、申文に名字を書かず判を用ひるのが例である。淸和天皇の時、外祖良房が人臣として始めて攝政となり、次いで陽成天皇の時藤原基經から職名となつた。明治維新の始、廢官となり、その後明治二十二年皇室典範が發布されるとともに再びこの官を置かれたけれども、昔時のものと少しその趣を異にしてゐる。

〔あづまの若君云々〕 當時の將軍賴經のこと。將軍賴經は攝政道家の子である。賴經は幼名三虎、建仁元年三月權大納言に進んで四月これを辭し、寛元二年將軍職を子賴嗣に傳へ、明年薙髮して行智と號した。康元元年八月薨去、年三十九。東は東國の稱。日本武尊が碓氷峠に登つて、その妃、弟橘媛を追懷し給うて「吾妻はや。」と三嘆遊ばされた故事から出てゐる。

〔院の思し構ふる事〕 後鳥羽院の計畫して居られること、卽ち北條氏追討の御企をいふ。

〔忍ぶとすれど云々〕 御はかりごと(北條氏追討の)を內々に進めようとなさるけれど、その秘密のはかりごとが次第にあらはれ聞えて、關東の北條氏の方でもこれに對する用意をしてある樣子らしいの意。ひがしざまは關東卽ち鎌倉幕府方、北條氏を指す。「すべかめり」は「すべくあるめり」の約。「めり」は物事の狀態の、その樣子に見える、又、そのやうに見えると推量していふ助動詞。

〔あづまの代官〕 關東から遣した京都守護のこと。京都警衛の任に當つて洛中及び近畿を守護し、兼ねて政務を掌つた役。文治二年賴朝が始めて藤原能保をこ

れに任じた。

〔伊賀の判官光季〕 佐藤朝光の子。北條氏の緣者。建保三年父の職をついで左衞門尉、檢非違使となる。故に伊賀判官と稱した。承久の初、京都守護となる。三年、後鳥羽院北條氏を討たうとして光季を召されたが行かなかつた爲官軍に攻められ、火を放つて自殺した。東鑑に、「承久三年五月大夫尉惟信、山城守廣綱、廷尉胤義、高重等、奉二勅定一、引二卒八百餘騎官軍一、襲二光季高辻京極家一、合戰緯火急。而光季竝息壽王冠者光綱自害云々。」とある。

〔かつ〳〵〕 かつ〳〵しの意で、然るべきの義。ここでは、まづまづといふほどの意。

〔御勘事〕 勅勘のこと。勘事は勘當のこと。卽ち尊長の旨に違つた爲、緣を斷たれその許を追放される意。後鳥羽院が光季を召されたけれども、參內しなかつたので、勅勘あつて誅せられたのである。前項參照。

〔御方に參るつはものども〕 院の御方に參つてゐる兵ども。

〔いみじう〕 「いみじくの」音便。大層、非層に、甚だ。

〔さるべくて云々〕 然るべくては。さうあるべき氣運となつたのならば。上皇の御憤にふれては、すべきやうもなく、然るべき宿業でこの身の滅亡する時になつたとは思ふけれどもの意。「あなれ」は「あるなれ」の約。「思ふものから」は思ふけれども。思ひはするものの。

〔はかなき樣云々〕 おめ〳〵と犬死のやうなつまらないことはしないといふ意。「はかなし」はたのみにならぬこと。もろいこと。ここはくだらないくらゐの意。

〔おほやけと聞ゆとも云々〕 官軍とは申しても、後鳥羽院御親ら軍勢を率ゐてお出でになるわけでなく、君側の佞臣どものすることであるから、おめ〳〵と引退くわけにはいかぬの意。「おほやけ」は公、大官の、義朝廷又は天皇のこと。「みづからし給ふ」は天皇が御親征あらせられること。

〔且は我が身の云々〕 その上に、この戰で我が身の運だめしをやらうといふ心になつて。「我が身」は北條義時。時政の子で江馬小四郎と稱した。深沈膽略、度量人に過ぎ、相模守となり、父に代つて執權となり、和田氏の亂を鎭めて侍所別當となつた。實朝が誅せられた後、藤原賴經を迎へて將軍とし、承久の亂後は、

その威勢天下を壓した。元仁元年歿。「宿世」は佛教語で生まれる前の世、前世をいひ、轉じて前世の宿緣、さきの世の約束をいふ。

〔時房〕 時政の子。承久の亂後、六波羅南方を鎭し、伊勢守護を兼ねた。義時の歿後鎌倉に還つて泰時と同じく執權連署となる。修理大夫を兼ね、正四位下に昇進して仁治の初に歿した。

〔泰時〕 義時の子。承久の亂後、元仁元年執權職を嗣いだ。寛仁大度、人主となる器量があつて德望甚だ高かつた。寛喜中、諸國大いに飢饉であつたから、泰時米穀を發して貧民を救つた爲、民が仰慕すること慈母の如くであつた。仁治三年歿、年六十。

〔雲霞のつはもの云々〕 雲や霞のたなびいたやうに群り聚つた多くの軍兵を率ゐて京都に上させ。

〔たなびかす〕「たなびく」は雲、霞などの薄く長く横に引くこと。ここでは、前に「雲霞」といつたから、その緣語として用ひたので、ひきつれての意。

〔おのれ〕 もと自稱代名詞であるが、轉じて對稱代名詞に用ひ、「その方」といふ程の意となつた。ここもその意。

〔思ふ所多し〕 いろ〳〵の考がある。次の「ほいの如く云々」はそのいろ〳〵の考をのべたのである。

〔ほいの如く清き云々〕 まづ武士の本懷通りにいさぎよく戰死するがよい。華々しく戰つて死せよの意。ほい(本意)はまことの望。まことの心。

〔人にうしろ見えなんには云々〕 若しも戰に負け退いて、人に後指をさされるやうな卑怯な擧動があらうならば、この親の顏を二度と見てはならぬ。

〔今を限りと思へ〕 今を今生の別と思へ。最後の別と思へ。

〔賤しけれども義時云々〕 微賤であつてもこの義時は君に對し奉つては(君のために盡すに於ては)うしろ暗い心は毛頭ない。「うしろめたき心」は後目痛い心の義。うしろぐらい惡いことをして、他人に顏向けの出來ないやうな場合の恥づかしい、自分から責められるやうな心。

〔義時〕 北條第二代の執權。父時政と共に賴朝に親近せられ、相模守執權となつた。賴家を廢し比企、和田兩氏を滅す等も多くその計に出た。又公曉をして實朝を殺さしめ、藤原賴經を迎へて鎌倉の主として實權を握つた。承久の役に、後鳥羽、土御門、順德三上皇を流し、仲恭天皇を廢立した。元仁元年六月病を以て出家し法名を觀海と號し即日卒、年六十二。鎌倉法華堂の東の山に葬つた。一說に義時近習のために殺されたともいふ。

〔されば横様の云々〕 それだからはかない最期を遂げるやうなことには決してならない。「横様の死」は横死、天命ならぬ死にかた。はかなき最後。役に立たない拙い死に方をいふ。——犬死をいふ。

〔心を猛く思へ〕 心づよく思つて戰へよ。

〔おのれうち勝つ云々〕 その方が若し戰に打勝つたならば二たびこの足柄、箱根の山をば越えて、鎌倉に歸つて來い、親子うれしい對面をしようの意。足柄は相模國足柄上郡の足柄峠。俗に地獄峠といふ。箱根は足柄山南方の火山。阪東八州の天險で、世に箱根八里といふ。山中に溫泉があつて七湯の名がある。

〔泣く〳〵言ひきかす〕 涙ながらにいひきかせた。

〔誠にしかなり〕 ほんに親子の情としてはもつともなことだ。

〔いと危し〕 甚だ懸念である——十中八九さういふことは得られまい——出來ないであらう。「いと」は甚だ。

〔鎧の袖をしぼる〕 あふれる涙で、鎧の袖も濡れてしぼるばかりに烈しく泣いたの意。

〔かたみに今や限りと〕 互に父子相見ることは今が最後かといふ意。

〔うち出でぬる云々〕 出發した翌日。吾妻鏡に「承久三年五月二十二日卯尅、武州(泰時當時武藏守たり)進ニ發京都一。」「またの日」は翌日。

〔鞭をあげて馳來たり〕 馬に鞭打つて馳せて來た。

〔胸うち騷ぎて云々〕 胸騷ぎがして、驚いて、どうしたと尋ねると。「胸打騷ぎ」は胸の動悸すること。驚き懼れた時の有樣である。

〔軍のあるべき樣云々〕 戰のかけひきや、なにくれの掟(きまり)などは、父君の仰せの通り心得ました。

〔路のほとり〕 途上。道中。

〔はからざるにかたじけなく云々〕 思ひがけなく恐多くも後鳥羽院親ら三軍を率ゐられて先立たれ、錦旗を揭げられいかめしく臨幸なさるのに出會ひました場合には、その時のかけひきはどう致しませうかの意。

「鳳輦を先立て」は上皇親ら三軍を率ゐられること。

鳳輦は天子の御乘物。屋形車の輪なしに昇いで行くもの。その上に金鳳を立てるのでかういふ。又鸞輿ともいふ。「臨幸」は天子がみゆきしてその場に臨みたまふこと。「參りあへらば」は參りあひたらば、出會したならば。遭遇した場合には。

〔進退いかゞ云々〕　我々の態度は如何に致すべきで御座いませうか。進退はかけひき。態度。

〔侍る〕　もと人の傍に在るを敬つていふ語であつたが轉じて「あり」「をり」の敬語となり、又單に對話上の敬語として「ございます」などの意に用ひる。

〔とばかりうち案じて〕　暫くの間考へて。

〔賢くも問へる云々〕　よくもまあ尋ねてくれたぞを のこ」は男子で泰時を指す。よくまあその方は尋ねたものだわいの意。

〔その事なり〕　その事である。さあその事だといふ程の意。

〔正に君の御輿に云々〕　たしかに後鳥羽院の御親征の場合には御乘輿に向かつて弓を引くことはどうであらうか、恐多いことである。それほどの事のある時は、兜を脱ぎ、弓の弦をきつて、ひたすら恐惶して罪を謝し、身命の處置をお任せ申すべきである。かしこまりを申す」は恐惶して罪を請ふ。　恭順の意を表す事。

〔軍兵を賜はせば〕　たゞ軍兵だけをお遣しになるならば（後鳥羽院は都にとゞまつてお出でになりながら）。

〔言ひも果てぬに云々〕　泰時は、その父の言葉の終りきらぬ中に急いで出立してしまつたの意。

〔思しまうけつる〕　かねて關東から討手が上るのを承知して待受けてゐたこと。

〔宇治、勢多の橋〕　共に東國から京都へ入る要所。宇治橋は昔山城の久世、宇治の郡界であつたが、今は久世郡宇治町に屬してゐる。勢多橋は近江栗太郡。前者は宇治川に、後者はその上流の勢多川に架る。

〔橋も引かせ〕　宇治、勢多は橋を取拂はせての意。

〔かたきを防ぐべき云々〕　敵軍を防ぐ用意が竝々でない。「心ことなり」は常とは違つて格別であるの意。

〔公經の大將一人のみなん云々〕　「ひとりのみなん」は「一方ならずあづまを云々」に續く文脈である。公經は藤原實宗の子。承久元年正二位權大納言に累進、公經の女は道家の妻となつて賴經を生み、賴經は鎌倉

の將軍であるから、公經は將軍の祖父に當る。又、公經の北の方は一條中納言能保の女、能保の北の方は源義朝の女で、即ち賴朝の妹である。だから、公經からいへば、妻の母が賴朝の妹に當る。勢を恃んで驕恣甚だしいため一時後鳥羽天皇の怒に觸れて朝參を停められた。承久の亂に關東へ內通して事を敗らせた。後堀河天皇即位後、內大臣に任じ、貞應元年八月從一位太政大臣に拜せられた。翌年これを辭して寛元二年八月薨、年七十四。鞆繪大將、また西園寺入道前太政大臣とも稱せられ、西園寺家の祖。

〔御うまごの事も云々〕　公經の孫賴經が將軍になつてゐるから、關東に心引かれるのも尤ものことである。北の方即ち公經の妻は、能保の女であるといふ意。大臣、大將、公卿等の妻を敬稱して北の方といふ。おくがた。簾中。

〔一條中納言能保〕　藤原氏。丹波守通重の子。義朝の女を娶つて權威があつた。正二位權中納言に至つて出家し、保蓮と號した。建久九年十月薨、年五十一。

〔その母北の方は故大將の云々〕　公經の妻の母である能保の妻は故大將賴朝の兄妹（賴朝の妹が能保の妻）であるから の意。

〔さしいらへ〕　返事をいふ。こたへ。「さし」は接頭語。

〔院の御心の輕きこと云々〕　後鳥羽院が輕忽に事を起しなされたことをあやぶまれた、不安に思はれたといふ意。

〔七條〕　藤原殖子。修理大夫信隆の女。高倉天皇の妃、後鳥羽院の御母。建久元年四月從三位に敍せられて、同日准三宮。次いで院號を賜はつて、元久二年十一月御出家。安貞二年九月薨、御年七十一。「ゆかりの殿ばら」は（ゆかりは緣故）緣つゞきのある高貴の人々の意。

〔坊門大納言忠信〕　內大臣藤原信淸の子。七條院は信淸の妹であるから、忠信からいふと七條院は叔母、後鳥羽院は從兄に當る。

信隆——信淸——忠信
　　└—隆淸——淸親
└—七條院——後鳥羽院

累進して建保六年大納言に任ぜられた。承久の亂に捕へられ鎌倉に送られて將に殺されようとしたが、政子に哀訴して特に釋された。京都に歸つて僧となり、聞

もなく義時の爲に越後に流された。

〔尾張中將清經〕 この當時、清經といふ人はない。尊卑分脈に參議隆清の子清親といふのが尾張中將とあるから、清親の誤であらう。清親からも七條院は叔母後鳥羽院は從兄である。

〔中御門大納言宗家〕 中御門中納言宗行の誤。中御門宗家は後鳥羽天皇の文治五年四月年五十一で薨じた人、故に承久の亂には關係ない。承久軍物語、東鑑、保歴間記等皆中納言宗行とある。宗行は島大辨行隆の子。建保六年權中納言となる。承久の亂後捕へられて鎌倉に送られ遠江菊河驛の逆旅の柱に「昔南陽縣菊水汲下流而延齢、今東海道菊河、宿西岸而失命」と題して駿河燒津原で殺された。年四十八。これは太平記にも出てゐる。

〔修明門院〕 藤原重子。式部少輔範季の女。後鳥羽天皇の妃、順德天皇の御母。建久九年從三位、次いで從二位。建久元年三宮に准じて修明門院の號を賜はり、三年出家。法名は法性覺。文永元年八月薨、御年八十八。

〔甲斐宰相中將範茂〕 範季の子。即ちその妹が修明門院である。承久の亂後捕へられて、足柄山に終つた年三十七。宰相は參議の唐名。

〔上達部〕 公卿のこと。關白以下、三位以上をいふ。

〔殿上人〕 四位五位の廷臣及び六位の藏人にて清涼殿の殿上に昇ることを聽されたものの稱。陪膳、宿侍その他年中恒例の公事、臨時の雜事等に奉仕するもので、天皇踐祚の後、その人を定めて昇殿を聽し、その名を殿上の簡に書く、これを「ふだにつく」又「仙籍を聽る」といふ。員數は宇多天皇の御宇に二十五人、その後次第にその數を增して百人に及んだ。うへびと。うへのをのこ。雲の上人。雲客。星の位。「殿上人にも數多ありき。」の次に左の一節が省略されてゐる。「御修法ども數知らずおこなはる。やんごとなき顯密の高僧もかゝる時こそたのもしきわざならめ。おのおの心を致して仕うまつる。御みづからもいみじう念ぜさせ給ふ日吉の社に忍びて詣でさせ給へり。大宮の御前に、夜もすがら御念誦し給ひて、御心の中にいかめしき願どもを立てさせたまふ。夜すこし更けしづまりて、御社すごく、燈爐の光かすかなるほどに稚き童の臥したりけるが、俄におびえあがりて、院の御前にたゞまゐりに走り參りて託宣しけり『辱くもかく渡りおはしまし

てうれへ給へば聞きすごし難くは侍れど、一とせの御輿ふりの時、情なく防がせ給ひしかば、衆徒おのれを恨みて、陣のほとりにふりすて侍りしかば、空しく馬牛のひづめにかゝりし事は、今にうらしめしく思ひ給ふるにより、この度の御方人は、えつかまつり侍るまじ。七社の神殿を金銀に磨きなさむとうけたまはるも、もはらうけ侍らぬなり。」と、ののしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。聞し召す御心地、物に似ずあさましう思さるるに、たゞ御涙のみぞいでくる。過ぎにし方悔しう、とりかへさまほし。事、必ずしもみづから思しよるにもあらざりけめど、『責一人』といふらむ事にやと、あぢきなし。中院はあかで云々。」

〔中院はあかで云々〕 土御門天皇は御心に不滿足ながら、御位を退き給うたので、口に出して何事も申されぬけれども、この世のさまを面白くなくおほしめされるから、かやうな今度の御企には別にあづかりなされぬやうであるの意。「すべる」は滑る意から轉じて遜ること。「心やまし」は面白くないこと。「ざめり」は「ざるめり」の約。

〔新院は同じ御心にて〕 順德院は後鳥羽院に御同意にての意。

〔おきて〕 ここは指圖の意。

〔何時の年よりも〕 その年は例年よりも。

〔晴間なくて〕 霽間がなく降り續いての意。

〔富士川〕 東海道第一の急流。甲斐の笛吹、釜無、蘆三州の合したもの。富士郡の西端を過ぎ駿河灣に入る。

〔天龍〕 天龍川。源を信濃國諏訪湖に發し、遠江に入つて磐田、周智の二郡を貫流し、掛塚に至つて遠江灘に注ぐ。

〔えも言はず漲りさわぎて〕 何とも言へぬ程水がみなぎり溢れて、物凄い音をたて。

〔いかなる龍馬も云々〕 どんなにすぐれた馬でも渡すことは難いから。「龍馬」は駿馬のこと。周禮に「馬八尺以上爲龍。」尙書に「帝堯卽龍政。龍馬銜中赤文綠色。」

〔怪しく惱めり〕 非常に難儀した。「怪しく」は常に異なつて、例ならず。

〔君の御武者も出でたつ〕 官軍方の兵士どもも出發した。

〔世の中ひゞきのゝしる云々〕 世の中の人々の騷

動の有樣は言葉にも盡し難く何とも形容が出來ない。

「ひゞき罵る」はがやがや言ひ騒ぐこと。「まねぶ」はそのまゝを語り告げること。形容すること。またまねする意もある。百練抄に「洛中貴賤、東西馳走。」とある。

「遠き世界に落下り」　遠い田舍に逃下りの意。「遠き世界」は單に遠い國のこと。古くは世界を國の意に用ひた。

「いかゞあらんと君も云々」　どうなることであらうかと、後鳥羽院も御心亂れて考へ迷はれた。

「まことのきはになりぬれば」　實際の戰爭に臨むとの意。

「たのもしげなし」　頼みがひがない。

「六月十日餘りにや」　「泰時と時房と亂れ入りぬれば」に續く文脈である。一本には「二十日あまりにや」とある。

「御方のいくさ」　後鳥羽院の身方の軍。

「荒磯に高潮云々」　荒磯に大浪が押寄せて來るやうな勢で泰時と時房が都に亂入したからいはん方なく呆氣にとられて、上下貴賤悉くうろたへあわてて物に突當るほど、迷ひ亂れた。「荒磯」は荒波の打寄せる磯べ。「高潮」は津浪のこと。大浪をいふ。皇帝紀抄に「六月十五日、關東武士亂二入洛中一、官兵等館悉放レ火。」「物にぞあたり」はあわて惑へるさま。狼狽して前後を亂し、物につきあたる程の騒ぎの意。

「あづまより言ひおこするまゝに」　鎌倉の義時からいひよこす通りに。

「二人の大將軍」　時房と泰時の二人を指す。

「謀らひおきてつゝ」　義時の命によつて、亂後の京都を處理した。

「保元のためしにや」　保元の亂に崇德上皇を讃岐に遷し奉つた例に倣つての事ででもあらうか。保元の亂は崇德上皇の御不平と、藤原忠實の子の忠通、頼長の關白爭が原因である。始め鳥羽上皇が美福門院を寵愛する餘、崇德天皇に迫つて、位を美福門院の生んだ近衛天皇に讓らしめなされたが、近衛天皇は早世されたので、門院は崇德上皇の呪詛に出づるとなし、その皇子の重仁親王を措いて後白河天皇を立てられた。そこで崇德上皇は不平に堪へられず、鳥羽上皇の諒闇を機として、白河殿によつて兵を擧げ、藤原頼長、源爲義、同爲朝、平忠正等がこれに從つた。一方後白河天皇に

於かれても、詔を以て源平の諸將を召された。爲朝の長兄義朝及び平忠正の甥清盛等が參候した。義朝清盛は各精兵を率ゐ、夜に乘じて白河殿に攻め寄せた。かくて上皇の軍は破れたのである。戰後爲義は義朝を憑んで降り、忠正は清盛を憑んで降つたが、清盛は命を受けて忠正を斬つた。義朝も父を斬るべき命をうけ大いに嘆き己の功に代へて父の死を宥されんことを請うたが許されず、鎌田政家に害させた。義朝の弟五人も殺された。爲朝は伊豆の大島に流された。上皇は讃岐に遷され給うた。これを保元の亂といふのである。この戰によつて源氏は一族の勇士を多く失ひ、清盛はこれに反して勢望義朝を壓するに至つた。かくして義朝は漸次不平を抱き、やがて平治の亂となるのである。

「院の上、都の外に云々」　後鳥羽院をば都の外にお遷し申さうとの噂があるので。

「女院」　天皇の御母又は女御、内親王等で、特に院號を贈られた御方。ここは後鳥羽院の御母七條院、御后の宜秋門院、承明門院、修明門院、中院の御后陰明門院、新院の御后の東一條院等を指す。

「宮々」　皇子たち。雅成親王は但馬に流され給ひ、頼仁親王は備前に流され給うた。

「所々に思し惑ふ事さらなり」　ここかしこ（外國その他のゆかりの人々の所）に途方にくれて迷はれていられることはいふまでもない、勿論のことだの意。

「本院は隱岐國に云々」　後鳥羽院は隱岐國へお遷りになる筈であるから。隱岐國は出雲の北方日本海に横たはる島。島根縣に屬する。承久三年八月五日御鳥羽院ここに遷幸あり、この地に在ること十九年、四條天皇の延應元年二月、御年六十で遂に崩御せられた。跡は海士郡海士村の刈田山。今、その山腹に隱岐神社があり、後鳥羽院の靈を祠つてある。「おはす」はここはゆく（往）の敬語。「おはします」は一層の敬意を強めていふ。「べけれ」は「べし」の已然形。當然の意を表すもの。

「鳥羽殿」　山城國紀伊郡鳥羽村の離宮。一に城南離宮といふ。應德二年十月、白河天皇が鳥羽の山莊百餘町をトして御殿をお造りになつたのが始めである。

「網代車」　屋形を網代で張つた牛車の一種。網代は檜を薄くへぎ、又は竹葦を網の目のやうに斜に組合はせたもの。四位、五位、中少將、侍從、外衞督佐等の常

用で、攝關、大臣、大納言、大將等は略儀遠行の時に用ひる。

〔怪しげなる〕 麁末な。見苦しい。いやしげな。

〔今日を限りの御ありき云々〕 都の內を歩き給ふも今日限りといふことであれば、あさましく哀に見申したの意。「あさまし」は驚くほどに甚だしいの意。

〔ものにもがなや云々〕 後鳥羽院の以前の御有樣をとりかへしたいと思ふもその效はないとの意。「ものにもがなや」は源氏物語河海抄、箒木の卷の引歌「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思はん。」による。一首の意はこの世の中を再び昔の世にとりかへしたいものだわい、さうして昔の世にあつたそのまゝの我が身と思つて見たい。しかし昔の世にとりかへすことも出來なければ、昔のまゝの我が身と思ふすべもないといふ程の意。「がな」は願望の意を表す助詞。「や」は感嘆の助詞。

〔その日やがて御ぐしおろす〕 その日(七月六日)すぐに剃髮して佛門にお入りになつた。

〔御年四十に一つ二つ〕 後鳥羽院の御年齡は皇年代略記には四十二とある。

〔まだいと惜しかるべき云々〕 剃髮して出家なさるにはまだ早く、御氣の毒に思はれる程の御齡である。

〔信實朝臣〕 右京大夫藤原隆信の五男。正四位左京權大夫となり、出家して寂西と號した。畫に巧でその北野繪卷物は天下の絕品と稱せらる。又、似繪即ち肖像畫に名を得てゐた。文永二年薨、年七十。東鑑に、「承久三年七月六日戊子、上皇自二四辻仙洞一遷二幸鳥羽殿一。八日、上皇御洛飾、御戒師御室道助。先レ之召二信實朝臣一被レ摸二御影一。」承久兵亂記に、「同じき八日、御出家あるべきよし、六波羅より申し上ぐるに、御ぐしをおろさせ給ふ。のりの御諱良然とぞ申しける。太上天皇の玉體たちまちに變じてむげの新ほちとならせ給ふ。信實の朝臣をめして、御かたちをにせゑにかゝせ給ひて、七條の女院へまゐらせ給ひけり、女院御覽じもあへず、御涙を流させ給ひけり。」「朝臣」は四位以上の人の敬稱。

〔同じき十三日に云々〕 皇胤紹運錄に「爲二關東之沙汰一奉レ移二奉移隱岐國一。」「御舟に奉る。」とは御舟に召す、御舟にお乘りになること。「波路を凌ぎ」は波路を押分けて。

〔この世の同じ御身云々〕 境遇の變化が餘りに甚だしいので、きのふとけふと同じこの世の一つの御身とも思はれない。遠島にお遷りになる御有樣は、昔院政をおとりになつてゐた際、御心のまゝに白河、鳥羽、水無瀨等の仙洞に御幸あつて樂みを極められたのに比べて、これが同じ御身とは思はれないの意。

〔いかなりける代々の報〕 いかやうな前世の應報でかかるあさましい目を見る事かと怨めしく思はれる。

〔新院も佐渡國に云々〕 新院即ち順德院が佐渡國へ遷され給うたことは、一代要記に「七月二十日、下二向佐渡國一。」とある。順德院は二十二年間佐渡にましまして佐渡に崩御された。佐渡國は越後の北方、日本海に横たはる島。新潟縣に屬する。順德天皇を御火葬申上げた所は、佐渡國佐渡郡眞野村である。

〔みかどをも云々〕 仲恭天皇は御退位になつて、高倉天皇第二皇子守貞親王の第三御子茂仁が御位に即かれた。御年十歲。これを後堀河天皇と申した。仲恭天皇はこの年(承久三年)四月二十日受禪、七月九日御退位と共に九條邸に渡御せられた。在位七十餘日。御即位の禮も御元服の式も行はれずして廢され給うた。

明治三年七月御諡を上つて仲恭天皇と申上げる。

〔唐土にぞ云々〕 秦の第三世子嬰のこと。史記始皇本紀に「子嬰爲二秦王一四十六日。楚將沛公、破二秦軍一入二武關一、遂至二霸上一使レ人約降二子嬰一。子嬰即係レ頸以レ組、白馬素車、奉二天子璽一、降二軹道傍一。」唐土は昔、我が國で支那を呼んだ稱。

〔それも斯樣の云々〕 唐土の例もこのたびのやうな戰亂などがあつたのであらうかとの意。

〔はた殘りなく〕 又それから下々の者まで殘らず。

〔この事に觸れにし云々〕 今度の後鳥羽院の御企圖に關係した人々。「いみじ」は一通でないこと。甚だしいこと。いちじるし。

〔いみじげなり〕 一通りの事でない。大變な事だつた。

〔知らしめさぬ〕 「知り召す」の延音。知つて(係つて)お出でにならない。

〔のどかにて都に云々〕 御自分一人、心靜かに都におとどまりになる事は(父後鳥羽院は隱岐に遷され給うたのに對して)不孝のおそれがあると思し召されて御自身から遠い所に移ることを望まれたの意。「御心も

て」は御自身から望まれること。

〔幡多〕 土佐國幡多郡。土佐の西南なる大郡なり。中世、土佐畑と稱し、貴顯の流配せられ給ふ所なり。承久の亂に、土御門天皇土佐畑へ遷幸の事、增鏡に見ゆれど、當郡にその遺事を傳へず。疑ふらくは香美郡山石本に至り、滯留・阿波へ還駕ありしにや。」（大日本地名辭書）

〔去年の二月云々〕 承久二年二月二十六日に、土御門天皇の第二皇子邦仁親王（後嵯峨天皇）生まれ給ふ。二月は「きさらぎ」と讀む。

〔承明門院云々〕 源在子。法勝寺の執行龍圓の女、後鳥羽天皇の宮に入つて土御門天皇を生む。本姓は藤原。僧の女は國母となることが出來ないため、源通親を父として、源姓を冒した、土御門天皇の即位とともに三宮に准ぜられ、建久二年承明門院の號を賜はつた。建歷二年尼となり、正嘉元年七月薨・御年八十七。「御せうと」は御兄人の音便。

〔やがてかの宰相の云々〕 土佐國の幡多へお移りになることが決すると、時を移さずに御子の若宮をば通宗の弟の通方といふ人の家にお止めになつて、土御門院は近く――の意。「近くさぶらひける云々」は土佐國の御下向の有樣である。

〔さぶらふ〕 伺候する。お傍に仕へる。

〔北面の下臈〕 院の御所警衛の武士。上北面は諸大夫の家格で、四位五位に昇つた者が聽されて殿上の北面二間をその所とする、下北面は侍の家格で六位の武士、聽されて北の築地に沿うた五間屋をその所とする。白河院の時から始つた。下臈の臈は僧家の語で、年功を積んだ年を數へるに用ひる詞、又年功を積まない新參の藏人でもいふ。轉じて下郎の意となつて、身分賤しい者をいふ。

〔召次〕 取次の如く院中の雜事をする下役の者。西宮抄「院中雜事、御隨身勤し夜、召繼奏し時。」

〔怪しき〕 前の「怪しげなる」の項參照。

〔手輿〕 手に持つて舁ぐ輿。高さが腰の程であるところから、腰輿ともいふ。昔時主上、上皇などの御料輿。大嘗會御禊の日、河原の頓宮よりの乘用であるが、事變により急遽の遷幸にも用ひる。又大臣や高僧などにも用ひた。

〔わりなき事〕 非常に堪難いこと。本來は道理に合はぬこと。

〔憂世にはの御製〕 續古今集に「題しらず、土御門院御製」とある。前世の因果によつて、かくつらい目に逢ふ爲にこの世に生まれたのであらう、しかし我が涙はこの道理をわきまへずに落ちることであるわいと嘆かれたのである。「かゝれ」は「かくあれ」の略。なほこの歌は承久兵亂記にも出てゐる。

〔せめて近き程にと云々〕 比較的都の方からいつて近い所へ遷座あるべき由、奏聞したから。「奏す」は天子に申し上げる意。

〔阿波國に云々〕 土御門院は阿波國に遷られて十一年、寛喜三年に崩ぜられた。陵は阿波板野郡池谷村にある。

〔さてもこのたび〕 以下の一段は著者が承久の亂に就いての議論である。

〔うたて〕 餘りに。甚だ。普通は忌む程。いよ〳〵惡いこと。又は怪しからぬなどの意。

〔父の王を云々〕 觀無量壽經に「劫初以來、有二諸惡王一貪二國位一故、殺二其父一二萬八千人。」

〔ためれ〕 「たるめれ」の約。

〔一ふし二ふしのよせ〕 一應二應、或は一條二條の理由。「よせ」は寄託の意で、口實をいふ。

〔若しは〕 もしくは。或は。

〔すぢ異なる大臣〕 家筋、系統の違ふ大臣が權を爭ふこと。例へば蘇我氏と物部氏との爭、藤原忠通と賴長との爭などの場合。

〔さらでも〕 或はさうでなくても。

〔おほやけともなるべきざみ〕 皇位に即かれる分限、資格のこと。即ち皇族中で天子になり得られる資格のある方々をいふ。この爭は壬申の亂の弘文天皇と天武天皇、又は崇德上皇と後白河天皇との保元の亂の如きをいふ。「きざみ」は刻で、時の意。また階級。等級。

〔少しのたがひめに云々〕 少しの手違で世に入れられないでゐるその恨の結果から爭が起るのであつた。

〔今の樣にむげの民云々〕 今度の爭亂のやうに極めて微賤の民（北條氏をさす）と爭つて君が負けて滅びなさる例は、この日本國には餘り多くは聞かぬやうだの意。「むげ」は無下の意。

〔承平の將門〕 承平は朱雀天皇の御世の年號（一五九

一―一五九七）將門は平氏、相馬小二郎と稱して鎭守府將軍良將の第三子。壯年の時攝政忠平に仕へ、檢非違使を望んで許されなかつた爲、常總に赴いて伯父常陸大掾國香及び源護を殺し、なほも伯父良兼及び貞盛を破つた。朝廷では問責して罪しようとされたので京都に上つて陳辯した。承平七年再び良兼を破つて遂に下總猿島に僞宮を建てたが、天慶三年貞盛及び秀卿に破られて射殺された。

〔天慶の純友〕 天慶は朱雀天皇の御世の年號（一五九八―一六〇六）。純友は藤原長範の子。承平中伊豫の掾であつたが、任が滿ちても還らず、日振島に據つて海賊となつた。又將門が下總猿島によつて叛いた時、東西相呼應して事を擧げ、兵を京都に縱つて坊肆をば燒いた。天慶三年官軍小野好古、藤原忠文に太宰府に挾擊せられ、再び伊豫に走つて警固使橘遠保に殺された。

〔康和の義親〕 康和は堀河天皇の御世の年號（一七五九―一七六三）。義親は源義家の第二子。康和四年對馬守となつたが、鎭西に掠奪したため、隱岐に流された。配所に赴かず、出雲に止つて目代を殺し官物を掠めた。嘉承二年、朝廷は平正盛をして追討せしめ、鳥羽天皇の天仁元年に誅に伏した。

〔宣旨〕 陛下の詔をいふ。內侍が勅旨を承つて職事藏人に傳へ、次いで上卿より外記に命じ宣下させるもの、轉じて公文書の名稱にもなつた。「宣旨には勝たざりき」は宣旨によつて向かつた官軍には勝たなかつたの意。

〔保元に崇德院の世を云々〕 保元の亂に崇德院が世の爭亂を起されたのでさへ、後白河法皇は當時天子の御位にあつたので、崇德院にお勝ちになつたの意。崇德院は第七十五代の天皇。御名は顯仁。鳥羽天皇の長子。保元元年重祚を計り兵をあげて敗れ、讃岐に遷幸、長寬二年崩。在位十八年、御壽四十五。故院は後白河天皇。第七十七代。鳥羽天皇の第四子。御母は待賢門院藤原璋子。崇德天皇の同母弟。近衞天皇崩じ、御年三十にて卽位。在位三年、位を太子守仁（二條天皇）に讓り、院政をおとりになること三十四年、建仁三年崩御。院政の間、國內多事、大權終に皇室を去るに至つたのである。

〔御裳濯川の同じ流と云々〕 天照大神の御系統をいふ。御裳濯川は伊勢內宮の御前を流れる川で、五十鈴川ともいふ。倭姫命が御裳を濯がれたのでこの名が出たといふ。轉じて天照大神のことをもいふ。崇德・後白河兩院は御兄弟であつて、同じく天照大神の御系統であるから、何れも輕重あるべきではないが、それでもなほ時の御位にある天皇をお守りになることは强いやうであると、古の人も申してゐるの意。「なめり」は「なるめり」の約。

〔信賴の衞門督云々〕 いはゆる平治の亂である。信賴は藤原信賴。忠隆の子。別に才能に勝れてゐなかつたが、後白河法皇の寵を得て累進し、藤原信西と權勢を爭つて相軋り、信賴が嘗て近衞大將たらんと請うたのに對して、信西が法皇を諫めて安祿山僭奢の狀を書いて奉り、これを妨げた。それ以來は、不平の餘り病と稱して朝せず、ひそかに源義朝を誘つて信西を亡さうとした。當時義朝は、保元の亂の功が遙かに平淸盛を越えてゐたのに、行賞却つて淸盛に厚く、義朝の權勢はこれに及ばなかつたので、後白河法皇の信任を受けてゐた信西に親近して榮達を圖らうとしたが郤けられ、信西は淸盛と結んだので憤怨してゐた時であるから、直ちに信賴の誘に應じて、平治元年十二月九日兵を擧げ、三條殿を燒き、法皇及び二條天皇を幽し、信西を大和に斬つて首を梟した。そして信賴は「小袖に赤き大口、冠に巾子紙入れて、ひとへに天子の御擧動の如く」ふるまつてゐたのである。が、熊野參詣の途中から馳せかへつた平淸盛に破られて仁和寺に遁れ、法皇に哀訴して死を免れようとしたが遂に勅命によつて六條河原で淸盛に斬られた。年二十七。「衞門督」は衞門府の長官。衞門府は左右に分れ、禁中の諸門を守護し又は巡羅して警戒することを掌つた役所で、督、佐、大小の尉、志等がある。信賴は右衞門督であつた。

「おほけなく」は負氣なくの意。恐多くもの意。身分不相應、又は過分の意。

〔舊りにし事〕 古來の例、出來事をいふ。卽ち朝敵は常に亡びたことを指す。

〔尙さりとも〕 かういふやうに古から屢〻爭亂はあつたけれども皆宣旨には勝たなかつたから、今度も、やはり爭亂が起つても――。

〔上皇今上〕 後鳥羽院、土御門、順德の三上皇と仲恭天皇。

〔王城〕 宮城。宮居。ここは官軍の意。

〔徒に滅ぶるやうは云々〕 はかなく敗亡するやうなことはないだらう。

〔あやなきわざ〕 「あやなき」は黒白の區別のないこと。筋道の立たないこと。物の道理も差別もないこと。大義名分に背いて黒白のわかちもないこと。即ち官軍破れて三上皇の遷させられたことをいふ。

〔この世一つの事云々〕 現世ばかりで論ずることも出來ずして、必ず過去の宿業によるであらうが、迷深い愚かな自分には、いかにも不思議でならない意。作者の述懐である。

〔六つにて云々〕 増鏡原文に「四つにて」とあるは誤。又御在位「十五年」は十三年が正。後鳥羽天皇の御事を申し奉る。文治元年六歳で御踐祚。皇年代略記には「後鳥羽院在位十五年、土御門院在位十二年、順徳院在位十一年。」この間、院中で政を聽かせられたとある。

〔天の下には同じ事〕 上皇とはなられても、院中で御政治をなされたのである。隨つて天下の政治は上皇の御心一つに出たのであるから、御在位と同じであるからの意。

〔萬機〕 政治のこと。機は樞機の機で、その發するところは極めて多い。「萬機の政」はいろ〳〵の重要な御政治をいふ。

〔吹く風の云々〕 いはゆる風靡で、百官萬民が聖德に服し奉ること。草木の風に靡くにまさること。論語に「君子之德風、小人之德草、風如草則靡。」

〔雨の脚よりも云々〕 上皇の御惠の極りなく繁きことの喩。雨の盛に降る時は、脚があるやうに見えるから雨の脚といふ。雨脚といふ語もある。

〔津の國の云々〕 「津の國のこや」はひまなきの序。「こや」は攝津河邊郡。今稻村大字昆陽。伊丹町の西。歌枕になつてゐる。後拾遺和歌集和泉式部の歌（頭註參照）は地名の昆陽を小屋にかけ、又來よにもかけたのである。なほ屋根を葺くにひまのないのを、御政治を聞召すのに少しのひまもなく忙しいのにかけたのである。

〔難波の葦の云々〕 「亂れ」といふ爲の序で、難波は蘆の名所であることはいふまでもない。難波のあしの亂れてゐるやうに、世の中が亂れることのないやうにと思召されてゐたの意。

〔藐姑射の山〕 上皇の皇居。支那で仙人の住む山といつて仙人を珍重する風がある。これが我が國にも移つて上皇の御所を仙洞とも藐姑射の山ともいふ。又射山ともいふ。莊子逍遙遊篇に「藐姑射山有仙人居焉。肌膚若氷雪綽約若處士。」ここは院の限りなくめでたく榮え給ふをいふ。即ち山といつた爲に松を出し、松の壽命の長いことを上皇の御父子御兄弟になぞらへたのである。霞の洞も仙洞と同義。仙人が霞を呼吸して不老不死であるといふ所から來たのである。この春も霞に對した語で、同じく上皇の榮え給ふこと春日の永きが如しといつたのである。

〔枝を連ねて〕 枝を連ねて繁りの意。

〔千代に八千代を重ね〕 千代に八千代を重ねて榮えの意。

〔空行く月日の限り知らず〕 空行く月日の如く限りなく。

〔のどけくおはしまし云々〕 御心しづかにおはします筈だつた御世であるのに、そのまゝ續いて來た結果はたうとうちもない一件即ち承久の亂によつて今はかうして花の都を立ちわかれて云々の意。「ありありて」はたうとう。つまり。そのまゝに。そのまゝに續いて、そのはてはの意。「よしもなき一ふし」はらちもないつまらない一件の意。承久の御企をいふ。

〔おのがちり〳〵〕 三上皇及び皇子たちも皆遠國に遷されて、各離散せられたことをいふ。

〔さすらふ〕 四段にも下二段にも活用する。ここは下二段の方。流離。流沈。よるべなくさまよふこと。又左遷をもいふ。

〔とまや〕 苫屋。苫で屋根を葺いた家。苫葺の小屋。苫は菅、茅などで菰のやうに編み、家の屋根もしくは周圍を覆ひ、又は日蔽等に使用する物。

〔言問ふ者〕 訪れ來るもの。話相手になるもの。

〔あま小舟〕 蜑小舟。漁夫の小舟。いさりぶね。

〔我が故郷のしるべ〕 わが故郷への案内。鹽を燒く煙の靡く方を都の空と眺め給ふこと。

〔御すまひども云々〕 かゝる遠島の御住居はいつまでと限られてゐても心細いものを、まして定めなき老少不定の人の世に、いつと期限もなくそこに一生を送り給ふ御樣は、いともロ惜しく殘念な御事である。いつをはてとか云々」は三上皇方の再會の時が何時と限

りないのを含めたのである。「うしろめたさに」は心もとなさに。不安さに。あとのことが氣がかりなのに。

〔雲の浪煙の浪〕　雲煙萬里の意で、雲や霞が幾里とも知れず、見渡す限りはる〳〵と非常に遠い所をいふ。雲を浪に喩へたので、煙の浪は煙波をいふ。

〔世をつくし給ふ〕　一生をこの配所でお送りになる。

〔口惜しと言ふも愚なり〕　たゞ殘念だなどといつただけではいひ足りやしないの意。

〔このおはします所〕　隱岐の後鳥羽院の御住居をいふ。東鑑承久三年八月五日の條に、「上皇遂着二御于隱岐國阿摩郡刈田郷一仙宮者、改二翠帳紅閨於柴扉桑門一所者亦雲海沈々、而不レ辨二南北一者、無レ得二雁書青鳥之便一、煙波漫々而迷二東西一之故也、不レ知二銀兎赤烏行度一、只離宮之悲、城外之悵、增惱二叡念一御斗也。」

〔片そへて〕　片寄せての意。

〔大きやかなる巖云々〕　大きな巖の聳えてたつてるのをたよりにして、それに添へての意。「大きやか」は大きなる樣を表す語。

〔松の柱に葦葺ける廊〕　松を立てて柱とし、それに葦を葺いて屋根とした廊の意。廊は細殿、宮殿などの周圍に通路として造つた細長い屋。

〔けしきばかりことそぎたり〕　形ばかりで、簡略に手を省くこと。御住居は形式的で簡略粗末にしたこと。

〔柴の庵の唯暫し〕　新古今集卷十八雜下、西行法師の歌「いづくにもすまれずばたゞすまであらむ柴のいほりのしばしなる世に。」柴のいほりの柴といつて「暫し」とかゝる。ほんの暫しの間なるこの世に、自分は住まうとするが、どこにも物憂いことがあつて、住まれないならば、いつそのことたゞ住まないで、放浪の旅を續けようの意。

〔かりそめに見えたる云々〕　ほんの間に合せに造られた御住居ではあるがの意。(柴の庵のついちよつとの間住む所といつたやうに)

〔さる方になまめかしく云々〕　假初の御住居で簡略にしたが、その粗末な所に、それ相當に品よく、故ありげに面白くつくらせられた。「故づく」はよしありげ。趣を添へて。

〔水無瀨殿〕　攝津三島郡島本村大字廣瀨にある。今はその中央に官幣中社水無瀨宮がある。祭神は後鳥羽、

土御門、順德の三上皇。明治六年の創建。社地は即ち離宮の舊址。古はこのあたりを水無瀨の里といつた。後鳥羽院が隱岐遷幸以前にここにいらせられて、これを水無瀨新御所と稱した。

〔海の眺望云々〕　隱岐から海上を眺め給ふに、かの白樂天の「三五夜中新月色、二千里外故人心。」の詩句が心に通つて、二千里も彼方の故人(舊くからの知人)の心まで知られるやうに、はるばると見渡され、この詩のもつ風情が、今更のやうにひしひしと心に迫つてくるといふ意。

〔こちたく〕　事甚くの義。强いこと。

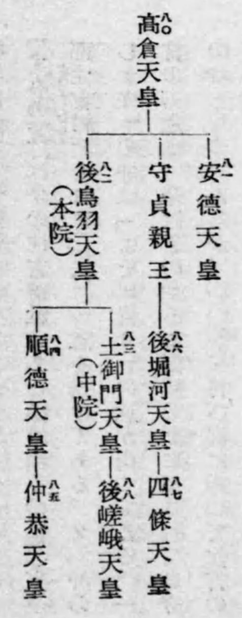
〔われこそはの御製〕　後鳥羽院御百首に見えて名高い。「おきの海」の「おき」には隱岐と沖とが掛けてある。島守は島の番人。一首の御意は、我こそ新たに、この隱岐の島に遷り來て、島守となつたものだ。されば吹く波風も、氣をつけて、荒く吹くことだけはしないでくれといふのである。そして、この御歌の裏面には、世の中の波風は、我に辛く當つたから、せめては、おきの波風だけでも、どうか氣をつけて吹いてくれとの御意が籠められてあることは申すまでもなからう。

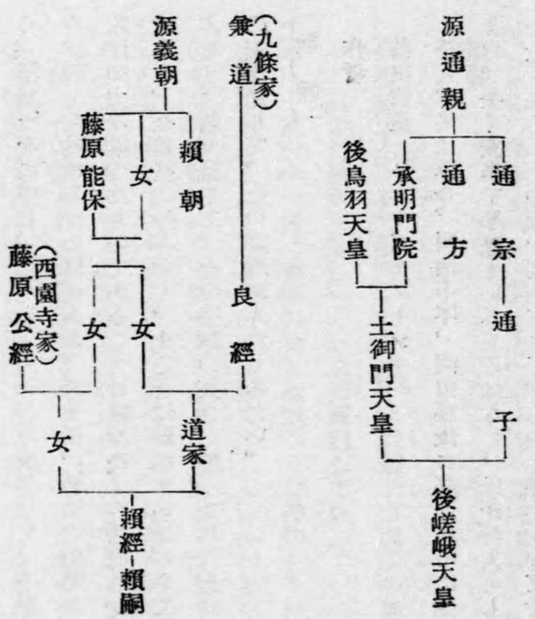
〔おなじ世にの御製〕　「おなじ世に」一生のうちに。「すみの江」は今の住吉神社のある攝津國(大阪府)東成郡住吉村。それに「住む」の意を掛けてある。又「沖のしま守」の沖は「よそに置き」の意が掛つてゐる。一首の御意は、今はこのやうに隱岐の島に流されて島守の身となつてゐるが、いつか又再び都に歸つて住吉の月を見ることが出來るであらう(か)といふのである。

鑑賞批評　皇統及び攝關等の姻戚關係が稍複雜であるが、さういふ所で停滯して、全篇から湧く史的感興(恐多い言葉であるが)を取逃しては、本課は意味をなさないのである。全篇に或は澱をつくり、或は瀨をなし、或は淵となり、或は直流し、或は曲流してゐる律動、その律動を敏感に感ずることが、本課のやうな課にあつては最も大切だと思ふ。「さても院の思し構ふること、忍ぶとすれどやうやう漏れきこえて——」といふところからして、何となくただならぬ時世の雰圍氣が、木枯のやうに面を打つて感じられるが、「東にもいみじうあはてさわぐ。」に至つて、次第に爭亂——それも顏をそむけたいばかりいまはしい爭亂の渦中におづ〳〵と入つて行く感が一層深い。そして、戰況をくだ〳〵しく叙することをあ

つさりと逃げて、「かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわただしく――」といつたやうな「たのもしげもな」き人心を些か主觀的に述べて、歴史の基脈に繋いで行つたところ、正に增鏡の作者の獨壇場であらう。後半の方では前半の方の「おどろおどろしさ」から一轉して、野分の過ぎた朝のやうな、はかなげな靜かな雰圍氣が、それにふさはしいしめやかな調子で描かれてゐるのだが、殊に上皇の御すまひのさまを叙したところは、何となく眼の潤ふやうな哀感が、ひたひたと漂ひ、その景情まことに眞に迫つて、天皇の御胸中永く後代の讀者の涙を催さしめるのである。相當時間をかけて教授していただきたい。最後に特に附加へておきたいことは、義時の態度である。決死の覺悟を促して立たしめた子泰時が、出陣の翌日一騎歸つて來た。「いかに」と問うと、戰のおきて一切はのみこんだが、「若し路のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗を揭げられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんにまゐりあへらば、その時の進退いかゞ」といふのである。義時は暫し考へて、その時は一切の手向ひを止めて、たゞ降服して身を任せるべきであるといふ。この泰時の問、義時の答こそ、我が國民の胸奥にひそむ本能的ともいふべき尊皇心の現れであらう。「賢くも問へるをのこかな」といふ義時の言葉の、何と讀者の胸を打つ强い響を持つことか。「さばかりの時は冑を脫ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。」これは臣子として當然至極の事であらう。極惡道無といはれた義時にも尙かうした大義名分のあつた事を忘れてはならない。よし、その思想の徹底的でなかつたとしても、惡逆の標本と目せられる人にしてこの思想のあつた事は注意せねばなるまい。我が國民の尊皇心は理窟を絕して、その胸底に根强く植ゑつけられたものである事を悟らしめたい。

參考





一三　石彫獅子の賦

薄田泣菫

扱方　「石彫獅子の賦」は泣菫の代表作の一である。その縦横な詩才を最もよく發揮して、憧憬的な情熱の高い諧調を醸してゐる。全篇に漂つてゐるエキゾチックな味に就いてはいふまでもないが、雄々しく偉大な超自然の石彫獅子に寄せて、胸中の鬱屈を放つたものと見るべく、「權威」を高唱し、「勝」と「力」とを讃美して、千里を睥睨し叱咤するかの概がある。又他面、藝術の神秘な永遠の力を謳つたものであることは終局によつて明らかである。全篇些の弛みなく、まことに絶唱といふべきであらう。朗々誦して、その格調の高さ、整々された音律の美を通じて、その詩想にふれしめたい。

教授

作者

薄田泣菫　スヽキダキフキン

詩人。名は淳介。明治十年、岡山縣淺口郡連島町に生まれ、全く獨學で學歴といふものはない。氏が詩人として最も鳴らしたのは、明治三十年から四十年へかけてであつて、殆ど島崎藤村と時代を同じうしてゐる。しかし藤村氏は小説の方へ向かつたが、氏は相變らず詩人として立つてゐたのである。その第一詩集「暮笛集」の出たのは明治三十三年であつた。實にこれは土井晩翠氏の、「天地有情」の出た年である。また三十四年には第二詩集「行く春」を出し、その間、詩風にも自ら變化はあつたが、ともかくも北原白秋、三木露風氏等の象徴派の新詩人の輩出した四十年前後までは、明治詩壇に於ける第一位の詩人であつた。しかし四十年後は漸く衰へて、童話、隨筆などに、筆を染めるやうにもなつた。なほ氏の本業は新聞記者であつた。現に大阪毎日新聞社の顧問になつてゐる。氏の代表作として詩集では「暮笛集」「行く春」「白玉姫」「二十五絃」「白羊宮」「子守唄」等であつて、今はすべて泣菫詩集一卷に收められてある。なほ隨筆物として「泣菫小品」「茶話」「樓茶話」「草木蟲魚」「太陽は草の香がする」等がある。

引用書

泣菫詩集 ― 薄田泣菫著。大正十四年、大阪毎日新聞社發行。氏の詩集「十字街頭」、「白羊宮」、「二十五絃」「白玉姫」、「ゆく春」、「暮笛集」、「子守唄」の全部を收めてゐる。本詩はその「ゆく春」の中の一篇である。

語釋

一

〔石彫獅子〕　石で彫刻した唐獅子。唐獅子は獅子の異名。猪また鹿を「しし」といふに區別していふ。

〔賦〕　漢文の一體。普通の文とは違つて、詩のやうに句末に韻がふんである。例へば散文詩ともいふべきもので、「赤壁賦」「阿房宮賦」などがそれである。詳しくいへば、反つて誤りにくいであらうから、賦についてあつさりと右のやうに説明して置けばよいと思ふ。ここは、ただ賦といふ名義を借りただけで、石彫獅子を歌つた詩くらゐの意味に用ひてある。七五調の純然たる詩であつて、散文詩でないこといふまでもない。

〔童子〕　子供。ここはこの石工の細工場の雜用などをしてゐる子供であらう。

〔石工は、木かげに夢を結びぬと〕　番人に「石工はどこにゐるか。」と問ふと、「石工は木かげで晝寢してゐる。」と答へたといふ意。「いしきり」は石を切る職人。ここは石を刻む職人。「夢を結ぶ」とは、ぐつすり寢こんだ形容。夢寢の巻をさまようてゐること。

〔入りて小暗き仕事場に〕　小暗い仕事場に入つての意。石工は今「木かげの夢に耽」つて、仕事場にはゐない。その留守に仕事場の中に入つたのである。「小暗き」は、ほのぐらいこと。うすぐらいこと。

〔刻みさしつる〕　刻むのを中途で休めてゐる。

〔圓き頸〕　獅子のまる〳〵とした太いくび。「うなじ」は項の字を宛てるのが正しく、特にくびの後面の部（ほんのくぼ、えりくび）をいひ、頸の字は項に對してくびの前面をいふのであるが、ここは頸を「うなじ」とよませて、くび全部を漫然と指してゐるのである。

〔誰ぞ、もの思ふは、ひそやかに〕　靜かに物思ふのは一體誰かの意。即ち暗い石工の仕事場に入つて、まだ完成してゐない石彫の唐獅子の頸をなでまはしながら以下のやうな物思ひに耽りながら詩を吟ずるのは誰かといふので、作者が作者自身を第三者のやうに見て「誰か」といつたのである。この一齣は作者が石工の仕事場に入つて、石彫獅子を見、賦詠の感興を催した事を叙してある。以下その獅子の威ある風姿を描く。

〔朽木の棚〕　古くなつて腐りかけた木で造られた棚、ここは、彫刻品を載せる棚である。

〔くすぼる〕 くすぼる(燻)に同じ。煤がついて眞黑になつてゐること。

〔あら彫〕 粗彫。粗く、ざつと彫ること。又そのもの。まだ完成してゐない彫刻。

〔豕〕 ぶた。豚狗。

〔狗兒〕 犬の子。

〔野の狐〕 野狐。野に棲む狐。

〔さてはを鹿のむらがりに〕 を鹿は牡鹿卽ちをすの鹿。朽木の棚に据ゑられてゐる煤ぶつた顏をした粗彫の豕や兒狗や、或は牡鹿の群の中にの意。

〔こはめざましき誇かな云々〕 さういふいろ〳〵の動物の群の中に、一際目立つて日かげを浴びながら立つてゐる獅子の姿は、何とめざましくおごりたかぶつた樣であることよといふのである。「こは」はこれは、「めざましき誇」とは群を拔いて威嚴のあるさま。この一齣は仕事場の全體の狀を述べたのである。

〔雄々しいかるかその姿〕 忿怒してゐるその姿は、いかにも猛く勇しい意。

〔たてがみ長く云々〕 その多い鬣は背まで房々と蔽ひ。「まきて」は背がうね〳〵とうねつて垂れてゐるさま。

〔見れば湧きよる云々〕 その鬣があたかも春の潮が漫々と渦卷き寄せてゐるかのやうに見える。

〔胸はゆたかに云々〕 その胸は、あたかも剛勇な男子がひきしぼつた弓のやうに張つてゐるといふのである。「力男」は、力の强い剛勇な男子。「ひきしぼる」は矢をつがへて弓を十分に張ること。

〔忿怒現ずる明王云々〕 明王は不動明王を指す。不動明王は五大明王の一でその中央にゐる。大日如來の化身とされてゐる。惡魔を降伏する爲に忿怒の相を示し、色は眞黑で、右手に持つた劍は煩惱を斷除するに譬へ、左手の索は方便の自在なことを示し、左方の瓣髮の結縛の多いのは衆生の爲には身を奴僕として祈願を叶へしめることを表す。又大智德の故に大火焰を出し、大定德の故に大磐石に坐すと說かれてゐる。「忿怒現ずる明王の云々」とは獅子の長い尾は、あたかも不動明王の廣い肩の後から燃えあがつてゐる（それは明王の怒をあらはしたものである）焰であるかのやうに嚴めしく躍りの意。

〔にこ毛密なる云々〕 にこ毛は鳥獸のやはらかな毛。

柔な毛がいつぱい生えてゐる脚の裏は地に落ち散つた野薔薇の花を踏んでもの意。彫刻の獅子の脚の裏には毛はないが、あたかも毛が生えてゐるかのやうに巧に刻まれてゐることを形容したのであつて、前も皆同じである。

〔いざよひ薔薇の花ふむも云々〕 「いざよひ薔薇」は、なにはいばら(金櫻子)の異名。薔薇科の落葉灌木、やゝ蔓狀を呈する。五六月頃白色五瓣の大形の花を開く。にこ氣が密に生えた脚の裏は、落ち散つた薔薇の花瓣を踏み歩いてもどうして樹上に巢をかけて眠つてゐる鳥はその脚音に眼を覺ますことがあらうか、といふので、柔かな脚の裏で踏む音では、樹上の眠つてゐる鳥を驚かし目覺すことが出來ようか、出來はしまいといふ意。

〔心がまへのいみじさや〕 石工の心がまへ(工夫)はなか〳〵すぐれてゐるわいと作者の主觀を挿入した句である。この句は勿論下にかゝり、「瞳子彫られぬ唐獅子は」と續くのである。「畫龍點睛」などといつて、畫や彫刻では最後に睛(瞳子)を入れて、作品を完成させるのであるが、この唐獅子もまだ未完成で、瞳子がない。この瞳子を彫つてないといふことは（瞳子を最後に彫るといふこと）は石工の心組といふべきである。何故ならば――「瞳子彫られぬ唐獅子は、光を知らぬ盲目の身云々」と續く。「いみじき」は勝れてゐる意。

〔瞳子〕 人見の義。眼球の中央にある光線の通ずる小さい孔。瞳孔。

〔光を知らぬ盲目の身〕 まだ光線を見ることの出來ない盲目の身であるからの意。「めしひ」は目廢の義。視力を失つたこと。又、その人。めくら。

〔鼻かぐはしき云々〕 瞳子のない盲目の身であるから、たとひ（すでに彫られてゐる）鼻は芳しい花園の香を嗅ぐことが出來ても、前脚をふみあげて花園の小路を踏みしだくことは未だ出來ない。

〔花野の路〕 花園の中に通じてゐる小さな路。この齣は未完成の石彫獅子の雌伏の狀を述べたもの。

〔鑿の手まだたく捨てられて〕 彫刻が完成しての意。鑿は木材又は石材の表面に孔を穿み、溝を掘り、或は削る等に使用する工具。ここは石材彫刻用の鑿である。「鑿の手」とは鑿で仕事すること。「まだたく捨てられて」は全く仕事が終つての意。

〔御苑の夏のあけぼのや云々〕このやは語調を整へるためにおく感嘆詞である。石彫獅子がすつかり完成して美しい苑のあけぼのの艶やかに鮮な新緑の木の下蔭に、巨人のやうに堂々と据ゑられる時には、その雄々しい姿はどうであらうといふ意。「雄姿いかに」で句は切られてゐる。

〔背に伏して云々〕今、この未完成の獅子の背にもたれかゝつて、完成のあかつきの狀を暫く想像させてくれよの意。以下その想像を歌ふのである。

二

〔汝の王者かたどられ云々〕この「汝」はすべての獸類を指してゐる。すべての獸類よ、お前たちの王である獅子の形を寫しとられて、今眞白い石に彫刻されただから——。

〔野より山より林より云々〕だから——野からも山からも林からも、いづこに棲んでゐる獸も皆この獅子の所に集れよ。そして獅子の蹄の前につらなり、ひざまづいて、各の身の弱いことを恥入つて獅子の召使として仕へよの意。

〔おほき靈魂くだり來て云々〕偉大なる獸王のたましひがここに降つて來て、この眞白い石に籠つたといふので、前に風姿の彫刻されたことを述べたので、今度はその靈魂が籠られたことを歌つたのである。

〔その光輝にぬれぬべく云々〕獅子の靈魂の稜威を身に浴びるために、獸類よ、汝の卑しい心を獅子に捧げよの意。

〔無上の權威あらはれて云々〕獸王としての無上の權力威光がこの眞白い石に具備されて。

〔王にさゝぐる燔祭の云々〕燔祭の燔は膰に通じ、宗廟の祭に燒いた肉を神に供へること。「聖き火盡」とは火の上にかけて物を炙る神聖なさら。（盡はさかづき）獸王たる獅子に捧げる燔祭の神聖な火盡を用意せよの意。

〔かもしか〕反芻偶蹄類。深山に棲む。體長三尺内外。毛は茶褐色、長く柔である。頭に一對の角があり、種類によつて形を異にする。かもしゝ。かましゝ。

〔ふかき痛手に甘んじて云々〕快く自ら進んで重傷を受けて死に、燔祭の犧牲となつて、「聖き火盡」の上に燒けよの意。

〔誇るべきかな云々〕犧牲となることの高い名譽は

お前たち（斑牛と羚羊）にあるのであるから、それを他の獸類に誇るべきであるの意。

〔羨む群ぞ云々〕むしろ犧牲となれないで、お前たちを羨んでゐる他の獸こそ愚といはなければならないの意。

〔ながき流をふるはせて〕長々とうねつた流のやうな鬣を額際に振り亂し、猛々しく頭を起して。

〔あな起ちあがる〕あゝ起ちあがつたことであるよ。

〔戰鬪と勝と力の權化云々〕權化は神佛などが衆生濟度のために、權に化身してこの世に現れること。又その化身、權現。獅子が起ちあがつて群獸に向かひ、「我は狂暴な戰鬪の化身である。又いかなる時にも慘敗した事のない勝利の化身である。又無上の力の化身である。我に敵するものはない。群獸よ、我に降伏せよ。」と呼號すれば群獸は皆ひれ伏してしまつたの意。

〔さかんなるかな、その言葉〕その命令は何と壯烈を極めたものであるよ。

〔神は死ぬめりとことはに〕以下「絶ゆることなき永遠よ、われは汝の伴なり。」まで獅子の言葉と見るべきである。神は死のやうに靜穩に默して永久に動かないで。人間には魔のやうな不思議な強い力はない。我（獅子）はこの神と人間界にあつて、何物をも屈伏せしめる王者であるぞ。又あらゆるものの價値を一身にあつめてゐるものであるぞ。又人間の胸中に煩惱を起させる絶大な魔力を持つてゐるものであるぞその意。「魔のごと」とは「魔の如く」で魔は人に障害をなす不思議な力をもつてゐる鬼類。「萬有」とは天地間にありとあらゆるもの。「わづらひともだえは」煩悶の意で、思ひ惱み心を搖亂して苦しむこと。「あるじ」は主人。ここでは支配してゐるものの意。

〔運命の眩きをも云々〕面を向けがたいほど——即ちどうすることも出來ない運命をも、眼を見開いて凝視することが出來る——即ちぐん〳〵と開拓して邁進することが出來る意。

〔胸わなゝかぬ雄心の云々〕怖氣づいて胸がびくびくとうち顫へるやうなことがなく、勃々たる雄心の若若しい勇氣に溢れ、勝利を獲得する確信に漲つてゐるこの身（獅子）は、この世に生きて死ぬといふことがあらうか。決して死ぬことはない意。

〔絶ゆることなき永遠よ云々〕我は永遠とともに決

して絶えることのない(死ぬことのない)ものであると呼號する獅子の聲は、あたかも喇叭の音のやうに高く耳を聾するばかりであるの意。

〔時に默止はやぶられて〕その時、今まで沈默を續けてひれ伏してゐた群獸は、一齊に大聲をあげて獅子の威力をほめたゝへ、服從の意をあらはし、その聲は雷の轟き鳴り響くやうに聞えたといふのである。「もだし」は「もだす」といふ動詞が名詞になつたので、默つてゐること。「どよみ」も「どよむ」といふ動詞が名詞になつたので、轟き響くこと。

三

〔いま想像の羽たゆむ〕第一章の終の「背に伏して、しばし想像にふけらせよ。」に對する語。「鑿の手また く捨てられて、御苑の夏のあけぼのや、綠したゝる木のかげに、巨人の如く立たんとき」獅子の雄々しさ威めしさを、いろ〳〵に想像して見たが、今その想像が消えかゝつて來たといふのである。「たゆむ」はゆるみ怠ること。いろ〳〵に想像を逞しくして來たことを羽をひろげて大空を翔る鳥の自由さに譬へ、その想像が消えかかつたことを、羽に元氣がなくなるに譬へたのである。

〔見れば唐獅子日を浴びて云々〕夢から覺めたやうに現實にかへつて、傍を見ると、未完成の唐獅子は相變らず「日を浴びて立」つてゐる。それは今想像した獸王のやうな狂暴さこそなけれ、何となく豐滿な感じの溢れてゐる靜かな悠然とした姿は、唐獅子の大きな誇であらう。「すがたいかなる誇ぞや」は姿は何と大きな誇でなくて何であらうの意。

〔石彫永く傳はりて云々〕この唐獅子の石彫は永久に傳はつて、幾千年も絶えない光榮を受けるであらう。

〔あゝ術藝は支配せよ云々〕ああ藝術は一切のものの上に位する。實に藝術のみが永久の生命を持つてゐるのであるといふ意。「藝術は長く、人生は短し」(Ars longa, vita brevis.—— Art is long life is short.) などといふ諺がある。「とはの生命」とは永久に絶えない生命、「汝に歸する」とは永久の生命は何物にもなく、ただ藝術のみに與へられたものであるの意。

鑑賞批評 この詩の中心點は第二章にある。第一章と第三章は第二章に從屬したものと見るべきである第二章に

あらはれた雄渾壯大な詩調は、まことに珊瑚の鞭を手にして天馬を驅るとでも形容すべきもので、「汝の王者かたどられ」といひ、「おほき靈魂くだり來て」といひ、「無上の權威あらはれて」と矢つぎ早に疊みかけ、「眞白き石」に獸王の形と靈魂と權威を籠めて、百獸をその前にひざまづかせ、天に向かひ地に向かひ、永遠に向かつて戰鬪と勝利と力を呼號し、「この身この世に何の死ぞ、絶ゆることなき永遠よ、われは汝の伴なり」と壯語するあたり獸王の冲天の意氣が句々に躍動してゐる。かうした壯大な詩調をかくまでに歌ひ得る詩人は稀である。作者泣菫の明治詩壇に於ける地位を確立した作品の一つとして、當時嘖々たる高評を得たのも當然である。

〔參考〕 本課教授の參考としてロ語譯的に大意をとつて見ることとした。

石工は木かげで、晝寢をしてゐるといふので、その留守に暗い石工の仕事場に入つて、まだ荒彫の唐獅子の頭を撫でまはしながら、靜かに詩をうたふのはいつたい誰なのか、——この一齣は作者が石工の仕事場に入つて、石彫獅子を見、賦詠の感興を催したことを叙してゐる。以下第四齣まではその獅子の威のある風姿を描く。

朽木の棚に据ゑられてゐる煤ぶつた額をした粗彫の豕や兒狗や野狐や或は牡鹿の群の中に、一際目立つて日かげを浴びながら立つてゐる獅子の姿は、何とめざましくおごりたかぶつたさまであることよ。

險しく裂けた岩に前脚をかけて、忿怒してゐるその姿、たてがみはうね〳〵と背の上に垂れて、あたかも春の潮が漫々と渦卷き寄せてゐるかのやうに見え、その胸は剛勇な男がひきしぼつてゐる弓のやうに張つてゐる。

不動明王の廣い肩の後から燃えあがつてゐる焰であるかのやうに長い尾は嚴めしく躍り、にこ毛が密に生えた脚の裏は、落ち散つたいざよひ薔薇の花は踏むことは出來ても、地上に巣くう鳥を驚かし目覺すことが出來ようか。(以下二齣は石彫獅子の悲哀と、完成の曉の想像を描いてゐる。)

石工の心がまへはなか〳〵すぐれてゐる。瞳子をまだ彫られぬ唐獅子は、光線を見ることの出來ない盲目の身であるから、たとひ昴は芳しい花園の花の香を嗅ぐことが出來ても、前脚をふみあげて、花園の小路を踏みくだくことはまだ出來ない。

鑿の手が全く捨てられ、石彫獅子が完成して美しい苑

のあけぼのの艶やかに鮮な新綠の木の下蔭に巨人のやうに堂々と据ゑられる時には、その雄々しい姿はどうであらう。獅子の背にもたれて、完成のあかつきの狀を暫く想像させてくれよ。(以下八齣は石彫獅子完成の曉の想像を歌つたもので、獸王讃美、獸王に對しての犧牲、獸王の威力等について。)

すべての獸類よ、お前たちの王である獅子の形を寫しとられて、今眞白い石に彫刻された。だから野からも山からも、林からも、どこに棲んでゐる獸も皆この獅子の所に集れ、そしてその蹄の前にひざまづいて、自分の弱いことを恥ぢて獅子の僕として仕へよ。

偉大な獸王のたましひがここに降つて來て、この眞白い石に籠つた。集まりひざまづいてゐる獸類よ、獅子の靈魂の稜威を身に浴びるために、汝の卑しい心を獅子に捧げるが宜い。

獸王としての無上の權力威光が、この眞白い石に具備された。獸類よ、獸王たる獅子に捧げる燔祭の神聖な火盞を用意せよ。

斑の牛と羚羊は、快く自ら進んで重傷を受けて死に、燔祭の犧牲となつて「聖き火盞」の上に燒けよ。犧牲となることの高い名譽はお前たちにあるのであるから、それを他の獸類に誇るべきで、犧牲となれないで、お前たちを羨んでゐる他の獸こそむしろ愚といはねばならないのだ。

見よ、犧牲はそなはつた。獅子は長々とうねつた流のやうなたてがみを額際に振り亂し、猛々しく起ち上つた、「我は狂暴な戰鬪の化身である。又いかなる時にも敗慘したことのない勝利の化身であるぞ。又無上の力の化身である。群獸よ、我に降伏せよ。」と呼號すれば、群獸は皆ひれ伏してしまつた。

その命令は何と壯烈を極めたものであることよ。神は死のやうに靜穩に默して永久に動かない。人間には魔のやうな不思議な强い力はない。我(獅子)はこの神と人間界にあつて何物をも屈伏せしめる王者であるぞ。又あらゆるものの價値を一身にあつめてゐるものであるぞ。又人間の胸中に煩惱を起させる絕大な魔力を持つてゐるものであるぞ。

どうすることも出來ない運命も、眼を見開いて凝視することが出來、怖氣づいて胸中がびく〳〵とうち顫へるやうなことがなく、勃々たる雄心の若々しい勇氣に溢れ、

勝利を獲得する確信に漲つてゐるこの身(獅子)は、この世に生きて死ぬといふことがあらうか、決して死ぬことはない。

我は永遠とともに決して絕えることのないものであると呼號する獅子の聲は、あたかも喇叭の音のやうに高く耳を聾するばかりである。その時、今まで沈默を續けてひれ伏してゐた群獸は、一齊に大聲をあげて獅子の威力をほめたゝへ、服從の意をあらはし、その聲は雷の轟き鳴り響くやうに聞えた。

いろ〳〵と想像を逞しくして來たことも、大空を翔る鳥の羽の元氣なくたるんだやうに消えかゝつた。夢から覺めたやうに現實にかへつて、傍を見ると、未完成の唐獅子は相變らず陽を浴びて立つてゐる。それは今想像した狂暴さこそなけれ、何となく豐滿な感じの溢れてゐる靜かな悠然とした姿は、唐獅子の大きな誇であらう。

(以下二齣は想像を終へて、藝術の永久なることを描く。)

この唐獅子の石彫は永久に傳はつて、幾千年も絕えない光輝を放ち、この上もない光榮を受けるであらう。ああ藝術は一切のものの上に位する。實に藝術のみが永久の生命を持つてゐる……。

一四　千里が竹

近松門左衛門
（國姓爺合戰）

扱方　近松翁の著作は概して世話物に傑作が多いといはれる。翁獨特の輕快洒脫圓轉自在の筆力を以て、社會の事件を材にとり、義理人情の葛藤を寫實的に描出して、直ちに人の肺腑を突く深刻味があるのが、翁の世話物である。しかし時代物も亦あながち棄てられない。內容が多く誇張的荒誕的ではあるが、その大味な所にまた却つて妙味がある。その上文章が甚だ典雅莊重絢爛を極めてゐる。そしてその中で第一の秀作とされてゐるのは「國姓爺合戰」である。本文はその一節千里が竹、和藤內奮戰の一齣を描いたものである。翁はこの父子の企圖を、彼獨特の美化力と詩化とを以て、忌憚なく和藤內のために、日本のために萬丈の氣焰を吐いてゐる。その空想的な、洒脫な、輕妙な文趣を味はしめるとともに、上方文學に重きをなす淨瑠璃文學の體裁を知らしめたいと思ふのである。淨瑠璃はいふまでもなく、目で讀んで味はふものではなく、耳できくものであるから、先づ、教授者なり、一生徒なりに讀ましめ、他の生徒をして、耳で、一應味はゝせ、その大要を把握せしめて、後語釋に移りたい。尙、教授に先立つて、國姓爺合戰全體の筋を話し、「千里が竹」の全篇中の地位を理解させておく必要があらう。

教授

作者

近松門左衛門　チカマツモンザエモン

江戸時代中葉の淨瑠璃作者。姓は杉森、名は信盛、通稱は平馬といひ、巢林子、不移山人、平安堂等の號がある。近松門左衛門とはその作者名である。その傳系は詳でなく、京都に生れ、京都に育つたともいふが、或は長門の人とも越前の人とも三河の人ともいはれてゐる。初め僧となり、後髮を蓄へて上京し、一條家に仕へたともいひ、或は役者であつたとか種々の說があつてはつきりしない。彼が作者生活の第一步に入つたのは、延寶四年のことで、二十四歲の時であつた。卽ち宇治嘉太夫（後の加賀掾）のために同年五月「源氏供養」を作り、更に山本角太夫（後の相模掾）のために同年十二月「瀧口橫笛」を作つたのである。爾後、加賀掾のために屢〻筆を執つたが、

延寶五年には、都萬太夫座のために藤壺の怨靈が藤の花から大蛇に變ずる趣向を作つて、好評嘖々たるものがあつた。そしてこれが彼の脚本として最も古いものでありこの頃から同座の狂言作者となつた。次いで貞享三年、彼が竹本義太夫と始めて提携して、義太夫のために「出世景淸」を作るまでは、一方では加賀掾また播摩掾のために淨瑠璃を作り、又一方では都萬太夫座の狂言作者として、幾多の脚本をものしてゐたわけである。が、何といつても彼が壓倒的な名聲を博するに至つたのは竹本義太夫と握手してからであつて、元祿十六年（五十一歲）には久しく住馴れた京都を去つて、大阪に移り「曾根崎心中」「雪女五枚羽子板」「傾城反魂香」「夕霧阿波鳴渡」「冥途の飛脚」「長町女腹切」等を製作して、これを竹本座の舞臺にかけ一世の人心を魅了したが、義太夫の歿後（正德三年）は、その門人政太夫（二代目義太夫）と提携して「國姓爺合戰」「曾我會稽山」「槍權三重帷子」「博多小女郎波枕」「心中天の網島」「心中宵庚申」等を新作し、享保五年「關八州繫馬」をその絕筆として十一月二十二日、七十二歲を以て歿した。

引用書

國姓爺合戰――一冊。正德五年十一月竹本座に興行。非常の大入で、三年越十七箇月間興行した。明末の忠臣和藤內を主人公とした時代物。近松六十三歲、正に想老い筆熟した圓融無碍の大作で、時代物三傑作中の第一に位するこの作の評判の餘りよかつたため、この後にも、「國姓爺後日合戰」「唐船話今國姓爺」などの作がある。尙この梗概は語釋「千里が竹」中にのべておいた。

語釋

「千里（せんり）が竹」　作者の假設の地名。「虎は千里の藪に住む」の俚諺から著想したものであらう。國姓爺合戰は全篇五段より成り第二段は「はまづたひ」「もろこし舟」「千里が竹」の三齣に分れ、第四段は「栴檀女道行」「九仙山」に分れてゐる。第一段は、大明十七代思宗烈皇帝の寵姬華淸夫人の御產が近づいたと君臣喜ぶところへ、韃靼國の使者貝勒王が來て、我が國王順治大王は華淸夫人を見ぬ戀にあこがれ給へば、夫人を韃靼に贈るべしと奏聞する。右將軍李踏天は夫人を韃靼に送るべしといひ、大司馬將軍吳三桂は不可なるを論じ、貝勒王怒つて席を蹴立てて退出しようとするのを李踏天が呼止めて、左眼を抉つて韃靼王に獻ずる。貝勒王は

色解けた體で立歸る。帝は李踏天が忠義に感じて、御妹栢檀皇女を與へようと、皇女に說き給ふ所へ、吳三桂が來て、李踏天が眼を抉つたのは韃靼へ一味の證據であるから、油斷あるなと諫める折から、韃靼勢が攻寄せて來る。吳三桂は手勢を率ゐて防ぐ間に、李踏天は帝の御首を打落し、寄手の陣へ駈入る。吳三桂は是非なく妻柳歌君に栢檀女を伴なはせて落し、己は印綬を携へ、華淸夫人を守護し近頃生れた己の子を槍の先に結び付けて落延びる。海邊まで落ちて來たが、夫人が流丸に當つて息絕えたから、腹を割いて王子を出生せしめ、己が子を刺殺して腹の中に入れ道を晦まして落ちて行く。一方柳歌君も栢檀女を伴なつて海際まで來たが敵の追擊が嚴しいので、皇女を小舟に載せて沖遠く舟を突遣り、「あら心やすや嬉しや。よしこの上は生延びても我は身一つ。死んでも誰を友ちどり。生死の海は渡れども、夫の行く方、子の行の方、君が行く方は覺束波のうき世の海を越えかねし渡りかねしといはばいへ、この一心のはやて舟、仁義の櫓櫂、武勇の楫は折つても折れぬ沖つ波寄せくる時の聲か。」とて、劍に縋つてたぢたぢ〳〵。よろ〳〵よろほひ寄る方の、磯山おろし松の風。亂れし髮を搔上げて、あたりを睨んで立つたりし、和漢女の手ほん紙、筆にも寫し傳へけり。」第二段「はまづたひ」は、日本肥前國に和藤內といつて二十餘りの漁師がある。父は鄭芝龍といひ、大明の忠臣である。諫言が容れられなくて日本に移り住み、老一官と名を改め、平戶の漁師の女を娶つて和藤內を設けた。和藤內は一日濱邊で鴫と蛤と相爭つてゐるのを見て軍法の奧義を悟つたと喜ぶ。「唐土船」は、——ところへ、沖の方より珍しい小舟が一艘漂つて來る。和藤內は妻の小睦とともに引寄せて見ると「唐土人と思しくて、二八餘りの上臈の芙蓉の顏、柳の眉、袖は涙の汐風に化粧もはげて面やせて、あはれにも美しく雨にしをれし初花に、目鼻を付けし如く」である。和藤內は「つね〳〵父が詞の唐韻」を覺えてゐたので、問ふと、これが栢檀皇女であるから驚いて家に伴なはうとするところへ、父一官も來て、樣子を聞き、直ちに唐土へ押渡り舊主の無念を雪さんと和藤內に計る。和藤內は謹んで「たゞ今某この濱にて、鴫の鳥と蛤、稀代のわざを見受けしより、軍法の奧を悟り開いて候。千里を出て西に利ありとは、大明國は我が國より、

西に當つて千里の波濤」軍法の法の字は、散水に去ると書く。散水なり、水を去ることはこの出汐の水に任せ、早く日本の地を去るべしとの神の告。我等が本封師の卦に當つて、師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといつば、我が一身を以て數萬騎の軍兵を從へ保つ大將。今散水のさす潮に、早く日本の地を去つて、南京北京に押渡り、浮世にながらへあるならば、吳三桂と軍慮を合せ、李踏天が賊徒を滅し、軍勢催し韃靼へ逆よせに押寄せ、韃靼あたまの芥子坊主、ねぢくびつらぬき追伏せ、御代長久の凱歌を上げんこと、和藤內が心魂に徹するところ。天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。吉凶は人によつて日によらず、このまゝ直に御出船。道すがら島々の夷を語らひ、案の中なる軍船、御出陣。」と「三韓退治の神功皇后」の如く勇み立つ。で、栢檀皇女は妻小睦に守護させて日本に殘し置き、出立しようとすると、小睦は別離の悲歎に暮れる。和藤內は父母とともにそれを宥めて「舟を浮みに漕出せば、詮方波に身をひたし、たゞ手を上げて『よなう。舟よ』と呼べど出船の、かひなき巖に駈上り、足をつま立て伸上り、見送る影も遠ざかる。唐土の望夫山、我が朝のひれふる山。今の我が身の吾が思、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじと搔口說き、涙限り、聲限り、互に寄れば招かれで、姿を隱す汐ぐもり。聲をへだつる沖津波。沖のかもめ磯千鳥泣きこがれてぞ……。」そして「千里が竹」の齣となる。卽ち「別れ行く船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども——」となるのである。

〔船路の末も知らぬ火の筑紫〕船路の行末もわからぬといふことを、知らぬ火にかけたのである。知らぬ火は筑紫の海に燃える不思議な火から、筑紫の枕詞となつた。萬葉集卷三或は卷二十に「白縫筑紫のわたわ。」又は「しらぬ火筑紫國に。」などとある。日本書紀には、景行天皇が筑紫に下り給うた時に、夜暗くて御船を着ける便もなかつた。然るに忽ち火の光を見られて岸に著かれたとある。俗に千燈籠ともいつて、今も陰曆七月晦日の夜あらはれるといふ。肥前肥後の肥の國も火の國の義である。筑紫は九州の古稱。

〔雲に埋む〕遙かに見渡しても、筑紫は雲に隱れて見えないことをいふ。

〔あとに擁護の神風〕あとに逢ふを應護にかけた詞。

皇妹栴檀皇女を妻小睦に托して日本に置き、和藤内は父母とともに明に赴いたが、神の加護によつて再會を得ること。神の吹き給ふ順風に乘ること。擁護は感應加護の略、神佛が祈請に應じて護らせ給ふこと。

〔千波萬波を押切る〕 大波小波を押切つて進むこと。即ち長い航海をしての意。

〔鄭芝龍一官〕 「はまつたひ」に「抑この和藤内が父は元日本の者ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といつし者なりしがくらき帝を諫めかね、自ら長沙の罪をさけ、この日の本に筑紫潟、老一官と名を改め、浦人に契りをこめ、この男子を設けしゆゑ、母が和國の和の字を用ひ、父は唐人唐の聲をかたどつて和藤内三官と名のり」とある。鄭芝龍は後、前述のやうに妻と和藤内を伴なひ明に行き、婿、甘輝將軍を身方にして明朝の恢復を謀つたが、成らなかつた。因に鄭芝龍が明帝を諫めたることに關しては第一段に吳三桂が帝に申す言として「御若年の時、鄭芝龍と申す者佞臣(李踏天を指す)を擯け給へと諫め申すを逆鱗あり、鄭芝龍は追放され、今老一官と名をかへ日本肥前の國、平戸とかやに住まひ致すと承る。鄭芝龍か(李踏天謀叛のことを)傳へ聽き、日本まで大明國の御耻辱ならずや云々」といふ一節がある。

〔故郷へ歸る唐錦〕 漢書に「富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ錦夜行。」 立身出世して故郷へ歸ること。唐錦は支那から渡來した錦、又、金絲を入れて織つた錦。

〔裝束引きかへ〕 裝束を改めること。

〔時移り代變り〕 時勢の變遷したのをいふ。

〔李踏天〕 明の重臣。右將軍。私に韃靼王と結んで明國の顚復を謀り、遂に思宗烈皇帝及び皇后清夫人を弑し、皇族忠臣を滅して自ら國王となつた。後、國姓爺等に捕へられて酷刑に處せられた。

〔引入れにて〕 手引でといふ意。李踏天がひそかに韃靼に通じ、明に叛き、韃靼をして明を滅させたことを指す。「天下悉く」は「韃靼夷の奴となり」にかゝり、「李踏天が引入れにて」は「韃靼夷」にかゝる。「韃靼夷の奴」は韃靼の奴隷、即ち韃靼の被征服者となり、臣下となつた意。

〔韃靼夷〕 韃靼は明の北にある大國。實傳では清朝のこと。清朝は女眞の後、通古斯族で愛親覺羅氏から起つた。

〔司馬將軍吳三桂〕 明朝の忠臣。帝と皇后とが弑せられた後、栴檀皇女を妻の柳歌君に托して遁げさせ、自らは幼皇子を保護して九仙山に隱れた。後、皇子を奉じて國姓爺に投じ、韃靼王を追ひ、李踏天を誅して皇子を即位せしめた。實傳では遼東の人、遼東總兵となつて清を拒いだが、逆賊李自成が燕京を陷れた故、師を清に乞うてこれを破つた。清これを平西王として雲南の雄藩に封じた。聖祖の時、藩を撤しようとした爲、遂に兵を擧げて清に叛いた。一時勢盛んであつたが、康熙十七年(一三三八)病死した。

〔何を以て云々〕 身方に賴む者もない意。義兵を起すべき軍勢もない。義兵は義の爲に起す兵。「旗を擧ぐ」は旗揚で、軍を起すこと。

〔天啓五年〕 天啓は明の嘉宗皇帝の年號で、その五年は我が後水尾天皇の寛永二年に當る。

〔二歳になりし娘の子〕 錦祥女を指す。後、將軍甘輝の妻。自刄して、義によつて甘輝を說き、和藤内を援けさせた。

〔乳母の袖に云々〕 乳母の袖の上に抱かれてゐる我が子を、そのまゝ見捨てての意。

〔八重の潮路の中絶えて〕 遠く海を隔てたこと。八重の汐路の八重は彌重の義。潮のさしひく路筋。又、うみぢ、ふなぢ、海上の意。こゝでは遠くうちつづいてゐる海上の意。

〔いつ父母も知らぬ身が〕 いつ父母に別れたとも知らぬ身がの意。

〔育てば育つ〕 育てば育つものであるわいの意。

〔草木の雨露の云々〕 和漢朗詠集に紀納言(長谷雄)「養得自爲二花父母一、洗來寧辨二藥君臣一。」謠曲「熊野」に「草木は雨露の惠、養ひ得ては花の父母たり。」

〔天地の父母〕 天を父とし地を母とする。「草木の雨露の惠に長ずる」のが天地の恩による如く、天地の恩惠によつてであらうかといふのである。天地の恩は佛教では四恩(天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩)の第一に位する。

〔五常軍甘輝〕 獅子が城の主、初め韃靼王に從つたが、妻の義によつて和藤内に從ひ、遂に恢復の功を奏した。永曆帝即位の後栴檀皇女を賜はつた。實傳には永曆十三年七月大擧して金陵に迫つたが、朱成功がその言を用ひずに備を爲さなかつた爲、清將梁化鳳に破られて

殺されたとある。

〔商人の便りに云々〕 唐土との貿易商の話によつて傳へ聞いた意。勿論、平戸で傳聞したのである。

〔承引〕 うけひくこと。承諾。承知。

〔頼まるべし〕 依頼することが出來よう。

〔怪しまん〕 原文には「怪しめん」とある。「怪しむ」は四段と下二段と兩方に活用する。いづれも他動詞で、意味に變りはない。

〔和藤内〕 曲中の主人公。鄭芝龍一官の子。明國が逆臣のため韃靼國の侵すところとなつたことを知つて、栴檀皇女を妻の小睦に托し、父母と共に明に赴いた。異母姉錦祥女の婿五常軍甘輝を說いて恢復の軍を興し自ら大將軍となり、延平王國姓爺と稱して鄭成功と號した。頻りに數城を陷れ、吳三桂とともに南京城を占領し李踏天を捕へて酷刑に處した。又、韃靼王を逐うて太子を立て永曆帝とした。後、東寧の王となる。實傳には朱成功初め鄭森といつた。太祖の遠孫唐王を立てて恢復を謀り、防禦中軍督に任ぜられ、國姓朱を賜はつて名を成功と改めさせられた。これから呼んで國姓爺と稱する。二年、芝龍は清に降つて、唐王は殺された。成功は永明王を奉じて明祚を繼ぎ、なほ清に抗した。永明十二年、延平王に封ぜられ招討大將軍に拜せられて大擧南京を襲うたが、克たずして臺灣に據つた。偶〻日本にゐた朱舜水と謀つて日本に兵を借らうとして成らず、遂に十六年病歿した。年三十九。

〔頓智〕 機に應じて忽ち出す奇智。頓才。「頓智を以て人家に惹ひ」は惹ふ際の注意までにいつたのである。次の「おつつくべし」は我に追付くべしの意。

〔潯陽の江〕 江西省九江府。唐書地理志に江州に「潯陽縣あり。」一統志に「九江府潯陽江は府城の北に在り」と。楊子江の南岸にある入江。白樂天の「琵琶行」によつて、古くから名高い。

〔これ猩々の栖む所〕 謠曲「猩々」に「又、こゝに不思議なる事の候。市ごとに來り、酒を飲むものの候が、盃の數は重なれども、面色は更にかはらず候程に、餘りに不審と存じ名を尋ねて候へば海中に住む猩々とかや申し候程に、今日は潯陽の江に出でて、彼の猩々を待たばやと存じ候。」とあるが、これによつたのである。猩々は猿猴類の獸、スマトラ、ボルネオ等の諸島に棲む。他に髮が赤くて長く、聲は小兒の泣くやうで、か

つ好んで酒を飲むといふ想像上の猩々がある。こゝもこの方の猩々である。

〔赤壁〕 湖北省黃州府（現在の黃岡）城外の景勝である。府縣の西北にあたり、楊子江の北岸に屹立し、截然壁のやうで赤色である。因つて名づけられた。一に赤鼻磯といふ。古來曹操が孫權、劉備の軍に敗られた所と稱せられてゐるけれども、彼の古戰場は湖北省武昌府嘉魚縣の同名の地である。前記の赤壁は宋の神宗元豐五年蘇東坡が再びこの地に遊んで舟遊びを試み、赤壁前後二賦を作つてその景勝を記した所として有名である。

〔東坡〕 蘇東坡のこと。唐宋八家の一人。名は軾、字は子瞻、東坡はその號である。洵の長子。眉山の人。弱冠にして經史に通じた。嘉祐二年禮部に試し、主司歐陽修に知られた。英宗、神宗、哲宗に歷事し翰林學士兼侍讀に至る。王安石の新法に反對したため、杭州に貶せられ、又更に黃州に貶せられた。後、宮中に召されたが又貶せられたりした。歿する時、年六十六。

〔配所〕 罪ある人が流罪にされた場所。

〔獅子が城〕 假作の城。「千里が竹」に續く第三段の冒頭の所に「大和唐土さま〻に、道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人巡り合ひ、我が聟とばかり聞き及ぶ五常軍甘輝がやかた城、獅子が城にぞ着きにける。聞きしに優る要害は、未ださえかへる春の夜の、霜のきらめく軒の瓦、魚虎天に鰭ふりて、石疊高く築き上げたり。堀の水藍に似て、繩を引くが如く、末は黃河に流れ入り、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧しく、箭窓に弩際間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはといはば打放さんその勢、和國に目馴れぬ要害なり。」とある。

〔しめし合はす〕 互に合圖をして知らせあふ。

〔方角とても白雲〕 方角も知らぬに白雲をかけたのである。

〔日影を心覺えにて〕 日の射す方によつて方角を知り、それを心おぼえにしての意。心覺えは記憶のしるしとするもの。

〔かひ〻しく〕 しつかりとしたこと。てきぱきしたこと。起居動作が勇ましいこと。

〔たつきも知らぬ〕 たづきは手著の義。又よるべ、たよりの意。「たづきも知らぬ」は、こゝでは手をつけ

ることも出來ぬこと。

〔根ざし〕 根ざすこと。こゝでは根。瀧つ波は沸上る波、逆捲く波で、古木の根が逆捲く波のやうに地に横たはつてゐること。

〔ほうど我をぬかし〕 芒然と拍子抜けのしたさま、途方に暮れること。「ほうど」は殆ど。

〔なう〕 人を呼びかける時の語。

〔母ぢや人〕 封建時代の武士の間で母を呼んだ詞。今は廢れた。母者人。母人。母御。

〔この脛骨に覺えあり〕 この脛の骨がだるくなつたことで、以前の經驗により遠路を歩いて來たことがよくわかる意。

〔うむ〕 一人で合點するやうな場合に用ひる。あゝ、さうだ。

〔なぶるよな〕「なぶる」は馬鹿にする、ひやかす、もてあそぶ、又いぢめる意。「よな」は念を入れるためなどに用ひる。なぶるんだなあ。

〔魅す〕 だますこと。たぶらかすこと。

〔小豆の飯の相伴〕 小豆飯を頂戴すること。昔から狐は稲荷明神の使として、これに小豆飯や油揚などを供へるので、かう書いたのである。相伴は貴人の食に陪するをいつたが、轉じて同輩にもいふ。即ち一緒に頂戴すること。

〔根笹〕 笹の一種。根のよく蔓延して繁茂するもの。千里竹。

〔ちやるめら〕 ポルトガル語 Charamera の轉。喇叭に似て七つの孔がある。管は木製、頭と尾とは銅で作る。大平簫、哨吶、哨那、唐人笛ともいふ。

〔高音をそらし〕 高い音を發する。そらしは吹きそらしの略。

〔すは〕 すはやの略。さあ、やあの如くに、突然の出來事に驚いて發する詞。

〔凄じなんども云々〕 物すごいなどいふくらゐではまだいひ足りない、非常に物すごい。

〔臆せず〕 恐れないこと。

〔讀めたり〕 わかつた。合點した。

〔虎狩な〕「な」は「よ」と同じ意味の感歎詞。

〔勢子〕 列卒ともかく。獵の時に鳥獸を驅り出す人足のこと。

〔虎嘯けば風起る〕 淮南子に「虎嘯而谷風至、龍擧而

景雲屬。」古樂府に「虎嘯谷風起、龍興景雲浮。」易に「雲從レ龍、風從レ虎。」などとあるのによつて、かくはいつたものであらう。

〔二十四孝〕 支那に於ての二十四人の孝子。即ち虞舜、漢文帝、曾參、閔損、仲由、董永、剡子、江革、陸績、唐夫人、吳猛、王祥、郭巨、楊香、朱壽昌、瘦黔婁、老萊子、蔡順、黃香、姜詩、王裒、丁蘭、孟宗、黃庭堅。

〔楊香〕 晉書に「楊香年十四歳嘗テ父豐ニ隨ヒテ田ニ往キ粟ヲ穫ル。父虎ノ爲ニ曳キ去ラル。時ニ楊香手ニ寸鐵ナキモ、惟父アルヲ知リテ身アルヲ知ラズ、踴躍シテ向ヒ前ミ、虎ノ頸ヲ握持ス。虎モ亦靡然トシテ逝キヌ。父賴リテ害ヲ免ルヽヲ得タリ。」

〔神力ます〳〵日本力〕 神のやうなふしぎな力がますます加つて來る武勇な日本人の力。

〔大人氣なし〕 大人であつて、その擧動が大人らしくない。

〔一挫ぎ〕 一度で押しつぶしてしまふこと。

〔尻ひつからげ〕 尻ひきからげの音便。衣服の裾をからげること。

〔身繕ふ〕 姿をとゝのへること。みごしらへをする。みじたくをする。

〔圍うて〕 圍ひての音便。身を以て母を蔽ふ意。

〔西天の獅子王〕 西天は支那で印度を指す稱。印度の獅子のこと。獅子は百獸の王と稱せられるので獅子王といふ。

〔べうぞ〕「べくぞ」の音便。

〔吹く風と共に暴れたる云々〕「虎うそぶけば風起る」その凄しい風の中から猛り狂つた虎の姿があらはれ出でたといふ意。

〔藤根〕 藤の根。

〔二人〕 和藤內とその母。

〔いがみ懸る〕 獸の怒つて嚙みつかうとする貌。「いがむ」(唾む)といふのは、獸の猛りて咆えること。獸の齒を現して嚙みつかうとすること。

〔弓手、馬手〕 弓手は弓を持つ手即ち左手、馬手は馬の手綱をとる手即ち右手。

〔根競べ〕 根氣を比べ合ふこと。根氣は忍耐力、物に堪へしのぶ精力。

〔聲を力にえい〳〵〳〵〕「えい〳〵〳〵」と掛聲を

出して勢をつける意。

〔大童〕 髪を振亂した貌。

〔岩間に小首を投げ〕 小首は首を傾ける時の首の稱にいふ語。疲れ弱つて、がつくりと首を岩の間に投出して休むさま。

〔ふいがう〕 吹革とも風櫃とも書く。火をおこす具。一種の箱の中に空氣を孕ませ、孔より風を出して火を吹かす裝置の物。ふいご。「ふいがう吹くが如くなり」は虎の盛んな大息を誇張した形容。

〔神國〕 我が日本の國をいふ。

〔神より受けし云々〕 日本人は神の子孫であるからいふ。

〔身體髮膚〕 身體のどこからどこまでもの意である。孝經に、「身體髮膚受二之父母一。」

〔力立〕 力あるを見せかけること。力あるを自慢すること。

〔神は我が身にいすゞ川〕 神は我が身に居ますの居を、五十鈴川にいひかけたのである。

〔御祓〕 おはらひ。災厄を除くために、神社佛寺より出す札。倭訓栞に「伊勢の御祓くばりは祓串を分配するなり。撫物の遺風といふはいかが。後陽成院の頃よりの事。」

〔納受〕 神佛が祈願者の心を受けて守護すること。

〔護符〕 神佛の加護がこもつてゐるといふ札。社寺などから受けて厄難などを除くために身の守とする。「肌の護符」は肌に付けるまもり、肌身離さず持つてゐるまもり。

〔神國神秘のその不思議〕 神國の神祕といふほどの義。更に不思議といふ文字を加へて句調をよくしたのである。即ち不思議にも直ちに神の感應があつたことをいつたのである。

〔じりゝ〳〵と〕 少しづつの意。徐にすゝむさま。

〔わなゝく〕 身振ひして動くこと。

〔岩洞〕 岩の洞窟。岩のほらあな。

〔尾筒〕 尾の根の脹れた所。

〔ひるむ〕 力が弱つて萎ひ撓むこと。挫け縮むこと。

〔天の斑駒〕 素戔嗚尊が天の斑駒の皮を剝いで大神の忌服屋へ投げられた故事。古事記に「天照大御神坐二忌服屋一而令レ織二神御衣一之時、穿二其服屋之頂一、逆二剝天斑馬一剝而所二墮入一時、天衣織女見驚而、於レ梭衝二陰

上一而死。」

〔天照大神の威德ぞ〕 かく容易に虎を打ち伏せたことは、人間業でなく、天照大神の御威德ぞと、神恩の高いことに感佩した義である。

〔うぬ〕 おのれ、きさまの意。輕蔑の意を含んだ對稱代名詞。己奴。

〔風來人〕 風に吹寄せられたやうに何所よりともなく來たことを風來といふ。風來人は何所よりともなく來た人。浮浪の人。

〔高名〕 こゝでは武功の意。戰場で敵の首を取ることなどに用ひる。及、名譽の意もある。「うぬはいづくの云々」以下は「我が高名を妨ぐるうぬはいづくの風來人。」の意。

〔狩出す〕 鳥獸などを探して追出す意。

〔早々〕 早速。

〔異議に及ばゝ〕 承諾せずして彼此いふならば、異議は他に異なつた議論。反對の意見。

〔しやぐわん、〳〵〕 冠者を倒にして唐音めかしたのだといふ。こわつぱ。

〔わめく〕 叫。喚。をめく。

〔笑壺に入る〕 餘念なく笑ひ興ずること。悅に入る。

〔餓鬼も人數〕 物の數にもならぬが時には便となることと、多數の勢力でその效力があるをいふ。餓鬼も千人、枯木も山の賑はひの類と同じ俚諺である。餓鬼は餓鬼道に住する亡者。飲食物に乏しくて皮肉枯槁し、或は腹は大きいが咽喉が細くて針のやうであるから、飲食することが出來ず、常に饑渴に苦しむといふ。轉じて子供はよく物を食るから子供の稱にもなつたが、こゝはたゞ卑しめていつたのである。

〔しをらしい事〕 殊勝なこと。氣のきいた立派なこと。「しをらし」には可憐な意もある。

〔ほざく〕 ぬかした。しやべつた。「言ふ」を賤しめた語。

〔舌長し〕 言過ぎを罵倒した詞。詩經に「婦有二長舌一、維亂之階。」

〔李踏天とやら、石花菜とやら〕 李踏天と石花菜と音の相似てゐる所から、李踏天を卑しめていつた詞。石花菜は石花菜草をよく洗ひ晒してこれを煮た後、滓を去り、次に冷して固めた物を突出器で細切としたもの。醬油又は酢をかけて食ふ。突出しはところてんの

緣語。

〔ぢきに逢ふ〕 直接に對面する。

〔いかなこと〕 斷然。どんなことがあつても出來ないの意。

〔ねめつくる〕 睨めつける。强く睨みつける。

〔ものな言はせそ〕 物をいはすこと勿れの意。

〔働かず〕 こゝでは暴れない意。おとなしくしてゐることと。

〔八方無盡〕 縱橫無盡に同じ四方八方へ自由自在なこと。思ふ存分なこと。

〔なでまくる〕 撫捲。撫切りにしようと切りまくる。まくし立てて撫切りにする。

〔安大人〕 捕卒の頭。大人は敬語。

〔官人〕 又クワンニンともよむ。官吏。役人。

〔おのれ老耄餘さじ〕 「おいぼれ」は老いて心が鈍になつた者を罵つていふ語。こゝでは和藤內の母を指す。うぬ老母もろとも叩き斬つてやるほどの意。

〔一文字に切りかゝる〕 こゝはただひとうちにと勢凄まじくきりかゝるさま。

〔神明擁護〕 神明は神、神祇。又、伊勢皇大神宮の特稱に用ひる。神の加護。「なほも」といつたのは、前に虎の威勢を失はせ、次に「繫ぎし如くに働かず。」なつたことを受けていつたのである。

〔身慄し〕 こゝは猛獸が怒り猛つて身體に力を籠めるための身慄である。

〔かり鉾〕 不詳。鉾の種類にこんな名は見えない。

〔數槍〕 不詳。多數の槍の意か、或は投槍又は鎌槍の誤か不明。かり鉾、數槍とも頭音の調子で並べた言葉であらう。

〔神力自在〕 神明の加護に依り自由自在に神の如き力のあること。

〔打物〕 鍛へ打つた太刀、槍の類の總稱。

〔色めきたつ〕 軍勢が崩れ始めること。

〔どつこい遣らぬ〕 「どつこい」は用意する時に出す語。どつこいさうはやらぬ。そちらへは返さぬ。

〔素首〕 「そくび」の音便。首を罵つていふ語。

〔岩に熟柿を打つ〕 脆く往生するさまをいふ。岩の如き堅い物に熟した柿を投附けると、容易に壞れてしまふ諺。

〔五體〕 筋、肉、骨、毛の稱、又頭と兩足をもいふ。

卽ち全身の總稱。

〔ひしげる〕 おしつぶれること。

〔仁王立〕 二王の像の如く、勢こんで立つてゐること。二王は金剛神のこと。義經記にも「武藏坊は敵を打拂ひ、薙刀を逆樣に杖につきて仁王立にたちにけり。」

〔申し〕 人を呼びかける時にいふ語。

〔土にくひつき〕 平蜘蛛のやうに平身低頭するさま。

〔手並〕 腕前をいふ。技倆のこと。「手並覺えたか。」は腕前がわかつたかの意。

〔平戸〕 肥前北松浦平戸島上にある。平戸町は人口一萬三千。松浦氏累世の城址がある。

〔三世の恩〕 現在、過去、未來の三世に續いた恩義の意で、君及び師の恩をいふ。親子は一世、夫婦は二世、君(師)臣は三世といふ。

〔向後〕 原文には「きやうこう」とよませてゐる。この後。以後。

〔地に鼻つける〕 「土にくひつく」と同じく平身低頭の意。

〔出かした〕 出來たと稱揚した詞。うまく成就したと譽めた詞。

〔月代〕 男子の冠の下の髮を半月形に剃ること。武士が冑を著る爲に應仁の頃から起つたといふ。

〔元服〕 男子が成人して服を改め、髮を結ひ、冠を加へる時の儀式をいふ。この時幼名を廢して烏帽子名を附ける。

〔指添〕 刀に添へてさす短刀をいふ。急拔。中刀。わきざし。

〔並ぶ頭の鉢の水〕 頭が並んでゐるをいふ。鉢は頭の鉢などをいつて賤しんだ意と、鉢の水とを掛けたのである。鉢の水は月代の時水が必要な爲に用ひたのである。

〔揉むや〕 水をつけて毛を揉む意と、押合ひせり合ひして混雜する意とをかけてある。

〔こぼつ〕 破る意で、卽ち傷つけること。

〔絲鬢〕 江戸時代の中頃に行はれた男子の髮の結方。頭の髮を剃下げて兩方の鬢を細く狹く結つた髮。鬢は頭の左右側面の髮をいふ。

〔厚鬢〕 鬢の髮を剃りおとさずに頭の中央部より額にかけて狹く剃り落し、鬢の髮を廣くして結つた髮の風、古く神主が作つた髮。

〔二櫛半のはらけ髪〕 二回半ほどしか櫛を入れない極めてぞんざいなはらけ髪の意。「はらけ髪」は毫髪で俗にいふばらけた髪のこと。「はらけ」はばらげで散らばつた毛のことをいふ。

〔頭ひやつく風引いて〕 頭の頂を月代にしたので、風がぢかに當つて冷たく、それで風邪を引いたといふ意。「風」が兩方にかけてある。

〔くつさめくつさめむら雨云々〕 「くつさめ」はくさめ。嚏。くしやみ。くつさめと村雨は音が似てゐるから續けたのである。又、村雨といつて涙を洩らすことにかけてある。村雨はざつと一しきりづゝ降る雨。

〔供廻り〕 供人の一群。

〔國どころ頭字〕 生國の名稱の首にある字。

〔二行に立つてぼつたてろ〕 二列に並べて追立てろの意。追ふことを上方ではぼふといふ。

〔御手先〕 前衛。先陣。先鋒。

〔手振の衆〕 手を振つて行列の前を追ふ役の者ども。

〔ちやぐちう〕 南支那の泉州のことか、福建省の厦門。

〔東蒲塞〕 Cambodia. 佛領印度支那の王國。一八六三年來佛國の保護國となる。カボチャ即ち南瓜が傳來した本國。男子を罵つて「かぼちや野郎」といふ語がある。

〔呂宋〕 Luzon. 米領フィリピン諸島の大島。

〔東京〕 Tongking 佛領印度支那の地名。昔の交趾の地。一八八三年來佛國の屬地となつた。

〔暹羅〕 Siam. アジヤ洲の東南部に突出する一王國。東北は佛領印度、西は緬甸に接し、南はシヤム灣に臨んでゐる。首府は盤谷。氣候炎熱で、頗る米作に富んでゐる。

〔占城〕 Chamba. 今の交趾支那の南方の地。安南に滅された。

〔ちやるなん、ほるなん、うんすん、すん、もうる〕 これ等はいづれも南方支那の地名、或は物名、或は物名。めかした近松が頓智の造語。

〔うんすん〕 支那の吳淞か。

〔じやが〕 南洋の Jacatra 島。じやがたら芋即ち馬鈴薯が傳來した國。

〔さんとめ〕 Sao Thome. 印度の東岸にある地名。サントメ縞の原産地。棧留縞は綿物である。

〔今參り〕 新參をいふ。只今家來になるをいふ。

〔御供先〕 供廻りの先手。

〔引馬〕 飾に引出す馬。こゝは跡に虎を引きつれることであるが、馬でなくても跡に引連れるのを引馬といふ。

〔虎斑の駒〕 虎毛の斑文ある馬といふので、虎を馬と見立てたのである。前の「天の斑駒、素戔嗚尊の神力云々」と對應する。

〔名を取る、口取る、國を取る〕 孝行の名をとり、お供先は虎斑の駒の口を取り、又唐土を占領した意。

〔踏跨げたる〕 鞍鐙に足を踏跨いでゐることと、譽が日本、唐土の兩國に輝いてゐることを掛けてある。

〔鞍〕 馬の背に置く具。人を乘せ、物を載せる座の義。

〔あぶみ〕 鐙、馬に乘る時兩邊の脚をのせる馬具。足蹈の義。

鑑賞批評 變幻自在な近松の妙筆は、實に天才的淨瑠璃作者としての彼を萬古不渝のものとしてゐる。勿論行文、運筆には到る所に破格があり亂調がある。雅俗は混淆し、緣語、掛詞は縱横にからみからんでゐる。が然しこれこそ天才人のみに許された藝術上の勇躍であらねばならない。一方、內容に於ける不自然さも亦、最も藝術的意味での「荒唐無稽」を表すものとして、いはゆる「詩の境」に踏入つてゐるものと思はれる。近松は、決して「通人」的藝術家ではなかつた。小さく凝り固つた粹人の藝術に安んじた作家ではなかつた。これを西鶴と比較して見ても、より以上に大衆的な——大衆の心を魅し去り、その魂を高鳴らせるだけの力を賦せられた作家であつた。

そのスケールの大きさ、その表現の潑剌さは、しかも例の獨得の情緒をひた〳〵と中に漂して、無縫天上の錦——とまでは行かずとも、とにかく一種の空想世界を形づくつてゐる。まことに彼の作品に接して、いつも驚かされるのは、その天を擎げるばかりの大らかな空想力である。特にかうした時代物に於ては、恰も天馬の馳けるが如く、その藝術的長翼を思ふまゝにひろげて、右に行き、左に行き、上を馳け、下を這ひ、——我々はたゞ魂の昂揚に我を忘れつゝ、そして、そのうちに自ら胸のそつと潤されるやうな情調にまで惹きこまれて了ふ。この「國姓爺合戰」が彼の傑作の一として、當時の人々を熱狂せしめたのも無理ならぬことである。例へば、「案にたがはず吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち……」あたりの和藤內と猛虎の組打ちは、害侈宴樂に馴れ切つた元祿人にとつては、

一味の清涼劑として、如何に興味をそゝられたことであらう。又、和藤內が勢子を威服するあたりの、意氣天をつくばかりの和藤內に對して、唯々諾々たる勢子の意氣地なさは實に「大向を唸らせた」ものであらう。天照皇大神宮の威德を持ち出したり、大和魂をふりかざしたりするあたりも亦、彼の大衆味たつぷりの所であらう。とにかくこの一篇は、武勇の權化大和魂の權化ともいふべき和藤內の活躍が、自由奔放な彼の詩的空想の下に、變幻自在な筆を以て躍如として描かれてゐる。そして、苟も大和魂を持つた日本人にとつては、痛快極まる作品といつていゝのである。この點を特に主眼として教授して頂きたい。又その句讀に注意させ、目で見る文章ではなく、耳で聞く淨瑠璃の文章の輕快な階調にも留意させて頂きたい。

一五　美術に現れた日本國民性

藤懸靜也

[扱方] 筆者はいふ「元來我が國民は風光明媚な山川の風趣に惠まれて、藝術をよく理解し味はふ力をもつてゐた。それ故、一たびすぐれた大陸藝術に接すると勃然として藝術の振興を見、自己獨特の長所を發揮するやうになつた。」と。その道程に於て、我が優美な國民性がいかに輸入された美術を日本趣味化し、いかに燦爛たる發展を來したかを個人的趣味好尙に捉はれず、純然たる美術史的立場から述べたのが本文である。美術史の概要を知つて、そこに現れた我が國民性の一斑を知り、延いては國土が一國文化の上に及ぼす力が偉大であつて、國民性もまたその支配を受け、藝術もまた國土の恩惠に浴するの大なることを窺つて見たいと思ふ。

本文は、僅かな中に、我が國の繪畫を中心とした美術史の概略をよく說いてある故、小さな美術史を講ずる心持で講義されたならば、生徒をして、我が國の美術の發達變遷を知らしむることが出來る。更に理想的にいへば美術作品の理解は實物に接することを必要とするが、少くとも寫眞又は模寫の掛圖などによつて說明し、美術鑑賞力を養はせるならば、その下に働いた國民性の力を十分に會得させることが出來ると思ふ。

[教授]

作者

藤懸靜也　フジカケセイヤ

美術批評家。文學博士。東京帝國大學教授。明治十四年二月茨城縣古河町に生まれ、東京帝國大學史學科を卒業し、國學院大學教授、日本大學講師等を兼ね傍ら美術雜誌「國華」の編輯に携つてゐる。美術批評家として批評の筆を執り、尙ほ、版畫の研究としては、自他共に許す所であつて、篤學溫厚の學者である。その著書に美術に關するものが多く「木版浮世繪大家畫集」「浮世繪」「浮世繪精粹」等がある。

語釋

〔美術〕　Fine arts　色彩、形體、音律、言文等によつて美を表すを目的とする技術、即ち繪畫、建築（但し美的要素の多いもの）彫刻、音樂、文學等を廣く美術といふが、普通には特に造形美術(form ative arts) 即

ち繪畫、彫刻、建築等を美術といつてゐる。こゝもそれ。

〔國民性〕 National character. その國民に特有な氣質。一國民全體に通じてゐる性質。

〔文明〕 社會の物質的並に精神的發達の總稱。文教が盛になつて人智が進歩し、百般の事物が整備して世の中が開明におもむくこと。

〔文化〕 文明と殆ど同意である。文教が盛になり、世が開け進むことをいふ。近頃は文明より、文化の方をやゝ新しい意味に用ひてゐる。しかしこれは文明といふ言葉の語感に陳腐な感じが生じただけで、意味に變りはないのである。

〔適應〕 かなふこと。よくあてはまること。

〔日本畫〕 我が國に發達した特殊の繪畫である。太古には陶棺銅鐸にかいた繪模樣があつたけれども極めて幼稚であつた。三韓の文物輸入とともに漸く發達し、佛教の傳來から急速の進歩をなした。だかその發達は稍彫刻より遲れ、平安朝に百濟河成、巨勢金岡が出てから我が國固有の趣味を發揮した。その後の畫も佛教に關する物多く、鎌倉時代に至つて繪卷物など多く行はれた。禪宗の傳來とともに宋元の畫風を傳へ、いはゆる東山時代に至つて絶世の盛運を見るに至つて、これがために、平安朝の濃艶柔美の風は淡白剛健を讃し殊に水墨畫を喜ぶに至つた。江戸時代に至つては南畫西洋畫の輸入があり、應擧の寫生風、文晁の南北折衷等さま〳〵の畫風が行はれて、互にその勢力を競ひながら明治時代に及んだのである。

〔油繪〕 顏料を油に溶して畫布又は板上に描いた繪畫で、江戸時代に我が國に傳り、現時隆盛を極めてゐる。

〔文物〕 文化によつて生じて來た事物をいふ。

〔藝術〕 美を色彩(繪畫)音律(音樂)言語(文學)形(彫刻、建築——但し美的要素の多いもの)等で表示する手段。又舞踊、歌劇等の手段を、綜合的に用ひる藝術もある。一切の藝術の分野を示せば左の如くである。

- 藝術
  - 視覺的藝術
    - 建築(但し美的要素多きもの)
    - 彫刻
    - 繪畫
    - 工藝美術
  - 聽覺的藝術
    - 詩歌
    - 音樂
    - 文學
  - 綜合的藝術
    - 歌劇
    - 演劇
    - 舞踊

〔考察〕 考へしらべること。考へあきらかにする事。

〔一瞥〕 ちらつと一目見ること。

〔風光明媚〕 「風光」はけしき。風景。「明媚」は山水の景があざやかで美しいこと。

〔山川の風趣〕 山川のすがたの趣あつて美しいさまにいふ。

〔大陸藝術〕 支那大陸、又はヨーロッパ大陸の藝術をいふ。ここは支那や韓の藝術を指してゐる。

〔推古時代〕 第三十三代推古天皇の御代をいふので、この時代には、聖德太子が攝政として、萬機を統べ、政治上にも空前の發達をした時代であると同時に、又美術史上に於ても、非常な意義ある時代である。この時代には佛教の興隆と共に朝鮮半島から寺工、佛工、畫工、瓦工等種々の技術家が相續いて渡來したから、我が國の美術、工藝は頓に發達した。當時の代表作品で、現存してゐるものは、建築に於ては法隆寺、繪畫に於ては同寺の壁畫、刺繡としては聖德太子の薨去せられた時、太子妃橘大女郎がその死を悲しみ太子の天壽國(極樂淨土の意)に於て大往生をなせるさまを、宮中の女官達に命じて繡らしめた丈六の繡帳、いはゆる天壽曼陀羅の刺繡が中宮寺に殘つてゐる。工藝品としては有名な玉蟲の厨子といつて、高い台座を有し宮殿の形をなす高さ七尺の厨子、佛像としては、司馬達等の孫、止利(鳥佛師)の作つた法隆寺金堂の釋迦三尊の坐像の如き、又は西域地方の美術品といはれてゐる「獅子狩文錦」といつて、將軍が獅子を射る圖を表せる文錦(法隆寺所藏)等の如きである。

〔外國から傳來したもの〕 外國から來た美術品をいふので、「獅子狩文錦」の如きはその一である。

〔六朝式のもの〕 支那六朝風の美術品といふ意である。六朝とは歷史上の時代區分ではなく、文化の上の區分で、しかも支那の南方に限られてゐるのであるから、正確に時代を示すことは出來ないが、强ひていへば三國時代吳の建國(二二九)より隋の一統(五八九)までを總稱したものである。即ち三國時代に孫權が江南の建業に據つて國を建てて吳と號した(二二九)。建業に都を置いた初である。これは晉の武帝に亡ぼされた

後、北方胡族のため晉室も亦滅ぼされたが晉室の司馬睿は南に奔つて、建康(故の建業)に都した(三一七)。これが東晉である。當時はいはゆる五胡十六國時代で北方は胡夷の勢力が廣く及んでゐた。爾來漢族は江南の地に屏息し、南北朝時代には北方の胡族の王室に對して、宋、齊、梁、陳の四朝が興亡した。以上の南の地に興つた吳、東晉、宋、齊、梁、陳の六國を稱して六朝といふ。しかしてこの時代は漢族の勢力が南方に萎縮して甚だ武威振はなかつたが、文化は燦然たる光を放つて、詩文、書畫の道に多くの名手が出たのであつた。

〔聖德太子〕 第三十一代用明天皇の第二の皇子。厩戸皇子または上宮太子とも申し上げる。太子は我が國に佛教興隆の基を開かれた方で、推古天皇の元年皇太子として攝政の事を執り行はれ、これより愈〻佛教の弘通につとめられ、多くの寺塔を建て、夥しい僧尼を度せられた。朝廷の禮も太子の力に依つてはじめて備り冠位を制し、憲法を定め、支那との外交を開いて內治外交に大功を立てられた。未だ帝位に卽くに及ばずして推古天皇の二十九年二月、大和の斑鳩の宮に薨ぜられた、御壽四十九。

〔明治維新〕 明治初年の大政變をいふ。德川の末に及んで尊王攘夷の論起り、遂に慶應三年十月十五代將軍慶喜は大政を奉還し、十二月九日明治天皇は王政復古の大號令を發せられた。「維新」は「これあらたなり」の義で、國政の改まること。詩經大雅に「周雖二舊邦一其命維新」とあるより出た。維新といへば我が國では明治初年の政變、卽ち王政復古に限つて用ひられる。

〔法隆寺(はふりうじ)〕 奈良七大寺の一。法相宗の大本山で、大和國生駒郡法隆寺村にある。推古天皇十五年に聖德太子の建立したものである。本尊は釋迦如來、舊名を斑鳩(いかるが)寺といつた。又山背大兄薨去の跡なる所から現身往生寺の稱がある。天智天皇の時に、災厄に遭ひ、和銅年間に再建したといふ說に對して、藝術家の鑑定に據れば、金堂竝に現存の佛像等は推古朝の建立のまゝに現存してゐるのだといふ。とにかくその金堂などは千三百年前の古代建築であつて、今なほ侵すべからざる生命を有し、偉人の如く深き威嚴を具へ、つきぬ生命を具へてゐる。後世の建築に比して種々の特質を持つてゐる。なほ次項參照。

〔其所の寶物を云々〕 法隆寺には千三百年前の堂塔古器物が今悉く存在し、上古美術の好模範となつてゐる。その一二を擧げれば、金堂內には有名な壁畫がある。西洋にも類まれなる優れた壁畫だといはれてゐる佛壇中央の釋迦三尊、東の藥師三尊は當時の名彫刻家鳥佛師の作である。同じ金堂內の玉蟲厨子は當時の建築の風を寫した宮殿風の工藝品である。その裝飾は工藝美術の粹をつくしてゐる。なほ同寺內の五重塔や山門等は何れも同時代の物で、金堂と等しく優秀な建築である。

〔奈良時代〕 第四十三代元明天皇和銅三年藤原宮から奈良に遷り、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の六代を經て桓武天皇延曆三年長岡京遷都まで七十五年間前後八帝の治世に涉つてゐるが、桓武天皇はこの宮にましますこと短く(更に延曆十三年平安京遷都 その上、この帝以後を平安時代といふから、普通に桓武天皇を數へず七代七十年間を奈良時代といふ。本文にもある通り、この時代は大寶令制定後を承け、支那との交通頻繁であつて遣唐使、留學生等屢〻派遣され文化が盛に輸入されたので、朝廷の制度から文學、美術、宗教、建築等の上に大なる影響を受け、燦然たる文華は前古無比の盛觀を呈したのである。

〔天平期〕 天平とは第四十五代聖武天皇の御代に於ける年號であつて、天皇の神龜六年改元して天平といひ後、二十年を經て、天平感寶と改められたのである。帝は篤く佛法を信じ、奈良には東大寺を、又諸國には國分寺を建立し、大佛を造るなど、佛教の興隆に力を盡され、ために、佛教美術の全盛を見るに至り、美術史上にいふ、いはゆる天平時代を現出したのである。彫刻が我が國で、空前絕後の發達をなしたのはこの時代で、外國の逸品と比較し得る物を數多く遺してゐるのである。東大寺戒壇院の四天王、同法華堂の不空羂索觀音、梵天、帝釋天、藥師金堂の藥師の如きは、寫生と理想とを調和し、崇高にして圓滿、世界的に永遠の生命を有するものである。工藝美術品の今日に傳はつて最も珍重されるのは正倉院の御物である。凡そ三千點大抵は聖武天皇の御遺物である。佛器・武器、樂器、鐘等種々の貴重品日用品を含んでゐるが、しかも皆美術品として優秀な物である。世界どこの國にもこれ程多くの古代工藝美術品の逸品を完全に保存してゐる